果樹園第十二号　昭和三十二年一月一日発行（毎月一回一日発行）　布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所　印刷所元市印刷株式会社　定価三十円

果樹園

第十二号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
ジャズの街　福地邦樹
小さな密告者　池澤茂
定　西垣脩
手紙　山根忠雄
嵐のあと　小山正孝
笛を吹く　林富士馬
初冬の歌　服部三樹子
叫び　芳野清
歸郷の船の旅で（湛方生）　森亮
インバール　岩崎昭彌
牡丹と紫陽花　田中克己
新浦島太郎の歌　上村肇
おわりなきうた　ピオンテェク
あのひとに　石口敏郎
落葉の街　浅野晃
編輯後記（O・T・）

書簡から見た伊東静雄（十）

小高根二郎

先に掲げた宮本氏の小説「氷雨降る日」で或ひは読者に時間的な倒錯感を与へたかもしれぬが、よろしく記憶を、弟壽恵男さんが佐賀高等学校に入学した、昭和三年の春に修正して貰はねばならぬ。その大学最後の晩春に伊東は詩の処女作をものしてゐる。

家の外に柿の花咲き
その柿に雀ゐる故え
そのことを心にもちて
寂しけど寂しきまゝに
うらやすう夕の座にゐる。

（昭和三年五月三十日京都より京都市内今熊野南日吉町二〇〇交番坂下酒井安代宛はがき）

この安代さん宛の端書には、右の柿と雀の詩だけが書かれてゐる。詩以外の一切の文句は書かれてゐない。その断絶的な書き方と、花咲く柿の木に遊ぶ雀に向ひながら、寂しいけれど安んじて夕餐の卓についてゐると云ふ内向的な抒情の雰囲気から、私に感じられるのは、やがて嫁ぎゆく安代さんに対する伊東の惜別の情である。恐らく、この頃安代さんの結婚の日取が決つたに相違ない。この惜別の思ひと、大学最後の晩春を彩る惜春の心情とは、こまやかに伊東の胸底に交錯往来して一種の俳体詩とでも云ふべき前掲の詩を生み出したのであらう。

この頃どうやら伊東は短歌から疎遠になりつゝあつたやうである。この処女作を書いた日から丁度一と月前、短歌上の女友達であつた平山マサ子さんから宮本氏に宛てた手紙があるが、その中で伊東が短歌上の障壁に衝き当つた事実を察知する記述がある。

「歌がたくさん、たくさん、出来ます。とよく書いてよこした頃の伊東さんをなつかしく思ひます。それだのに何か解らなくおなりになつたのでせう。然し人間に解つた事があるでせうか。本当は解らないんだけど解らない事は解らないなりにして大急ぎに歩いてかないと生存競走に負けさうですね…中略…今朝床の中で伊東さんのお手紙を頂きました。どんなに離れて了つたと思つても矢張りなつかしい気持でいらつしやる方ですね。」（昭和三年四月二十九日平山マサ子より宮本新治宛封書）

この歌が解らなくなつた伊東が、実は詩の処女作を生んだわけである。

然し、その後伊東は詩に走らず、童話に專念してゐる。その秋十一月十日に行はれる今上天皇の即位の大典を記念して、児童映画脚本の懸賞募集が大阪毎日新聞紙上に報じられたからである。

……

御大礼記念
児童映画脚本募集

主催　大阪三越
後援　大阪毎日新聞社

課題　家庭向少年少女を主題とした健全にして明るい、清新な気分情緒を持つ内容で、シナリオとするも、ストーリーとするもよし（約五巻に纏まるもの）

審査　大阪毎日新聞社

賞金　一等一千円、二等三百円、三等二百円

右各一編で当選作品の権利は大阪三越に属す。

締切　昭和三年九月二十五日

発表　昭和三年十月上旬

原稿すべて匿名とし、別に住所姓名を記して、添附し、大阪高麗橋三越内映画脚本募集係あて書留郵便で送附のこと

映画　一等当選作品は松竹キネマ株式会社で映画化するはず

……

この懸賞募集広告は、若い伊東の眼を、金星のやうに射たのである。即位大典の佳日。十一月十日。それは安代さんの華燭の佳日でもあつたからである。その記念すべき佳日を、自分のための佳日にもしたい。その希望は伊東に熱い決心の火を点じたのである。伊東はその後童話に專念してゐる。

「オ疲レサン。…中略…アナタノ生活ガ少シハ解ツタ。ウレシイコトガアツテ詩構デス私ハ近頃童話ニ心ヲヒソメテキマス。四五篇出来マシタ。自信ノアルノモ一、二ハアリマス。昨日ハ今熊野ノ座敷デ朗読会ヲヤリマシタ。コレカラ又女ノ豪ト琵琶湖ユキ少シ自分デ自分ガカハイソーデス。」

（昭和三年七月十二日京・聖・伊東より門司市楠町四丁目谷口方宮本新治宛はがき）

夏休で宮本氏は帰省してゐるのに伊東は帰郷せず童話を書いてゐたわけである。伊東は多作をして、それを今熊野の酒井家で次々と朗読し、その作品に対する安代、百合子さんの反応を確かめてゐたのである。伊東はその反応を聞きつゝ、ひそかで楽しい陰謀が成功して、彼女達をあッ！　と驚ろかす夢に胸をふくらしたに相違ない。伊東は後年詩が出来ると、必ずそれを身近な者に朗読して聞かせて、その反応で作品のできを判断してゐるが、その癖はすでにこの日からあつたのである。末尾に、伊東は琵琶湖行を強ひられてゐるが、強ひたのは例の遠藤さん母子でなく、今度は酒井さん母子だつたのだらう。

この書簡の三日後にも帰省中の宮本氏に手紙を書いてゐる。

「家にも帰りたくなし、ゆり子さんにも行きたくなし。私は目をとじてじつと寝たり坐つたりしてゐます。こんなに人の心が見え透いてては閉口です。

一方が純情になると一方はすぐそれを利用したり、まあ正直な方で笑つておいてきぼりにする。

私の様な男はどうせ利口になれぬし、こうして自分を軽蔑したり、他人を瞠若トシテミテキルより仕方なし。どれもうそんなくだらぬことは考へないとして、子供の水およぎでもみにゆくとしよう。」

（昭和三年七月十五日京都伊東生より門司市楠町四丁目谷口方宮本新治宛はがき）

首尾はやはりかんばしくなかつたのであらう。いや、童話に精進して、詩髄だけに澄化してゐる伊東には、何もかも見え透き、自分でさへもが形骸のやうに見え透いて、目を閉ぢて寝たり坐つたりしてゐるより手がなかつたのであらう。それにも堪らなくなつた彼は、童話の対象である少年少女達が、初夏の陽のやうにキンキラ笑ひを撒いて水浴してゐる動物園の下の疏水まで、岡崎公園をよぎつて見に行つたのであらう。このモデル達の観察は毎日のやうに行はれたやうである。右の手紙から十三日後に書かれた書簡にも、その由見えてゐる。

「おやおやいゝことばかりで恐れ入りますね。氷柱ものですね。…中略…

私の様にしいようすいし切つてはだちかん四五日したら京にもお別れ。もうとつくに古い自分の心にはアデューを云つてゐますから、もうぽつぽつおかあさんのところでねころんでみたいと思ふ願ばかりです。門司で一寸でいゝから会つて呉れませぬか、あなたの御都合はどうです。しかし二三日前から童話「お坊さんと蟾」が出来上つて心が少しは楽しんでゐます。こんなものが一と月に五篇も出來たら私もほんものだとうぬぼれてゐますよ。

ブリッジ下の泳ぎ場

みておれば子等の泳ぎのうつゝなさ
電車も人も用なし子等には
ひさしぶりのものですからなつてゐますかどうか。みなさんによろしう。」

ジャズの街

福地邦樹

また横暴な多がやつてきて
またも耐へることをむり強ひした
巷には　飾燈が
見知らぬ地の祭のやうに列ねられ
古代の土人の歌が
麻薬のやうに狂ほしく歌ひ散らされた
それはかつて弱小の部族が
結合を固めるためのものであつたのだが
僕らは離心のおそれと自愛の寂寥とに
おのれが血流の深みから
それら未開の日の歌声を　くりかへし
呼びもどさねばならないのだらうか

この腹立たしい季節に
せつに願はれるものはなく
ささやかな　こはれやすい祈念のために
冷い金属の樂器は
さらに激しく打ち鳴らされよ
そして僕らは　またも無体に
こころ惑はされるだらう

枯れがれた僕らの内部に
たとへそれがはかない造り花なりとも
あでやかに花咲くもののあれと

心のために

木枯の街を　翻翻と
女達は美しかつた
葉のないプラタンの並木に
風はむなしく吹き過ぎ
そんなに冷い終日を
早くも暮れさした宵には
ネオン燈の下に
女達はなほも歩かねばならない
みんな　私にはわからぬ傷心に
真直ぐに家路につけないでゐるのだつた
きつと寒さのために　一人一人は
もう心が通はなくなつたのだつた

そして今宵
彼女達がこんなに美しく見えるのは
私が草花とは話の出来ぬのと
それゆゑに美しいのと
まつたく同じであるに違ひなかつた

（昭和三年七月二十八日聖護院―消印―静雄より）
（門司市楠町四丁目谷口方宮本新治宛はがき）

この書簡によると、伊東が帰郷したのは八月になつてからである。その間、伊東はあれこれと応募作品を試作し、いわけない懇情の断絶をももくろんでゐたのであらう。

小さな密告者

池沢　茂

ぼくが会社からの帰り、家のほうへ、ぶらぶら、坂をあがってゆくと、めずらしく、呼びとめられた。「めずらしく」というのは、なにか用事でもないかぎり、家族のもののほか、ぼくには、めったに話しかけないからだ。たまに話しかけてくるとすれば、そのころは、たいてい子どもだった。そのときも、すじむかいの田岡さんととの中学生だった。

『さっき、おじちゃんととの金魚とられたの知ってる?』と笑いながら言っている。ひさしぶりに逢ったのだし、口をきゝあったことも、ほとんどない。それなのに、なんだか、あまえているような、なつかしい親しみを精いっぱいあらわしているような、感情的な笑顔なのだ。『二時間ほどまえだったよ。どこかの子供が三人、おじちゃんととの水槽にあつまってね、タモで金魚をすくっていたよ。ひとりで一ぴきずつ持って帰ったから、みなで三びきぐらい、とられたんやないかしらん。うちへ帰ったらいちど調べてごらんよ』

ぼくはふしぎな気がした。四年ほどまえ、おなじように、金魚をとられたことがある。そのときは、しかも、一ぴきだけ残して、二十ぴき近い金魚が、ごっそり盗まれたのだ。そのころ田岡さんの家は、まだ新築されたばかりだった。このへんは山手の住宅地だけれど、戦災地で、ぼくの家は、このあたりの戦後の家のなかで、いちばん早いほうに属する、すこしおくれて、となりが建ち、つゞいて、むかいの家。それから、そのとなり。そのあとで、すじむかいの田岡さんの家ができた。めだって大きいだけでなく、木材も、土台も屋根も、そとから見えないところまで、とくに上等のが使ってある。戦後むきの商売がむやみにもうかっているということで、その当座、よけい評判になった。その男の子がまたふつうより、ずっと、たくましく、すばしこい。はしるのも、とぶのも、人なみすぐれている。まっくろな顔をし、体つきも大きく、がっちりしていて、木にのぼったり、へいのうえを走ったりの、あぶないことでも、さきに立って、どん〳〵やる。野球などもじょうずで、けんかも強い。たちまち近所の子どもたちの「がき大將」になった。すこしぐらい上級の子でも、ときゞ〳〵泣きべそをかゝされる。金魚がとられたとき、妻は『あの子にちがいない』と言った。近所の人も『あの子でしょう』と言う。しかし、いくらなんでも、家のなかへ乗りこんで、さがしまわったりもできないから、とう〳〵、うやむやになり、ぼくはあらたに、金魚を買いもとめた。すると、また、まもなく、その半分ほどが、持っていかれた。妻はこんども『あの子にちがいない。おとなりも、そう言ってますよ』と、じれ〳〵した。しかしやはり、そのまゝになって、ぼくはまた、おなじ数ほどの金魚を買いたした……。

それから、もう、四年がたつ。金魚はその後、一度もとられないから、みんな、見違えるほど大きくなった。れいの田岡さんの男の子は、その当座、こちらが疑いの目で見るせいか、たまに逢うと、こわい顔をして、ぷいと横をむいてしまう。ところが、それから一カ月ほどたつと、にこにこして、ていねいにおじぎをするようになった。なんにもとがめだてしないで、あらたに金魚を買って、そのまゝすましているから、それとなく感謝しているのではないかしらん、などと、ぼくは思った。しかし、なにも証拠を見たわけではないから、ほんとうのところはわからない。ただ急に打って変った態度におどろきながら、相手がこどもでも、近所どうしで、こわい顔をされるのがやんだのだから、ぼくまでも、なんとなく、うれしい気がした。ところが、ぼくはやがて、おなじ神戸市内の会社をしくじり、ようやくのことで、となりの大阪に、転を見つけることになった。ずっと大きい会社だから結果はかえってよかったかもしれないけれど、遠くなったから、通勤時間が、三倍も、四倍も、かゝる。それに、早帰りの日は週に一回ほどで、帰りはたいてい夜半に近くなる。公休日が別にあって、日曜日や祭日も出勤する。そのかわり、朝はたいてい、ひるじぶんになってから、のこ〳〵でかけてゆく。ということは、つまり、生活の時間の配列が、ふつうの人とは、まったく食いちがっているということなのだ。学校へいっている子どもなら、ぼくが出勤するころは、たぶん学校にいるだろうし、ぼくが帰ってくるころは、寝床にいるときが多いにちがいない。

ぼくが見たのは、小学生の「がき大將」の男の子だった。しかし、いま、ぼくのまえには、一足とびに、ひとりの中学生が立っている。兄とか、従兄とか、非常によく似た年上の子がいて、その子が話しかけているのだろうかと、ぼくは、しばらくのあいだ迷った。ちょっと見ないでいるあいだに、いつのまにか四年がたって、この子は小学生から中学の上級生へと、めざましく成育していたのだ。すねの出ていた半ズボンは、筋をたてた長ズボンにかわり、上着には、金ボタンが光っている。まっくろだった顔は、色がさめたように白くなって、にきびが出かゝっている。おしゃれな性質になったらしく、帽子は、えんを小さく、水平に付けかえ、うえの布は、まるい形に、しわをよせて、ちゞめてある。ただ体つきは、まえとおなじく、がっちりとたくましそうで、その背たけは、おとなのぼく

定

西垣　脩

逝つたきみらは
しろじろ　塑像
ほほえみかわして
こちらを見ている
こんなに切なく待ったから
もう来なくても
それはそれでいいんだよ
深沈となった　ガラス質の
空気のかなたに
きらめき　重って
しきる落葉……

濃くうすく
合唱は
歳月の層。

手紙

西村稔先生に贈る

山根忠雄

「閑事」といふ言葉を覚えた
初めて言葉を覚えた子供のやうに
それが使つてみたくて仕方がない
夏休み――
妻子はそろつて帰省し
獨居自炊の生活が始まつた
八月立秋の頃
軽快に赤とんぼの飛ぶ明窓に
机を浄めて
清閑を愛するある人へ
手紙を送り
その封筒に
「閑事」と書きつけたのである

より、むしろ高いくらいになっている。
「ねえ、おじちゃん、おじちゃんとこの金魚、これぐらいに、大きくなっていたんやろ」と、かれはまた、あまえるように、両手で大きさをこしらえ、ぼくの顔をうかゞうようにしながら、話しかける。「ぼくはね、うちの窓から見ていたんだよ。そやから、だれがとったか、知っているんやけど……。ひとりは知らん子やった。むこうの山のほうへ、いそいで帰っていったよ。あとのふたりは知ってるんやけど、うちの窓から、ちょっと偶然に見ていただけやから、はっきりは見えなんだけど……」
言おうか、言うまいかと、しきりに迷うふうだった。金魚などより、もっと〳〵重大な切実なことを、そっと打ちあけるというふうな、ためらい、口ごもり、みずから決心をうながしているようすだった。が、とう〳〵言った。そして、たいへんな親切をしてあげたというように、うれしそうに、にこ〳〵と笑顔になった。それから、ふいに、はずかしくなったらしく、逃げるように、大いそぎで、はしり去った。体は大きいけれど、ようすはいかにも少女めいて見える。あばれんぼうの「がき大將」が、娘になりかゝった少女のような「はにかみ」を知る時期になっていたのだ。ぼくも、かれが知らせてくれたとおり、金魚を持って帰ったという子の家まで、ほんとうに取りかえしにいったものかどうか、ずいぶん迷った。

嵐のあと（二）

小山正孝

「どこまで行きますか。」
「さあ、どこに行かうか。」
私は自動車の運転手の目をバックミラーの中で見つめながら、一寸笑つた。自動車は走り出して、料金計を下ろした。
運転手も笑つて、車を止めて、私をふりかへつた。
「さうだ。俺は河が見たいよ。だから、両国橋にやつてくれ。さうして、河の見える所をとにかく、浅草の方に行く事にしよう。」
二時をすぎてゐた。本屋の店の看板が、どたんと音をしてたふれて、本屋の小僧が、「奥さん、どこの店も、今日は店をしめましたよ。しめませうよ。お客さんも來ないですよ。」
と、私の居るのに言つて、奥さんも店をしめるやうに決めたので、嵐のはじまりかけた街の中に私は出されてしまつたのだ。
自動車は、両国橋に出た。並木が、さかんに枝をふり上げてゐた。雲の動きがいそがしさうにしてゐる空には時々黒い点のやうなものが動いた。吹き飛ばされてゐる何かであらう。私は橋の上から荒れてゐる河を見た。舟は一隻もゐない。大河端は、ずうつと白く弯曲してゐた。
道の上につぶつぶに雨はふりかかり、鉄橋さへも、どうどうと音をたてて吹かれてゆれた。
「なんだ、あの音は。」
「風ですよ。旦那、どつちへ曲りませう。」
「うん、とにかく、河の見える所を行つてくれ。」
窓の所に押しつける風と雨。
「いいなあ、どうだい。河の白くゆれてゐるのは、鉄橋の黒と、ちやんとした形になつていい画になるよ。」
「旦那は絵かきですか。」
「絵かきだつたら、こんな日は、女の裸体でも書いてるさ。書かないまでも、見てる方がいいさ。」
「どこまで行きませうか。」
「どこまででもいいさ。いつそのこと、白鬚まで行くか。あそこは、玉の井が近いからなあ。あそこから、ずうつと行くと。さうだ、君、かういふ日はいいんだぜ。かういふ日ば

かり目ざして行くのを、お雨さんつていふんだ。お嵐さんとでもいふかな。」
「梅を見るのは聞いたけど、嵐の中をどこでもいいから行けつて言ふお客ははじめてですね。」
「でも、嵐は君たちにとつて、かせぎ時だらう。」
「いいや、とんでもない。どらんなさいよ。さつきまでうろちよろしてた人間が、もう、どこにも姿を見せないでせう。」
「さうだな。不思議なものだ。雨がふると、みんな傘さしてやがるし、そのくせ雨が上ると傘なんか誰も持つて歩いてないんだから、同じやうに、皆、適当にやつてやがんだらうな。」
「どこかにもぐつちまふんですね。ちかごろのお客は、だからかなひませんよ。」
「俺みたいな馬鹿は、さう、ざらにないつていふわけか。」
「まあ、旦那みたいな方がちよくちよく居てくれると運ちやんも、樂ですがね。」
運転手は、私に悪いと思ひはじめたのか、それとも、私の真の目的の一端を理解しはじめたのかわからないが、スピードをゆるめてとにかく、橋をあちこち渡つては、橋の上で一寸車をとめてみてくれたりした。しかし、橋の鉄の黒と、風と雨の白色とだけがかもし出す、丁度、すぐれた白黒映画のクライマックスのはげしさのやうなものを私が感じては嘆声をあげてゐるわけは、遂に理解しなかつたやうである。波の一つのしぶき、橋の一本の黒のマッス、アスファルトにたたきつける雨足のしぶきの美しさに私は一瞬も見失ふまいと、目をこらして、思はず身を運転台の方にのり出した。素晴らしいといふか、――私は、自分の身の幸福をこの時程感じたことはなかつた。
外は嵐である。私の身は自動車の中で、嵐から守られながら、なほ嵐を突進出来る。ふと、これは、妙なことだが、安全な革命家といふものは、こんなものかな、――革命家とよばれたい何人かは、こんな風な具合に物事が進行したらいいのだらう、――ひよつとすると俺は、俺が、こんな風な人生を送らうと

笛を吹く

林富士馬

拵へたやうな松の木蔭に　苦むした石に
　腰かけて
笛を吹く
類型的な絵に描かれた童子の姿で
笛を吹く
一心に笛を吹く
兵士が來て　追払へば　立ち退き
暫くして　又やつて來て　笛を吹く
三日月が架つて
松に雪綿が積まれ
まつたく　舞台装置も照明効果も変つた
　やうだが
笛を吹く
小便をして又笛を吹くのである
人が來て　足をとめると　にこにこして
勇気づいて笛を吹くし
例へば　編集者といふ種類が嘲笑しやう
　が
そんなことは知るもんか　と笛を吹く
酔払つた異国人が気紛れに
大きな刀で首を刎ねてしまつた
と　別なおんなじ扮装の童子が舞台に出
　て来て
笛を吹きつゞける
さういふ仕組の芝居なのだが
どうも少し智慧が足りない。

初冬の歌

服部三樹子

窓の外にかがやきふしし黄金の波高き稲
架に沈む夕ぐれ
わがこころうつろのごとく満つごとく稲
穂の上に日ごと遊びし
逢ふごとに稲田の色のうつれるを風に吹
かれて言ひしなりけり
食すもののことを思はぬ良き日かな稲田
の色のうつりかぐはし
一散にみるみる稲の刈らるるを薄陽の道
に見れば無情に
今ここにゐまさぬことは目の前に稲刈ら
るると同じさびしさ
空にむく稲の穂のごと真昼間も青く默し
てゐし日逢ひにき
久しぶり今日は明るく陽の差して稲架は
高し人帰るらむ

ネクタイの風に吹かるるさまさへも見な
れし人を風かとも思ふ
父母の授けたまひし我が名さへ忘れてを
見し春の夜の夢
春ながき嘆き負はせて二月夜を往かしめ
し子ぞ我のをとめ子
往かしめし汝がみづから遠く往く山茶花
のはな咲くくれなゐに
美しとなげきし記憶なきものをいつ美し
くなりてここにかも
木も屋根も夕べなりけり我がこころ稚し
と思ふ支離滅裂に
あたりみな稚くなりて夕ぐれはよりゆく
ときに加勢及ぼす
ある時に誕生佛と我がなりてあやめもわ
かぬ夜の暗さみき
勝ち負けの姿にいはば明らかに君絶えに
きを玉の緒にまきぬ
紫苑の花群透きて光る雨われと人との見
し世さながら

カンナの花赤色枯れて黄の残り菊咲きそ
めぬ黄ばかりの庭
あめつちにかかるやさしき人ふたりあり
ともみじと思ふあけぼの
ちちのみの父より広しははそばの母より
優し我よりも熟しこのみ手
ふるやうに星のかがやく夜空ふと身につ
く時しながく逢はざり
言ひかくる言葉もなくてあまたふる星は
真白き重さなりけり
恒河沙の星のまたたき身にふりて我は遠
くの人に目を閉づ
聞きしとき嫉妬のほむら燃ゆるべきやさ
しこころは何時よりかなき
ここに来て恋のこころを喪へり神の召す
とも毛もの呼ぶとも
忘れぼき我が忘れず遅々と燃す夢のすが
たのなきむらさきに
春秋の季わきまへず庭に咲くたんぽぽの
黄色またぎて通る

してゐるのに、気づいてゐるのに、気づかな
いふりをしてゐる悪い奴かな、――といふや
うな思念が心をかすめたりした。真実、妙な
ことではあるが。

自動車が吾妻橋にかかつた時、対岸のアサ
ヒビールの前では、並木の何本かが、馬に鞭
うつ時のやうに、ゆれてゐた。
「隅田公園を白鬚まで行きますか。」

「うん。」
のろのろと車は、なほも走りはじめた。
「百花園にでも行くかな。」
「いつたい、何があるのですか。」

「百花園といへば、百花園さ。でも、もう、
何もないだらう。昔は、よかつたらしいけど
ね。ここを抜けると、鳩の町か。俺は、この
公園をよくランデブウしたもんだな。言問だ
んごを食ひに来たこともあるよ。君、ここは
ね、柳橋の芸者たちがお客と船にのつて来て
だんごを食つて帰る所だよ。それが面白いん
だ。男に芸者を押しつける時にはね、ここま
で一座して來てね、舟の中に二人だけ残して
あとは、ここから自動車で帰つてしまふんだ
男と女だもの、舟の中で、二人きりでゐれば
なんとかなつてしまふさ。」
「春はいいですものね。」
「いまだつてすばらしいぢやないか。実際、
パリのセーヌ河つて言ふけど、東京の隅田川
は、すばらしいよ。どうだい、見てくれよ。
河の流れは白く、嵐の中を流れて行く、嵐の
中を流れて行く、しぶきはなほ、飛びながら
どこへしづかに、ゆつくりと、水は橋の下を
通りすぎて行く。」
「白鬚ですよ。」
「では、帰りだ。なんだ、もう、小やみにな
つたなあ。」
「旦那は、どうして遊ばないんですか。ここ
まで来たのに。」
「もう、年だよ。」

「さうでもないでせう。まだお若いのに。」
「いやね、もう年だな。女の芝居の上に乗つ
かつてるよりも、かうやつて、自動車に乗つ
かつてる方がいいよ。自然は、うそをつかな
いからね。それに、勘定高くなつてるよ、か
うやつて、ゆつくり、遊んでゐたつて、五百
円もかからないだらう。女に乗つてごらんよ
千円ぢや、ふふんてな顔をしやがるし、つか
れるし、おまけに、おみやげでもいただいた
ひには、女房子供に申しわけないし。それよ
り、かうやつて、桜並木の間を行つてる限り
では、気分的にブルジョアだ。第一、運ちや
んは喜ぶし、落語の落ちぢやないけど、三方
得といふわけさ。」

国際劇場の前でおりる時に、
「お互ひにまた、嵐があつたら逢ひませう。」
と、笑ひながら言つて、自動車は去つた。
六区を抜けた頃には、もう、頭の上には青
い空の方がひろく、雲は、所々に残つてゐる
だけであつた。それから私は吾妻橋へ行つた
のだ。

私の目の前で、默劇のやうに、少女は、動
いてゐた。私の目の前に、いまは、現実の彼
女であるといふよりは、もつと、重みを持つ
て彼女は存在してゐる。
彼女は、私の中で、十年は存在し得るやう
だ。十年たつて、十八才になつた彼女が、も
し、母親がゐざりであることを叫んだとした

叫び

芳野清

あそこでは
老いた薄は
すげない秋風にも手招きして
廢屋の基礎だけが
沈默の肌をさらしてゐたが
海があんなにも青く　やさしかつたので
私はひとと別れたのだつた
私のうつけた心は　しばらくは
箒雲につれて稚く　ゆれ動いてゐたが
日の傾きに気附けば
薄の穂は幾千の目となり
礎石は見知らぬ太古の獣となつて身を起
し
影には戦場の血がちろ〳〵と流れ始めた
私はあやうく叫ぶところだつた
あの北欧の不吉な画家ムンクの
夕雲におののくひとのやうに、

ら、私はどうしたらいいのだ。彼女が、淫売になつたらどうしたらいいのだ。その時、私は、果して、自動車を乘り廻すだけで滿足してゐるいいぢぢいであるであらうか。

不幸は、嵐のやうにやつて来る。予報がある時もあるであらうが、予報のない時もあるであらう。

十年たつて、彼女が半玉であつて、船で、言間だんごを食ひに行つたとしたら、あるひは船の中に、男と二人きりに残されたとしたら。私は、なほ、その残されて、半玉である彼女の、はじめての唇を奪ふ役目でありたいとさへ願つてゐるではないか。私は、私がどんなに正常な社会生活を望んでゐるにしろ、私の中に、かうした気持のあるのを否定しない。機会あれば、私は彼女をふみくだかうとするであらう。

しかし、私は、橋の側の、小さい家の彼女が、いつか、学校で元気よく、育つて、それから幸福な恋人を持つことを、強く願つてゐる。

おままごとのやうに、彼女の水やりも終つたやうだ。彼女の目は遠くを見る時余計美しい。日が照つてゐないのに、小さい手をかざして、対岸をしばらく見つめてゐた。大して腰をかがめたやうでもないのに、手で腰を軽くたたいて、つかれたやうなしぐさをした。少女は、私には気づかない。吾妻橋の上からテープを投げれば、すぐにもとどくであらうに。心のテープを投げれば、すぐにでもとどくであらうに。

「君の今立つてゐる下には、十年前には、ぶかぶか、死んだ人が浮いてゐたのだよ。もうそんなこともない。君もそんなことにならないやうに。」

私には、空が一段と輝いてゐるやうに思はれた。夕方が近いので、一日の光の、最後のひびきが、ずうつと大きく空一面に鳴りわたつたやうだ。

ガラス戸をあけて、老婆が顔を出した。手にセーターをもう一枚持つて、さし招いた。

その白い手が窓に消えると、少女は、ゆつくりと、注意しながら、歩いて、家の方に帰つて行つた。両足の膝小憎の絆創膏が、十字に、二つ、互ひちがひに動いて、——私は、なんだか、一つのすぐれた芝居が、終りに近づいて、ああ、幕なんかがなかつたら、どんなにいいだらう、とためいきをつく、そんな風な感じで、少女の足と、からだと、顔と、おかつぱと、隅田川と、空と、さうして、それを見てゐる私自身とを惜しんでゐた。

歸郷の船の中で

湛　方　生

山はけはしい切り岸を連ねてそびえ
湖は美しい水を湛へてどこまでも続いてゐる
白い砂浜、その白さは何年たつても真新しい
青々と、夏も、冬もしげる松の林
水は搖れゆれて暫くもとどまらうとしないの
に
是れはまた千歳の誓ひを守つてうどかない木
立ちよ
おまへの眺めは、旅にある身の憂へを忘れて
この旅人に新しい詩を夢中になつてつくらせ
る

（森　亮　譯）

註　作者の湛方生は東晉の一無名詩人（西紀四〇〇年頃。古詩紀に見出される原詩は還都帆といふ題になつてゐるから、やかましく言へば「帰京の船の旅で」と譯した方がより正確である。併し、原作を知らないでアーサー・ウエーリーの英譯で讀んでゐた時分に、私は長く都會生活をしてゐた人が田舎にある故郷に旅行した時の作品のやうな印象を受けつつ樂しんだ。拙譯も矢張り同じやうな印象を與へるものになつてゐると思ふので、題名に敢て「歸京」の文字を採らなかつた。

インパール（一）

岩崎昭彌

ビルマの皺に　巨大な帯となつて走るチンド
　ウイン河を
闇に乘じて渡河した川獺群があつた
彼等はジャングル上の缺けた月を不気味に仰
　いだ
ときに昭和十九年三月十五日の夜十時
一群は　第十五軍「林」集団の兵隊だつた
　——ヨーロッパでは
頼りだつた独逸軍も殲滅の一歩手前で戦つて
　をり
太平洋では　マーシャル群島の守備隊全員が
　またも玉砕した
続くアメリカの機動部隊はマリアナ基地を嵐
　のごとく攻め
聯合艦隊司令長官は作戦指揮中に飛行機事故
　で、捕虜となつた
参謀達は救はれた陸軍士官にその場で殺され
同じ場所で　彼は割腹自盡したのだが
真実は　国民すべてが知らず、天皇陛下も御
　存知ない
印度はコングレス（国民会議派）の點じた反
　英独立の火が炎となつて拡がり
チャンドラボースの率ゐる国民解放軍は
　チヤロウ・デリー！（デリーへ進め！）
　ジヤイ・ヒンド！（印度萬歳！）を叫び
酷熱のラングーンで祖国を指呼してゐた
だが　チン丘陵を御存知なのか
山系数百粁　標高一万呎に達するそれは巨大
　の背中
シーズン中の雨は地球上の首位をしめ
河川溪谷の氾濫で年々地形が改まる
市ケ谷の参謀達さへ迷ひ迷つた　嶮難を
そして成吉思汗さへ征服出来なかつた蕃境を
南から　日本軍が彼等を率ゐてゆくといふ
無謀な？　いや雄大無比の主戦論者は誰なの
　か？
勇名は知らぬものない牟田口廉也軍司令官
支那事変を起し　マレー半島を攻略し　昭南
　島をつくつた彼はいふ
「絶対優位な四辺の敵の反攻に
　守勢をもつてまもるは不可
　意表をつき急襲覆滅するのほかに軍なし」
　と
　（無名の犠牲をいま考へてはをれぬのだ）
こちらには　だが憂ひ濃き老將軍の顔もある
「日本ならば北アルプスの嶮を
　越えて続かねばならぬ補給法は？」
「敵の建設道路や軍用品の逆用と
精神力なる皇軍最後の武器もある
　起死回生　断乎起て！」と
鳥でもない　雲でもない　また風にもなれな
　い兵達は
思ひ思ひの新しい季節を、ひそかに願ひ
父母の育てたその肩に　分解した砲身　砲車
　を背負ひ
原始の山を、来る日も来る日も踏破した
かくて四月上旬の晴れた朝
インパールの南十一マイルのビシエンブール
　の街を
はるかに見下す峡谷にやつと立てた「弓」部
　隊の、軍旗！
「烈」部隊は、民家を襲つては空腹を満して
　コヒマを攻め
底豆の足をひきずり　ひきずり　デマプール
　に向つて行軍した
　（もう直ぐ　インパールなのだ）
このニュース　祖國へ向けては一語一語に力
　をこめて打電され
女のまじる黒い解放軍は、季節風のごとくテ
　イデムに急いだ
青葉のメイミョウーでは、ビールが飛ぶやう
　に売れた
街には、軍司令部があつたのだ
そこには、軽井沢もあつたのだ

三月末に誰にも会はず故国を発ち
四月十六日、真夏のシンガポールに上陸
ブキテマ高地の競馬場にて部隊編成中の
歩兵一五一聯隊「安」一〇〇二二部隊が
「マンダレーに向ひ直ちに前進せよ」と
師団命令を受けたのは、八日目の暁だった

自動車　二一輛
兵　二九一七名
火器が貧弱なのは　一人一人が肉彈となり得
るからだ
彼等はやがて長蛇となつて移動しはじめた
見送るものの誰一人ない丘に
祈るやうに　夜明けの風が吹いてゐた
――インパール――

牡丹と紫陽花

田中克己

前号に牡丹のことを書いたすぐあと、木下杢太郎「食後の唄」（昭和二二、角川書店）をひもどくと、この詩人が異様に、牡丹を数多くうたつてゐるのに気づいた。煩はしいのをかまはず、あげて見よう。

「まつ白な牡丹の花、觸るな、粉が散る、匂ひが散るぞ。」といふのが、巻頭の「金粉酒」の一節であり、「牡丹を染めた袢纏の蝶蝶が波にもまるる。」が、次の「兩國」の一節で三首目の「珈琲」にもちやんと「當もなく見入れば白き食卓の　磁の花瓶にほのぼのと薄紅の牡丹の花。」といふ箇所がある。みな一九一〇年五月の作で、この年のこの季節に杢太郎の詩的脳髄に、他の花をおしのけて牡丹の花がひどく強烈に印象づけられたことは、あたかも唐の牡丹マニヤの時代を連想させる。

一九一二年の五月の作なる「檀古聿」にも「にほふ檀古聿、コニヤック、鉢の牡丹」といふ箇所が、チョコレートヘコニヤックを入れてくれた微笑し、少し誇張した眼付をし、始終足を動かして抱くやうに、椅子のより懸りに腕をもたせ、真に美しい皮膚をもち、濃いお納戸のちみな羽織を着た、昔美人との評判だつたが、今とても美人らしいひとの背景としてうたわれてゐる。のちの医学博士太田正雄はまだ数へ年二十八才なのである。

しかしこの年六月の作なる「杜鵑」はさらにわたしをひきつける。この詩には「その頃われは漸く生活の不安に目を瞠りつ。わが日日の順俗の營に憤懣の情を発しつ。かたへには昔の唄耳に悲しきシテエルの鳥を聞めてはあれども、生活の改造の要求はわが心を鞭ちたりき。」との序があつて

青き夜は、窓越しに、静かに
卓布の角にさした。牡丹花
音なく落ち、杯の緑酒微に光れる時

室の一隅の黒衣の人の群は
もはや胡散くさき偸視をもやめ
磬段段に高まる……
SYNDICA RISME……
革命……実行の前の考察……
一度は血だ……

牡丹花、五月一日
濕りたる梧桐にうち搖るる雨後の月光は
たつた今聽いたばかりの投節のところ忍
ばせ
眼をつぶり、しめやかに

歌うたふ老女の姿……ふと見ゆ……
昔の世……長き橋……岸辺の柳……

新浦島太郎の歌

上村肇

空が茜に燃えはじめると
明日は来る　明日は来ると云いながら
太郎は高い柿の木の上からすべり下りる。
とおい潮路の
未だ明けやらぬ緑の波濤をかきわけて
白い卵を生む巨大な海亀が
七歳の少年太郎の海岸目指してやってく
る
太郎　太郎　馬鹿な太郎　夢見勝な太郎。

暗い岩陰　荒い砂浜
幾朝　波音に起されて
卵をさがす太郎の素足は
どれだけ絶望の小石をこゝに踏み
どれだけ吐息の小道を帰ったことだろう
太郎　太郎　馬鹿な太郎
夢見勝な太郎。
夢をもとめて三十余年

青き夜の薄荷酒

いま故園の地に帰り佇てば
幼くあそんだ家もなければ父母もなく
昔のぼった庭の柿の樹もない
太郎　太郎　馬鹿な太郎　老いぼれの太
郎。

身にまとうはアメリカ中古衣料の服
足にうがつはビニールの白い靴
心も暗く渚を行けば
潮は昔にまさる非情の色
太郎　太郎　馬鹿な太郎　老いぼれの太
郎。

わずかな夢のきりぎしに
夕陽を浴びて佇めば
そのまゝ　そのまゝと
玉手箱ならでカメラを下げた太郎の子供
太郎の知らぬ一閃の
光りをおのが胸にとりいれて
はや太郎に背を向け
かわいた沙丘の方に行ってしまう
太郎　太郎　馬鹿な太郎

いや更に澄み行くを……牡丹花
またも散り

老いぼれの太郎　しらがのまじった太郎。
（南薩　谷山海浜にて）

途上佇立

勾配のはげしい高い寺院の屋根の上に
男がひとりのぼって屋根の修理をしてい
る。

男の腰には大きな綱が結いつけられてあ
って
その一端は　高い屋根の
棟木にある銅の環に結びつけられてある。

古い瓦と新しい瓦を差しかえたり
半ば朽ち堆積している落葉の濕りを
そのまゝ廂近い屋根から落したりして
破損の箇所なぞがしたりしている。

男が動くたびに綱は異様に緊張したり
まだらに光る屋根の上に
綱は男の精神のようにしばし
時に遅緩しておかれてあったりする。

おわりなきうた

ピオンテエク

書いては、忘れ——
靴底はすりきれ
つかいはたしてしまった
なんにももってはいなかった
上衣にオレンジをつっこんで
街の灯を追う
時は、ばらの幹の
緑の光沢のようにさりゆく
たいていはしずまってしまった
杜松(ねず)のにおい
灰色の山羊の毛皮が
東方的なにおいをたてる

一度は血だ……
自由思想……理性の齟齬……
傳承及び情緒の破壞……
人人の聲あらあらかに、且つ鳴らす麥酒の杯。

虚構をならべたといって
それがどうだというのか
世界はうすい紙の上で
はじまったまま

炎をあびて、紙は焦げ
やがて膠のにおい
だが、空気の中から、まもなく
新しいうたのひとふし

なんにももっていなかったことが
ぼくをゆたかな気持にさせる
書くも、忘れるも
おんなじことだ

薄荷酒、また牡丹花、
荒みゆくわが心……青葉の空に
啼き過ぐる……ほととぎす。

——Unablässiges Gedicht——

★ピオンテエクは一九二五年生
ドイツの新進詩人

(たかはし・しげおみ訳)

メーデーの日に杯をあげながらサンヂカリズムの理論を説くのは石川啄木でないかと、ちやうど下阪された野田宇太郎さんにきいて見たら、啄木はこの年四月に死んでゐるのである。一九一二年はわたしの生れた翌年である。まだ革命は來ず、これを説いた啄木も、それをきゝながら投節のことを思つてゐた李太郎も亡くなつてあまたの年がたつた。しかしここに使はれた牡丹の花は偶然だらうか。その花をふさはしいと思つて用ひたのなら、白樂天にはなかつた情景なのである。

紫陽花

李太郎を引いたついでに、もう一つ「食後の唄」の「抒情小吟」中「夜ふけには」に収められた「たとひ品は」といふ唄は

たとひ品は低うてもそなたは女はつと思ふ時もある岩に咲いた紫陽花も雨あとの夕日を受けたればくわつと光る時もある

といふのである。アヂサヰの花の印象をよくうたつてゐると思ふ。私もこの花は好きで、学生時代帰郷の途を中央線にかりたとき、浅川のあたりで一軒の家の背戸に咲いてゐたその花の印象が、三十年たつた今だに忘れられない。ところで李太郎は紫陽花といふ漢字を用ひ、これがまた私どもの常識であつた。この常識で、唐詩をよんでゐる中に、白樂天の詩で「紫陽花」といふのがあり、これには序がついてゐて「招賢寺に山花一樹あり、人の名を知る無し。色紫に氣香ばしく、芳麗愛すべし。すこぶる仙物に類す。よりて紫陽花をもつてこれに名づく」とあるのを見て、アヂサヰの漢名の名づけ親を知つたと、ちよつと得意になつた。この詩はたぶん長慶三年(八二三)の作で、招賢寺はしらべてゐないが、杭州にあるにちがひない。

ところが奈良女子大の小清水教授のお教へで牧野富太郎博士「日本植物図鑑」(一九四九、北隆館)を検すると、アヂサヰ Hydrangea macrophyllia Seringe. var. Otaksa Makino の漢名は天麻裏花、瑪哩花、洋繡毬であつて紫陽花、八仙花、紫繡毬をこれにあてるのは宜しくないと明記してあり、なるほど前によんだ同博士「植物記」「牧野植物随筆」などいたるところにあげてある植物漢名の濫用の例として、馬鈴薯、椿などのほかに紫陽花があつたことを思ひ出した。それでは白樂天以後漢土で用ひられるやうになつた紫陽花はいつたい何だらう。牧野博士のその比定を検するひまをもたないので、有識者の御教示をまつこととする。

なほ序でながら小清水教授の御教示では、

あのひとに

石口敏郎

こがらしの中から
バスが私を抱きあげる
〃さやうなら〃
言葉が
別れた人の方向に
少し傾く

エンヂンが興奮し
街を掻き分け
其処で
赤い小さな指を立てる
方向指示器を振りあげる
警笛のアンダーラインをほどこして
遠ざかつたのだ
停留所で
エンヂンを動かし
自動車は息を切らしてたたずんでゐた

早朝の歌

裏通り
共同の水道が
藁を着て立つてゐる
人々の暮しがほとばしり
藁に貧しい樹氷をつくつてゐる

既に消えたはずの
昨日迄の女達のざわめきが
激しい風の中に硬直し
栓を持去られた水道が
そこに立つてゐる
新しい今日を噴き出す為に
首を持去られた水道がそこに立つてゐる

雑司ヶ谷墓地にて

墓石が
赤トンボのリボンを結んでゐる

香煙が立ちのぼり
さつきの人の祈りが
まだ燃えてゐる　匂つてゐる

かさこそと
落葉を掻き分け
蛙が墓石を拜んでゐた

アヂサヰの学名中のオタクサは、日本植物を西洋に紹介したシーボルトの愛妾楠木オタキさんの訛だと。学名までロマンチックである。このごろ女友達の口ずさむ歌「マドモアゼル・オルタンシア」はまがひもなく、「アヂサヰ嬢」であるが、洋品店の売子の孤児から侯爵夫人となつたといふだけで、なぜアヂサヰなのかわからない。西洋でも日本のやうに、この花は色の変ることを特徴としてゐるのだらうか。

（唐詩の草木3）

落葉の街

浅野晃

ラッシュアワーの勤め人は
夕刊を買つて
改札口に押しよせる
明るく裁断された形で
プラタナスの並木路をねつてゆく詠歌隊
病人はみな病院にゐるし
金に困らない有閑主婦は
劇場の前で車をすてる
歌声はそこまでひびいても
お互ひ濕きものが濕いてゐる仲間だもの
ガード下にならんで
鼻水をすすつてゐる靴磨きより
もつとかなしい
のつそり歩いてゐる君は
マンホールから出てきたのか
頭に菊の花冠をまいて
サンドウィッチマンに化けてゐるのか
君は平和などいふ言葉を
口にしない
君はだまつて
ビルの向ふを指さしてゐる
そこには失はれた河が
金色にかがやいてゐる
地表といふこの曲面の平面
谷間もあれば海も沙漠もあり
ちぎれた手帖も落ちてゐる
悪夢ではない　しかし——
涙を流すのはよさう
狐狸はわれわれの頭に棲んでゐるのだ
今夜よく眠つて
あすは思ひきりめざめるのだ
濕きものをおとすのだ
死者が生きてゐる世界の午后おそい街角に
影をおとす君
これほど巧みに匿された太陽
都会の群集の流れのなかで
いつもすれちがつてばかりゐるものよ

編輯後記

十二月八日石上玄一郎氏に出会つた。梅田駅の有料便所前で落会つたのだ。彼は弘前高校の一年先輩で太宰治と同窓だつた。先輩の顔は覚えてゐるもので直ぐ判つた。石上氏の話によると、その頃小学生の安岡章太郎氏がよく私の家に遊びにきた由である。さう言へば太つた眼やかな小母さんに、くるくるツと顔の丸い少年がよくついてきた。この章ちやんの方は後輩だから思ひ出すのに若干時間がかかつた。

（O）

このあひだ私の詩集の出版記念会があつて、それに出席して下さつた方はみな御承知なのだが、私は三十年の詩作をやめることを申し上げた。そのあと永い間のしこりがとれて、せいせいした気持で町を歩いてゐる。こんなに樂になれるのだつたら、もつと早くやめるのだつた。今後は散文だけを書く。詩について書くとすれば、自分が作らないだけ、最正な批評家の立場に立てると思ふ。

（T）

果樹園叢書田中克己詩集「悲歌」（定価一五〇、送料一六）の申し込みは直接、発行所あてにして下さい。

果樹園　第十二号　（毎月一回一日発行）
昭和三十二年一月一日発行
編輯兼発行人　田中克己
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所　元市印刷株式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所　果樹園発行所
定価　三十円

果樹園第十三号　昭和三十二年二月一日発行（毎月一回一日発行）布施市西堤町六〇七田中克己方　果樹園発行所　印刷所　元市印刷株式会社　定価三十円

果樹園　第十三号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
ある歳末　浅野晃
葡萄　田中克己
河岸にて　石口敏郎
ノンブラドツク　岩崎昭彌
Are you poor　小山正孝
大昔の人（元結）　森亮
琴　山根忠雄
ヒゴイと金魚　池沢茂
雪とみ佛　服部三樹子
公園　福地邦樹
「悲歌」読後感　杉山平一・西垣脩
月に招かれた男　保田與重郎
編輯後記　芳野清

書簡から見た伊東静雄（十三）

小高根二郎

八月になつてからやつと伊東は帰郷するとそれを追ふやうに、安代さんも久し振りに郷里諫早に帰つてゐる。多分、その秋結婚をするので、酒井家の先祖の霊や、祖父母、親戚やら、友人に、別れを告げるためだつたのであらう。宮本氏の小説「氷雨降る日」に見えた短歌一首は、その想ひがけぬ安代さんの帰郷を迎へた時の作である。

この宿の葉鶏頭いよいよ赤き時にま旅にたえて友つきにけり

その友である安代さんの帰郷の模様は、逐一福岡なる宮本氏に伝へられてゐる。

「瀬高からの葉書有難う。…中略…安代さんが突然諫早にやつて來たことやらで、つい返事出しおくれて失礼、二三日内に例の江口女史（註・伊東の生家の近くに住んでゐた安代さんの女学校時代の親友。）と安代さんと三人で雲仙に出かけることにしてゐます。そんなことにはあまり心すゝまねど、我儘もなりますまい。論文一段落ついたら出ておいでなさい。侍つてゐます。」

（昭和三年八月八日諫早—消印—伊東より福岡県山門郡瀬高町上庄野口桑太郎内宮本新治宛はがき）

「宮本さん。故郷の交友は私を不快にします。私は今あなたのことを思ひ出して、なつかしい心になつてゐます。

ひまがあつたら瀬高の生活をこまかに書き送つて下さい。

明後日くらいには例の温泉行きをします私には全々興味がないと云つていゝほどです。世間の小利口ものに禍あれ。早く論文の出來上るのを侍つてゐます。」

（昭和三年八月十一日諫早—消印—伊東より福岡県山門郡瀬高町上庄野口桑太郎内宮本新治宛はがき）

「宮本さん。

安代さんもとうとう今日（十三日）午後京にかへりました。私は近頃少し気分がすぐれなかつたので安代さんにもよくして上げず、こうして、夕方に坐つてゐると泌みじみした心になつて悔んでゐるのであります論文出來しだい大至急でおいでなさい。…中略…皆で大待してゐます。」

（昭和三年八月十四日諫早—消印—伊東より福岡県山門郡瀬高町上庄野口桑太郎内宮本新治宛はがき）

この八月八日から十四日までの一週間に出された宮本氏宛の三通の端書で、安代さんを遇する伊東の心境は、かなり不精不精であるのに気附くであらう。かつて茅上娘子の断腸の惜別歌を書き送り、或ひは枇杷の花にすがる蜜蜂の歌、柿の木に遊ぶ雀を歌つた詩の処女作を捧げた心境からは、大分距たりがありさうである。

もともと伊東が懸賞脚本の応募を思ひ立つたのは、安代さんの佳日をわがための佳日たらしめたいと云ふ、切ない悲願からであつた言はゞ、おいてきぼりにされまいとする発奮の挑みであつたのだ。その挑みの対象である安代さんが、脚本の完成を急ぐ日に立ち現れたことは、伊東の挑みに対して一種の攪乱作用をしたかもしれない。「近頃少し気分がすぐれず」と云ふ断り書きは、伊東のその複雑な心情を現はしてゐるやうである。義理合だけのもてなしをした伊東は、安代さんが帰洛して了つてから、改めてその不親切さを反省してゐる。かつては、小遣、靴下、風邪薬まで恵まれた安代さんの親切を回想したからであらう。いや、懸賞脚本の応募を思ひ立つたことすらが、安代さんに遅れまいとする、悲願からではなかつたか……。

伊東は、あれを思ひ、これを思つて、泌々とした後悔と感慨に耽つたのである。宮本氏の小説に出てくる、も一つの短歌は、その時の感慨を歌つたものである。

肥の国は大和の涯所この思ひになぐさまなくて今朝も茶をすする

この僻遠の郷土を佗ぶる感慨も、先の葉鶏頭の歌で、生家を「この宿」と素気なく歌ひ流してゐる抒情も、もともと一つのものである。この抒情の底の底にあるものは、田舎者であつたが故の敗北感なのである。伊東は嫁ぎ行く安代さんの円満な面影を心に浮べ、さらに意のまゝにならなかつた勝気な百合子さんの幻影を追つて、われとわが失意を弔つたものであらう。

然し、安代さんと入れ違ひに、福岡から莫逆の友宮本氏がやつてきたことは、その失意を補つて余りある喜びであつたらう。母のハツさんにしても、春休以來……待ちに待つた息子の命の恩人である。居心持のよいもてなしがなされたことであらう。妹りつさんのォムレツトは早速作られたらう。二人の文学論のために、寿恵男さんは城址の森が見える書院を空け渡したであらう。そこで宮本氏は伊東の応募作品を見たのである。先の書簡に見えた伊東の快心作「お坊さんと蟾」の代りに「美しい朋輩達」が完成されてゐた。構想と云ひ、行文と云ひ、今までの作品に比し抜群の出來であつた。宮本氏は早速当選の可能性の折紙を、失意の友のために附けた。伊東はその「美しい朋輩達」を祈る心で投じたのである。

昭和三年十月十日の大阪毎日新聞は、その銓衡結果を報じてゐる。応募総数千四百十七篇。先づ予選で五百篇が荒選りされ、そこから候補の五篇が精選された。その五篇中の最高得点作を一等当選作としたのである。

一等（賞金一千円）「美しい朋輩達」
京都市上京区聖護院西町一元岡方　伊東静雄

二等（賞金三百円）「お月様とシロ」
石崎　豊

三等（賞金二百円）「前途洋々」
竹腰芳樹

伊東の悲願は達成されたのである。賞金一千円。学生の分際なら、まさに二年間の生活費に相当する莫大な金高である。が、伊東にしたらその金高より、安代さんの佳日を彼の佳日たらしめ得た幸運の方に、より随喜したに相違ない。四段にわたる当選発表記事には角帽姿の伊東の写真を載せ、例によつて当選談話を掲げてゐる。

「当選しましたか。初めての作であり、自分の力が判らないため不安でした。夏休みに郷里（長崎県諫早町這松下）で書いたものですが、母が大変心配して励ましたりお祈りしたりしてくれました。「美しい朋輩達」は美しいほゝゑましい滑稽を織込み、善と悪とを対立させながら強ひて善を主張せず、美を眼目としたつもりです。きれいなことを主張した映画をつくりたいと思ひました。」

この伊東の談話の末尾に見える、「美しいほゝゑましい滑稽」を眼目とした狙ひは、学生らしからずなかなか老巧である。又、強ひて善を主張せず美を眼目とした創作意図は、この日すでに、美を以て審判の尺度とする浪曼派詩人の資質を持つてゐた事実を物語つてゐる。

一千円の賞金の授与式は主催者である大阪三越催場で行はれた。主催側の三越、後援側の大毎の委員達が威儀を正して立ち列ぶ前に書生ッぽ姿の伊東が呼び出された。「どうぞお改め下さい。」と云ふ祝福の言葉で授与された真白の角封筒。伊東は一礼してそれを受け取ると、授与者の言葉通り、矢庭にばりばりッ！と封を切つて、千円の有無を数へだしたものである。二等の石崎氏、三等の竹腰氏も次々に賞金を授与されて、すでに行儀よく着座してゐる。その後までかゝつて、かつちり千円の金高の紙幣の数を読み終へた伊東に満堂の観衆は、やんや……の哄笑と拍手を送つたのである。

これは、伊東自ら『呂』の主宰者故青木敬麿氏に語り、青木氏はまた同人の原野栄二氏に語り継いだ逸話である。恐らく伊東は、微笑ましい滑稽を眼目にした当選脚本の手前、意識的な滑稽で授賞式を幕にしたものであらう。

因みに、この賞金の一部は、幾多の安代さんの恩愛にむくいるため、結婚祝金として酒井家に贈られた。

ある歳末

浅野　晃

しつとりと降り積んだ雪
面長な主婦は哲学しながら
なますの大根をきざんでゐる
納豆売の少年がとぼとぼ帰つてゆく
私のなかには暮れはてた海がある
ロシアといふ国へつれてゆかれて
いまもつて生きてるのか死んでるのか
わからない　親はあきらめたといつては
　ゐるものの
いまごろはやはり思ひ出してゐるのだら
　う
師走の海では
かくれるかいつぶり
まだ舟を洗つてゐる老漁夫の手を
西風が吹く
繁華街のネオンは菫も紫も奪つた
ショウヰンドーの
きれいな着物や人形の失神の
ぼんやりした光り
花売り娘やマッチ売りの娘が
蛍の光の合唱のなかで
凍つてゆく
空には不動の星
自動車のヘッドライトの桃色が
国道の胸の上をすべつて過ぎ
まつ黒な工場　汐の香がし　灯がかたま
　つて見え
温泉場で年を越す人たちのガラス戸内で
　の会話
どこまでもつづく渚
日本の国をひとまはりするこの多感な曲
　線
くらい水　しろい波　佐渡おけさ……
私のなかに海は重い
除夜の鐘の輪がひろがつてゆくなかを
家のない子供らの額を
照らすべく新年の太陽が動いてくる

葡萄

田中克己

昨年の初から酒を嗜むやうになつた。といつても日本酒やウイスキーを好むところまでは参らず、もつぱら葡萄酒を、といふとみなが笑ふ。しかしそのおかげで、永い間の不眠症がなくなつた。ただし眠るためには、飲む量がだんだん多くなつて、コップに一杯から四杯まで、みる〳〵上達した。こはいものである。そこで「果樹園」の満一年のお祝ひの意味をも兼ねて、唐詩にあらはれた果樹、葡萄のことを書いてみよう。

誰もが予想するやうに、ブドウを歌つたのは李白が一番おほく、五ケ所に見えてゐる。中でも彼の酒の歌の代表的な一つである「襄陽曲」では、酔ひしれて襄陽の小児どもに笑はれながら、百年三万六千日、毎日三百杯づつ傾けようと志を立て、漢江の流を見やるとその緑色の水が、たちまち葡萄酒の滝してないのに見えて來るといふ、誰でも知つてゐる箇所がある。宋代の史書「南部新書」には、唐の太宗が高昌国（新疆省カラホジャにあつた漢人の国）を破つて、馬乳ブドウといふ種類を手にいれ、これを苑中に植ゑ、また造酒の法をも知り、このおかげで唐人は、はじめてブドウ酒の味を知つたといふ。その真偽はともかく、李白がすでにブドウ酒を好んだことは明らかで、「対酒」といふ詩でも、その酒をブドウ酒と明記してゐる。前にも引いた「楊太真外伝」は宋人の小説だが、李白が「清平調詞」三章を即席で作り、楊貴妃の美しさをあまさずたゝへたとき、貴妃が玻璃七宝の杯に、西涼州のブドウ酒をついでこれにすゝめた、といふ記事は、それゆゑあながち荒唐な想像とは申せない。大体、唐代のブドウの栽培は、宮中だけではなく、西北支那の方々で行はれ、中でも皇室発祥の地である山西省の太原は、その一中心であつた（石田幹之助教授「唐史叢鈔」二四七―五〇頁）。唐の皇室とともに、血統的に純粋の漢人でない疑ひのある李白でなくても、ブドウ酒を好むことには別にふしぎはないのである。

たゞ李白の詩では、ブドウの表記はまちまちで「襄陽曲」では葡萄であつたが「対酒」では蒲萄、その他に蒲桃とも記す。これは李白が無頓着で、アテ字にかまはなかつたからではなく、このころまだこの外來の植物の表記が、定まつてゐなかつた証拠であらう。その反対に、前代の作なる漢代から梁までの情詩をあつめた「玉台新詠集」（「岩波文庫」に鈴木豹軒博士の訳註がある）では、葡萄と統一されてゐるのは、後人のせいに相違ないなほこの集では、ブドウは衣飾の模様としてなど、その蔓の美しさのみ詠じられ、酒の材料としては、一向にうたはれてゐないが、これは中国人のブドウ酒嗜好が、唐代にはじめて盛んになつたことを証する。

河岸にて

石口敏郎

木枯が
低い言葉を
電柱に伝へ
エスカレエタアの速度で
過ぎて行つた河舟に
白い干物が
風に輝き
貧しい今日が翻つてゐる

セロファン紙に包まれた冬空の底
樹々の葉は散り
人体循環図のやうに
梢は空を支へて立つてゐた

しかし我国でも正倉院御物などに見られる葡萄鏡の佳品は、原田淑人博士によれば、同じく唐代の玄宗の頃に最良のものが製せられた。いはゆる海獣葡萄鏡がそれである、といふ（「東亜古文化研究」一四九頁以下）。

ブドウは杜詩でも三ケ所に見えるが、そのうち「寓目」と題する、秦州（いま甘粛省天水市）での作は、「一県蒲萄熟」といふ句ではじまり

県のいたるところにブドウが熟し
秋の山にはクローヴアーが多くある。
関所の上の雲はいつも雨気を帯びてゐるが
とりでの水は少くて河にはならない。
チベット種の女はのろしなどには平気
イラン系の青年がラクダを曳いてゆく。

ノンブラドツク

岩崎昭彌

ゴム林とジャングルを眺めて
五日間を列車にゆられ通しだつた
なつかしい地面を踏んで宿舎に入ると
命令は「一週間の待機」　ほつとする。

こゝはバンコツク行と泰緬鉄道の分岐点
街並をしばらく行くと田圃に出た
追はれながらも悠々と歩む水牛たち
日本とそつくりぢやないか！
眺めてゐるとポンと肩をたゝかれた
見馴れぬ上等兵がそこに立つてゐる
「出身は何処だ？　俺も滋賀県だ

滋賀県の何処か詳しくいつてくれ」
直立のまゝ「彦根の駅の近くです」
答へるとたちまち女のごとく抱きしめられた
一瞬、さわぎたつ全身の血潮。
知つた、こゝまで出征してしみじみ知つた
緒戦以來駐屯してゐる先輩の上等兵
その顔も別れた故郷に見え兄弟に見える
二人は青草にあぐらをかいて語りあつた
祖国と泰国とを何度もゆききして――
夕陽が森に沈むとき、声をひそめ
「ビルマへ進軍すると伝へたい」
さういつて母の住所（アドレス）を彼に托した

――インパール――

ぼく自身は年よりの眼ざしでかなしく
戦乱のあくまでつゞくのを眺めてゐる。

といひ、杜詩でも一等うつくしいものの一つで、ブドウとクローヴアーと、どちらも西方原産の植物が、この方面に多く栽培されてゐるのを示す。しかし杜甫がこのエキゾチツクな草木をあげて、秦州の風物と詩人の心中をあますところなく描かうとした効果が、今のわれわれには遵確にあらはれるかどうか。二種とも非常に平凡な植物になつてゐるからである。

しかしブドウはその種々なる表記法の示すごとく、イラン語の宛字であるし（ギリシヤ語ボトルスからといふのは、今の東洋学では採用されない）クローヴアーを表はす苣宿といふ見なれぬ漢字も、たぶんイラン語の音をそのまゝ表はしたものである（ラウファー教授「シノ・イラニカ」二一二頁）。

白楽天の詩では、ブドウは三ケ所に見えるその一つは「和夢遊春詩」で、美人の帯に模様となつてゐるが、こゝではさらに蒲萄と異字であらはされてゐる。第二は「房家夜宴喜雪戯贈主人」といふ詩で、酒宴が長びいて、蠟涙のたまつた様子が、ブドウの房そつくりだといふので、あまり感心した形容でもない最後の第三首目は、太原尹・北都留守たりし

斐度に贈つた詩で、「巻管吹楊柳、燕姫酌蒲萄」といふ箇所、自ら註をもつけて「蒲萄酒は太原より出づ」といひ、石田教授が史料として引かれたのは当然だが、詩としてはあまりいいものとは思へない。とまれ唐人のやうやくポートワインに親しむ状を、これらの詩が伝へて、わたしには楽しい。

ブドウそのものをうたつた唐詩として、最も忘れがたいのは、これら大家の作ではなく婦人、それも妓女だつた趙鸞々の「酥乳」といふ詩で、佐藤春夫先生はその転結を訳して

乳房をうたひて
湯あがりを
うれしき人になぶられて
露にじむ時
むらさきの玉なす葡萄

とされた。（「玉笛譜」一五二頁）

蛇足として桑原武夫教授「一日一言」（岩波新書）のおかげで（この書の三月十二日の項には、伊東静雄の写真と「朝顔」の詩が収められてゐることは、お気づきと思ふ）「雅歌」のブドウをうたふ一節を思ひ出されたが、「ブドウの木は花さきて、そのかぐはしきにほひをはなつ」といふので首をかしげたブドウの花がどんな匂ひか、いちどたしかめたいと思つてゐる。（唐詩の草木4）

Are you poor

小山正孝

私の妻が英文科の学生であつた頃、私は彼女と永福町といふ町まで電車に乗つて行つたことがある。下車してすぐに広い通りがありそこを軍用自動車が猛烈なスピードで、何台も何台もが走つて行つた。一台毎に旗を持つた兵士があごひもをしつかりして、全く、わき目をしないで、次から次へと、すぎて行つた。私と彼女とは、何分間かを二人で立ち止つてそれを見送つてゐた。私と彼女とが永福町に行つたのは、用事があるからではなかつた。当時、まだ結婚してゐない男と女とが行くことの出來るのは、大きなお宮さんか、それとも郊外らしい風景の場所だけだつたのでまだ結婚してゐなかつた私と彼女とは、永福町に行けばそれらしい所があることを予想してはじめてそこへ行つたのだ。帰りの電車の中で、私はまだ、どことなく少女らしい彼女の横顔を見つめながら、さつきまでの愛撫をもう一度くりかへしたくなつてしまつた。電車は渋谷に向つて走つてゐた。私よりも渋谷よりに彼女は坐つてゐた。並んで坐つてゐると、私は、ずいぶん顔を横に向けないと彼女の顔を見ることが出來なかつた。私は、一つの案を考へ出した。私は前に立つてゐる人々の顔が真面目さうに、前だけを見つめてゐるのを知つてゐた。私は腕組みをした。彼女の指をそつと、私の右手の中ににぎつた。彼女はだまつてゐた。私もだまつてゐた。当時としては、この事は大変な快感を感じた。妻の手はやはらかくて、細くて、従順であつた私たちの前に二人の少女が立つてゐた。急に少女が声をあげた。

「まあ、たいへんね。」

私たちは指を離した。十数年たつた今になつても、その少女たちは、何を見てさう言つたのか、見当がつかない。その時には、私の腕組みの事を発見されたのではなかつたのかと思つて、はつとして、私は妻の指を離したのである。十数年たつても、なほ昨日の如く少女たちの声を耳に感じる事が出來る。同じく、私は妻のその時のやさしい指を感じることが出來る。

人間は向き合つて坐るのがほんたうなのかそれとも並んで坐るのがほんたうなのであらうか。人間の愛情は会話することによつて本当に表現されるのかそれとも接触することがほんたうの愛情の表現なのであらうか。いろいろの場合もあるだらうが、とにかく、隣に坐つて、しかも、ある部分接触してゐるということは「愛情」について一歩近づいたと見てもよいであらう。

電車の中では、好むと、好まざるとにかかはらず、男と女とは隣席するのである。

今年の夏は何と長い夏であつたらう。また秋は何と早く足早にすぎてしまはうとしてゐることであらう。輝かしい一日だに持つことなく私の人生は、またまた過ぎ去りつつあるのである。電車に乗つてゐるやうなものだ。昔の人は駒に乗る。と表現したが、私は、同じ意味で電車に乗りつつ、人生は過ぎ去りつつあると表現しよう。

一日の中には、いい日として過ぎることもあれば、いやな日として過ぎることもある。しかし、いい日は二日とつづかない。また、いやな日は二日とつづかない。それでは、一日おきに、いい日と、いやな日が來るのかといふと、さうでもない。現在の生活では、私たちは、何度か気持をとりなほすことによつて、やつと一日一日をすごし得るのである。計算としては、一日おきにいい日といやな日がやつて來るのかもしれないが、とにかく、これは、一瞬毎に、気分的には、私たちはさうした感情に襲ひかかられるわけである。

感情の起伏がはげしいので、私は、ある時にはしみじみと人生の哀れさと、自分のだらしなさに涙する。ある時にはものすごく優越の気分にひたることもある。

夕方から少し雨が降つたりやんだりして、私の一日も、その時にはいやな日に属するやうな事件ばかりで、暮れて、終りに近づいてゐた。憂欝を消すために、私は少量の酒気を帯びてゐた。

時間はもう、十二時近かつた。

私は電車に乗り込んだ時、人越しにある女の顔を見た。目立つ程ではないが、色が白くて、エキゾチックな感じであつた。洋服はじみであつたが、一寸、そばかすが目のあたりに集つてゐるのは、あいのこかしらと思はせた。私がその女を見おぼえてゐたとか、知つてゐたといふのではなく、全然はじめて見た顔にちがひないのだが、私は気をひかれた。新聞を読んでゐるうちに、私の前の席が空

大昔の人

元結

都を去ること東南に三千里、
沅の流れと湘の流れが洞庭の太湖をつくる。
湖の背後ははけはしい山地、谷の深い皺は数へ切れない。
そこに住む人たちは邪気といふものを全く知らない。
木のてつぺんに集つて彼等は嬰兒のやうに意味なく笑ふ。
かと思へば水に入つて鯉やすずきを捕へる。
彼等の喜びは鳥や獣の喜びとひとしく、
その身も、その心も、何物によつても拘束されない。

わたしは九州に分かたれたこの広い国土を廻り歩いたが、
このやうな生き方はもう余所では忘れられてゐた。
「なるほど聖人賢者の教へもよいけれど」と、
ふとこんな歎息をもらすほど私は考へ込んでしまふのである。

（森　亮　譯）

註　元結は盛唐の詩人で、字を次山といふ。原詩は全唐詩に入つてゐて、思太古といふ題であるが、太古の民の無爲自然を単純に讃美したものではない。時代に對する諷刺詩として読むべきものである。元結は彼と時代を同じうする杜甫や李白などの大名におほはれてか、その名を餘り知られてゐないが、好んで特異な題材を捉へ、一句一句を御ることなく、いつのまにか一篇の佳作に歌ひ上げる力量は凡庸でない。

正誤　第十二號の拙訳の題は「歸郷の船の旅で」が正しい。

いたので、私は坐つた。なほ、新聞を読みつづけた。

気がついてみると、車内に立つてゐる人は少くなつて、もう大分、電車は進行してゐた電車の進行は時間の進行と一致してゐるやうだ。共に生れた人も、だんだんに減少して行く。同じ年の友人を次第に失つて、自分が生き残りであることをしみじみと感じる老人の気持に近いのだ。遠距離まで帰る人間には、そんな風に感じられるのだ。老人のさびしさはこんな風なものであらう。また長生きのたのしさも、こんな風なものであらうか。と、いふのは……

電車の進行方向の方に、私の隣りに私は、さつきの女が坐つてゐるのを見出した。桃の肌のやうな耳たぶに金色のイヤリングがゆれてゐた。そし、何となく、そわそわとしてゐるのである。

私は、ふと、家で私の帰りを待つてゐる妻を思つた。彼女は、私がひどく酔つた時には私の手をひきあげるやうにして、

「まあ、お酒くさい」

と言つて、もう一本つけるやうなふりをして、そのくせ絶対につけてくれないで、ねかせてしまふ。少し、酔つてゐる時には、

「あら、お酒くさい」

と言つて、もう一本つけるやうなふりをして、そのくせ、今日はどこから急にお使ひに來て、お金が入用であつたとか、子供は勉強しなかつたとか言ふのである。

私がお酒をのんでゐない日は——そんな日はないのだから、説明を要しないであらう。私は、妻が英文科の学生であつて、永福町に行つた日を、その時、ふと、なつかしく思ひ出した。あの日の彼女は、私の隣の席の彼女よりも若かつた。お嬢さんのやうな隣席の女は、ハンドバックの中から一枚のレターペーパーを四つ折りにしたのを取り出した。それは。何度も出し入れされたものにちがひないしわがたくさんついてゐた。しわくちやとまでに行つてゐないが。

私は新聞を読んでゐるふりをしたが、目はぎよろりと、女の方に向いてゐたにちがひない。

私の生活はわびしかつた。変化のない毎日を、アルコールによつて、ひきのばして使用してゐるやうなものであつた。私は変化がほしかつた。目をつぶつて、明日といふ日を考へると、三通り のヴァリエーションでもつて、明日といふ日は完結する。果して、明日になつた時には、その三通りの組み合せが少々の変化をしただけで、相似て、明日の今日といふ日は完結する。経験は教へてくれるのである。「ああ 生きてゐてよかつたなあ」(生けるしるしあり)といふ日は、全くないやうなものであつた。

私は、新聞紙をたたんで、ひざの上に置いた。そして腕組みをした。

私の目は、女の膝の上のまるい形のハンドバックの上に向き、その上の白い手と、手の中の紙切れに向けられた。

ふと、私は、自分の姿勢が、永福町に行つた時の日のやうなのに気づいた。昼と夜との相違があり、妻と、別の女との相違はあるが。

私は、妻を昼のやうに明るい、正確な女と思ひ、その女を、夜のやうな女ではないかと考へはじめた。

電車は、一つ、一つ、駅をすぎて行く。

私の気持が、そのやうにはつきり女にひかれてゐる時、妙なしぐさを女がしてゐた。手の中のもみくちやの紙を、時々、うつすらとあけるやうにして、また、女はそれをたたみこんでゐる。

子供が蝶の羽を大切に三角紙につつみ、それを人に見せる時のやうに、はつきり見せるのは君にだけだ、といふしぐさに似てゐる。

私は蝶の羽の模様を見てもよい人間なのかもしれない。

二人が並んで坐つてゐるのは、これは二人の心が近づく機会である。私は、胸がどきどきとして、期待に、少し、うきうきとしはじめた。しかし、私としても中年の立派な紳士なので、いくら酒気を帯びてゐるとはいへ、はしたない言ひよりかたはしたくなかつた。

私は、女が、その紙を、わざと、ひろくひらいた瞬間に、はつきりと見た。

英語がずうつと四五行書いてあつて、その英語の上に、一字づつに、かな文字で、発音が、たどたどしく書いてあつた。一箇所から一本の線がひいてあつて、その線のうしろの所に、何か文章が日本語で書いてある。

女は、たしかに、私と同じやうに、どきどきしてゐる。そのうへ、女は、口の中で、何かを、たどたどと言つてゐる。聞えるやうだ私に向つて言つてゐるのであらうか。私も何か言はなくてはならないが、きつと、女は私が、その英語をよむのを待つてゐるのだ。

昔、ある時、聞いた事がある。売春婦が相手を求める時に、取締りがきびしいので、何気なく手紙をよんでゐるふりをして、それで男を釣ると。ああ、冒険は如何なる形であれ冒険にちがひない。

第二回の機会がきた。私は、はつきりと、次の言葉を読みとつた。

Are you poor

そこで、紙が折れてゐて、なほつづくのかそこで疑問符がついてゐるのかはわからないそして、英語の上に、アア ユウ プーアと書かれてゐた。Are you の頭の上の所から上述の一本の線がひかれて、その終りの所に日本語が書いてある。

この言葉を彼女に

と書いてある。その先は見えない。

私は、心の中でくりかへした。

Are you poor Are you poor Are you poor

果して、poor はどの意味の poor である可きか。

私は決心をした。「この言葉を彼女に」——の次の文章は、次の通りに補足されるのが正しいのではないだらうか。「この言葉を彼女に語りかけて下さい。彼女は日本語が出來ません。彼女は貴君の意志を諒承し、貴君に微笑をもつて答へるでありませう。」私は決心をしたが、なほ、ためらふものがあつた。私は腕組みをしなほしたが、わざと、私の指は彼女のひぢに触れた。思つたよりも強く、私の意志は通じたにちがひない私は、そして、哀れにも、小さい声で、言つた。

「Are yor poor」

お前は貧しいか、もしお前が貧しいのならば、私は若干の金円をお前に提供することが出來る。

さういふ意味を表明するような調子で言つ

琴

山根忠雄

静かな晩だつた
正月に二人でおまへの実家へ行つたとき
夕飯もすんで
親子三人
炬燵にあたつて話してゐると
ふと琴の音が茶の間の方から洩れてきた
三人は黙つてそれを聴いてゐた

あの琴の音だ
琴を弾かうといふあのふくらんだ気持
それこそ詩だ
そしてその気持こそ
僕がいつも詩を人生に求めてゐるわけなんだ
僕は急におまへがいちらしくなつて
立つてそつと茶の間の障子をあけた

たのであつた。私は、別な調子で、しかし、やはり、哀れにも、小さい声でもう一度言つた。

「Are you poor」

お前はさびしいか。私はさびしい。こんな時にはお互になぐさめ合ひたい。

彼女は、その紙を私が読み終つたのを見て安心したのか、ハンドバツクに、さつと、しまひこんだ。口の中で、何事かくりかへしてゐたが、次の駅で、下りた。

私もゆつくりと立つて、次いで下りた。

彼女は陸橋を越えて、足早に歩いた。そこに一人の、もつと年寄つた女が待つてゐた。彼女の帰りを待つてゐた母親であらう。二人はつれだつて歩きはじめた。

私は、立ち止つた。いままでのことは、何かのまちがひなのだ。それ以上追つても無駄であることをさとつた。陸橋を二人は下りて改札口を通つて行つた。上から、私は二人を見送つた。彼女はしきりにうしろを見てゐた。遠くの白い顔が、相手に語つてゐる言葉を私は想像した。

「へんな人がついて來るのよ」

私は、秋風につめたくほほをなぜられてゐるのを感じた。もうすつかり酔ひはさめてしまつた。彼女は、多分英語を勉強しはじめの所だつたのだらう。その中の文を暗記でもしてゐたにちがひない。

私を迎へて、妻は玄関の所でにこつとした

「お前は英文だつけなあ。poorの本当の意味を言つてくれよ。知らないか。本当の意味を。俺は、今晩はわかつたんだ。Are you poor」

ヒゴイと金魚

池沢　茂

ぼくは金魚をなるべく自然に近い状態において、いわば天寿をまっとうするまで、大きくしてやりたくなった。といっても、ぼくの家では、ほりをめぐらしたり、池をほったりは、とてもできないから、防火用の水槽で代用した。広さはざっと二尺と三尺ぐらい、深さは二尺ぐらい。たゝみ半畳にも足りない広さだけれど、わりあい深い。そして金魚は、三、四年のあいだに、じっさい、見ちがえるほど大きくなった。そのかわり、あおくよどんだ水の底にしずんだり、繁茂した藻のかげにかくれたりしたら、その姿は、まったく見えない。小さな金魚鉢などで飼うのと違ってもはや、本來の観賞の用に立たない。大きくなるのがたのしみの、単なる「生きもの」にすぎない。それなら、もと〳〵動作が緩慢な金魚より、もっと活潑に動くもののほうが、よく見えて、おもしろい。大きくなる点でもっとすみやかに、もっと大きく成育するもののほうが、たのしみが大きい。ぼくはだんだんヒゴイが飼いたくなった。

ちょうど男の子がうまれた年で、その二、三ヵ月あとの初夏に、妻の父が、いなかから來て、こいのぼりを買ってくれた。おすの黒いほうは、めだって大きい。竹ざおも、すごいほど太く長いのを買った。小さな長屋の一軒で、こいのぼりだけが、断然他を圧した。ながいあいだ不妊で、なかばあきらめていたところへ、はじめて男の子が出來たので、義父としても、よほどうれしかったのだろう。いつも生活の不安におびやかされて、ひとの子の親になど、満足になれそうもないと思っていたぼくだけれど、大よろこびに、はしゃいでいる妻と義父をまえにすると、どうしても、なにかしなければいけないような気持にかりたてられた。

「ぼくはほんとうの、生きているコイを飼うよ。子供が大きくなるにつれて、コイも大きくなるやろ……」とぼくは言った。

しかし水槽は一つだから、心配がある。ヒゴイと金魚とを同居させたばあい、おとなしい金魚が。あらっぽいヒゴイのために、かきまわされ、突きたおされ、えさをうばわれ、すみのほうに押しつけられ、ついには殺されてしまうかもしれないからだ。そして、はじめのうちは、じっさい、そのように見えた。しかし、かなりの月日がたったころ、ぼくはようやく、その心配がほとんどむだだったことに、気づいた。金魚には、どうやら、ヒゴイよりも、ずっとすぐれた嗅覚やら生活力やらが、めぐまれているらしいのだ。その証拠に、えさを投げいれてみると、かれらはヒゴイよりもかなり早く、その存在と位置に、気がつくらしい。ヒゴイはすばやいから、おくればせに気づいても、さっと水をきって身をひるがえし、よこあいから、たちまち、かすめとってしまう。金魚はえさを目のまえにしながら、あわてふためくばかりで、しばしば突きとばされ、よろめかされる。しかし気がつくのが早いから、たいていのばあい、一くちや二くちは、すでに口のなかにいれているときが多い。平素でも、ヒゴイの子が、小さいながら淡水魚の王者らしく、ものかげに、じっと、おうように構えているあいだに、金魚たちは、あちこちと、たえまなく、ゆらめきあるきながら、ふちの水あかをつゝいたり底のどろや藻のなかに頭をつっこんだり、水の表面におちた羽虫などをさがしたりして、こまめに、えさをもとめている。たいていの動物はそうらしいが、金魚も、年をとって大きくなると、動作がにぶくなってくる。おっとりと落ちついて、むやみに動きまわらない。それでも、ヒゴイの子より、こまめなのだ。

しかし何年かたつと、金魚が「としより」

雪とみ佛

服部　三樹子

ああ我れにひとりの人のある春を忘るるまでにながながと寝し
月にそふ一つの星のかがやける冬の夜空の下に戸を差す
鶺鴒ならぬ人の教へし道なれど理窟はなくて教へたまひき
暗き夜に招かれむとて灯を消せばまなうらに残る夜のともしび
谷ふかきところにおちて聞くことば土の下ゆく水音のごと
戸を明けて外の白きに驚きぬねむれるうちにふりし雪なれば
胸内と雪の白さと出合ふ間のつかのま越えて朝の雪ふる
ものにゆかむときめきごころ不意に來る歓びに似てはかなけれども
雪の上に虹かけわたすたまゆらのをさなごころは胸ののぞき絵
外見れば雪の速さの身にそひて降りゆくほかになにごともなき
美しい錦鶏鳥の飛ぶやうな夢を希ひて年を越えたり
雪の中に骨結ばむと耳近くききしことばの綾の上に臥す
足跡の目には残らぬ言葉もて誘ひつつ雪うつつ目に降る
むなしこころ神のみくらとなれかしと希ひし春は日女なりけり
見なれつつ今日みる人は飛鳥路にましし佛のもの言へるごと
又來むと思ひてさりしみ佛と今日の我が身といづれなつかし
かりにしも美男と云へば偽りに人や美し我やなれにし
なつかしくなごみて思ふ飛鳥路にましし佛は遠く近きも

になるのに反して、ヒゴイは「わかもの」になる。はじめのうちは、金魚のほうが、取りまわしがうまく、よくかせいで旺盛だけれどやがて、どうしても、ヒゴイに圧倒されてくる。持って生まれた運命で、どうにも、しようがないのだろう。としをとって大きくなり尾びれも目立って長かった一ぴきの金魚が、ある日、なかば死にかゝったまゝ、水面に、ぼんやりと、浮きあがっていた。三つにわれて、ゆら〳〵水になびいていた、とくに優美だった尾びれは、はしの二つは全部、まんなかのは半分ほど、食いちぎられてしまっている。尾ばねをむしりとられた雄鶏や七面鳥みたいに、打って変って、さむ〴〵しく、みすぼらしい姿なのだ。しばらくえさをやるのをわすれていたあいだに、よわったところへ付けこまれて、たぶんヒゴイに、えさのかわりに、食われてしまったのだろう。

ところが、そのヒゴイは、いちばん小さい二ひきを残して、あとの、にわかに大きくなっていた四ひきがみな、大雨の日に、水槽から、とびだしてしまったのだ。ぼくの家は高みにあって、石垣のしたにある前のみぞは、大雨がふると、谷川みたいに音をたてて、急な坂をながれおちる。そして五、六百メートル下のほうで、宮川に合流する。その名のとおり「宮川」は、むかしは、ちかくの山にみなもとを発し、ひろい谷間をぬって、やがて平野に出て海にそゝぐ、水のきれいな、りっぱな「川」だったにちがいない。いまはしかし、ごみだらけの、くさい、きたない、市中の「どぶ」にすぎない。それでもヒゴイは、大雨の日、したのみぞに谷川の音をきき、それがやがて、もっと大きな川につながってゆくのを、魚の本能で、まざ〳〵と感じたのだろう。そして、水槽からとびだすことができたとき、おもわず「しめた！」とさけんだかもしれない。その瞬間、その小さな頭には、みぞをつたって川へおよぎだし、ひろい天地で、のび〳〵と活動する自分のすがたが、火のように、あか〳〵と映じたにちがいない。

このことにぼくが気づいたのは、三日ほどあとで、晴天がつゞいていた。そして、庭にちらばって落ちているのが、水槽で飼っていたヒゴイらしいとわかるまでには、かなりの時間を要した。「めざし」か「いりこ」か、なにかそんなものがころがっているとしか、見えなかったのだ。どろにまみれたまゝ、もはや、かさ〳〵に、ひからびている。はだのあかい色も白っぽくあせて、目の部分には、すでに、恨めしそうな、うつろな大きな穴があいている。そして全身に、なんともいえないほど、苦しみがあらわれている。やっと窮屈な水槽からとびだせたものゝ、大雨でも高みにある庭の地面には十分な水のたまりも流れもできないから、どろにまみれるばかりでのた打ちまわりながら死んでいった絶望と苦痛が、その小さな全身に、まざ〳〵と、あらわれているのだ。

公園

福地邦樹

この都心の公園をめぐって
電車や自動車やおびただしい人々が
終日ひしめき流れる
周囲のとどろきのなかに
台風の目のように
ここにだけ穏やかな光がさし
真赤なサルビアの花壇や
噴水のある小さな池のあたりには
無心の明るさがあふれている

わたしの心が　こうした場所にと
回帰を求めるわけではないが
ここには老成者のかわらぬ親切と
人をうながす幼児の激刺さとがある

金魚は全部そろって、いき〳〵とおよいでいた。ヒゴイの大部分がいなくなったせいかかえって、ゆう〳〵として見える。大雨のため、あたらしくなり、酸素もゆたかに、よく澄んだ水のなかで、はだのくれないもあざやかに、ながい尾びれをゆらめかせ、目をくりくり光らせている。しかしヒゴイも、ちっぽけな水槽などでなく、ひろい池やほりに飼われているのだったら、ながいあいだ生きのびて、淡水魚の王者にふさわしく、金魚の何倍何十倍というほど、大きくなったにちがいない。

「悲歌」読後感

五

田中さんらしい清楚な御本で「大陸遠望」以來のよろこびでございます。私は古文調がわかりませぬので御詩集で再びあの口語調に接しうれしくてなりません。何でもない平俗調でゐてそれで独特のものであることを私はよく味つてをります。佐藤春夫氏が漢文を和文にするときに出る調子が、田中氏の詩の口語にそつくりなのに驚いたことがあります。「四季」にありました、橋の上を子供と犬が走つて通りまた戻つてゆく情景を敍したものなど、あゝいふものは忘れられません。今度の御作品は、にがく暗くかなしい詩篇であり小冊子「寒冷地帯」を頂いて「哀歌」を見て泣いたときのことを思ひ出しました。（また泣きました）「この頃」のやうに、私も泣きたく思ひます。小寺範輝のひつぎは來れり、など今だに暗誦できる詩篇の「大陸遠望」『西康省」のころを思ひ出させる詩集でもありましたがやはりあの頃よりおだやかになつてをられます。その代りそして戦争のいたみが、田中克己流に出てゐて惻々と迫るものがあります。このごろドライといふ言葉を俗に使ひますが本当の意味で田中さんの詩は早く乾いてゐたと思ひます。「自殺未遂」を最も好みます。それから「わが立場」など。多くの「別れ」の詩、それから、友情の詩は、いつもの田中さんの詩のライトモチーフで、愛読者の私には手応へがあります。全部がわかつたわけではありませんが、取敢へず失礼をも省みずハガキでお礼申し上げました。

杉山平一　敬具

六

この間は悲歌忝く存じました。まことに沈痛耐へ難い詩品多く、よむ者よりも、作つた人の苦しみを痛感しましたが、その時々意ぢわるい眼の間に、むかしの君の抒情詩が、水のやうなすゞしさで（透明に）出てゐるのがこの上なく存じました。むかしといふのは、あなたが日本の新詩に、よみがへりを与へたコギトの時、その初期の詩風です。そのことは、いつか私が云はないと人が忘れます。世の中の人は、他人をほめるよりも、他人のてがらをわがものとすることに、本質的（本能的）だといふことをこのごろさとりました。なほその当時ケストナーの詩風で実用抒情詩（？）といつて我々のよろこんだこの浮世の詩の、もつと痛ましいことそのものをこんどは思ひきり知らされました。ほめるのも苦しい位、本当の詩集です。しかし一行位気に入らぬ句と、二三気に入らぬ語尾ありましたがその点も十分同感同情してゐました。

保田與重郎

七

「新詩作法」といふ田中さんの作品を拝見して、一種ショックに似た感嘆を味はった。「友人たま〳〵門を叩いていはく「当世流行の詩、みな汝と態を異にす」と。その一言に意を強うして上梓するのであるが、云々」とある「悲歌」のあとがきの辞は、それと表裏をなすものであらうが、おのづから「悲歌」の詩人の存在の貴重さをかたった言葉とおもふ。

詩とは、詩人とは何かといふことを、どう説明したらよいか、今日では大変むづかしい

やうに思ふ。言葉を光りのやうに直截に正確にうつくしく用ひて、感動をそのままつたへることが詩の作業で、それをなしうる人が詩人といふことになるのであらうか。田中さんの「悲歌」の一巻は、そのことを実にきはやかに示してゐる。「新詩作法」のやうな作品が生れるのも無理はない。つまり、これは資質的な詩精神によることで、かうなるともはや詩法についての論議など意味がない。わたしなど、現代日本の平易な日用語をもって淡々と自在にうたはれる「悲歌」の、ハイネ風な詩業のあざやかさに、ただ感嘆するばかりである。かつて、芥川竜之介が谷崎潤一郎との小説論争で、谷崎作品に詩精神の欠除してゐることを難じ、ハイネに対する愛慕の念を告白してゐたことなども、ふと思ひあはされる

先日帰阪しての戻りに、「青衣」の同人仲間へのみやげに「悲歌」数冊をおあづかりしたが、たちまち足りなくなって困った。田中さんのデスクの抽出しに、それがまだぎっしり眠ってゐたことを、わたしは口惜しい気持で思ひうかべた。そして、詩を書くことを止めようと思ってゐると笑ってをられた田中さんの胸に、いったいどんなにぎっしりまだ詩想が眠ってゐることだらうか、と思った。

西垣脩

月に招かれた男 (八)

芳野清

彼が母を歌つた詩の底には何時も幼児の母を呼ぶにも似た切ない響があつた。人一倍寂しがりやだつた彼の心にはいつも何処かで自分を慰めてくれる人、心の故郷として母を求めてゐた。放縦無頼は嘗つて彼が世俗への反抗の態度として最初に選んだものであつたがつひにそれは彼の頑健さを誇るポーズでしかなかつた。彼の本心は寧ろ私達が無下に忘れはてやうとしてゐた幼い日々の宝を護りつづけ、それに美の秩序をつけ、整理する事、いはば、詩心の基盤を築くことによつて荒涼の生活に耐へてゐたのだ。そして自分の誕生日を歌ひ、その中で遠く離れた母を呼ぶ時、己れの生といふいみじく、いじらしいものに涙せずにはゐられなかつたのであらう。大垣は思ひ通りにならない長い間の恋の悩みや、自分だけが疲れ、傷ついてしまふ友情の傷心の後に、必ず思ひ浮べるのは幼い日の稚い夢であつた。「私の誕生日」を書いてゐる僅かな時間だけ深い憩ひとなごやかさに溶ける事が出來た。それを又数少ない友に書き送ることで彼の心の祭典は美しく飾られるのだつた。その葉書を写してみよう。

—お便り嬉しく戴いて居ります。そのお返へしも幾枚か書いたのでしたが、いつかそのまゝ筐の中に入れられてしまつたのですこんな辭も許して戴けるでせう。でも今日は私の誕生日とあれば数少ない友の貴方と大塩さん、ふるさとの父母には一葉書かねばなりません。ほんとうに私のさゝやかな喜びなど祝つてくれるひとは少ないのですから。こんな麗らかなのどかな青い空と、白い雲の下で、小鳥に歌はれながら、早咲きの花々にかこまれて生れてしまつたのですから。碧い風はいつからかこわい風と吹き荒ぶのでせう。さうして、でも私は今日の日の心で堪へねばならない。

私の誕生日

春弥生　三月二十三日は
卑しい街をよそにして
机の上に一輪の花飾つて祝ひます
お母さん　見て下さい
このつゝましいよろこびを
空はこんなに麗らに晴れて
野に咲く野花に囲まれて
私は生れて來たのですね
こんなにも　たのしく！
さうして碧い微風がさゝやき去つて

こわい木枯しが吹き荒ぶ日が來ても
でもお母さん
私は堪へられますね
今日の日のこの稚い心で
お母さん　私は堪へられますね

この詩の中で「こわい木枯しが吹き荒ぶ日……」と彼は幼児のおのゝきそのまゝに、繰返へし母を呼んでゐるが、それは次第に募る戦争の苛烈さにおのゝいてゐると云ふより、自分自身にいつか襲つてくる精神の荒廃の日に対する本能的な恐怖、と私には考へられてならない。

昭和十五、六年は不思議に美しい文学が燎爛と咲き誇つた時期で、思ひ返へしてみても後年ともに透谷賞を得られた田中克己「楊貴妃とクレオパトラ」、伊東静雄「夏花」それに同じ田中氏の「大陸遠望」、メリメの訳ののつた、薄命の佳人を思はせる表装の堀辰雄「晩夏」及び「菜穂子」、今に街中は軍靴とラッパの音に満たされると不幸な予言を呟き、己れの青い花束の奪はれぬうちに、いち早く旅立つて姿を消してしまつた萱草の詩人立原道造全集が出たのも十六年の始めである。湧き上る泉のやうな大らかな愛情をいつのまにか詩人と云ふ、はぐれてしまつた種族の中で歌はねばならなかつた愁しみをそこはかとなく漂よはせた、棟方志功の奔放な版画に飾られた詩集、小高根二郎「はぐれたる春の日の歌」、それにいつのまにか夢のやうに死んでしまつた詩人、津村信夫「戸隠の絵本」、それにまだ流行作家にならなかつた、太宰治の小説「新ハムレット」や「千代女」などの短篇が出たのもこの頃だつた。思ひ出しても懐しく、美しい世界が、大東亜建設の美名の下に次第に殺伐さを加へてくる世相と全く別に、貧しく愉しみの奪はれた私達の青春の傍らに木蓮の花のやうに匂つてゐたのである。いはばそれは長い間培はれた花園の花が一度に咲き出たと云つたふうで、戦争と云ふ厳しい灰色の嵐の季節を背景として、一際美しくそれ故にまた悲しく、ある時は逆説的にさへ私達の目に映つた。その花園がやがてくる嵐に散り〳〵になり、荒涼たる焦土と化すことを一番よく知つてゐたのは、花園の中で一時の逍遙をたのしんでゐた私達ではなくて、実は咲き誇つてゐる花々自身であつた。……と云ふ、あの殺伐の詩人の荷はねばならなかつた悲劇が一層その詩の花々の中に清冽な泉の音を響かせてゐたのである。確かに悲劇に裏付けられた覚醒の詩情こそ、高踏派にも象徴派にも耽美派にも見られぬ特質であつた。そこには李太郎にも白秋にも中也にも朔太郎にも求められぬぎり〳〵の精神の燃焼の姿があつた。耽溺することを許されぬ時代の詩人達が培つた花園は又自づと異つた花の色と匂ひを持つてゐた。早くもその花園の在処を知つて私達を誘つたのは大垣だつた。彼の部屋の四周の壁はさう云つた種類の詩集やら小説で埋まつてゐたが、彼は又古本を探す名人でもあつた。書棚はきれいに整頓されてあつたしがつしりした机の上には夜になればオレンヂ色の灯をともす、文明開化趣味の長い房のついたスタンドと、蓋を開ければ稚く鳴り始めるオルゴールと、水牛の角のペーパー・ナイフと、硯や巻紙などが並んでゐた。彼はその机の前で一晩中春夫全集に読み耽り、昼は丸の内の会社で簿記などの経理事務に専念すると云ふ生活の使ひ分けを巧みに身につけてゐた。高商時代、ゼミナールに会計学を選んだ彼は「詩をつくるより田をつくれ」式の通念として考へられる経済に暗い詩人では決してなかつた。会計学と云へば一般には最も無味乾燥なものと考へられてゐる簿記の学問である。その上彼の勤めた会社は日本でも有数な造船会社であるから悪い給料ではなかつた筈である。ところで彼はその給料の殆どを本代

32.2.5.

や友達づきあひに費つてしまひ、家から不足分を送金して貰ふと云ふ極めて我儘な、めぐまれた生活をしてゐた。その彼は反対に商人の血筋を内心では軽蔑してゐて、その反抗として取つた懶惰や放縦の姿勢は彼一流の見せかけであり、ポーズでしかなかつた。本当の彼は決して怠惰でもなく社会的に無能力な男でもなかつた。彼はいつも独特な計算をしてゐた。例へばある詩人の生涯を賭けた詩集が売れず捨値で店頭に曝らされてゐるのを見ると、そんな安い値で詩集を買ふのは詩人への冒瀆であり、それに相応しい何そう倍かの値で買はなくては悪いと考へる、と云つたふうである。

十七年、「四季」十二月号には母を讃へた詩が投稿詩の入選第一作として発表された。彼の得意や思ふべきである。丸山薫氏は選後評で次のやうに云つてゐる「…入選の大垣君の詩は彫琢が利いて明瞭に歌ひ上げた点で、立派な出來栄えである。二百余編中でこの作だけが際立つてゐた。特に末尾の「かへし」と詩には些の間然するところもない。同君の投稿はこれだけしか見当らなかつたところをみると、この一篇によほどの自信をかけたものであらう。大いに今後を刮目してゐる…」と激讃を惜まなかつたところをみると、余程この詩が他の作品を圧してゐたのであらう。尚ほ、この時の入選二席は伊藤桂一氏の「南紀の駅」で後に同じアパートで顔を合はせるやうになる機縁にもなつたのだから不思議である。そこには嘗つて私達の母が未曽有の日々にひそかに祈つてゐた悲しみの貌がある。

貧しい日本の母たちは……
貧しい日本の母たちは
何も知らない
何も持つては居らぬ
誰よりも弱いから
弱いままの姿で耐へてゐる
巧みなく
いのちすなほに
精いつぱいに生きてゐる
己が身をたゞ一つの祈りに支へて
——この子はきつと勁くなる
一茎の野花のやうに
そして日本の母たちは
この大いなる日のために
その一燈さへ捧げつくして
ひそかに美しく泪する
——かへし
たふべきはひたにたへたりこのはゝの
そでのなみだをひとなとがめそ

（未完）

編輯後記

過日久し振りで高野線の初芝に伊東家を訪れた。中学一年の夏樹君は元気で机に向つてゐた。昨春社会に出たまきさんは、日曜なのでまめまめしく家事を手伝つてゐた。但し花子未亡人は微恙で教職を休務されてゐる。主治医は詩「訪問者」に出てくる少女の夫君である大東博士だ。臨床に長けた人なので誰より安心だが、さらに安心するために阪大にゐる義弟の診断を乞うた。当分療養を要する由である遺児達のため一日も早い快癒を祈るや切である。（O）

暖いお正月だつたが、菊菊酒をたくさん枕もとに置いて寝正月といふことにした。賀狀もたんだん多く來て、それを見てゐたてのしい思ひをした。今年からはつとめて怠け者にならうと思ふ。きつと肥えられるだらう。文学、いや日本全体がさういふ風に向くべきではないだらうか。私など自ら顧みてやましいが、日本はあまりに神経質で、あまりにあくせくしすぎてゐる。「果樹園」はそのなかに鷹揚でゐて、たうとう満一年を越えた。この調子で豊かなどつしりした雑誌にしてゆきたい。（T）

果樹園 第十三号（毎月一回一日発行）
昭和三十二年二月一日発行
布施市西堤町六〇七
編輯兼発行人 田中克己
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所 元市印刷式会社
布施市西堤町六〇七田中克己方
発行所 果樹園発行所
定価 三十円

果樹園第十四号 昭和三十二年三月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八小高根二郎方 果樹園社 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園

第十四号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
家路 山根忠雄
ざくろ 田中克己
プラットホーム 福地邦樹
おさない盗人 池沢茂
波蝕台地 ピオンテエク
昔と今と 林富士馬
月に招かれた男 芳野清
白居易詩抄 森亮
花宴 上村肇
就職試験 石口敏郎
詩集「愛しあふ男女」 田中克己
白日 岩崎昭彌
編輯後記 （O・T・）

——松竹キネマの撮影打合会記念写真——
左から牛原虚彦監督・俳優鈴木伝明・伊東静雄・某・蒲池歓一氏

書簡から見た伊東静雄（十三）

小高根二郎

伊東はその後、当選作「美しい朋輩達」の撮影打合会のため上京してゐる。雑司ヶ谷に小中学校での同期である国学院大学生蒲池歓一氏を訪れ、彼の案内で、蒲田に松竹キネマを尋ねたのである。そこで撮影打合会に出席してから、牛原虚彦監督や俳優鈴木伝明等と記念撮影をしてゐる。その写真を見ると、久留米ガスリに小倉袴の伊東は、右に鈴木、牛原両氏、左に学生服姿の某と蒲池氏を従へて立つてゐるが、ライオンのたて髪を思はす長髪をいたゞいた精悍な顔に、両眼は昂然と燃え上つている。

伊東はその上京中に、卒業論文の資料に子規全集と、世界童話文学全集とを購つてゐる。

伊東は意気揚々と東京から引揚げてくると宮本氏を東木屋町四條上ルのスキャキ「くず屋」に招待した。そこで「えらいやッちや」と言つて見せた名刺には、監督清水宏の姓名がしるされてゐた由である。宮本氏の意見では、「美しい朋輩達」の監督は、牛原氏ではなく清水氏だと言うのである。それに、宮本氏の記憶では、その日の伊東は長髪ではなく丸坊主であつた由である。「くず屋」の女中達は、この丸坊主が一席設けた宴主とはつゆ思はなかつたらしく、チップを当てにしての彼女達のサーヴィスは、自然……かつぷくのいい宮本氏に集中した。あまり気の毒になつた宮本氏は、

「偉いのはあつちの方だよ……。」と、丸坊主こそ、御大禮記念の映画脚本の当選者で京大の秀才なんだと紹介したが、彼女達はちら……と青坊主に眼をくれたきりで、てんと信用しなかつた。

「大学は、大学でも、北の方（註・宗教大学の大谷大学）どすやろ……。」

さう、宮本氏に耳打ちしたとのことである。

この伊東の青坊主も、授賞式の際の滑稽のやうに、意識的であつたやうである。安代さんに茅上娘子の断腸歌を書き送つた昭和二年十一月二十三日の書簡にも、「都の中にすむ有髪の僧そのままです。」と云ふ記述があつた。あの日は、安代さんの結婚話が具体化した日ではなかつたかと、私は推定したが、今度は安代さんの結婚に際して剃髪をしたのだ……と言へぬこともない。つまり、安代さんの清純な恩愛を記念するためと、百合子さんに対するいわけない恋情を断絶するために、意識的に青坊主になつたのであらう。應募作品を書いてる日に歌つた、「肥の国は大和の涯所……」は、まさしく敗北の歌であつたが、栄光の日に敢てしたこの剃髪は、その敗北感を清算して、われとわが身に新しい出発を思ひ知らす決心であつたのだらう。

餘談はさておき、当選童話「美しい朋輩達」は遺憾ながらまだ入手してゐない。その試寫会に招待された宮本氏の記憶にも、開幕の場面の印象しか残つてゐない。先づ樹の枝影を寫した田舎家の明障子が大寫しとなる。そこに、小学唱歌「水師営の会見」の「庭に一と本、棗の木」を合唱しながら、美しい朋輩達である子供達が現れる。つまり、序の序しか今のところ判つてゐないわけである。

然し、宮本氏の比類稀れな友情の御蔭で、伊東の童話一篇が今に残つてゐる。「山科の馬場」と云ふ原稿用紙五枚の短篇であるが、「美しい朋輩達」当選の翌月に書かれたものだけに、恐らく、当選作の面影を最もよく傳へるものであらう。

「山科の馬場」には「可憐草」と云ふ筆名が使はれてゐる。宮本氏が異校の学生の作品を、同志社高商の学友会誌に敢て発表するために、案じだした苦肉の策なのである。「可憐草」はイトシサウと訓む。イト・シソウ。イトウ・シソヲ。イトウ・シヅヲとなるわけである。

……

（童話）山　科　の　馬　場

可憐草

尋常二年の秋のことでありました。かあさんにつれられて、私は京都の山科のおばさんのうちに、二三日がけで泊りに行つたことがありました。

夕方になると人數の少いおばさんの家内はさびしいもので、私は、もう電気が來そうなものだ、來そうなものだとおもひながら暗くなつた茶の間にひとり坐つて雑誌を讀んでゐました。然しあまり暗くなつて來たので、私は讀むのをやめて、台所の方に行つてみました。するとかあさんは風呂の前に坐つて火を焚いてゐました。おばさんと女中さんはこつこつと音をさせながら夕めしの支度をしてゐました。そして、おばさんは、私の顔をみると

さびしいの　永ちやん、ごはん出來るまでおんもの方へでも行つてごらん。

と云ひました。それで、私は門のそとまで出てみました。

郊外の、家のぽつつりぽつつりとしかないさびしいところで、とほる人とてもありません。私はぼんやりといつまでもそこに立つたまゝでゐました。すると、家のそばの原つぱの一ぱいみぞそばの生えた中から一匹の仔犬がちよこ〳〵とあゆみ出て來て、やがて私の立つてゐる前をとほると、あつちの方に行つてしまひました。私は何の気なしにそれをみてゐましたが、急に犬の行つた方にあるいて行つてみようか知らといふ気になりました。

その犬の仔の姿はすぐ見えぬ様になりましたけれど、小さい道はぽつつり〳〵立つてゐる家の横手や裏をとほつてつづいてゐました。私はもう仔犬のことはわすれて、みぞをわたつたり原中をとほつたりして、しづかに

家　路

山　根　忠　雄

女子大在学中結婚
二年して
えり子が生れた
主人はN会社に勤めてゐるが
家にはおばあちやんがゐるし
思ひきつて
或る保険会社に彼女は就職した
土曜日の午後
会社が退けてから
友だちに誘はれて
映画館に入つた
終つてそとに出ると
もうまつくら
冬空には星がパチパチとまたたいて
――八時前
両方のお乳が一ぱいに張つてゐる
えり子が待つてゐるだらう
主人の機嫌は？
まあ土曜日だから……と
家つき娘の彼女はいそいそと帰路についた

あるいてゆきますと、家の立つてゐる地面より一段低くなつた、一方は赤松の林がある一寸した広場のところに來ました。

そこにはさくがしてあつて、隅の方には小舎などがあるところをみると、すぐ馬場だとわかりました。私はひつそりと歩みよつて來て、そのさくのそばにたゝずんでみました。すると、だいぶくれかゝつた空気の中に、三人の人がまだ馬の調練をつゞけてゐるのでありました。そして、馬の汗ばんだにほひがなんとも云へずなつかしく、しづかに、そこらにたゞようてゐました。みてゐると三匹の馬は一列になつてしづしづ、しづしづとあゆむのです。そして馬にのつてゐる人も、それをいつくしむ様に、馬のせの動きに、自分の身をまかせ切つて、遠くからみると、目さへつむつてゐるのではないかとみえます。

それなのに、馬達は自分達同志ではかつた様に、相変らずしづしづ、しづと一つの圓をゑがいて廻りつづけるのです。然し、わたしはもう一人の人をみました。その人は、その圓の中央に立つて手には長いむちを持つてゐました。そして時々思ひ出した様にとつ拍子もない様な声を出して号令をかけるのです。それが、怒つてゐるのではないかと思ふ様なひどい声でしたけれど、馬も馬の上の人も相変らず、しづしづ、しづしづとあゆみつゞけるのです。そして、今の怒り声の様な号令をかけたその人自身も静かに長いむちを地にさげてひつそり立ちつゞけるのです。

私はこんな光景をみてゐる内に、何とも云へぬ心持になりました。ひどく心細い様な、そのくせ、いつまでもこゝでこうして、じつとみてゐなければならないかの様な。

そして、自分が今此処で身動き一つしても、きつと、この馬も、号令をかける人もさくも何もかも皆なくなつてしまつて、私一人ぽつんと広い原中に取り残されるのに相違ない。そして原中をあるいてどこをどう尋ねまはつても、おばさんの家は見つからぬのに相違ない。私はそんな風に次ぎ〳〵思ひました。そして、じつとしておれぬほど、さびしいおそろしいとりとめもない心が湧いて來ました。

それで私は馬の列があちらをむいて歩いてゐる時に思ひ切つてさくのところを離れるとすた〳〵と、もと來た道をかける様にしてあるき出しました。その途端、うしろでは、さつきの怒つた様な号令の声がして、そしてその声が消えるとしーんと静まつて、私の心を一そうこはがらせるのでした。私はもう夢中で中原の道をかけてかへりました。そしてや

つと、おばさんの家が見える様な処に出て來たのです。あゝよかつた〳〵そう思つてゐると、あゝあゝ、門のところにおばさんが立つて、私をさがしてゐる樣でありました。私はうれしくなつて、一寸手をあげると、どんどんかけて行つて、おばさんと云ひながら、その袖をにぎつてみました。

おばさんは

　永ちやん、どこに行つてたの、ごはんよ、もう

と云ひました。私はそう云はれると、一種のわけのわからぬ涙が目のずーと奥の方でにじみそうでした。で、だまつて、あの馬場にあたる方を指でさしてみせました。すると

　あゝ、馬場だつたの、そう

おばさんは何ともなくそう云つて、私の頭に手をのせられるのでありました。

――一九二八・一一――

（昭和三年十二月三十一日発行・同志社高等商業学校学友会誌第六号所載）

……

この童話は、宮本氏の小説「氷雨降る日」と一緒に同志社高商学友会誌第六号に掲載されてゐる。卒業を眼前にした宮本氏は、学校時代の文学上の交友を、終生忘れがたく記念するために、格別の配慮をしたのである。

尚、「山科の馬場」が取材された乘馬クラブは、山科と指呼の間の今熊野の、酒井家のすぐ近傍にあつた銀鞍会である。その銀鞍会の会員である宮本氏と、酒井家を訪ふ伊東とは、よく同道したものなのである。伊東は自然……馬の調練を見る機会に恵まれたわけである。伊東は後年馬に取材した詩を二篇書いてゐる。

……

馬のにほひは
咽喉をくすぐり
愛撫求むる
繁き足踏

……

第二詩集「夏花」――疾駆――

……

空腹で敏感になつたあいつの鼻面が
むなしく秣槽の上で、いつまでも左右に
　揺れる。
あゝ慥に、何かがかれに拒ませてゐるのだ。

……

第二詩集「夏花」――決心――

この「疾駆」「決心」の鋭い鑑察は、恐らく「山科の馬場」で胚胎した詩想が、後年に至つて結晶したものであらう。

ざくろ

田中克己

ザクロ、近畿方言のジャクロは私どもの子供の時代からおなじみの果樹で、私自身は詩にうたつたことはないが、歌に

　枕べにざくろを割りて置いてある弟はいま床を出でたり

と作つたことをおぼえてゐる。昭和五年、まだ高校生だつたころの作で、そのころの前川佐美雄をまねた歌だと気づく人があればうれしい。子供の喜ぶ果実だといふことも、この歌にはその美しさとともにとり入れたつもりだつたのである。

私どもは物の名を漢字であらはすのが、知識人の資格だと考へる時代に育つたので、ザクロの漢名を柘榴とおぼえさされたが、これはたぶん日本人だけの用字で、唐詩ではすべて石榴である。さうしてこの漢字は安石榴の上略、安石は漢代いまのイラン方面にあつた安息国のことで、この植物の原産をあらはしてゐるのだといふ。たゞし榴の起原は、はつきりせず、金沢庄三郎博士は腫物（瘤）と形が似てゐるからだらうとの仮説を立ててをられる（「茶」創元社、昭和二二年、六頁）。

たいへん色消しな話である。

唐詩にうたはれたザクロは、色彩が十二分にゆたかである。李白の詩では「過汪氏別業」といふ詩の第二首目で、汪氏の別荘には山ぞいで、いま秋になつてはじめて來たが、酒のおかげで十分たのしくしたといふ。庭園の装飾としてその紅色が唐人の目をよろこばした様を知り得る。

李長吉の詩には、三ヶ所にあらはれてゐて「綠章封事」では、その花が山川の辺にいつぱい咲いてゐるといひ、「莫愁曲」では城の隅に植ゑられてゐるといふ。いづれも周囲とその色彩との對照を巧みにとらへてゐると思ふ。その第三は「謠俗」といふ詩で

　宮中の上林苑には小さい蝶がゐて
　女官のうしろについてゆく気になつた。
　南城に飛んでゆくうち
　彼女のザクロ色のスカートの中にまぎれこんだ。

このとき花はどの木にも咲きみち
蕎はひらひらと雲間にあがる。
女官はそとへは出たが路もしらず
さりとてゆきずりの人にもよう問はぬ。

といふので、宮中から出されて、平民の妻にもなり得ない宮女をうたつてゐるのだといふが、彼女の裳が赤いザクロ色をしてゐるといふので、その薄命を一層おもひおこさす。この「石榴裙」は実は先人にも用ひられたので「玉台新詠集」には傾城の美人が葡萄の模様の帯をし、ザクロ色の裙をしてゐると歌ひ（岩

プラットホーム

福地邦樹

電車から若い女が
あわただしく抱えおろされ
ベンチに仰向けにねかされる
人がわいわいと寄ってくる
医者医者！　と叫んで
駅員が走っていく
ほんとはまっさおなのだろうが
化粧のために女は
頬も唇もいい艶をしている
だが眼をむいてしまって
左手はぴんと立ったまま下りない
そして　ひとつふたつと
二つ数えたような指つきをしている
靴下に泥がついてひどく皺がよっている
このひとの荷物や　といって誰かが
真赤なハンドバックを頭のそばに
ハイヒールを腹の上にのっけた
べっぴんさんやないか　と男の声がする
二三分おくれて電車が発車する

日記

私の日記は
とびとびの日付で書かれている
時には一箇月も抜けてることがあるし
毎日たんねんに書きこんでいる所もある
その分量もまちまちで
感情のむらが歴然とわかる
だがこうしてぱらぱらと見返してみると
書かれているのは
あたりまえの事か
少し楽しい事件だけで
つらかった事は
ほとんど抜けてしまっている

波文庫、中三二〇頁）、「唐詩選」では李白と同時代の萬楚の「五日觀妓」といふ詩に、「紅裙はザクロの花をも妬ますばかり」と詠じ、また杜甫の祖父杜審言の詩「戲贈趙使君美人」に「桃花馬上石榴裙」といふ箇所のあることはあまねく知られてゐる。桃花馬は黄白まだらの馬ださうだが、ザクロ色の裳をつけた美人の乘馬として、その色彩の美しさは繪さながらである。そのかはり、この色彩はちみな孫にはきらはれたと見えて、杜甫の詩にはザクロは一ケ所にも見えてゐない。

李長吉と同時代の白樂天は、さらにこのザクロ色の裳が好きだつたと見えて、美人にはさかんにこれを着けさしてゐる。「官宅」といふ詩に見える石榴裙は木蘭のかじでこぐ舟の上で、酒の酌をする美人のつけるものである。「和春深」の第二十は「何處春深好、春深妓女家。眉掃楊柳葉、裙妬石榴花。」といふのが前半で、たしかに妓女の着物である。「諭妓」といふ詩でも酒のしみで、これが汚れるとうたふ。「和韋庶子遠坊赴宴未夜先歸之作、兼呈裴員外」で金鞍でひそかに送られるこの衣をつけたひとは、銀燭のもと楊柳曲をうたふのであるから素人ではない。同じく「想東遊」といふ長詩でも、杭州のおもひ出をうたつて、なかに「圓盞飛蓮子、長裙曳石榴」の聯句をいれる。酒宴につきものの女がみなこのザクロ色のもすそを曳いたことを証明する。

かやうに唐詩に出てくるザクロが、おほむねその色の着物といふ点に限られてゐるのはいささか物足りないが、私もこの木の果実の味はあまり好かないのである。唐人と喈好をひとしくしたといふべきか。しかし色といつても、ルビーにもまがふべき、あの果実の粒の美しさも、これまた一向にあらはれないのはどうしたわけであらう。花は頭に挿したこともあると見え、「玉台新詠集」には「鬢邊に石榴を挿」んだ美人をうたふ詩（「和人渡水」岩波文庫下四〇六頁）が見えるが、これも唐詩には見えない。

おもへばニューギニアで戦死した画学生大塩麟太郎君の習作のうち、私のおぼえてゐるのはたゞ一つ、ザクロの画であつた。再度の出征にあたつて大垣國司君に托し、大垣君はまたこれを私の机前に飾らしたが、昭和二十年のわが出征の時か、二十一年帰還して奈良県へ赴任するとて家財をすべて整理したときか、いづれともはつきりしないが、私はたしかに大垣君に返した。彼さへも死んだあと、この画はどうなつてゐるのだらう。二友をおもつたところで筆をおく。（唐詩の草木5）

おさない盗人

池沢　茂

ぼくが金魚を飼っている木槽は、前庭にすえてある。そこは石垣のうえで路よりはだいぶ高いけれど、へいがないから、石の段々をあがると、いくらでも手がとどく。すじむかいの田岡さんとこの中学生が知らせてくれたところによると、そこへ三人の子どもが来て、たもで金魚をすくって、それぞれ一ぴきずつ、持って帰った。ひとりはどこの子かわからなかったが、あとのふたりは、すぐ近所の子で、たぶんみな同じ幼稚園にかよっているという。『まあいいや。みちばたで、へいもないし、とろうと思えば、いくらでもとれるようになってるんやからな。こんな町のなかではさかなとりをして遊ぶわけにもいかんし……どこか、いなかの池で、さかなとりをしたぐらいに思っているんやろう』とぼくは、あきらめて言った。

しかし妻は「あんなに大きくなっていたんやもの、おしいわ」と、ためいきをつく。ぼくが金魚を買ったときは、子供じみていると、あきれ顔をしたり、月給がとぼしかったせいもあるが代金を出ししぶったり、ずいぶん反

対していたのに、いつのまにか、妻のほうが金魚に熱心になっている。もっとも、ぼくも、そう云われれば、だんだんおしくなってくる。ためいきなど聞くと、こちらこそ、せつないくらいになる。なにしろ四年以上生きつづけたから、いつのまにか、買ったときの何倍というほど成長していた。小さな金魚屋では、ちょっと見られないくらいに大きい。

とにかくぼくは、妻に引っぱられるように

波蝕台地

ピオンテエク

日おおいの　まるい
影がおち
まばらに　巻雲が流れる
しめった光のなかをよぎって

そよ風のパイプが
かもめをおどらせてなりひびく
砂礫のなぎさ道に
翼の反射がちらつく

珊瑚のようなくちばしに
かるやかな　わらのフルート
よろこびにあふれるその赤さは
ぼくにしらせる

その外側がすでに水成岩となり
よせてはかえす波の音が
貝がらのなかでひびいている
この世界を

真昼へ

クロロフ

ながれる光の
たばのしたの
朝の時間の
眼のたまのいろ！

大気は
新しくつくられ
果実のように
こころよくにおい

よろこびが口もとで
とけゆくあいだ
不安のないしらせを
上からささやく

だがこってりした
真昼をおおう
テセウスの物語や
さまざまの背信

まくらべをおそう風が
愛の口づけに
つかれたからだに
ねむけをさそうとき

木の葉からたっぷりと
甘味がたちこめ
そして足もとで
青草に風わたるとき

理性ははかないものだ
たかまる気温とともに
重苦しくだらけて
阿呆になってゆく

（たかはし・しげおみ訳）

して、ふたりで、その子の家へ出かけた。すると、その家へはいるまでもなく、その門のまえの石段に、その子を含めて四人ほどの子が、こしかけたり、うずくまったりして、かたまっている。みんなおさない子で、なかには、よちよちあるきの幼児まで、まじっている。幼稚園のその子が、としのわりに背も高いから、いちばん大きい。非常にあおじろい顔で、どこか陰気なかげがある。父親が危険なタクシー会社に勤めていて、帰りがたいていい夜おそく、顔をあわせることも、めったにないからかもしれない。ほそい切れながな目には、じっと思いつめるような光がある。そして、ひとの顔を見るときは、視線をすこし横のほうへずらし、まともには見つめない。いつも年したの子とあそび、年うえの子のなかまには、ほとんどはいらない。無口で、さびしそうで、いたずらっ子らしい元気さにとほしい。しかし、ためらってばかりいても仕方がないから、いきなり「きみ、うちの金魚、持ってかえらなかった?」と聞いた。その子はちょっと目をあげただけで、かすかに首を横にふった。「ね、ぼうや、正直に言ってごらん。なにも怒るんじゃないから」と妻も、すこし声を大きくした。それでも、やはり、視線を横のほうへそらしたまま、つめたい顔をしている。それから、ふいに、なにか叫んで、まわりの子どもを引きつれ、鬼ごっこのように、いっさんに、路地のむこうへ、かけだしていった。

ぼくたちはこんどは、もうひとりの子の家へいった。やはり近所で、まえの子の家のすじむかいにあたる。しまっていた冠木門をあけて、妻が、出て来た主婦に、はなしをした。『まあ、さようでございますか。わたしもね、あの子が金魚を持ってかえったとき、変に思ってたずねましたんですけれど、友だちにもらって来たと言うものですから……。あんな大きな金魚、くれるはずもありませんし、そうですか、お宅さんの金魚だったのですか』

かの女は顔色をかえ、けたたましい声で子を呼んだ。子は奥のほうから、おびえたように、腰をかがめ、目をしばしばさせながら出てきた。母親に似て、むっちりと小がらな、いかにも丈夫そうな子だ。元気に日やけして、くりくりした、つぶらな目をしている。母親は声をはげまして、叱りつけた。子はしばらく、ぶつぶつ言いわけした。

『うそを言ってはいけません! このかたのおうちから、とってきたんでしょう? うそを言っても、もう、わかっているんやから、はっきりと言ってごらん。え、そう、やっぱり、そうやったの……』

子がうなずいたのを見て、母親は、がつかりと気落ちして、さっきの金魚を持ってくるように、子をうながした。すると、子はそのとき、ふいに「わっ!」と泣き声をあげ、母親の胸のしたあたりに、ぐいぐい頭をおしつけてゆきながら『ばか! ばか! お母ちゃんのばか!』と叫んで、いきなり母親に打ってかかった。

『じゃあ、いい。お母さんがとってきます。たもはどこへやったの』

母親はその子をそっと、もぎはなすようにしてから、たもを持ってこさせ、ぼくたちにむかって『あの金魚はもう、裏の泉水にいれてしまいましたの。水がにごってますので、なかなかとりにくいのですけれど、いま、たもで、すくってきますから』と言った。

ぼくはしかし、はっとなり、胸のうちが、こごえた。母親の目にも、うっすら涙がにじんでいる。その視線には、子にではなく、ぼくたちにたいして、突きさすような、はげしい憎しみと恨みが、こもっていたのだ。

金魚はぶじにかえってきた。もう一ぴきの金魚も、子が母親に連れられて、まえの子の家へゆき、とりもどしてきた。ぼくはしかし、それからしばらくのあいだ、その家のまえを

通るのが、どうにも、ぐあいがよくなかった。母親の憎しみや恨みをこめた視線が気にかかったからだ。子どもたちも、ぼくが通りかかると、いくら笑顔をつくって見せても「こわいおじちゃんが来た!」というように、おびえて、かたくなり、目をそらせた。

ぼくには三つになる男の子がある。もすこし大きくなったら、近所だから、一しょに遊んでもらうようになるにちがいない。そのとき、金魚のことを根に持たれて、意地わるなどされてはたまらないと、その点でも、心配でならなかった。そのうちに、しかし、ぼくはその子たちと、ばったり、あわなくなった。そのときはたぶん、幼稚園が冬休みだったのだろう。ぼくの勤めは、たいてい、出勤はひるじぶん、帰りは夜ふけになるから、幼稚園や学校がはじまると、いくら近所の子たちとでも、めったに顔があわなくなる。そうして二ヵ月か三ヵ月かたったころ、そのころはたぶん春休みだったのだろう、ぼくはまた、その子たちと、ひょっくり出あった。すると、ひとりの子は、いつもの、あおじろい、つめたい、さびしそうな顔に、ふっと微笑を浮かべ、ちょっと頭をさげた。もうひとりの子も、くりくりした元気な顔で、にこっとわらってみせた。ぼくの知らぬまに、なにかあったのか、それとも単に、二、三ヵ月という月日が、邪念のない子どもの心に、しぜんと、そういう経過をまねいたのか、ぼくにはわからない。ぼくはそのとき、いつものようにいそいでいたから、どちらの子にたいしても、こんどはぼくのほうが、なんにも言葉をかけず、おじぎも笑顔もかえさず、さっさと通りすぎてしまった。そしてそのことが、またしばらく、気にかかった。

昔と今と

林　富士馬

道ばたの草が黄色い花をつけてゐる。
——春がやつて來たのだ。
春は——あんなにかなしかつた
それに酔ひながらも。
とし老いたいま　私はしづかに春をよろこぶ。
未知なもののために　期待し　をののく
必要がなくなつたので。

月に招かれた男（九）

芳野　清

しかし、十七年には、大垣の身辺は俄かに寂しい影がさし始める。この年の二月には、田中克己氏の南方遠征の報を、コギト紙上で知つたが、彼はたまたま郷里に歸つてゐたばかりに、お見送りも出来なかつたのが残念で仕方なく、「なごり」の詩に、新しく涙を流すのだつた。五月に大いなる詩人、彼の詩への開眼者とも云ふべき朔太郎と、「みだれ髪」の歌人、晶子の訃音を聞き、その哀傷は時間とともに深まさるばかりだつた。又この哀傷を共に慰め合ふべき友の大塩は、既に再度の応召で南海に赴き、彼の周囲には詩のライバルこそあれ、語り合ふ友は少なかつた。除隊して会社に戻り、物わびしい下宿住まひの明け暮れは寂しがりやの彼には堪へ難かつた。彼がこの時期にひどく感傷的になつてゐたのはそればかりでなく、一つには少女との恋の経過が思はしくなかつたせいでもあつた。

或る春の一日、村山貯水池に遊びに行つた時、彼は湖の近くの草にねそべつて、少女の写真を見せてくれた。そこには明治神宮外苑の芝生に絵画記念館を背景にして形よく坐つ

て微笑してゐる少女の姿があつた。事務用の上着を着た少女は十分清潔で美しかつた。そんな少女達に全く無縁であつた私は寧ろ嫉妬を感じた。戰時中の事で、貯水池は立入禁止の柵が廻はされ人の姿は殆どなく、後に大岡昇平「武蔵野夫人」に出てくる湖畔のホテルは荒れ放題荒れて、壁は落ち、ポーチの屋根は半ば崩れて見る影もなく、いたずらに冬の落葉がうづ高く庭を埋めてゐるだけで、幽霊屋敷を思はせた。窓越しに覗き込んだ部屋の床には埃が白く、家具の持ち去られた部屋はたゞがらんとしてゐて人の住んでゐる気配すら見られなかつた。しかし、大垣にはその荒涼さが気に入つたらしく、「ポォのアシャ家の没落そのまゝだね」などと云ひながら霞さながら、咲きこぼれた雪柳の枝近くに腰を降ろすのだつた。

「少女との事は十分、一冊の小説になる位なんでね、でも困まる事ばかり多くて……」彼はさう云つて言葉を継いだ。大体その話によると、彼が想つてゐる程、少女は彼を想つてくれない。愛に応へる態度が消極的で、と云つて彼をとくに嫌つてゐるわけでなく或る時はハッとする程心に近づく素振りを見せる事がある、堀さんの本など貸した時は大へんよろこんで菜穂子のやうな少し翳のある性格は好きだなどと云つたりする。しかし映画や散歩に誘つたりすると、一緒についてはくるが余り喋らないのでどう云ふ気持なのか迷つてしまふ。それに彼女の母は内々秋田で大きな材木商を営んでゐる伯父に子が無く、彼女を養子に望んでゐるので、さうしようと思つてゐるなどと云ふ事だつた。それに都会で育つた少女の心の何処かに、詩ばかりに夢中になつて、世間並みの出世や生計など意識して背を向けてゐる一風変つた文学青年に対する、女性としての本能的な不信が隠されてゐたのではなかつたらうか。さう云って白つぽい桜の影を宿した湖水に投げた彼の目は寂しさうだつた。湖水の汀には水鳥が群れて春の陽を浴びて如何にものどかさうであつた。常緑樹の多い狭山丘陵を渡る風は湖面に縮みのやうな波を描かせた。月夜、こんな湖水に小さな舟を浮べて山々の影を一晩中眺めてゐたらどうだらうと私は心の中でそんな甘い夢に浸つてゐた。しかし大垣はもつと別な想ひに駆られてゐたらしく、「いくさがひどくなつて皆散り〳〵に別れてしまひ、異境の土になつてしまふとしても、少女達だけが生き残つて若人の魂に祈りの涙を灑ぐとしたら、それで僕達の生きてきた甲斐もあると云ふものだ。昔の防人だつて皆故郷に想ふ人を置いて來たんだものね、カロッサが戰場でせつせと書いたのが実は『幼年時代』なんだね。その気持は分る気がする……」

暫くたつて彼から一篇の詩が送られてきた。

いかなればかの日の優しい絵姿して
おまへはわたしの前に佇むのか
舞ひの袂うちふり
それは美しい別れであつたか
橋のたもとで春の驟雨が……
おまへの頬は濡れてあつたか
今宵なほ月も出でなば
梅の木のもと　さめざめと
泪するひとでおまへはおゐでか、

十七年の九月に大垣は渋谷の八幡荘と云ふアパートに移つた。それまで芝の電車通りに面した一劃に下宿住まひしてゐたので解放された気がした。その新しいアパートには、伊藤桂一氏がゐたが、青山学院に近い閑静な所だつたと記憶する。彼はそこで早速、自炊しなければならなかつたが、彼はその事は、一向意に介しなかつた。勤めから帰つてきた彼

を第一に迎へるものは、ドアの前の叩きにごろ〳〵転つてゐる、配給のじやがいもや大根などであつたが、彼はそれを汁の中にぶちこみ、飯盒の飯と一緒にかきこんで、けろりとしてゐた。もつとも彼は大概は外食で間に合はせてゐたらしい。彼と一緒に歩いてゐた時の思ひ出と云ふと、不思議に食堂や喫茶店が浮んでくるのは妙だ。街を歩いてゐて、食堂が目に入ると見境ひもなく入つて、私の分までの外食券を出してくれて、わけの分からぬ時には池のほとりまで足を向ける。

立つて歩くときも、坐つたり長まつたりするときも、
胸の中は淡々しくて動く思ひがない。
歳月の流れはいつのまにか時をむかしのものとし、
わたしの白髪は遠慮なしにふえてゆく。
世間から疎んぜられるくらゐでなければ
どうものどかな境地には達しられないものらしい。

註　白居易の詩をこれから暫く訳してゆかうと思ふ。彼は楽天のあざ名で有名な唐代の詩人で杜甫が死んだ翌々年に生れてゐる。白居易の詩はアーサー・ウエーリーが可なりの数を英訳してゐるので、自然と私も彼の選んでゐるものを多く選ぶことになると思ふ。私の訳詩はウエーリーがやつてゐる程度の自由訳になるはずであるが、意訳の部分部分は必ずしもウエーリーの意訳に拠つてはゐない。
「鶴」の原詩の題は西風（四の四四）、「わが感懐」の原詩の題は詠懐（一の五八八）で、後者はウエーリーは英訳してゐない。原題の下の数字は統国訳漢文大成の白楽天詩集の巻数と頁数を示す。

白居易詩抄（一）

森　亮

鶴

西風が吹き出してから数日しかたたないのに
初の木の葉がもう中ぞらから落ちてきた。
余りすがすがしい日和に軽い履物が履いてみたくなり、
ひやりと感ずる涼しさが私に衣更へを強ひる
浅い溝に遣り水が痩せてちよろちよろ流れ、
竹のまばらの群立ちを斜に漏れる夕日差し。
このたそがれ時に、敷きつめた青苔のうへの
小道を
若い園守が鶴を連れて帰つてくる。

★

わが感懐

日がな一日、松の木の根かたにすわり、
雑炊などよく食つた。彼の胃の腑は特に丈夫に出來てゐたらしく、如何にも旨さうに平げるのを見ると、毋と一緒に住んでゐた私には彼の一人暮らしの寂しさがよく分るのだつた
それから神田あたりの古本屋で目ぼしいものを漁つてから彼のアパートへ行くのが大体のコースだつたが、その間も私達はミルクホールやおしるこやなどへ寄つてはよく食べたものだ。銀座に女の客ばかり多いしるこやがあつたが、彼はそんな事には無頓着で平気で入つた。大垣にも又一種の嗜好があつて、高商の入学試験で人物考査の際、君は何が好きだと問はれ、うづら豆の煮たのが好きだと答へ大笑ひになつたと云ふ話などその一例を示すものである。彼は又苺が大好きでこれを歌つた短かい詩がある。

苺の実

苺の実を食べてゐる
紅くて
つぶらな
嚙めばほのかに乳の香が漂よふ……
末つ子のわたくしは
やさしい胸を毋のものと知らされず
二十幾年を過ぎて來た。

花宴

上村肇

さくら　りようらんたれば
いのちうすき母を背負いて
子らとともに春の野にいづ。

藉けよわかくさ
傾けよ　みどりの空

野の宴　あかるう終りて
家路をたどる妻の爪先に
野のほこり　ほの白く
まなことぢれば
子らは
春のひかりのまつ只中
歓声をあげて
かけ去りしは　何処の野辺。

こは春のおさめならむやと
ふと　まみくらく佇ちどまれば
肇よと
ひくくわが名よび
いぶかり給う枯木の如き背のひとに
いちづにかよう　らんまんの
花の梢の花の重み　花の生命。

（旧詩稿より）

雪

屋根の瓦の上に
今朝　雪がきていた。
量積　微塵に狂いのない
一枚一枚の
秤を経た雪が。

そしてこの日
街には少女歌劇団の一行が來ていた。
美しく均整のとれた
脚を上下に打ちふる
五十何名かの一行が。

生活の寂しさには同情したが、彼の自由には大いに羨望した。私はほかにたのしみもなかつたので、そろ〳〵長男らしく身を固めようなどと分別臭い考へを起していたが、実は女が欲しくなつてきたと云ふのが本音だつた。そんな私によい詩など書ける筈はなく、大垣に会つた時だけ、その蜃気楼に昂奮した。数日たつともう私は平凡な、自分の小さな幸福だけをねがつてゐる卑しいエゴイストになつてしまふ。私は恥かしい事だが、女の柔かな腕や胸の事ばかり想つてゐた。そして今に召集されて戰死でもしてしまへばこの願ひもついに叶へられずにしまふといふ実に愚かな事を思つて、女ばかり溢れてゐる巷をきよろきよろ歩いたりしてゐた。しかし、私の動めてゐた工場は私の甘つたるい妄想など容れてくれる程ロマンチックではなかつた。私はその飛行機工場の建設関係の職場で、現場監督といふ事で野原を駆けめぐつてゐた。そこにあるのは荒くれた土工達の罵声と、女人夫達の野鄙な笑ひと、耳をつんざく鉄骨のリベット打の音だけだつた。所詮、堀辰雄の節子や、菜穂子は小説の中でしか生きてゐない女であつた。家に歸ると、私はそんな空想の中の女を胸に抱いて、女々しい感傷に打萎れたふりをして石の多い浅川のほとりを散歩した。当時、私の住んでゐた八王子といふ街は、東京の西端の山近く、至る所きれいな水が流れてゐる寺の多い静かな街であつた。街の北を流れてゐる浅川辺には織物工場があつて、小さな牢獄のやうな窓から、あどけない、しかし物悲しい女工達の歌声がきこえてきたりした。

た。夏になると川のほとりには月見草が咲いた。私は夕風を浴びて散歩しながら、夕闇の花影で語られる感傷的な恋の事や、詩の事や大垣や、南の島で戰つてゐる大塩の事など思つたが、さてそれでどうしようといふ心構へもなかつた。大垣はそんな私を励ますやうに時折葉書をよこした。それに大塩からも戰地からの便りがあつたりした。そこには駐屯地の一寸した風物詩が語られてゐるだけで戰争の烈しさは感じられなかつた。それが歴戰の兵士のせめてもの思ひやりであつた事は後で戰争が烈しくなつてから思ひ知らされた。青春と云ふには余りにも寂しかつたが、風当りのないエアポケットで小さな花をつけてゐたしかし、大垣は私の時折書いた女々しい詩についても丁寧な手紙を寄せはげましてくれた——貴方の世界がいゝ日だけを持つて展けてくれるやう祈らずには居れません。そしてこんな時の私はいゝもの、優しく甘いものが私の念ひの中で死に絶えてしまふやうな気がしてゐるのです。懸命に逃すまいと、でも…何か遅過ぎたやうな。悔んでも悔んでもとりかへしのつかぬときのやうな。詩はそんな場所を選んで。その詩も句を堪へることなくありかの周りを馳け足で過ぎてしまふやうな。……

便りの中の苦渋や焦りが私にはどう云ふものかよく分らなかつたが或る時彼はかう云つた。「君よりも僕の方がずつと弱虫だ。君が沈黙を守つてゐられるのはそれだけ強いんだよ。この頃の僕は全く意気地なくなつて、いつかの堀田君の壮行会にも自分の事のやうに泣いてばかりゐて、前田君からも声をかけられる始末だつたし……」その言葉に私は少し驚いた。巧まない饒舌とユーモアが影をひそめて、その横顔にはうそ寒い影が漂つてゐるのを見て私は不思議でならなかつた。何かしら生活の荒廃からくる疲れだらうと思つて、「その後、K子さんとはどうなの」と尋ねると「あんなお嬢さんもね、荷風の墨東綺譚の中の女のやうな、くづれた女もいいものだ。僕は迷ひが多くて困まる…」私がその所謂、くづれた女について大いに興味を湧かせ、きいてよいものかどうか迷つてゐるのを見ると大垣は口をつぐんでしまつた。彼の目はかう語つてゐるやうだ。——君のやうな男に僕などの頽廃趣味を教へるのはいけないことだ。君はいつか君への手紙の中で語つたあのメーリケと云ふ詩人のやうにほんのりと淡く、清く、優しく匂つてくるヒヤシンスの詩人達の一人であつてくれとねがつてゐるのだ。どんなに僕は憧れたことだらう。しかし僕にのぞめない道を君が歩むに違ひないと…。さうねがつてゐる君に頽廃の女の話などしてはいけない事だ…と。

その実、私の心は彼の願つてゐるやうには清らかでもなんでもなく、大いに頽廃趣味もあつた。無類の臆病と、無精とがそこに近づかせなかつただけの話である。私は若い女と口を交すのさへ恐れた。女は唯、私の妄想の中でだけ実に生々と実在してゐたに過ぎなかつた。妄想が醜いと云へば、これ程醜いものはなかつた。しかし、ついに頽廃の世界を覗かせなかつたのは、大垣が私に示した唯一の貴い友情であつた事に気附いたのはずつと後だつたが、今でも私はこの事に感謝してゐるともかく十七年は世を挙げて戰勝に酔つてゐた事だが、彼も又その嬉びを童心に托して歌つてゐる。生來、戰争詩の作れない事はこの一詩でもよく分る。彼は矢張り平和を願ふ市井の子であつた。

手毬

むかし　むかし　父が兄が
また小父さんが　ほくそ笑み
つけばはずみの　よろしさに
歌にあはせて　遊びし手毬
いま君のため　くにのため
生命をよそに　いでたちて

就職試験

石口敏郎

プラタナスの枯葉が
光の中に乱れ
透明な
その影絵がざわめく

就職試験の帰り
受験票の中で
今も私は緊張してゐる

靴の音が
ビルの窓にすきとほる青空
影絵が
私の眞似をして
ポケットに手を入れてゐた

ビルの硝子窓が
試験官の眼鏡になつて
白く光つてゐた

深夜

地平線を吸り込んで
ひとすぢ
自動車が丘を登つてゆく

いくつかの言葉が
其処を流れたのだ
ヘッド・ライトに照らされ
電話線に
紙鳶がうなだれてゐる
風を失ひ
自分を支へてゐる

すぐそこに
細く立上つた換気筒の風車が
わづかにきしんで
民家が
やすらかな寝息を洩らしてゐる

いくさの庭を　かけめぐり
なほ効き日　忘れかね
子らの玩具　如何ならんと

南のはてより　おくり來し
こはその手毬ぞ　うけよをさな子

五月八日の大詔奉戴日に国民学校初等科の生徒にゴム毬が配給になると云ふしかも「戰捷第一次祝賀記念」のマーク入にて、子らの嬉び如何ばかり

私もその頃、大垣を真似て自筆の粗末な詩集を編んだが、それを彼に手渡したのがお茶の水かどこかの喫茶店の二階だつた。大垣はその時、一人の女の人をつれてゐて、私に紹介した。嘗つての大塩の画家グループのモデル嬢だと云ふので私は少々面喰つて、見すぼらしい詩集を出すのに気がひけた。彼はぱら〳〵と頁をめくつて眺めてゐたが、黙つてその女に手渡した。私は一寸ひるんで手をのばさうとしたが、その女はいゝぢやないの、と云つた無言の流眄をくれると、頁を無雑作にひろげた。私は始めて女を見たが二十六、七で熟した果実の感じがした。額が狭く丸顔で目がうるんだやうに光つてゐた。豊かな漆黒の髪は粗い網のやうなもので束ねてゐた。私の甘つたるい詩には勿論余り感心したやうでもなかつたが、ふふんと云つた調子で私の顔を見て複雑な微笑を浮べた。私はたへず女を恋うてゐる本心が見すかされたやうで胸が熱くなつた。ルリ子と云ふ名の、恐らくは通称であらうが、その女に私は何か強くひかれたその後、その女とは時折会つた。大垣と一緒だつたり、一人だけの時もあつた。私はひそかに彼女を理想の女のやうに仕立てゝ詩をつくつたりした。或る時、大垣は私に云つた。

「君は、あの女が好きなやうだが、やめた方がいゝよ、あれは若い絵描きなどと次々問題を起してゐる女。この前出征したHなんかも十六のとき、あの女に童貞を失つたつて云ふからね」

私は一度その女の部屋に案内された時の事を思ひ浮べた。その窓からは明治神宮の冬枯れた木立ちが見えて、寒い日だつた。毒々しい程赤い模様の布団が炬燵にかけられてあるのに辟易して私は逃げ仕度をしたが、「怖がる年でもないでしよ」と、女は蔑んだ眼差しで私を見つめ炬燵から立たうともしなかつた画家仲間でもあの女の肌はもう荒れてゐて駄目だと云ふ事だつたが、暫くして姿を消してしまつた。モデル業も戰争の影響で思はしくなく、かねて知り合つてゐた漫画家と大連か上海かに行つてしまつたと云ふ事であつた。

文学雑誌などは紙の制限を受けて、次第に少くなつてゐたが、四季、コギトは健在で、殊にコギト同人の活躍は目ざましかつた。私達は次第に険悪になる世情に脅やかされながらも、会へば、伊藤佐喜雄氏や小高根二郎氏などの美しいロマンについて話し合つた。かうして小説の中でしか存在しない世界を、青春の実在として錯覚することで、私達は夢想の砦を護つてゐたのであつた。貧しかつたけれどかうして心を暖め合ふ事が出來たのは幸福であつた。やがて十六年が暮れようとして、突如アメリカとの宣戰布告があり、大東亜戰はいよいよ阿修羅の容相を呈し始めるのである。

年の暮、再度応召して陸軍東京経理部勤務の大垣はシンガポールに軍務で派遣され、先に従軍してゐた田中克己氏に、街上で感激の再会をした。彼は歸つてから「旅のあと」の一詩をつくりコギトに寄せた。

詩集「愛しあふ男女」

田中克己

小山正孝氏の新しい詩集「愛しあふ男女」を手にして、私はうれしく、同時になんとなく立原道造、堀辰雄の二氏の系譜を感じた。清楚高雅といふのはこの装幀のことであらうが、内容もそれにふさはしい。まつ白な表紙。きいろい本文の紙の中につづられてゐる詩句は、その装幀にまつたくふさはしい、しづかな典雅なことばばかりである。そして異様に悲しいのだ。愛しあふことには、かならず悲しみがともなふのだらうか。それならなぜ愛しあはねばならないのか。

この宿命を詩人はしづかに文字につゞる。なぜつゞらねばならないのか。それさへも宿命なのだらう。

けだもののやうにあらあらしく私はお
前に
ふるまつた　私は言つた（お前を愛し
てゐる
お前を愛してゐるのだから）
私の聲はお前の耳に流れて入つた

なんと悲しい宿命なのだらう。そしてこの宿命の断ち切られる時をも、はじめから二人は予覚してゐる。これが恋愛なのだらうか。それ以外に詩には歌へないのだらうか。

（ユリイカ社、一九五七年一月一日出版、駒井哲郎氏画、定價一五〇〇円）。

32. 3. 5.

白日

岩崎昭彌

三十三間堂では二人は拝みもせずに
千手観音の顔を見くらべて歩いて
円柱の貼紙「必勝祈願」に睨みつけられた
次に新緑の清水寺へゆき
舞台造を背にして交互に写真を撮つた
祇園で電車を降りると八坂神社をめぐり
向拝で一心に祈る老婆をみた
——もうすぐ僕も祈られる身となる
知恩院を抜けて平安神宮に詣で
池の鯉を眺めながら心のこもつた鮨を甘
がつた
——帰つて來て「僕の妻」といへる日が
來るだらうか
それから ニュース映画を見にいつた
青空に聳える大鳥居に鳩が飛び立つと
父やわが子の胸に抱かれた英霊がしづし
づと昇殿する
冷いものが背筋を走つて胸へ戻つて來る
と一転して画面は南方の陰気な密林を写
す
分解した砲を背負つて丈余の繁みを分け
る鬚と汗の顔
潜航中の艇内で戦闘配置につく油服の水
兵や
潜望鏡にうつつた太平洋のうねりと敵
艦隊！
けふも神に祈つて村を出てゆく若い出征
兵
見れば彼女の頬にスーツと涙が光つてゐ
る
——映画を逆に組合はせると僕の運命に
なる
さういつて帰りの路で立止つたら
美しい瞼が強くその言葉を否定した
動員で彼女は駅の窓口にゐるはずだ
ここは国境の山の中 泰領最後の駅ニー
ケを通過して
軍用列車はやうやくビルマ領に入つた

——インパール——

編輯後記

果樹園の創刊当初、編輯は田中、福地の両氏と私がやつてゐた。この四月から田中氏は東京に行き、阪大を出る福地氏は就職のため四国に去りさうである。まことに惜別の感に堪へない。從つて、今後当分編輯は大阪に棲み果てる覚悟をした私と、その後編輯に参加した池沢、山根の両氏でやることになるが、何卒倍旧の支援を御願ひする。果樹園がうまし実を生みだすかどうかは、まだ遠い將来にあるからである。 (O)

発行所が小高根二郎氏のところにかはり、同時に名も果樹園社とかはつた。私の東京の住所は当分きまらない。うはさにきけば家はなかなか見つからない由である。郵便の転送も責任がもてないから、どうぞ以上のことだけは御存じの方々にお伝へ願ひたい。

十年ぶりの東京生活に、私は内心非常にしよげてゐる。表面はさうでないかもしれないが、これをも御承知でお手軟かに願ひたい。在京の諸氏にとりわけお願ひしておく。

福地君は西へ行くが、はじめての他郷生活でこれもたいへん御苦労だと思ふ。別れの詩は私の得意ださうだがもう書かない。 (T)

果樹園 第十四号 (毎月一回一日発行)
昭和三十二年三月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行人 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五丁目八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八小高根二郎方
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園第十五号 昭和三十二年四月一日発行(毎月一回一日発行) 池田市野町一六八 果樹園社 印刷所 文化時報社 定価三十円

果樹園

第十五号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
船の話 クロロフ
神の真 小山正孝
写真の歌から 林富士馬
遍歴の歌から 浅野晃
警め 池沢茂
まごと 笛石口敏郎
額田王の一首 福地邦樹
月に招かれた男 山根忠雄
白居易詩抄 芳野清
待春歌 森亮
杉浦正一郎君を悼む 服部三樹子
編輯後記 田中克己 (O・I・)

書簡から見た伊東静雄

小高根二郎

卒業の時伊東を推薦した國原先生

伊東が卒業論文の取材をするため子規全集を購ったのは、撮影打合会で上京した時であったから、真剣に卒業論文と取り組みだしたのはそれ以後、恐らく、「山科の馬場」を書いた十一月頃からであらう。

伊東は浩瀚な子規全集から、とりわけ子規の俳論を精読したのである。「芭蕉雑談」「俳人蕪村」「獺祭書屋俳句帳抄上巻序」「一茶の俳句を評す」「病牀六尺」「松蘿玉液」「俳諧大要」「仰臥漫録」「俳句問答」「配合論」「明治二十九年の俳句界」「新派俳句の傾向」がそれである。

伊東はその俳論から、冒頭の「芭蕉雑談」「俳人蕪村」にとりわけ焦点を集中した。つまり、「芭蕉の俳句は迫手悪句駄句を以て埋められ」の芭蕉抹殺論と、「蕪村の作が千句尽く佳句なることなり」の蕪村過褒論との間の、あまりにも懸隔のある落差が、子規のどんな魂胆から出たものであるかを衝くのを、論文の主旨としたのである。

枚数は四百字詰原稿用紙五十枚。その春から初めて京大の教壇に立ち「俳諧史」を講ぜられる穎原退蔵講師に提出したのである。

論文は次のやうに構成されてゐる。

一、子規の芭蕉論に現れた二三の傾向
二、子規の写生論の吟味
三、子規の蕪村評と新派俳壇の指導的原理
四、子規の写生主義の歴史的、啓蒙的意義
五、結び

伊東はこの構成の中で、芭蕉を弁護しつつ、子規が極端に芭蕉を土偶化したのは、月並俳壇の改革者としての彼の、多分に啓蒙的な、或ひはジャーナリスチックな身振りがあると指摘してゐるのである。

『当時の月並俳壇は子規の言ふごとく「理想の弊害」に満ちみちてゐるものであった。古今集序以来の心を種として物につけてそれを言ひ出すといふ一種の精神主義、

主観主義は、日本文学思想の根本をなすものであったことは前にも述べた。しかして天保以後の俗俳諧師達は全くこの主観主義の愚なる誤れる継承者であった。彼等に於ける主観の表現といふことは、芸術的直観の象徴的表現の意味ではなくして、低級鄙俗なる世話的な目を以て人事自然をみ、その穿ち、譬喩、教訓、さもなくばそれに対する感情の概念的抽象的な曝露にすぎなかった。…中略…

しかして子規は芸術に於ける主観を知識的なものにまで堕せしめないもっともよき方法として、先づ主観を没せよ、只ありのままに自然を見、そのまま模倣せよと言ふ写生主義を唱えたのである。それが改革論としてはもっとも安全な方法であったには相異ない。然し、その際子規が真の芸術的主観の態度を指し示し、誤れる主観にかへるに正しき主観（芸術的に）を以てしようとせずに、全く主観を没することによって誤れる主観の弊害を脱しようとした所に、彼の写生主義が只単に啓蒙的な意義しか持ち得ない理由が存する。』

（昭和四年七、八月「国語国文の研究」―伊東静雄「子規の俳論」）

これが伊東の論文の核心なのである。ここで伊東が子規に要望してゐる「芸術的主観に基く写生主義」が、いはば、後年の伊東の文学精神を形成するに至るのである。それは独逸詩人ライネル・マリア・リルケとニーリッヒ・ケストネルへの傾倒と関心となって現はれるのは、その日から四年を経た日である。伊東は事物（Sache）と言ふものを内攻的、外攻的に凝視めたこの二詩人に学ぶところがあったのは、子規では満たし得なかった「芸術的主観に基く写生主義」のためであった。

船

クロロフ

海藻や　くさった鮫の
いやらしい　においや　ガスとともに
彼等は　おともなく　すすむ
風は　月にむかって　吹き
それにまじって　雨が　唾気のように
魚に　はきつけられる
消えゆく灯火を目ざして
夜は洪笑のように　下ってゆく
雨は次第にはげしさを加え
貨物の甘草（かんぞう）がにおいは
　じめ
うんざりするその臭気は
むれた甲板の上に　ただよう

又、伊東は日本文学思想の主潮である主観主義の先達として、古今和歌集序に触れてゐるが、後年この古今和歌集の詩精神を代表する在原業平の「花がなかったら春はどんなに長閑なことだらう」と言ふ逆説的な譬喩を、伊東は詩精神の根幹にしたのである。

つまり、伊東の生涯をかけた詩業の種子は、つとに卒業論文「子規の俳論」の中に、なんらかの形で播かれてゐたわけである。

尚、伊東は、前掲の論文の主旨を展開するために、子規全集に加ふるに、次の著書や評論を引用してゐるが、当時の伊東の読書範疇を示すものとして興味深い。

「古今和歌集」、芭蕉「笈日記」、「去来抄」。最初の芭蕉全集と言ふべき「俳諧一葉集」、夏目漱石「F＋f論」。長与善郎「芸術の二道」。荻原井泉水「芭蕉提唱」「俳句の作り方と味はひ方」。竹友藻風「文学論」。室生犀星「芭蕉雑記」。萩原朔太郎「詩の原理」。

即ち、その殆んどは古本屋から仕込まれたものらしいが、例外は末尾の朔太郎の『詩の原理』である。と言ふわけは、『詩の原理』の初版が上梓されたのは昭和三年十二月だからである。丁度、論文の脱稿を急いでゐた伊東は、古屋の店頭にこの新刊書をみつけると、早速これを購ひ、その独創的な評文を借

用したのである。

伊東は『詩の原理』第四章「抽象観念と具象観念」から、「芸術的主観」の解説として、物象の全体から「ある概念の殆んど言明されない様な、縹渺たる象徴的具体的観念」だと言ふ朔太郎の言葉を起用してゐる。

伊東は後年萩原朔太郎氏から、「歪みたる島崎藤村」として絶大な賞讃と推輓とをかち得たが、その結縁の運命的な種子もまた、つとに卒業論文で播いてゐたわけである。

如上の経緯で完成された卒業論文「子規の俳論」は穎原退蔵講師に提出された。多分、明けて昭和四年一月中旬であらう。穎原氏は、研究室に出入することもなく、従って顔も知らない伊東静雄と言ふ一学生の論文にひどく感動されたのである。その時の模様を、穎原氏は次のやうに述懐されてゐる。

「私が伊東君を初めて知ったのは、君の卒業論文の審査に当った時である。勿論それまでにも教室で君の顔は見覚えてゐたにちがひない。だが君の名が特に私の注意を惹き、その名に当る顔がどれであるかをはっきりおぼえたのは、確かに論文審査の時からである。

論文の題目は正岡子規論であった。その論文の出来ばえや、学問的価値の如何などについては今ここで言ふ必要はない。ただ私は君の子規論が、一般の所謂研究といふものとして、あまりにも激しい情熱を湛へてゐる事に驚いた。しかもそれは奔放な主観に任せた煽情的な論議ではない。非常に手堅い思索の底から、抑へ切れないで湧き出す泉のやうなものであった。」

（昭和十五年「コギト」七月号、「原退蔵―伊東静雄君と詩集夏花」）

犬が吠える　そして暗やみのなかに
靴をひきずる足音がやってきて
不安をはらむ　それは
蛙の足のように　人を愚弄する
そして　マストと　ロープの中間で
ものすごい錨鉤が　撓んでいる

船あしのあとには
ためいきがかぶさり
そして　顔からは　虚しさをおりて
　まれた
重い嘆きがずりおちる
その間に　はや竜骨は
ことなるくにへと走りゆく

（たかはし・しげおみ訳）

つまり、穎原氏が伊東の名に注意したのは、論文審査の時であったと云ふから、伊東が映画脚本の懸賞募集に一等当選をしたことも知られなかったわけである。しかも、初対面にも等しい伊東の論文の情熱に、異常なほど感動され、卒業論文中で第一席の栄誉を与へられたのである。その年の七、八月「国語国文の研究」誌第三十四、第三十五号に「子規の俳論」を推薦し、これを連載せしめられた事実を思っても、いかに穎原氏が感動されたかが察知される。

ところで、さらに面白いのは、この記念すべき論文審査日の伊東自身の述懐である。

「穎原退蔵先生　　伊東静雄

昨日は御本有難うございました。只今去来抄の解説を拝見し終ったところです。それにつけて思ひ出しました。わたくしが大学卒業の作文の中に、去来抄の中の二、三句を、しかも夜店で十五銭かいくらかで求めた活版本の中から大へん重大な引用をして口頭試験の時先生から、去来抄はそんなに平気には信用ばかりしてはいけないのではないかといふ意味の御注意をいただいたことがありました。それのみを知らないわけではないわたくしは、去来抄そのものについての御注意はそんなものかなあ位の、のんきな度胸でゐましたが、引用に用ひたあのひどい本を先生から見破られたのぢゃ

ないかと冷汗を流したことでありました。

……後略……

（昭和十四年二月二十八日堺市北三國ケ丘町四十より京都市大將軍西町三六宛顕原退藏封書）

この伊東書簡で、論文審査日の口頭試験の状況まで、髣髴として浮び上ってくる。伊東は論文のなかで、『去来抄』の中の「辛崎の松は花より朧にて」に対する芭蕉と子弟間の問答の条を引用してゐるが、穎原講師はこの引用にちくりと痛い質問を発したのである。と、言ふのは、当時まだ去来自筆の『去来抄』が発見されてゐなかったので、『去来抄』偽書説があったからである。その偽書説を手軽に考へてゐた伊東は、穎原講師の質問を、十五銭の古本屋物である『去来抄』の誤謬ぐらゐに錯覚したのだらう。その日より十年後、改めて穎原先生から、先生の校訂になる岩波文庫『去来抄・三冊子・旅寝論』の恵投に浴し、その解説での真偽考証の苦心を読むに至って、冷汗三斗の思ひをしたわけである。

然し、単なる学匠であることより、先づ文学者であることを誇こせられた穎原講師は、幾多の秀才の考証の精緻さより、伊東の文学精神の情熱を買ったのである。伊東の卒業論文「子規の俳論」が、諸秀才を圧して主席で通過した喜びは、伊東から宮本氏に報じられてゐる。

二十三日

「さく日夕景に諫早にかへりました。あなたの近況は梅さんからきいてゐました。私の就職は、大阪市内府立住吉中学校に決定しました。厳密なせんこうの結果、熱心に校長に懇望されたのです。（お喜び下さい。私の卒業論文は首席で通過しました）私の行くところが級友中では一番いい所の様です。四月五日にふ任するでせう。あなたも早くきまることを祈ります。

（昭和四年三月二十四日いさはや、いとうより門司市楠町四丁目谷口三郎内宮木群木宛はがき）

神の話

小山正孝

私は神を見た事がある。神の手は、働いた事のある人の手をしてゐた。指はたくましく、太く、少しひび割れて、爪は大きかった。

百合子が悲しそうな顔をして、いつまでもうつむいてゐるので、私は思ひきって、その事を話した。

「あなたに神様が現れるなんてことあるかしら。ちがふわよ。きっと、それはせいぜい使徒の一人よ。さうよ、さうよ。」

「さう思ふのかね。キリストでないことはたしかだから、僕は神だと思ふのだがね。とにかく……。」

中華料理店の入り口からは、時々吹雪が舞ひ込んだ。ドアのすきまから、一片二片の雪の白いやつが、室の中にはげしくかけ込むやうに飛び入ったのが、すっと消える。ストーブのあたたかい空気にとけてしまふのだ。さういへば、百合子の髪の毛の方々に、キラキラと水のつぶが、ガラスの飾りのやうにくっついて、髪かざりになって美しい。私は、あと何十分かたったら、私の顔のすぐ近くに、ぼんやりとひらいた目と、紅色のほほと、やはらかい唇を見出すのを想像しながら、何とかして笑はせたいと思ってゐた。そこへ客が一人。

「おお、さむい。ひでえ雪になりやがった。ラーメン一つたのむ。」

寒い風といっしょに、どっと吹き込む軍勢。矢玉はしかし、熱にかなひはしない。すぐにまた、暖かくなる。私たちを見つめながら、座席をさがして、ストーブから少し離れた所で、するすると食べ終ると客は去る。

「よく、ふる。よくふる。」

また、ラーメンが飛び込んで来て、去って

行く。人生への希望をもう一度持ちなほして、その人達は夫々出て行った。

「さあ、行くか。」

しかし、私のさう言った声は小さかったし、百合子は返事もしなかった。

「どうしたのさ。おそくなるよ。」

「きめてよ。困ってしまったんですもの。今晩は私、どこに行ったらいいのかしら。」

「あの家は駄目なの。もう、帰れないの。」

「だから言ったでしょ。帰れるものですか。帰れると思ってるの。」

「どうしてさ。」

「わからない人ね。自分で、こんな風にしたんでしょ。私は来ないで来ないでって、あんなに言ってゐたのに。どうして来たのよ。いきなり。それも。来るなら来るで、私だって、言っておくこともあったのだわ。誰も知らない人が来て、いきなり、百合子さんの友達です。その人の仕事の世話をするつもりです。お仕事を変る場所について、大体見当がついたものですから。こんな話を、全然知らないでゐて聞いてごらんなさいよ。貴方の事を全然知らない人が――私に貴方みたいな知りあひがあるなんて知らない人が、何て思って聞くでせうね。私は、もう、駄目なの。」

「わるい事ではないと思ふけど。」

「うるさいわ。わるい事だわよ。貴方って、女が一人で生きるには、何が必要だか、全然わからないのね。」

両手の中に顔をうめて、泣き出した。

「それに、私、からだの調子が、とってもいけないのよ。だから、いいの。貴方ばっかりがわるいのではないわ。苦しいのよ。」

しばらくのあひだ、私は、何物かに堪へてゐる百合子の姿を見守った。お腹のあたりを、くねらせながら、じいんと来る痛さを押さへてゐるやうであった。

昨日の夕方、私は急に逢ひたくなって、住所だけをたよりに訪れた。百合子の住んでゐる家は、私の思ったより立派な構へであった。門の所で何度か、ためらった。台所の所で食器のすれあふ音がして、水道の蛇口から水のほとばしる音がした。台所の小さい窓の中で、女の人の顔の動くのが、クモリガラスの上の方の素通しのガラスを透して見えた。私は百合子が、働いてゐるのかと思ってみたが、ちがふ人のやうであった。さうだ、きっと、百合子はお嬢の仕度をしてゐるのかもしれない。門の辺の砂利の一つまでが私には親しいものに見えた。箱の中に美しいきれがしまってあるのを、そっと、ふたをあけて見る前の喜びと同じやうに、私は彼女の家を訪れる前には、わくわくとしてゐたのだ。

「さあ、丁度、今、居ませんが、どなたでせうか。」

台所で動いてゐた影の人が玄関に廻って私と応待した。

写真

林富士馬

豪儀な面構えが写真に撮ってある
立派な仕事をしてゐる人ださうだ
その人の周りを何人かの人達が取りかこみ
露払ひ　太刀持といふ役どころなのだらう
その人達だって　それぞれ名前の知られた
者達だといふ
その人の前に行ったら　俺なんかへいつく
張ってしもふだらうなあ
政治家ではない　異国人でもない　絵描き
ださうである
美しい人も混ってゐる　御令閨や御令嬢な
のだらう
それにしても　この写真が俺を爽快にしな
いで　ひとの世の憂霽を感じさせるのは
つらいなあ

「お店のお知りあひの方ですか。」
さうか、百合子はどこかのお店につとめてゐるのか。スポーツ用品の売り子なのかもしれない。
「いいえ。さうではないのですが、お仕事を変りたいっておっしゃってゐたのですが、そのお仕事の目当がついたものですから。御本人に少しも早くお話ししたいと思って、失礼とは思ひましたがお尋ねしたのです。」
「ねえ、秋ちゃん、あの人、お店を変るやうなこと話してゐたの。」
奥の方で女の声が
「さあ、どうかしら。澄夫さん。どうって言ってて。澄夫さん知ってて。」
と言ふと、若い男の無愛想な声が、
「全然、知らないよ。」
さうか、若い男がゐるんだな。私はその澄夫さんが、百合子の許婚者だった学生の友人だといふことを想像出来た。
「御親切にありがたうございます。帰りましたらよくつたへますから。」
私は妙な気持で一晩をすごしたのだった。
百合子の腹の痛みは少しよくなったらしい。私はどうすればいいのだらう。昨日雪が降れば、私はあの家を訪れなかったらうに。
「お店って、君は、どこにつとめてるの。」
「待ってよ。やっと、少しお腹がをさまった所ですもの。ややこしい話はきらひよ。」
不思議なことで知りあって、お互に壁の側でつま立ちしたやうにつきあって、顔と身体と、気持だけをしっかりと抱きあった。だから、二人は世界で二人だけであった。困難な事態が具体的に起ったのは、はじめてなのだ。百合子がこんなに苦しんだことも。私の描いてゐた百合子は……
小さい頃はくちびるのうすい、ほほの白いきれいな少女。十五六歳には、舌をちょっと出して、肩をすくめて友達と顔見合せて、目を細めて青空向いて笑ふと、髪の毛がゆさゆさとゆれる。家庭教師に接吻されて、その男が好きでたまらなくって家出をしてしまふ。学校でキリスト教の洗礼を受けて信者になるが、自分ははっきりと裏側を持ってゐる事も知ってゐる。大学生を許婚者に持つが、彼は肺病になって、その入院費と、自分の生活費を、どうとかしなくてはならなくなる。澄夫さんの家に引きとられて、どこかのお店なるものに出てゐる。
私と逢ってゐても、時には言ふ。
「その人は知ってゐるのよ。知ってゐるの。わかってゐても何にも言へないでしょ。サナトリウムからは、海岸に打ちよせる波がガラス戸越しに見えるわ。波が白く、しぶきをあびてゐても、音は聞えないわね。はげしく岩に当って散るのや。海岸線にそってずうっと白くしづかに打ちよせてゐるのを見てゐても、別の世界の事ですものね。きっと、そんな気持だったでしょ。私の目を見つめながら、言ふの。何をしてもいいんだよ。臘のやうにすきとほった肌をして、真黒な瞳で私を見つめながら、その人は、私を好きだったわ。だから、私をかはいさうだって、言ってたわ。」
中華料理店では、もう時間がおそくなったし、これ以上営業してゐたら、ドアがしまらなくなってしまふだらうと言ってゐた。私も百合子も立ち上った。仕方がない。宿のない者は、雪の道に出た。
「大丈夫かい。」
「大丈夫よ。あなたも大丈夫。」
肩に手をかけると、その手に、砂粒のやうな痛さが当る。道にふり積んだ雪の深さは靴の上まで来た。ズボンの折れ目は雪をひっかけて、ズボンと靴との間の足首にはつめたい水が入りこんだ。どこまで行くにしても、どこの道もみんな同じやうなものらしい。
「君はきれいだね。」
「あんな。」

百合子の頭の上にかぶった赤いカーチフの上に白く早くもふり積む。白い顔のまつ毛にも露がのって、うれしさうに笑ってこちらを向いた。街燈の下に来ると、赤いカーチフが、よけいに赤く美しく見えた。
光の次には、時間といっしょに降ってゐる小さい雪のはげしい攻撃。光の中では暗い所を通り抜けた喜びで、つめたい手をしっかりとつかみあって、一寸、立ち止る。
「君はカチューシャみたいだ。」
「あんな。」
私は百合子がどこにつとめてゐるかを知らない。やさしい、利口な女であることと、顔が外国人みたいにはっきりとしてゐることしか知らない。
道は坂になりはじめたが、店の多い所になったので明るくなった。果てしない旅なのだらうか。いつものやうな旅ならば、もう、宿屋についてもよい頃なのだが、いつもの半分の道程も辿ってゐない。
「あなたは私の本当なんか知らないのだわ。ああ、どうしたらいいでせう。あなたには神さまなんか見れるものですか。本当のことを言ふわね。私、今朝、流産したのよ。お便所に行ったら、おかしいの。知らないでしょ。女って、いやあね。そんなはずないと思ったのに、不思議に落ちてしまったの。苦しくなってきたわ。」
「なんだって。君は、君は。そんなに簡単なのか。」
「たしかよ。流産だわ。だから、私って、駄目なのよ。」
私は百合子をかかへるやうにした。思ふやうには歩けなかった。すべって、二人はみっ

遍歴の歌から

浅野晃

これは壁だ
病院のながい廊下よりもながい廊下だ
土色の女の顔　後光がさしてゐるが
どこから出てきて立ってゐる君なのか
あたらしい教会も
ふるい教会の臭ひがする
むかし兵舎でかいだ
なめし革の臭ひがする
肉親の死んでゆくのを傍観してゐたつめたい
　心に
革命の愛を誓はせるなんて
二重の刑罰だ
酋長の頭の羽毛かざりに惚れたり
蓮食ひ人種の永久平和にうつつを抜かしたり
あげくのはてはすっぽり斬られて皿に盛られ
　た自分の首を
自分の腕で捧げてみたり
あなうらは何も感じない
きっとはだしで氷の上を歩いてゐる
オルガン曲の低音にあはせて
石棺の封をといてゐる
花のミイラを取り出してゐる
〈いつおれは砂漠のなかでむくんでゐたんだ
　あっちが東だ　おれは急ぐんだ
　まん丸な太陽が見たいんだ　どんなことが
　あってもまん丸でなくちゃいけないんだ〉
おそろしく深い夜だ　草はどこにもゆれてゐ
　ない
捜索の手は地下室から始めろ

ともなく雪の中にころがった。
「どうにかしてちやうだい。痛くなって。」
「急にひえたからなんだね。」
私は両手から抜けさうな身体を真白になりながらかかへた。百合子は表情多く私の顔をうす目をあけて見ながら抱かれた。
苦しさうなので、とにかく、一度、街燈によりかからせた。真上から光を受けて、二人の鼻と鼻との間の白い息を通り抜けても雪はすぎた。ああ、よく降るなあ、さあ、行かう。私は心で自分をはげまして、もう一度百合子を右手でぐっとかかへた。いっしょに立つ努力をして歩きはじめた。私がうつむいて、ふと、横の方を見た時、百合子の目が、案外つめたく私の方を見つめているのに気づいた。あれっ、この人は二通りの目を持ってるのか。あの苦しさうな目の裏側にこんな目も持ってゐるのか。
「だけど、をかしいな。僕はいつも、確実にしてたんだがな。僕は。」
すると百合子は言った。まるで、つめたい方の目が口を聞きはじめたかのやうに。
「何、言ってんのよ。誰があなたのためだって言ってゐて。」
「そんなら、をかしいよ。よけいをかしいよ。」
「私にだって、自由はあるわ。さうなるやうなことをしたいやうな人だってあるわ。」
澄夫さんだな。ひらりと、刃が私の頭を半分に、ななめに切ってすぎた。雪を浴びてはもう駄目だった。
「さうか。君にも自由はあるさ。僕は君とどんな関係なんだ。君にはいつもお金を払ってゐるものな。それとなく、友達のふりをしてゐたって、君にはお金を払ってゐるものな。君の仕事の世話なんか、誰がしてやるものか。君はさういふ女なんだ。僕と君との二人の姿は哀れだと思ってみたりして、僕は哀れを買ってゐたものな。はっきり言へば淫売ぢゃねえか。」
最後の言葉を聞くと、今迄と百合子の顔が、全く変った。顔中の筋肉がひきしまって、くちびるを赤く横に大きく開いて、
「ぎゃあ。」
といふ声を出した。するりと抜けて急に走りはじめた。私がとまどってゐるあひだに、後姿は飛んで、雪を蹴散らかしながら、道の反対側に渡った。鳥が羽をむしられて逃げ出したやうに。思ふやうにならない走り方で、百合子は私の視線から、一刻も早く去るために去った。どっと、雪がひどく降った。私は追ふこともしなかった。心の中で、自分に言った。
「なあんだ。なあんだ。なあんだ。」
私は後悔しながら、自分の目のするどさを後悔しながら歩いた。
「お寄りなさいよ。寒いから。一杯あがってらっしゃいよ。」
飲み屋の並んでゐるせまい通りの赤ちゃうちんの向ふ側に私は百合子の横顔を見出した。
さびしさに一杯やらうと迷ひ迄んだ道の遠くに、もう、笑ひながら、客を呼び込んでゐる百合子を見出した。お店って、ここなのか。今度は私と百合子はどんな風になるだらうか。私はまた百合子に逢へるのがうれしかった。しかし、逢はない方がいいかしらとも考へた。
彼は——私の見た神はからだの大きい人であった。ある夜、私は自分の室で机に向ってゐた。私がふりむくと室の天井にとどく位の人が立ってゐた。白い布をひだ多くまとって、腰のあたりから下は特にゆったりとして、私にはなめに向ってゐた。神の手は、働いた事のある人の手をしてゐた。指はたくましく、太く、少しひび割れて、爪は大きかった。右の掌を胸のあたりまであげて、何かを語りかけさうではあったが、左手を垂れ、だまって立ってゐた。清い空気の中に緊張した気分がみなぎった。

勤め人

池沢　茂

ぼくは義父について、しばしば「神のような愛」ということばを思いうかべた。そして、ときには、ほんとうに、なみだぐましくさえなった。ということは、ぼくがそれまで、それほど、つめたい、暗い世界に、住んでいた、ということになるのかもしれない。ぼくは大阪で父母といっしょに暮していたけれど「なんの希望もない」だけではなかった。することすべてが行きづまり、妻には家出をされ、失業したあげくに、やっとありついた職は、小さな町工場の注文取りで、身心ともに、疲れはて、苦しみはてていた。そんなぼくを義父は、父母に無断で呼びだして『いますぐというわけにはいかないが、そのうちに、なんとか、もっと適当な職を見つけてやるから……』と言いきった。そして神戸で、こじんまりした新築の家に、妻といっしょに住ませた。文字どおり着のみ着のままだったが、衣類や世帯道具はもちろん、食糧まで、世話をつづけた。そのために、かれは山地のいなかから、ながい坂をこえ、はるばる郊外電車にゆられて、なんべんとなく足をはこんだ。職も、おなじ市内の新聞社へ、ぼくが入社試験を受けにゆく段取りになると、義父は、その社の社長や重役たちへおくりものをして、どうしても入社できるように運動した。そうして、ぼくはとうとう、義父がはじめに約束したとおり「家」「妻」「職」を、そろって手にいれることが出来た。
ぼくは大学を出てから一年半ほどして召集され、足かけ六年にわたって兵隊にとられていたから、ずいぶんとしをとっている。そのうえ、中耳炎をわずらって両方とも鼓膜がやぶれているから、聴力に、かなりの障害がある。つまり、一般の人と立ちまじって社会生活をするのには、すくなからず不利な条件を負わねばならない。ぼくは義父から受けた恩義を思うと、ありがたくて、なんだか夢みたいな気がする一方、ときには、なんとなく、おそろしくなった。ぼくの肩には、その恩義が、あまりに重荷すぎて、とうてい負いつづけてゆけない気がしたからだ。
『なにも、そんなに、遠慮せんかてええ。わしとおまえとは、ほんとうの親子もおんなじなんやから……。この家も、名義はともかく、結局、おまえの家なんやから……』
会うたびにかしこまって、おそるおそる礼をのべるぼくに、義父はしかし、なだめるように言って『ほんとうの親子もおなじ』とくりかえした。そして、そういうときの義父の目や語調やようすには、じっさい、いたわるような、はげますような、やさしく念をおす印象が、あふれていた。

警笛

石口敏郎

今すれ違った列車の警笛が　深く
私の中に沁み込んでゆく　激しく
煩をすり寄せ　お互の風景を粉砕
し　時間がそこに乱れ　消え去っ
た存在の幻影を交換し　愛とはま
こと虚しく　確め合ふすべもない
吹け　警笛を　私のふところに残
った　髪毛のやうに　風景の中に
細く曳きのばしてゆけ　列車よ
一瞬にして終ったそのことのため
に　今はただあてどもない地図の
中にお前を押し止める為に

ぼくはふしぎな気がした。なぜそんなに大切にされるのか、わからないのだ。世間体のおもわくとか、将来を見越した利害の打算とかがあるのかもしれないと、疑ってもみた。ほんとうに愛しているのは、むすめ（ぼくの妻）だけなのだろうと、察してもみた。それから、ぼくを両親から無断で引きはなしてしまったことで、すまながり、あわれんでいてくれるのだろうと、推測してみた。しかし義父は、ぼくがちょっとでも父母について、たとえば『いちど、大阪の家に、帰って来ようかしらん』などと話しかけると、きつい顔になって『そんな過去のことは、みんな忘れてしまわなあかん。くよくよしたって、なんの得にもなれへん。もっと余裕が出来てからのこっちゃ』と言った。妻のほうは、狂気のようになって、がむしゃらに反対した。かの女はそのころ、すでに姙娠していたのだ。そして、ぼくは結局、そういう義父にうなずき、妻にも負けた。ぼくは妻とふたりきりになると『おとうさんが言うとおりやなあ。ぼくらは自分たちのことだけで、手いっぱいなんや。きょう、これから、どうしてゆくかが、たいへんなんやからなあ』などと語りあった。

義父はその後も、たびたび、ぼくたちの家をたずねてきた。義母も、ときどき、おとずれてきた。そのたびに、義父も、義母も、田畑でとれたものだと言って、米や麦、いもや豆、いろんな種類の野菜など、はこんできた。その季節には、山でとれるマツタケ、カキ、クリなど、みやげにした。ときには、たきぎや炭まで、これはトラック便で送りとどけた。ぼくはなんと感謝していいか、そのことばが、わからなかった。かしこまって礼を述べると、いかにも「水くさい」というように『ほんとうの親子もおなじだから……』と、くりかえされるからだ。といって、なんにも言わずにいると、やがて、ふと思いだしたように、百姓仕事はどんなに骨が折れるかが、はなしの種になった。ときには、だれそれさんはもうどれくらいな月給をとっていると、ぼくの月給の倍も三倍もの金額をあげて、知人たちの近況を話したりした。ぼくはそんなとき、おびやかされ、おもくるしく、やりきれない気がした。ふたり暮しでは一カ月かかっても食いきれぬほどの、イモや野菜などの山をながめて、そっと、ためいきをついたりした。

ぼくはあからさまに強制されたわけではないけれど、できるだけ早く月給があがるようにと、なにかしら、しきりに強いられだした。そして、だれにも負けないようにと、追いたてられるように、あせりはじめた。といっても、もともと聴力に障害があり、年齢もおくれているのだから、じっさいは、人なみにやってゆくだけでも、かなりの無理を生じる。ぼくはその無理を通した。すると、月給はやがて、どんどんあがりはじめた。義父が社長や重役たちに、おくりものをしておいたからかもしれない。新聞社といっても、たいして大きくもない地方紙だから、個人経営に近い面もあったのだろう。ぜいたくさえしなければ、補助がなくても、とにかく暮してゆけた。と同時に、はじめて就職できたころのよろこびや、希望をいだきながら働くたのしみなどは、しだいに、いらだたしい苦痛や不安とかわりはじめた。月給に相応する仕事ができないのではないかと、ぼくはたえず、周囲から、ののしられ、からかわれる声を聞いた。出勤しようと家を出るときには、ときどき、足がすくみ、目のまえが暗くなるのだ。むりに元気をつけ、笑顔をつくって歩きだすと、なんとなく狂気じみた。ぼくはしずかに、平和に、安心して暮したかったのに、そんなものは、もう、すこしもなかった。

それに義父は、それから義母も、ぼくの月給があがって満足したのか、ひどく足遠くなった。義父母の顔を見たり、みやげものを見ると、もう、それだけで、おもくるしい気分になってしまうぼくだったのに、ときどき、ふと、義父母のおとずれが、しきりに待たれた。なにか安心が欲しいのだ。どっしりした「うしろだて」をはっきり感じたいのだ。ぼくは勤めの帰り、たいてい夜のふけている坂路をぐったりとなってのぼりながら、今夜あたり義父か義母が来ているのではなかろうかと、あてにならない期待に、胸をときめかせた。

まままごと

福地邦樹

女の子たちは終日
人通りの多い道ばたで
ままごとをしたりしている
かれらの花の時は
けっして大人たちの注意をひかない
ほこりっぽい陽だまりで
せっせと雑草をきざみ
砂をかけ
化粧びんの水をふりかけ
すると大人たちの生活は
つややかに変貌して
小さなブリキの食器に盛られる

額田王の一首

山根忠雄

かねてから私は万葉集の二三の歌、例へば、

君待つとわが恋ひをればわが屋戸（やど）の
簾動かし秋の風吹く
（巻四・四八八）　額田王

わが背子はいづく行くらむ奥つ藻の
名張の山を今日か越ゆらむ
（巻一・四三）当麻麿の妻

わが背子を大和へ遣ると小夜更けて
あかとき露にわが立ち濡れし
（巻二・一〇五）大泊皇女

これら女性の歌だけがもつ、いふにいはれぬ不思議な美しさ――愛の苦悩や激情よりも、「愛する女」がその対象たる男性を離れてふともらした孤独な吐息……その吐息と、そのときふと味はつた自然の感触との緊密な結びつき、そしてその中にしづかに息づいてゐる生きた女性の体温――いはばさういったものに限りなく私は惹かれてゐたのですが、たまたま大山定一先生の『「愛の女」たち』〔創元社発行「リルケ雑記」（後に「リルケの薔薇」と改題）所載〕を拝見すると、リルケも同じやうにかうした女性の魂の深い美しさに傾倒し、全心をかたむけて、殆ど誰も気づかなかったこの新しい発見に向った径路が、見事に展開してあるのでありました。

先生は書いてをられます。

「彼女の深いたましひの愛は、すでにあらゆる対象を越えてゐるかも知れぬ。彼女の深い愛のながれは容赦なく彼女の愛人をこえて無限のなかへ流れこんでゐる。」

このことは、私が先に「その対象たる男性を離れて」といったことと相通じます。しかし先生は、私が「離れて」といったところを「越えて」といはれました。さうです。確かに無限に越えてゐるのです。

「リルケはただつつましい女らしい生活と忍従にあこがれたのではない。むしろ、リルケは「恋する女」に自然なこころの開花のうつくしさを見てゐるのである。いさましい男たちのやうに、彼女たちは運命とたたかひはせぬ。風雨にさからひながら、何ものかに挑戦するやうなことは、すこしも考えぬ。ただ一すぢに純粋なものを何の無理もなく無限にのばしていっただけである。そして「恋する女」は、かへって男たちが夢想さへ出来ぬおほきなものを僕らのそばへもたらしたのだ。リルケは運命や冒険よりも、生活の深さを愛してゐた。」

私はここまで読んで来て、思はずハッとしたことをおぼえてゐます。「男たちが夢想さへ出来ぬおほきなもの」――額田王の歌のあの不思議な美しさはつまりこれだなと、一種の悟りのやうなものがこのとき閃きました。

「運命といふものは好んで唐草模様や色模様を織りださうとする。運命のくるしさは複雑にあると見てよい。しかし、生活そのもののむづかしさは、むしろ単純にあるやうだ。生活が持ってくるもので、たうてい僕たちの力に及びもつかぬといふのは、せいぜい一つ二つのものにちがひない。聖者はわざと運命をさけ、神のまへに立って、この一つ二つのものだけを選びとったのだ。そしてまた女人も、彼女の生れついた性質から、男性とのむすびつきで、いつも聖者とおなじやうな単純至極な選択をしなければならなかった。恋愛の不幸をみるとそれが実にはっきりとわかるのだ。恋する女は、たえず変化をもとめ、一ところに瞬時もとどまらぬ男のそばで、永遠な女性のシンボルのやうに、運命とは何のかかはりもなく、じっと動かぬこころを取りまもってゐる。愛の女をみると非常に静かだ。このやうな女人のうつくしさは、その愛人にくらべて、一きは立ちまさって見える。たとへば生活が運命より偉大なやうに。……」

（リルケ「マルテの手記」）

リルケがただ漠然と「愛の女をみると非常に静かだ」とか、「生活が運命より偉大なやうに」とかいって暗示しようとしたものを、先生は更に明瞭に「男たちが夢想さへ出来ぬおほきなもの」とか、「リルケは運命や冒険よりも、生活の深さを愛してゐた」と追求し、また更に結論として次のやうに書いてをられる。

『「愛の女」たちのなかには、あらゆるものを凌ぐ一途なこころの純一さがなければならぬ。そこにはもはや他から強ひられたものでないうつくしい一すぢの緊張があるのだ。「愛する」だの「愛される」だのいふ区別を、すっかり振りすててしまった愛の無限があるのだ。リルケが全心をかたむけて傾倒したのは、このあたらしい発見に対してであることを忘れてはならぬ。リルケが「女人のみが僕のこころをうごかす」といったとき、彼はほとんど誰も気づかなかったこの「女のたましひ」の純粋と偉大を発見してゐたのである。』

リルケ畢生の大作といはれる「ドゥイノの悲歌」の一節に、

ちゃうど張りつめた弦に堪へぬいた矢が
力をあつめて飛びたつとき
矢以上のものとなるやうに。

（第一の悲歌）
（手塚富雄訳）

といふ比喩がありますが、丁度そのやうな「一途なこころの純一さ」、「うつくしい一すぢの緊張」、「愛の無限」、『「女のたましひ」の純粋と偉大』が、結局「君待つと……」以下万葉女流歌人たちのすぐれた二三の歌だけがもつ、いふにいはれぬ不思議な美しさ――秘密であったわけなのです。そして、それはまた「生活の深さ」からくる静かな美しさだといってもよいでせう。

前述したそれらの歌の中でも特に額田王の

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の
簾動かし秋の風吹く

の歌こそ、先生の『「愛の女」たち』に最もふさはしい、日本的な好き適例かと思ひます。

（つづく）

月に招かれた男（十）

芳野　清

七、友の死

戦争の暗さに比例して戦地にある大塩と大垣との間の友情は一層あつくなった。大垣は己れの詩作にいつも大塩の姿を思ひ描いてゐた。未完稿とことわった次の詩も遠く想ひを

馳せてゐるのは恐らくこの友の身の上であったらう。

春のてぶり

軒々に菖蒲が飾られ
爽やかな五月の空に鯉幟が舞ってゐる
なつかしい端午の節句
かがやくみ国の春のてぶり
どのやうに貧しい家でさへ
けふのひと日を
それらしく祝って暮すのであらう
喪ってはならぬ
喪ってはならない日本の祭
いくとせ兵ものたちは
あまざかる辺土に遠征の旅を続け
ふるさとの春を知らず
せめてもは夢に通へと
やさしい母のこころである

彼の友情に応へて大塩も又美くしい便りを忘れなかった。その二、三葉を写してみよう。

（「曼荼羅」所載、大塩麟太郎追悼より抜）

南支派遣

しばらくお便りしませんでした。何と云ふこともなかったのですが。再三の御文はうれしく読みました。そのための一、二枚も書いたのでしたが、いつしかそのままにしてしまったのでした。

このごろは、僕達も或る山間の牧舎のやうな所に住んで、ひねもす小鳥達の啼音と桃の花と、つぶらに含んだ青梅の実と、蜜柑畑と、もうすっかり春らしい日の健康を愉しみ暮してゐます。鳥兜やオリーブの緑樹に囲まれる、

白居易詩抄（二）

森　亮

南亭閑望

枕に頭を兜せかけて仕事のことは考へない。
二日ばかり門の戸差してやすんでゐる。
役人とはからだを使ふものだと今度しみじみ感じた、
病気にならないと閑が得られないのだから。
南の庭のわが小部屋は方一丈の四阿づくり、
のどかな気分はそんな近いところにかくされてゐた。
その西向きの軒のほとり、竹の細枝がぴんと張った更に上に
太白山が濃い青の襞々をきざんで眺められる
遠い峯の上にふはり浮んだ雲が（語るも面映ゆいが）
世の塵にまみれたわたしの顔をのぞいてゐる

★

夜の琴

この楽器がつくられてゐる蜀の桐は木の質が緻密で、
楚の琴糸が発する音色は清澄そのものだ。
ゆるやかにひびきを整へ、ゆつくりと掻い鳴らせば、
更闌けて、ころろん・ころろと幾声洩れる夜の調べ。
耳に入った具合は淡くてさらさらしてゐるがなんとなくあはれな趣きがそっと心を捉へてしまふ。
自分ひとり好きなときに試み、飽きればやめる、
それは別に人に聴いてもらふ必要のないもの

註　「南亭閑望」の原詩は病假中南亭閑望（一の四一三）で、白居易が三十五才のときに作ったもの。彼はその時長安の西の方にある某縣の上位の役人（尉）になってゐた。太白山は彼の他の詩でも「敷峯太白の雪」、「太白夏雲生ず」などと歌はれてゐる山である。「夜の琴」の原詩は夜琴（一の六四一）で、居易は左遷されて四十四才から四十七才まで江州（九江）に居たが、この詩はその頃のものと思はれる。
前回、註で言ひ落したが、「蜀」は六十に近い頃のもので、「わが感懐」は今回の「夜の琴」と同じ頃に出来たもののやうである。

れ、部屋にはそのみどりの為に古びて大きな机があります。時間のあるときにはその机に向って僕は又何もしないでゐるのです。お送り下さった冊子もここで戴きました。幾度か読んで、その中で貴方のおこころづくしがよくわかり、僕にはそれのみが嬉しくてなりませんでした。

南支派遣

僕はこれら南方の全き真昼が未だに怖ろしいと云ふのではありません。過去が整理しおほせないあがきに韜晦してゐるやうなものでなく、いはば、もう少しの間、何か少年の破けた感傷をいたはってやり度い、飽くまでも惨めだった少年（いかにその貌は醜いかな）の嘘でなかったことを充分見きはめた上で懐しいものに享け容れてやりたい母親のやうな気持がするのです。僕は僕の追憶の中で低い静かなピアニシモでいつかボナパルトがゲーテに語ったフランス語の一節を繰りかへし口真似してゐたいやうな気持がするのです。（青春はよくここまで耐へて来たと思ふときには、まだ身の戦きを禁じ得ません）

貴方はたびたびそのやうなことで僕を肯じ、御自身を慰めるやうなお手紙を含ませて下さったやうにも思へます。江古田にゐたときにも、だいたいそんな気持が僕にもあったやうです。云ひ難いところで、僕はひとことくらひ或る夜半の寝覚めにくりかへす歌は拙きままに、

春の日の人こそ知らね帰り花の
なごり佗しき露の音しやは

昭和十七年四月十九日　南支派遣

お変りないことと思ひます。頃日、「四季」と「うた日記」とを戴きました。いつも乍らまことに有難う存じました。「四季」はずい分久方振り「うた日記」も殆ど木読のものゆえ嬉しくてなりません。集中には随分有名の篇々あって、小生にもいくらかの回想や憧れがあり、改めて唯今に誦して客愁の耐え難きを覚えました。貴方のおこころづくし、いつも乍ら懐しく感謝してゐる次第です。

田中さん、その後は如何でせうか。山背ひの白い長雲を眺めて来る日来る日もの云ふこともないばかりに。Y君にもお会ひのときはよろしくお噂さ下さい。

「燃ゆる火の山にも似たり朝霧の花にも似たりますらたけをは」折々に読み参らせ、この詩畢生の愛誦歌との如くであります。「四季」の詩篇もこれからゆっくり読めるでせう。みなだいたい同じやうな気持で何か永い夜々の遍歴の上で漏れいづる天堂の光りを仰ぎみつつ己れをいたはりたいレクレエムを歌つたやうなおもひでした。僕のするこの種の消極を貴方はもう叱って下さるでせうか。

十八年「コギト」八月号に大垣は「星」と題して戦地にある友への尽きない友情を歌ってゐる。古典的と思はれる程の、完璧な美しさで、私は彼の詩の頂点ではないかと思ってゐる。

星

このごろよ汝がめにまさる星々が
やはけき光りみつつかなしも

大塩驕太郎

くらい海の夜空にも
星々は煌いてゐた
とほくたかく
もう手のとどかぬところで
ひとりがひとりの運命をきづかふやうに
つめたいやさしい光で凝視めてゐた
狭く苦しい憎愛の眸ではない
すべてを絶した
なにものも希はない
神の……
けれどもこころは
たえない琴の楽にまつはり
いつしれずうたってゐた
胸の中のあの歌を
くりかへしうたってゐた

待春歌

服部三樹子

方廣寺の石垣の石よ夕ぐれて不思議なほどの石の巨きさよ
いつか見し島の藪原の石室は秋の田の中ひそけかりしを
石垣の巨石に沿ひてゆく夕べある甲斐もなく我は貧しく
夕ぐれを人ら往き通ふ中に浮き平たき巨石見つつ春思ふ
いとせめてわびしき我は石みつつ今日の夕べを過ぎてゆくなり
立止らず道をゆきつつ石垣の巨石みほるるこころ夕影
さくらばな遠き彼方の空白く我が胸うちにあらかじめ散る
あはただし春の行手をせき止めて向嶋堤人とゆきし日
少女の日ふさふべかりし朱色（あけいろ）のセータを着て春待つ日なり
庭に降るやさしき雨の音きけば人にも我にも春は近しも
甘酒の麹を買ひに夜の道細く抜けゆく身の小軽さに
よりがたき二月の月の冷たさも畏しとのみゆきし未通女子
ふり返りし時にするどく空にありし鋭鎌の月よ冬を目守りて
賜はりしものを身につけ稚な子のごと我が趣味を持たず待つ春
人起ちて残しゆきたる戸の際に彼岸に近き雪降りてゐつ

杉浦正一郎君を悼む

田中克己

二月二十四日の大阪毎日は杉浦正一郎の死を報じて、かういってゐる。

「杉浦正一郎氏（文博、九大文学部教授）二十三日午後六時二十六分腸ガンのため九大附属病院で死去。年四十六。兵庫県生れ、昭和九年東大国文科卒、天理図書館研究員、千代田女専教授を経て十七年佐賀高校教授、二十八年八年九大教授となる。芭蕉研究家として知られ十九日東大から文学博士号を受けたばかりだった云々」

私にとってこの報知は全然寝耳に水といふわけではない。彼が癌のため再起不能といふことを聞いたのは、この十日ほど前で、この日、偶然にもその真否をたしかめに天理図書館司書研究員島居清君を訪うて、たしかにさうだとき丶暗然として服部正己君を訪うてこれを報じてから帰宅したのである。杉浦が息を引取ったのは、あたかも私が服部家を辞した時刻に当ってゐる。

新聞の報ずる略歴以外に、私としてはつけ加へたいことが山ほどある。だいたい私どもが知りあったのは昭和三年、ともに大阪高校に入学した直後である。しかし彼は竹内好と同じく文甲だったので、クラスのちがふ私とは大したつきあひもなかったが、三年になって短歌雑誌「炫火（かぎろひ）」といふのを一緒になって出したころから親しくなった。この雑誌は文科の文学を愛好する者どもの殆んどすべてが加はったが、中でも熱心だったのは杉浦で三崎皎のペンネームだったかで毎号歌をかき保田与重郎は湯原冬美と号して評論、歌、詩と何でも書いた。さうしてこの雑誌が大学へ入ってからの「コギト」の母胎をなしたわけである。杉浦の歌は今はおぼえてないが、なんだかねっとりとしたひどく官能的なものだったやうに思ふ。

昭和七年東京の肥下恒夫の家で「コギト」

32. 4.8.

の発刊の会合をしたときも、杉浦は出席し、創刊号以後つづけて小説か詩を毎号書いた。小説にも詩にもねっとりとした味はあひかはらずとれず、私どもは「杉浦はいやらしい」といひあった。この「いやらしい」の本質は何だったのだらう。いま手もとに「コギト」がないので一向わからないが、へんにW的な濃厚な美文を書いてゐたのではないかと思ふ。

美知子夫人との恋愛はそのころからで、私も十分刺戟を受けたが、彼のおかげでもっと刺戟されたのは早稲田の文学をやる仲間に紹介されたことだった。その中の一人、佐藤竹介のことは私も何度か文章に書いた。

卒業して未曾有の就職難の時節に、彼は楽々と天理高女に就職し、これが現在の天理図書館の豊富な俳書蒐集の端を開くことになったのは、斯界の人の知るところであるが、彼は同時に創作からは全然遠ざかり、「コギト」の仲間からも遠のいて行った。

たゞ私とだけはふしぎに縁がつづいた。忘れもしない、昭和十三年、同じく関西で教師をしてゐた私が、急に辞職して上京し、職もなくて困ってゐると、彼は突然訪ねて来て、三十円といふ当時の大金をさし出し「これを使へ」とすゝめた。かゝあ殿もこの時のことはおぼえてゐないので、はっきりしないが、私はこの時、恥かしがって辞退したやうに思ふ。それにしてもこんな形で友情を示してくれる友だちは他になかったので、その時の感激は今だに忘れない。

もう一度、終戦後、復員して勤め先は解散封鎖の不景気のどん底で困ってゐた私に、彼の救ひの手がのべられた。突然たよりをよこして天理図書館へ行かないか、推薦するといふのである。これが爾後十年以上の私の関西生活のはじまりになったので、いままた東京へ帰る私には彼の死は無限の感慨をさそふ。私は彼の手をへた藤井紫影博士の蔵書の満ちみちた研究室に席を与へられ、しかもその一冊だも利用しないで東京の空を望むこと三年半、その間、私の仮寓を訪れて泊った彼は、私の苦にしない蚤の大群に悩まされて一睡もしなかったと語った。

岩波文庫で出た「おくのほそ道」で、曾良の随行日記の架蔵のこともはじめて承知した。彼が不治の病でこんなに早く斃れることはもとより承知しなかった。東京に預けたままになってゐる「コギト」一そろひを手にしたらゆっくり彼の追憶にふけらうと思ふ。いまは遺児二人の上に幸あれと、祈るばかりである。

編輯後記

ぼくは田中さんと十年ほど會わなかつた。そのまえ會つたのも十年ほど以前だつた。だから「果樹園」創刊の相談を受けたときには、びつくりした。しかし田中さんはそんな人なんだろう。たゞ、ぼそ〳〵と、はずかしそうに、小さな聲で話すので、耳の遠いぼくは、たいへん困つた。その後聞こえるように話してくれるようになつたけれど、もう別れねばならない。こんど會えるのは、また十年あとのような氣がする。「果樹園」のためにも、元氣でいられるように祈ります。（I）

元コギト同人だつた杉浦正一郎氏の訃報を見たのは二月二十四日の朝刊だつた。學位を得てから五日目の死である。かねて死期の近いことは田中氏の話で知つてゐたが、それが事實になるのがあまり早かつたので、愕然とするほどのショツクを受けた。氣晴らしに理髪屋に行つてゐる留守に、棟方チヤコ夫人から電話があつた。ピエンナーレ受賞記念展で恵功画仙が來阪してたからだ。躍り上るやうな氣持で會ひに行つた。画仙は弘高サイプレス画會以來の師匠である。もう三十年になる。意氣は青年時代よりいよいよ旺んである。大鵬一路千万里といふ書をいたゞいた。果樹園激勵のためである。それにしても一日にめぐり會つた二天才の死と生とに私は數日考へさせられた。（O）

果樹園 第十三号 （毎月一回一日発行）
昭和三十二年四月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行人 小高根二郎
京都市下京區搭浦通梅小路上ル
印刷所 文化時報社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園第十六号 昭和三十二年五月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所文化時報社 定価三十円

果樹園 第十六号

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
白居易詩抄 森亮
窓 池沢茂
爪は桜貝 小山正孝
おまえについて 福地邦樹
飛躍・夜に クロロフ・ボルヒエルト たかはし・しげおみ訳
逃げる 浅野晃
西堤の家 田中克己
高野 山根忠雄
月に招かれた男 芳野清
夕日 石口敏郎
編輯後記（Y・I・O）

書簡から見た 伊東静雄 (五)

小高根二郎

伊東は先の宮本氏宛書簡で予告してゐるやうに、四月六日住吉中学校に赴任した。当時四年生であった池沢茂氏は、彼の新任挨拶の状況を次のやうに伝へてゐる。

「まず校長先生が壇のうえにあがって、それこそ円満らしい、まんまるい、にこにこした顔で『こんど来てくださった先生は、京都帝大の国文科を出てこられた秀才で、なかなか深い研究をし、すぐれた教養を身につけていられる。はじめのうちは、いろいろなれない点もあるだろうけれど、いちにちも早く先生にしたしみ、おしえをよくきいて、しっかり勉強するように…』と、たしかに、いつもより力のこもった、しんせつな、紹介のことばをのべた。それから、したにひかえていた伊東さんを呼びあげ、肩をならべて立ってから、さきに、壇からおりた。すると、伊東さんは、なにか、とつぜん、かんだかいこえで、さけんだ。生徒たちは耳をそばだてて聞こうとしたが、なんだか、のどにからんでどもったみたいな、へんにかんだかい、あんまりみじかいことばだったので、ほとんど、わからなかった。しかも伊東さんは、したのほうの先徒たちは見ずに、うえのほうの空を、まるきり怒ったみたいな眼つきで、じっと見あげている。顔はまっさおになっている。よわそうな、小さな、やせた体をしているのに、かみの毛は、もじゃもじゃと、ながくて、ひたいのうえにまで、たれかかっている。生徒たちは、つぎのことばを待った。が、伊東さんはやがて、ひたいのかみの毛をぐいと、あらっぽく、かきあげるようにすると、まっかな顔になって、そのまま、そそくさと、壇からおりてしまった。」

（昭和二十八年六月「祖国」伊東静雄追悼号、池沢茂―詩人とサラリーマン―）

この就任挨拶に気遅れた新米教師の伊東と僅か半年前、三越は六階催場の授賞式で、天晴れ名優振りを発揮した書生ッぽ伊東とを思ひ較べると、いささか奇異な感がしないこともない。が、元来かかるちぐはぐな精神の起伏こそ、詩人としての気質を何より雄弁に物語るものであらう。

このどぎまぎとした哀れな新米教師に、怪しからんことには、早速生徒達は「乞食」と云ふ仇名を献上したのである。大阪一ブルジュアの子弟が多いこの学校の生徒達の、傲慢な驕りからである。然し、伊東にも、さう仇

名された責任が全くないわけではなかった。

第一、就任に先立って元田竜佐校長から

「伊東君。その頭だけはなんとかし給へ。」

と、すでに注意をうけてゐたからである。短歌の嗜みがあった文人元田校長は、蓬髪には日頃馴染であった筈であるが、太ッちょと云ふだけの理由で、すでに「狸」と仇名されてゐる彼は、伊東の蓬髪が必ずや生徒達の絶好な餌食となる可能性を、知りすぎるほど知ってゐたからである。然るに、伊東は校長の忠告を無視したのである。

第二に、伊東は、郷土の大先輩酒井小太郎先生の恩愛を記念するため、先生の黒い古背広を拝領して、一着に及んだことである。長身の酒井先生の背広は、小男の伊東には丈が長すぎた。始末に困ったのは特に袖である。そこで、伊東は子供の和服の肩上げから思ひついて、背広の袖に肩上げを施したものである。この方が蓬髪より、仇名の好餌であったに相違ない。賞金の残額はまだあった筈である。又、伊東自筆の職歴によると、初任給は百拾円の高額である。当時一流会社の初任給が八、九十円であることを思へば、月賦でなくとも新調の背広一着ぐらゐ購ひ得た筈である。然るに伊東は恩師の古背広を、肩上げの苦心までして一着に及んだのである。伊東は謝恩のために自ら仇名を買って出たやうなものである。

赴任後半月あまりして書かれた穎原退蔵先生宛の書簡に、そこらの事情が仄見えてゐる。

「先生

たびたびの　御葉書　有難う　ございました。

日曜日には　輪講に　出席しようと思って、京に出かけて参りまして、藤木（註・藤木俊一氏京都府立一中教諭）に　会ひました。ところが、先生には、へんとう腺を悪くして　ゐらっしやるとのことで　ございましたので、先生が、御出席下さるので　なければ、何だか手持ぶさたで、しっくりしない様に　思ひましたので、やめにして、藤木　と　しばらくおしやべりして　大阪に　帰りました。御病気は　ひどく　お悪いのではございますまいか。心配して　ゐます。…中略…

学校にもだいぶ慣れまして、生徒達が何とかかとか言って　はやし立てます。今度の　土曜日には　一年生を　つれて、嵐山まで　遠足することになってゐます。大学の旧友達に会ふ様なことがなければよいがと、一人で　苦笑して　ゐます。…中略…

下宿の前は広い沼　になって　ゐます。そして　その畔には　夕方になると　子供達が集って来て、いろんな方法で、遊びます。只今が丁度　その時刻で　ございます。わいわい〳〵云ってゐます。

穎原先生　　伊東静雄」

（昭和四年四月二十三日大阪市住吉区北田辺町五二三宮地方より京都市外花園村谷口穎原退蔵宛封書）

右の書簡で、「生徒達が何とかかとか言ってはやし立てます。」と、あるのが、半月余りで「乞食」と云ふ仇名が、すでに伊東の通り名となってゐる事実を示してゐる。学校からひけてきても、夕刻池畔でわいわい騒ぐ悪童共の声を耳にすると、この不当で不名誉な仇名が蘇って、耳朶をほてらしたに相違ない。京大の講壇に立たれるまで、神戸の中、女学校に教鞭を執り、従って、いやと云ふほど仇名の体験がある穎原先生に、伊東ははにかみがちに苦衷を訴へてゐるわけである。

伊東の教へ子である西垣脩氏の語るところによると、校庭をそそくさと歩く伊東を見掛けた、三階屋上にたむろした上級生達は、よく、「乞食！」「コ！　ジ！　キッ！」と、空から奇声を浴びせたもんださうである。その揶揄を耳にした伊東は、とッさに三階屋上に駈け上った。そのスピードは、貧弱な伊東の肉体から、よく出るなと思はせるほど迅速

なものだった由である。想ひ設けもしなかった乞食教師を眼前にして、どぎまぎとしてゐる上級生の中から、伊東は発声者を厳格に訊ねだした。そして、あの焦点の鋭い眼に、怒りと、憎悪と、憐憫とを燃えあがらせて、

「僕は乞食ではないッ！」

と、じゅんじゅんと乞食でないゆゑんを説いたとのことである。

白居易詩抄（三）

森　亮

新たに竹を植ゑたときの歌

ちっぽけな町でのお役所勤めは気の晴れないものだ。
門をとざして秋草の生えるに任せておく。
自然を求める心のねがひをどうして叶へたものか。
竹を百本ばかりそこでわたしは植ゑてみた。
庭に石走る流れのほとり、この緑にさ揺らぐものが
わたしを駆り立てて遠く山中に住むの思ひを抱かせる。
たまたま公の仕事がひまなをりなどには
竹の匂を行きつ戻りつひと日を暮らす。
「未だしっかり根附いてゐはすまい」とか、
「未だ蕋らしい蕋も出来てをらん」とか冷かさないで欲しい。

★

山　麓

山の麓にたどり着いて独りの宿をとる。
静かな月夜に誘はれてそぞろ歩きをする。
流れのほとりの何処かに碓が仕掛けてあるらしい。
夜更けにことんことんと仙薬の雲母でも舂いてゐるのか。

註　竹を植ゑたときの歌の原詩は新栽竹（一の六九三）で、前回の「南亭閑望」と同じく、白居易三十五才の作。次の「山麓」の原詩は山下宿（一の六三五）といひ、四十六才の作。そのとき詩人は江州の司馬であった。

恐らく、伊東は肩上げをした背広が謝恩の美徳であるゆゑんまでは説かなかったらうが事実、伊東の師恩を思ふ情は深かったのだ。

伊東が穎原先生と声咳を交したのは、大学最後の日、つまり、卒業論文審査の日であったのである。言はば、浅からずとは言へ、決して深いとは言へぬゆかりである。……にもかかはらず、先生は伊東の論文を首席に推輓してくださったのである。この師恩に伊東はよほど感銘したのであらう。先の見舞状を出してから間なし、初めてサラリーを貰った伊東は、それで銘酒一升を購ひ、それに短歌一首を添へ、洛外花園村に先生を見舞ったのである。これは穎原芳枝未亡人の、伊東に関する最も鮮明な思ひ出である由である。

恐らく、その日初めて打ち解けて、伊東は穎原先生に接したのであらう。話の緒として先づ先生は伊東の故郷を訊ねたであらう。長崎県の諫早です。と言ふ伊東の声に、先生は膝を叩くと、僕も長崎県だ、五島なんだよ……と、たちまち胸襟を開かれたことだらう。

穎原退蔵先生は芭蕉十哲の中、とりわけ、向井去来に格別の愛情を傾けてをられる。そのわけは、「去来抄」の著者として、先師芭蕉の教へを最も忠実に伝へた弟子であると云ふ理由からだけではない。実に、去来は長崎

の出身、穎原先生と故郷を等しくしてゐたからである。

「丈草のあの冥想的な姿は、限りなく私の心を惹きつける。だがそれにもましてなつかしいのはやはり去来であった。

それは彼が芭蕉の最も忠実な信奉者であったばかりではない。彼が長崎に多くのゆかりを持つといふ事が、私の少年の日の夢に通ふからである。」（創元選書、穎原退蔵著「芭蕉・去来」序）

つまり、師範学校の少年時代を長崎で過ごした穎原先生には、去来が長崎の出であったと云ふ理由だけでも懐しかったのである。この先生のことである。長崎市と、つい眼と鼻の先の諫早出身の教へ子が、懐しくない筈はない。まして卒業論文で、麒麟児としての片鱗を見せた伊東である。先生は好物の酒杯を傾けるほどに、大いに伊東を激励するところがあったに相違ない。伊東は又その激励で「乞食教師」と云ふ汚名をしばし甘受する覚悟を堅め胸に昂然とした志を抱いたに相違ない。

伊東が教師生活一ヶ月にして出した宮本氏宛の書簡には、昂然とした何かが感じられる。かっての文学の友、宮本氏は、再製樟脳株式会社の会社員になってゐたのである。

「その内に遊びにいらっしゃい。いいとこだっせ。

小さい先生振りをみせて上げます。

（昭和四年五月七日大阪市住吉区北田辺町五三二宮地内いとうより神戸市上野一八〇篠山仲治内宮木新治宛はがき）

遊びにゆくとこの小さい先生は、黒板にしやァしやァと誤字を書いてゐた由である。それと気附いた生徒が一人嗤ひ、隣を小突き、やがて教室一杯の嗤ひとなって初めて伊東は自分の失策に気附く。が、照れも、謝りもしない。伊東は大きな厚い唇をキッ！と結び「枝葉は問題でない。問題なのは根幹なのである。宜しく諸君は、枝葉でなく、根幹の精神を見究めるやうにしなければいけない。」さう、伊東は瞭然と言ひ放ち、小先生どころか、天晴れ大先生振りを発揮してゐた由である。

さう言へば、もともと伊東は、昭和二年五月の安代さん宛書簡に見えるやうに、「中枢で動いたり考えたり」することを日常の祈りとし、生活指針にしてゐたことを思ひ出す。

又、心ある読者なら、卒業論文までの伊東書簡には、国文学専攻の学生にしては、かなり文法上の誤謬や誤字にとんちやくしてゐない事実に気附いたに相違ない。それは根幹を見究めることを急ぎ、枝葉を次にした結果であった。その枝葉も、前述の大先生振りを発揮しつつ、伊東はごく自然に矯めていったものに相違ない。

窓

池沢　茂

いつか義父は、ぼくにむかって、牧畜の計画を話したことがある。義父は家のぐるりに田畑のほかに山も持っているから、その山の一部を牧場にして、乳牛を飼おうというのだ。『一頭で一日に一斗も二斗も乳を出すんやからな。人間とくらべたら、どうやすごいやないか。あいだに種付けをしたら子を生んでくれるし、まあ、二頭も飼っといたら、ふたりや三人、なんとか暮してゆけるやろ。草はいくらでもあるし、たらんぶんは畑で作ってもいいしな……』と義父は、にこにこして言った。その笑顔をぼくにむけて「どうだ、ひとつ、やってみないか」と、ぼくをさそうような言いかただった。

ぼくはしかし、そのときも、これまでどおり、ただかしこまって、愛想よく、うなずき、感心し、あいづちを打つばかりで、それ以上に突込んだ質問や相談は、なにひとつ、できなかった。義父にたいしていると、与えるばかりで要求のとぼしい深い愛情とすぐれた力にむかっているようで、ものもろくろく言えなかったからだ。その反面、まだ会社づとめに、いくらかの希望や安心をかけてもいたのだろう。それに、ぼくは戦地で、腰や脚に負傷したせいか、ときどき神経痛のおこることがあって、肉体労働には自信がなかったからだ。しかしその後、病院にかよって注射をつづけた結果、はげしい神経痛は、一度もおこらなくなった。にぶい疼痛が漠然とひろがることはあるけれど、これまでの激痛にくらべたら、しんぼうできないことはない。それよりも、ぼくは耳が不自由なので、新聞社の校閲部などで、遠慮していじけながら、おおぜいの人間に立ちまじって、かみあうようにして働きつづけねばならない勤めに、しばしばやりきれなくなった。聴力がカバーされなくなると、ぼくはたちまち、人知れない不安とゆううつに、おちいらねばならない。その圧迫が押しつまると、ぼくには、にぶい疼痛ぐらい、ぜいたくになってくるのだ。ながいあいだの兵隊の経験をいかしたら、肉体労働も、あまり激しいものでなかったら、なんとか、やっていけるかもしれない。ぼくはいいかげんにしか聞いていなかった義父の牧場の計画について、もっと具体的に、くわしく知りたくなった。二頭や三頭ほどの乳牛を飼うのは、じっさいには、どの程度の肉体労働なのか。そんな規模の小さいもので、平均して、どれくらいの純利があるのか。しぼった乳は、どのようにして売りさばくのか。それから、ぼくがいよいよ会社づとめがやってゆけなくなったら、ほんとうに、牧場をやらしてくれるのかどうか……。ぼくは、めったに顔を見せなくなっている義父が、しきりに待ちどおしくなった。

そうして、その日、会社から、泊りあけで、ひるじぶんに帰って、玄関の戸をあけたとたんに、ぼくは、はっとなった。式台のうえに、ボストンバッグやら、大きなふろしきづつみやらが、二つ、三つ、おかれてあったからだ。いそいで見わたすと、下駄箱のうえに、キッドのような、よく光った黒い短靴が一足、そろえてある。「あ、ちちだな」とぼくは思った。義父がいなかから、ひさしぶりに、これまでどおり田畑でとれたものなど、いろいろみやげものにして、たずねてきているのだ。ぼくは、うれしかった。強い安心もおぼえたが、また、恩義の重荷がますますかさなってゆくと思うせいか、しきりに、おもくるしい気もした。うれしいような、おもくるしいような、へんに矛盾した気持がせめぎあって、ぼくは義父に、どんな顔をして面接したらいいのか、自分の顔つきに、妙に自信がなかった。おりあしく妻は、昨年はじめて生れた子を連れて、買物にでもいっているらしい。義父はひとり、ぼくに背中をむけ、ぼんやりと、窓にむかって、そとを見おろしていた。

窓のしたの庭には、三年ほどまえ義父に手つだってもらって運んだコンクリートの防火用水槽が、すえてある。そこに金魚が飼ってあって、三年のあいだに、ずいぶん大きくなっている。義父はその金魚を見ていたにちがいない。ぼくは思いきって、ふみこむように敷居をこえたが、義父はそのまま、ふりかえろうとしない。ぼくはしばらく息をのんで、どんなあいさつをしたものか考えていた。それから、やはり、いつもとおなじように、できるだけの笑顔を作って『あ、いらっしゃい！　なんじどろ来たんですか……』と声をかけた。これまでグズグズしていたのが、なんだか悪い気がして、はじめて義父の姿に気付いたようにしたのだ。そして当然、義父はこれまでどおり、こんな気持の重荷をときほぐしてくれるように、にこにこして「ちょっと前に来たとこや。しばらく仕事がひまやし、あそびがてら出て来たんや……」と機嫌よく答えてくれるものとばかり期待していた。しかし、ぼくは、はっとなった。ふりかえった義父の顔が、あまりに暗く、むっと怒りをたたえて、こわばっていたからだ。

『こうして窓から金魚をながめているのも

風流というか、なかなかいいもんやな。どうや、気にいったやろ。この応接間も、ジュウタンを敷いてから、だいぶ見ようなったやないか。そのうちに、客用のテーブルやソファなんぞも置かんといかんな』

ぼくのあいさつには答えないで、義父は、投げつけるように言った。ぼくは、そのことばの意味よりも、とげとげしいその語調に、また、はっとなった。なにか根強い、ぎすぎすした皮肉がはげしく、こめられているようなのだ。たとえば「わしにばかり苦労させて、おまえたちは勝手に、いいことばかりしているのだな。きょうも会社から、こんなに早く、ひるじぶんに帰ってきたりして……」とでも言っているようなのだ。ぼくはジュウタンは義父に買ってもらったけれど、客用のテーブルやソファまで欲しいとは思わないこと、きのうは夜勤で会社に泊ったので、きょうは早く帰るようにきまっていることなど、言いわけしようとした。が、なんだか、しらじらしくて、口もとまで、出かかったままになった。そして、言いそびれると、ぼくはもう、なんにも言えなくなった。そのうちに、ぼくは、ぼくがいないところで義父が妻（かれの娘）に言ったということばを思いだした。

『わしは、こんな生活が、うらやましうて、ならんがなあ……』

義父はいつか、ふと、つぶやくように言って、ためいきをもらしたというのだ。そういえば、義父は若いころ「百姓」がいやで、なんとかして都会で暮すようになりたいと、いろいろ、あせったり、なやんだり、したのだそうだ。もっとあとになってからも、ちかくの町で製材工場を経営してみたり、あそびにおぼれたり、なんべんも夫婦別れしそうになったり、したのだそうだ。すると義父の願望の一つは、もっと花やかな女と、はでな「都会生活」を送ることだったのだろう。もしそうなら、義父は、自分のためにこそ実現したかった「都会生活」を、自分以外のぼくたちのために、せっせと、実現させてやったことになる。ひとを自分がなりたかったものにしてやるために、自分はいやだった百姓をしながら尽力する。その苦労が度を越したら、当然、腹が立ってくるだろう。ときには、その相手に憎しみをさえおぼえるにちがいない。義父もやはり、特別な愛情や能力の持主ではなかった。ふつうの、なやみ多い人間だった。おなじ人間として、いたわりあったり、たすけあったり、せねばならない人だったのだ。ぼくは、いままで義父が見おろしていた窓から、つめたい風が、体のなかまで、さっと、吹きこんでくるような気がした。そして、とうとう牧場の相談も、勤めの思わしくないことも、なんにも言いだせずにしまった。

爪は櫻貝

小山正孝

「戦争がすんだら、軍人は皆死んでしまふんだらうと思ってゐたんだよ。将校以上は少くともピストルで死ぬだらうし、二等兵以外の兵隊も、ピンタをはったり、うまいものを食ったりしたものは、死んでしまふものだと僕は信じてゐたんだよ。僕は自分が二等兵だったから、戦争のすむ前に殺されるかもしれないし、除隊してゐたとしたって飢死するだらうとは思ってはゐたけどね。さうしてみると、君のお父さんなんか、軍人らしい人だったのだね。終戦の時にすぐになの」

私は早知子の顔を見た。早知子の目はまぶしさうに波のくだける方を見てゐた。私もその方を見た。ほんだはらが、ざあっと崩れる波の穂の下に、少し黒く見えて、すぐにそれは見えなくなってしまふ。日の光はまだ冬のつめたさを残してゐた。江の島がかすんで見える。

「終戦の日ですわ」

「これかい」

私は横になった姿勢のまま、右手で腹をぎゆっと横に切る真似をした。早知子は軽くうなづいた。

おまえについて

福地邦樹

おまえについて
私が知っていることはと言えば
光の多いおまえの部屋に
ガラスの小さな
白鳥や鷺鳥や
あめ色の鹿たちを
飼っているということだけだ
しかし私が
おまえの気の多いのに当惑してしまう時
おまえのすきとおった動物たちを
思いさえすれば
私は直ぐに安心することが出来る

「大将だったの。大将のお嬢様か。さうすると僕なんか、今、大将のお嬢様と鎌倉の海岸を散歩してゐるといふわけか。その時、君はいくつだったの」

「まだ子供だったわ」

「お下げ」

「ううん。もういいぢやないの。私、死ぬっていふことが、それからすっかりいやになってしまったの。いやだわ」

早知子はつぶやくやうに最後の言葉を言った。うっとりとして水平線の方に目をやってゐた。風がほつれ毛を吹いてゐた。近眼なので、遠くを見る時、普通の人よりも余計に目を細めるので、ずうっと美しく、愛らしく見えた。早知子は人妻である。

十一歳で父を失ってから、十七歳でたった一人の兄を失って、孤独の人となった。私は早知子の育った年月を自分の年令と引き合はせて、その時には自分は結婚した。その時には二人目の子供が生れた。その時には妻を変へた。その時には三人目の子供が生れたといった具合に、対照的に考へてみた。早知子とはじめて知りあった時には、

「ああ、俺はどうして、あいつを待たなかったのだらう」

と、唇をかんで言ったものなのだ。自分が今の妻と逢った時に、この人こそ、と信じた事を忘れたかのやうに。

早知子と私は、結婚について話しあった事があった。それは、ほぼ一年も前になる。

木枯しの吹く夜、二人はある公園の周囲をぐるぐる歩いた。つかれると、街燈の光のとどかない塀によりかかったまま時間をすごした。

「もしも、僕が結婚してゐなかったら、君は僕と結婚してくれるだらうか」

私は質問の意味がわからなかったのであらうか。早知子の若い瞳は困ったやうな動揺を示した。

「もしかして、假にだよ、僕が一人でゐて——さうだ、もっと僕が若くて、君と八つ位しかちがはなくって、結婚を申し込んだとしたら、君は、僕と結婚してくれるだらうか」

「なんだか、寒くないかしら。もう、そろそろ行きません」

「いやだ。返事をしてちやうだい」

だまって顔を私の胸に埋めた。私は外套のボタンを外して、黒い外套の中に、早知子をすっぽりと抱きかかへた。

「返事をしてくれないか。お願ひだ。君といふ人に逢へたのも、君といふ人と、かうや

って、たとへ短い時間でもいっしよにすごすことが出来るのはうれしいのだ。そして、もし、君が、僕と結婚してもいいといふ考へを持ってゐてくれたとしら、僕は、もっとうれしいのだ」

私は唇を求めた。しかし、私の唇は、髪の毛のごわごわした感じを感じた。早知子は私の腕の中に、ますます頭をつっこんでゐるばかりであった。両手を私の背に廻して、ぴったりと寄りそってゐるのに、絶対に答えてくれさうにもなかった。

「ねえ、うそでもいいのだよ。だって、さうじやないか。僕が君と二十も年がちがってゐるのは現実なのだ。僕が結婚してゐるのも現実なのだ。僕に子供がゐることも現実なのだ。だから、それが、みんなちがったとしての話なのだから。もしも、もしかして、といふ話なのだから。ねえ、おかしいだろ。それでも、僕は返事がほしい。僕に君の心が、さうだということを知るだけで、どんなにうれしいだらう」

「さあ、歩きませう」

「いやだ。君は意地悪だね。がっかりしたな。とうとう、言ってくれなかったね」

公園の中から、鶯の鳥き声が聞えて来た。

「僕たちがあんまり公園の廻りをいつまでも歩いてゐるから、中の動物がねむれないっていふわけか」

「見てごらんなさい。私の顔。さはってごらんなさい」

落ち葉のきっ先きは、ぶつかった時には、強く、外套の上から私の肉体を押した。

「僕は、君が涙を出してくれたといふことで満足しなければならなかったのだね。君は僕がいやになったろ。僕は、自分で自分がいやになった。僕は君の言葉がほしかった」

「どうして、言葉でなければいけないのでせうね」

「それなら」

私の手にぎゆっと力が入った時、早知子は道にしやがみ込んでしまった。そして、笑ひ声をたてた。

「いやよ、いやよ」

そこだけ光が当ったやうであった。そこだけ春が来たやうであった。

「もう、やめるよ」

別れの時に早知子は言った。

「私、言ふわね。もしかしてよ、もし、あなたがもっと若くて、奥さまがいらっしやらなくって、子供さんがいらっしやらなくって、お一人だったとしたら、私、いいわ」

その日から一週間目には私は結婚通知状を受けとったのだった。

「君のお父さんも、あと十年生きてゐたらよかったのにね。恩給はつくし、君は美しい人になったし」

「父が生きてゐたら、父は、やっぱり不幸だったでせうね。私だって同じことよ」

会話にも、もう興味を失ったやうな顔をして私は砂をいぢった。砂の中に、早知子の白い手を見出した。指に、そっと、乾いた砂をふりかけた。

「くすぐったいだろ」

「いいえ、ちっとも。気持いいわ」

鎌倉の海岸に、人は思ったよりも多かった。うしろの方で、小学生の一団が解散したやうだ。皆、いっせいに、黒い洋服を着た少年達が波打際目がけて走りはじめた。

「君の爪はマニキュアしてゐるから、ほら、かうやってると、桜貝が埋ってゐるみたいだ。見つけたぞ、一つ、また、一つ。これは小指のやうだな。なんだ、薬指か。へえ、ずいぶん小さいんだなあ。少しとがってゐるけど、けがしさうだな。君の爪は桜見だ」

――さま。ほんとうに、かうしたものでせうか。休むひまもなく、私は働きづめです

のよ。――さま、お笑ひかもしれませんけれども、腰をかがめて私は仕事をします。お洗濯だけでも大変ですの。一日に四度も、五度も物干台の上り下りです。悲しくなりますとあなたにいただいたオルゴオルを聞きます。お姉様と妹の（もちろん主人のですわ）洗濯は私がいたしますの。大変妙なお話ですけどその方々のパンツまでお洗ひしてあげます。私の仕事の一つになってゐるのですよ。結婚生活といふものはかういふものでございませうか。自己の運命を哀んでみたりして、おやさしいあなたを思って涙を流してしまふこともあります……

早知子さん、結婚生活は、さういふものですよ。僕は、うそは言ひません。僕が、もしここで、僕と結婚したら、そんな目にはあはせたいのにと言ひたい気持はあっても、僕には言へません。結婚といふことを、人が大切

飛躍

クロロフ

かるやかな風に身をまかせて
あかるい上げ潮に　身を　かがめよう
緑の輪郭　葉ずれのようなざわめきに
歓喜は　いよいよ　たかまる

無数のバラのささやきの上に
幸運はうるんだひとみで　さながら
風のなかから　かがやきだす
変容はあまい持続の犠牲となって

幅ひろい光の下で　垂直に
そして　歓呼しながら　美しくよそおい
奇蹟が　とどろきわたれば
永遠の塊り――ぶあつい時間は

真昼の腕にささえられ　宙にうかんで
いきづく　苛責なく
どんなにひっそりと彼女と生きているか
脈はくのなかに　ぼくは　現存を感じる

ああこのよろこび　だが
運命をもたないもの――老いた生命は
新陳代謝でしりぞいてゆく　かくて
孤独な水夫は青い風の上で死んでゆく

夜に

ボルヒェルト

ぼくの魂は街灯のようなものだ
夜になって　星が
あらわれると　存在しはじめる
ちらちらと光りながら
暗やみのなかをさぐって
猫のように恋する

夜の屋根屋根の上で
眼には緑の火花をちらせながら
人も雀も眠っている
ただ船だけが港でゆれている

月が教会の屋根の上をこえると
ぼくの眼のなかでは
パチパチとマッチがもえだして
ぼくは笑う

雨が降る――
ぼくのそばにあるのは
自分の影と風ばかり
だがぼくの両手は
だれかどこかのかわいい子供の
そのにおいをいだいている

★ボルヒェルトは一九二一年ハンブルグで生れ一九四七年バーゼルで死んだ

（たかはし・しげおみ訳）

にし、約束をしたら、それを果さなければならない義務のやうな社会の約束のあることも、結婚には、さうしたことがともなふことが事実だからです。労働の辛いことも、家族関係のこみ入った事情もあるでせう。しかし、君はがまんして——たとへ君の手が荒れても、君は果さなければいけません。僕は、君が苦労してゐるのを知って辛い。がまんして下さい。僕には何もしてあげられない。力づけることと、どうしてもがまん出来なかったら、僕は出来るだけなぐさめてあげるから、一寸だけ逢って、また、君を少し元気にしてそこへ帰してあげることだけしか出来ないでせう。手が荒れないいい薬を知ってゐますから送ります。いつもの場所に送ります。……

「君をつれて逃げてしまはうか」

早知子は私の指から自分の指を外して、

「さうだわ、あんまりおそくなってしまってもいけないわ」

「だから、僕は、君をつれて逃げてしまはうかと思ってゐるんだ。もう、帰さない。日が沈んでも。つめたい風が吹いて、夜になって、白いお星さまが出ても、君をここから帰さないやうにしようかな」

二人は砂浜を歩きながら貝を拾った。

「これはきれいだね。またあった。君は、これいるかい」

「ここにもあるわ。あげませう」

極楽寺へ行く切り通しの上の方に、梅の花が見えた。切り通しの上の空は青く、梅の花は遠く高くても、空が梅を私たちによく見えるやうにしてくれたらしい。一輪一輪が枝にくっついてゐた。

極楽寺の江の電の停車場に近づいた。

「もし君をこのままひっぱってしまったとしたら、僕たちはどこへ行くだらうか」

急に早知子が笑ひ出した。そして、坂を走りはじめた。

「なんだ、走ったりして。何がをかしいんだい」

「だって。をかしいわ。また、もしも、もしも、もしかして、ですもの」

なんだか、私は自分の顔が赤くなるのを感じた。同時に、一寸、むっとした。

「なんだって」

しかし、私は、急に語調を変へた。

「もしも、もしもといふ話が悪いとしたら、私も、お前も、今日はどこにも行く場所のない人間になっしまふのだ。私もお前も、もしも、と言ひながら、その言葉がないと同じ行動をしてゐるのだ。現実は、愛を誓ひもしないし、愛しあってゐるとも言ひあはない。それなのに、何時間かをいっしょに海岸ですごした。現実には、私とお前は、ここに二人いっしょにゐる。二人とも、それでは、どうしていっしょにゐるのだらう。私もお前も夫や妻に何と言へる。ここにゐるといふことだけなのだ。それが知られてゐないだけなのだ。それでも、逢はないですむのかしら。逢はないですむのなら、どうして逢ったりするのだらう。もう、がまんが出来ない気持になることだってあるのさ。逃げよう。君を奪ってどこかへ行ってしまはうと思ふこともあるのさ。今は、その一つの、重大なチャンスなのだ。けれど、僕には、言葉の外は、まだ、出来ないのだ。悪くても、秘密に逢って、やっと生きるといふことだけだ。でも、死ねば、それが出来る。逃げて死ねば」

田中克己 李白

李白の自由奔放、磊落酒脱の境地を円熟した訳筆・鑑賞の正確さによって伝える。詩人である著者が多年の研究を集大成した名著△鑑賞世界名詩選〉新版　三〇〇円

東京神田小川町二の八

筑摩書房

逃げる

浅野晃

おれは追跡されてゐる
おれは犯人ではない
天井が墜ちて来さうな路次裏だ
蔭から子供の眼が見てゐる
渇いた街角はかなしい
学校の建物はなほのことかなしい
犬が吠える　隊商が通る
犬が吠える　死んだ妹が過ぎてゆく
さあ手をかしてくれ
そしていっしよに逃げてくれ
おれは何も悪いことはしなかった
おれは逃げただけだ
まっ白なハンカチをひきちぎり
みにくくのしる女だ
じりじりじりじり熔けてゆく
テレビ塔のてっぺんが
おれと手を握りあったものよ
君がどんなにおれから逃げようとそれは
　むだだ
君がどんなにおれを憎まうとそれはむだ
　だ
おれは君を憎んでゐた　君はもうおれと
　一つだ
高架線の上を列車がいった
あの子が窓から何か叫んだ
おねがひだ　見のがしてくれ
おれをこのデルタから逃がしてくれ
「不毛の沙漠は灌漑せらるべし——」
うそだ　うそだ　うそだ
おれは逃げる
子供の手をひいてどんどん逃げる

「いやよ、死ぬのはいやよ」

かぶりをふって、早知子は私の手をやさしく握った。

極楽寺駅のホームにゐると、目の前の石垣の高いずっと上で、二人の外人の少女がよりそって下を見てゐた。私たちの姿を見ながら二人はくすくすとしのび笑ひをしてゐた。離れてゐても、肌が感じられる。

「グットバイ」

と、私は言った。うれしくてたまらないやうに、二人はからだをゆらせて笑った。肩をすくめた。ふと横を見ると、早知子がべろを出してゐた。上の二人も今度は、目をまるくして、大きく口をあけてべろを出した。私はなんとなく悲しかった。自分の一番愛してゐる女が、どうしてべろなんかを出すのだらうかと思った。ずゐぶん長い。私はもう一度手を振った。電車が来た。早知子が「べ」

と言って、べろを出しながら少女たちに笑ひかけた。明るい表情であった。

「君を、早く、旦那さまの所へ帰さう。さうして、二人とも、出来るだけ長生きしよう」

「さうよ。長く生きるためにだったら、きっと何をしたっていいのよ。生きるためにはどんなことをしたっていいのよ。もし、もしもそれが長生きするためであるならば……」

西堤の家

田中克己

布施市西堤町の家には昭和二十六年の四月に入って、おほかた丸六年ゐた。この六年といふ期間は他人はともあれ私にとっては珍しく永いのである。自分の家をもってから転居が十四回、中で十三回目のこゝほど永かったのは類がない。もとよりその間、勤め先も変へず、ひとによると一生つとめ終へて、名誉教授になるとでも思ってくれてゐたかもしれない。

それはともかく六年の間には、家もこはし汚してしまったが思ひ出もないではなく、いまこゝ東京の王子駅の近くのアパートの一室でも、まざまざと印象が浮んで来る。

訪ねて来てくれた教へ子たち、飼ってゐた猫三四、芝にくはれて育たない草花の中、あとまで残った坪井明君にもらったフランス菊など笑はれるかもしれないが愚にもつかない風景の中で、どうしても書いておかなければと思ふのは、同人雑誌「骨」と「果樹園」とが、どちらもその発生にこの家とかかはりがあることである。

「骨」と「果樹園」とはだいたい無縁ではない。この家に来てから二年目の昭和二十八年といへば堀さんの亡くなられた年である。亡くなられてからでは仕方がないが、実は僕は詩でなくて散文を書いて、堀さんの病床を慰めるつもりでゐた。「大和通信」といふのがその題で、堀さんの好きだった大和の風景と、そこに住んでゐたころの僕の生活とをうまく書いてといふ考へでゐたのだ。三、四度はどこかに書いたやうに思ふが、もとよりのせて呉れるところもさうあらう筈がない。そこで大望ながら個人雑誌をやる気になった。相棒には天理の高橋重臣君、和歌山住ひながら大和と堀さんの好きな西保恵以子君あたりだけをたのむつもりであったが、この夏ヴェニスの映画祭に行った依田義賢君を歓迎する小宴に、井上多喜三郎、山前実治、佐々木邦彦、荒木利夫の四詩人が集ったことから、依田君と僕とを加へた六人で詩の雑誌を出さうといふことになった。僕もしかたなく賛成したが、詩だけでなく散文も書かしてもらふことを条件にした。このときは酒の席だったので、たよりない話と思ったが十月三日荒木、山前、依々木の三名がこの西堤の家へ来てからは、のっぴきならなくなった。名前が「骨」ときまったのは次の同人会で、場所は下鴨の依田邸でだった。

さてこの「骨」は創刊号をこの年十一月に出し、隔月刊といふことで二号三号と出していったが、これがいけない。だいたい僕はもう詩を作る気がないのに、毎号詩をのせさゝれる。ろくなものが作れない。その証拠に、こないだ出した「悲歌」は僕の戦後の作を福地君が選したので、客観的な公正な選だったと思ふが、その中に「骨」所載の詩はわづか二篇しかとられてゐない。一方、散文の方はといふと、堀さんへのレクイエムなど書かうとの気合もいつのまにかぬけてしまふ。そんなわけで僕が怠けてゐると、同人たちの気合も一向にかゝらない。だいたい六同人中、僕が一等若くて四十何歳、むりなのである。同人の誰かれと交替に怠けて半年も出なくなると、僕にしてはまた書きたくてたまらない。そのまへに、「こんなに怠けたら僕はぬけるぞ」と「骨」の諸同人を脅しておいてから、また何ケ月、いよいよ僕の雑誌をこさへるつもりになり、夏休みに案を練る。題もコギトのあとつぎなのでスムとしようか、頁は四頁でいくらかゝるかな、などなかなか楽しい思ひをした。

そこへ現はれたのが小高根二郎君と福地邦樹君である。二人で伊東静雄の書簡をあつめてゐる中、思ひ出したと見えて、とだえてゐた二郎君との往来が盛んになる。つひに昭和三十年十月十六日、三人わが家に会して雑誌を出すこととときまる。大げさないひ方をすれば昭和文学史にのこる「果樹園」はこの日の会合で生れたので、その場所は西堤の家だったのである。池沢君や小山君の小説、福地君や山根君、斎田君の詩などが、どんどん生れれば大げさでなく、「果樹園」も文学史にのこり、あの陋屋も存在価値をもったわけになる。なつかしく西方をおもひつつ、東京ではじめての原稿をかく（四月十四日）。

高野

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

山根忠雄

鬱蒼と茂った千年の老杉
その下に眠る
無数の苔むした墓——

このやうな霊域を歩いてゐるうち
寂然として
想ひはいつしか過去へと溯り
死者たちの語る
ひそかな泉下の声に耳を傾ける
日頃忘れてゐた
亡き父母のことをふと思ひ出す
森の梢で
山鳥が
啼いてゐる……

月に招かれた男 (十)

芳野清

しかし、その大塩も十八年の九月以来音信が途絶えた。私宛ての最後の葉書を記してみよう。さりげない戦野の風物詩の影に、何かいつもこの世の見納めと云った目が注がれてゐるのに気附いたときには、彼はもうニューギネヤの原野に征ってゐたのだった。

南支派遣

静かな秋晴れの日が続いてゐます。空の青さのとめどもなく、お葉書書かうと思ってもなかなかペンを持てないのはその所為で、僕はさっきからここの丘に登ったり、降ったりして居りました。丘には扈顔の花が咲き、秋の蝶が消えたり点いたりしてゐます。

与瀬や追分の村々にも秋風はいちはやく立ち始めたでせう。今年は何かしら思ふこと多くて、秋の山近く住まはれる貴兄の日々のみ偲しまれます。あの日の五月もいつしか過ぎてしまひました。「わが五月はやもし来ませど野に山に緑翳らふ鳥の名知られず」歌ともつかず、そんな日記を書きあぐねてゐるときに、僕はあの大いなる計音をきいたのでした。（萩原朔太郎の死、作者註）そのことはいまも尚僕の沈黙を絞めつけるばかりです。星や秋の蝶もかりそめならぬ感傷が思はれてなりません。

しかし、大垣にはその後も便りがあったらしく、その文面から友の身の上に不吉な予感を感ずるに至った。その不安を彼は私に書き送ってきた。

——大塩君のこと、心配でなりません。便りの終りの行に萩原さんに言伝はないかと書かれてあり、いつもと違った迫ったものを感じました。小生、一兵としてかの地に居らぬのを残念に存じました…

この葉書は恐らく、ニューギネヤに行く前

か、それとも直後の便りであったと思はれる。その後全く大塩の音信は絶えてしまったが、それから十ヶ月ほど経った十八年の十月の夜大塩は友、戦死の悲報を受取った。大塩の死は彼には大きな衝動を与へ、或る意味では後年の発病の一因となったとさへ云へる。彼はその後、前にも書いたやうに、「曼荼羅」誌上に、大塩の書簡と共に、追悼文をのせてゐるが、簡潔な行間に友を偲ぶ心が切々と染みわたってゐてうたれるものがある。その一節を抜いてみよう。

——訣れの日、七月三十日は兵隊の私も外出を許された日曜日、真夏の一日を散歩に費し、「コギト」五月号に載った増田晃氏の「かぶとの歌へる」や発刊間近くあった小高根二郎氏の「はぐれたる春の日の歌」の噂などしてゐた。さうして何かの拍子に、何が一番好きかとたづねると、友は「菊花の契」と言下に答へた。

その通り仲秋の限ない月光に照されて、木葉がさやさやと音するとき大塩麟太郎戦死の報らせが届いた。その壮烈な最後を偲ぶのである。

合掌

友の死で彼は全く頼りない気持になってしまったらしく、私に会ってもいつもに似ず心弱い事ばかり云った。一際、涙もろくなってゐた彼は映画を見てさへ泣いた。私の記えてゐるのでは、確か「無法松の一生」と云ふ老車夫と未亡人とのほのかな恋物語の映画であった。祭りの太鼓の音と、画面一杯に廻はる人力車の車輪と、コスモスの乱れ咲きが印象的で、一人息子が学芸会の前に、練習のために家の中で台の上に立って歌ふ「一の谷のいくさやぶれ、討たれし平家の公達あはれ…」の哀調と、それを見つめる母のまなざし…。暗闇の中で、大垣の目から涙が流れてゐるのを私は見た。老車夫に扮した阪妻と、若い母になった園井恵子と云ふ女優もたしか戦後死んだ。彼は精緻な心理の綾で織りなされたジイドなどの小説より、直接心に訴へる抒情の美くしさのみ愛した。それがあるときは古風とも思へる人情噺であったりするのも不思議ではなかった。大塩について彼は追悼文以外に何か書きたかったらしく、私宛の葉書も借りていったが、ついに発表されるものには至らなかったやうである。しかし、その心は後まで残って次の詩に結晶してゐる。

千鳥

こよひまた鳴きてかあらむ
磯千鳥
星凍り波濤ふきちぎる風の夜を
翼濡らし
夜もすがら
友こひよびて明かすらむ
千代とも八千代とも
鳴きかはし
散り散りに　鳴きなけど
ひだりみぎ波濤のうねりに
かきくらす

これのけしきや、

（十九年三月「まほろば」所載）

時折、高い空を銀色の蜻蛉さながら飛んでゆくB29の姿が見られるやうになった。太陽の角度で機体がガラスのやうに透けて見えたりした。単機でしかも極めて高空なので追撃も高射砲射撃も難かしく、私達はその爆音が響いてゐる間、不安な面持ちでまぶしい空を見上げてゐるだけだった。人間が乗ってゐると云ふより、それは不吉な運命を祕めて飛びゆく死の十字架として目に映じた。忘れた頃訪れるこの不吉な訪問者は偵察機で本土の精密な航空写真を撮ってゐたものらしい。既にアッツ島の玉砕、サイパンの陥落が報じられてゐた。私は生活の荒涼さと重圧の中に次第に巻込まれて詩を思ふことは少くなったが大垣は執拗と思はれる情熱を失はず南海に散った友を主題にしての小説を構想してゐた。

吹きちぎる風の中に立った少年が好きだと云った大塩の言葉を踏まへて、わが征く所すべて美しと結んだ、この小説は終に成らず草稿も散佚してしまったが、彼は最後までその夢を失はず、精神の病ひに侵された後も、この友の幻影と相語ってゐたのである。大塩と云へば私にもたった一つの思ひ出が今も尚昨日のやうに浮ぶ。江古田の淋しい位整頓された北側の部屋で彼は机に静坐してゐた。私の来訪に手料理を作ってすすめてくれた。たしかその肉のないキャベツのロール巻のやうなものはなかなか旨かった。窓際の壁に小さなヘルデルリーンの肖像がかけられて。傍らにキャンバスやカルトンがきちんと立てかけられてあり絵を描いてゐる様子もなかったが、スケッチブックには裸婦や静物などが端念に描かれてあった。画友の堀田がそんなふうに絵も描かず読書に耽ってばかりゐる大塩の身を心配し、挙句の果ては憤慨し、はげしく責め、びんたさへ加へたが、その間、彼はなるがままになって一言も云はなかったと云ふ事など彼の性格を語る挿話の一つでもある。

大塩のかう云った勁さに大垣は崇拝に似た尊敬を深めてゐた事は多分己れにない性格への羨望があったやうである。大塩は昭和十八年に戦死したのだが、この年に戦死した詩人に増田晃氏がある。大垣は当時再度応召して航空本部附主計軍曹になっていたが、十九年の初め頃から詩誌「まほろば」の若い詩人達に近づいていった。そこでは林富士馬氏、三島由紀夫氏、庄野潤三氏等の野心に満ちた若人達が出版事情の稀有の困難さの中で徒労と

冬日

石口敏郎

電車の中で
少女が本を読んでゐる
ひざに冬日がさし込み
あかるい指で少女の頁をめくる
少女は感動する
カーブで静かにうなづく
電車が力強く抵抗するとき
少女は　本を読みながら吸ひ寄せられる
軽く　深く
不意に
少女がプラット・ホームに飛び降りる
窓から腕をさしのべてゐた冬日は
少女を再び捕へることは出来ない
屋根瓦の影絵が
ビロードの空席の上に
激しく凹凸をゑがいてゐた

時計屋にて

時間が交差し　光が乱れる　溶解
した音に空間が汚れ　抽象はガラ
スの破片の中　女のまつげより細
い秒針を動かし　生命は確実に生
産され　粉砕したゼンマイの音
ベルが冷く水晶の珠数よりも固い
　真実と存在は突然無意味となり
死はもはや歌へない　むしろ無気
味な生　今　水滴になって人の腕
にからまり　囁きつづけ　むくい
られるところ少い　時間の中の腕
時計　ガラス板の凸面鏡に盛りあ
がった風景よ　動け

32. 5. 12

も思はれる努力を注いで文学の唯一の希望の灯びをともし続けてゐた。大垣はこの「まほろば」に格調の高い二、三の詩を発表してゐる。

千　鳥

こよひまた鳴きてかあらむ
磯千鳥
星凍り波濤ふきちぎる風の夜を
翼濡らし
夜もすがら
友こひよびて明かすらむ
千代とも八千代とも
鳴きかはし
散り散りに鳴きなけど
ひだりみぎ波濤のうぬりに
かきくらす
これのけしきや

この詩の中でも変る事のない友情の想ひを繰り返し歌ってゐるが、心の奥底には戦死した友の面影を追ってゐたのであらう。確かに大垣には一面女々しいと思はれる程の心の脆さがあった。彼は太宰治の小説を愛読してゐたが、彼自身の中にも生来太宰的なもの（たとへば敗北主義）を持ってゐた。だから十代の弱年でありながら既に「花咲かりの森」を書き小説家としての強い骨格を身につけてゐた三島氏には驚嘆を禁じ得なかった。大垣は又さう云った新らしい友人達にも何かと尽くしたらしい。林氏が春夫を集めたいと云へば端念に探し廻ってその書棚を埋めたのもその表はれの一端だったし、彼の訪問の後、必ず軍隊煙草がなにげなく置き忘れてあったと云ふのも彼流の所謂心尽くしであった。

死んだ大塩の思ひ出になるものは凡て自分の身辺に置きたく、彼は私宛ての大塩の書簡やら、叔父の歯科医に托された遺品の中から油絵の習作やら、何やらまで熱心に求めた。彼は友の遺品の中に身を置いて深夜ひそかに涙を流したに違ひない。友の遺品が彼にどんな事を語ったか知る由もないが、彼の精神が次第に何物かに憑かれたものの如くになってゐた一因をなした事は事実である。B29の本土空襲は十九年春頃から本格的な熾烈さを加へ、味方の邀撃も凄絶な絵巻を展開した。火を吐きながらしかも不死鳥のように速度を落して尚も必死に逃がれ去るB29、その下に戦火で染まった不気味な夜空が一切の阿鼻叫喚の巷を包んではるかに遠望された。うつけた心にはそれは時折はこの世のものでない不吉な美くしさに錯覚されたりした。（未完）

編輯後記

早春のある朝、電車で果樹園のそばを通過した。桃、梨、柿、葡萄などの樹々はそれぞれいちめん同じやうな高さに剪定され、幹には白く防虫剤がぬられてゐた。美しい太陽光線の下に、展開された万端の準備！　自然と人工に愛護されて、果樹園はいまや新しい結実に向って、大きく羽ばたかんとする――その音が、雪をかぶった連山に、鋭刺と反響するかのやうだった。（Y）

「残党」という言葉がある。ぼくらもしば〳〵この言葉にふさわしいとされるらしい。しかし、だれが、ほんとうに、先頭に立ち、自由で、獨立しているだろうか。ぼくらは、こういうものに、傷つけられる。しかし、こゝから、愛や努力が、その本来の姿で、めばえ、深まってゆくのではなかろうか。（I）

前号の編輯日には福地氏が立会つてくれて、まだなにかかにか編集事務を教へてくれた。今号は文字通り三人だけで編輯を終つた。前号は不馴れで失策が多かったが、今度は完璧を期したつもりである。田中、福地両氏の住所も定つて、これからいよいよ本格的な仕事を進めたい。御支援を切に御願ひする。（O）

東京都北区岸町一の七中込アパート　田中克己
高松市八幡町の八県庁前増田淳一氏方　福地邦樹

果樹園　第十六号　（毎月一回一日発行）
昭和三十二年五月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区猪熊通樋小路上ル　文化時報社
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園第十六号　昭和三十二年五月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所文化時報社　定価三十円

果樹園第十七号　昭和三十二年六月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所文化時報社　定価三十円

果樹園

第十七号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
ムッシュウ・オノレの詩　石浜恒夫
忘れられぬ　田中克己
春の線　服部三樹子
英機君　小山正孝
遺書　林富士馬
おどろかな旋律　浅野晃
母性　池沢茂
月に招かれた男　芳野清
白居易詩抄　森亮
額田王の一首　山根忠雄
顔　福地邦樹
編輯後記（I・O）

書簡から見た伊東静雄(上)

小高根二郎

教師生活二ヶ月にして、伊東は社会主義的な関心を示しだしてゐる。その事実を物語る宮本氏宛の書簡がある。

「昨日「戦旗」を読んでゐましたらなつかしいものを見ました。それは、日本最左翼劇団なる戦旗のナップが、あのあなたにとっては忘れ難いであらう所の「馬鹿の療治」をやるといふ広告でした。東京がも少し近かったら、二人でみにゆくのだがと残念に思ひました。」

（昭和四年六月七日大阪市住吉区北田辺町五二二宮地内伊東から神戸市上野一八〇篠山仲治内宮本新治宛はがき）

伊東は当時、全日無産者芸術団体協議会の組織であるナップの機関誌「戦旗」を購読してゐる。そのナップが演ずる「馬鹿の療治」は、かって、京大、三高、同志社高商の有志で組織する劇団「街頭座」が、先斗町の歌舞練場で公演をする予定で、本読みと稽古をしたことがあつたのである。同志社高商の文芸部員だった宮本氏も「街頭座」の一員だった。その回顧を、「戦旗」所載の「馬鹿の療治」の公演広告で、伊東はしてゐるわけである。

「馬鹿の療治」の原作者は誰か判らない。或ひは川村花菱氏の「馬鹿野郎の死」であったかもしれない。馬鹿は死ななきや治らない。あの浪曲の台詞からの連想だけではない。義士の討入りに際し、四十七士の後事を託されて生き残った気のいい毛利小平太が、世間からだけでなく、肉身からも物嗤ひになって、「結局、俺は馬鹿野郎だった！」と自殺するに至るこの戯曲は、結構ナップの公演価値があるからである。つまり、この戯曲をもちれば、毛利小平太は左翼戦線から脱落した青白きインテリに仕立てることができるからである。

それは兎に角、伊東が「戦旗」を読んでゐたからには、相当な社会主義的な関心を持つてゐたことになる。さう言へば、大学一年、つまり、大正十五年九月八日の安代、百合子さん宛の書簡にも、社会的な関心が見えてゐた。然し、その関心は、「相争ふ二つの階級の各々に、『理解とそれから生ずる愛』が缺けてゐる」と云ふ程度の、すこぶる漠然とした関心にすぎなかった。が、「乞食」と云ふ仇名を、ブルジュアの子弟から二ヶ月浴びてゐる間に、伊東の社会的な関心は主義として明確な姿をとらうとしてゐる。

いや、当時の社会的な風潮は、センシブルな若者の精神を刺戟するほど、充分緊迫性を帯びてゐたのである。

大学卒業を旬日に控へた日に、伊東の耳は初の無産派の代議士である山本宣治暗殺事件に衝動をしたであろう。山本氏は同志社の講師でゝもあつたから、同志社高商生であつた宮本氏との別離の宴にも、当然、話題にのぼつたことであらう。又、教師の椅子も暖まらぬ四月十六日には、共産党の第三次検挙が華々しく報じられたのである。その華々しさは沈滞した職員室の空気よりは、幾倍かヒロイックに映つたことであらう。当時大学教授では、三木清、平野義太郎氏。作家では、片岡鉄兵、村山知義、中野重治、立野信之、青野季吉、前田河広一郎、葉山嘉樹、金子洋文、細田民樹氏等は、シンパサイザーとして生彩を帯びた活躍をしてゐた世相であつた。

それに伊東は生家の没落を予感してゐただらう。前年の夏休に諫早を訪ねた宮本氏の記憶では、店先にほんのさゝやかな荒物雑貨が列んでゐただけだつたと云ふ。兄弟二人までも大学に遊学させる資金だけで、結構傾きかけてゐた屋台骨が、傾斜しきるぐらゐの家運は、すでに伊東の胸に計算しつくされてゐたであらう。この、最も身近かで悲痛な環境が前述の世潮とあひまつて、伊東の社会主義的な関心を昂めるに至つたのであらう。

伊東が教師としての第一学期を終つた日に穎原先生に出した書簡に、さうした伊東の心情が、それとなく察知される。

「先生

暑中御伺ひ申し上げます。

先生には御達者で、御研究でございませうか。私もとうとう、一学期の教師生活を過しました。相変らず、研究の方向もはつきりいたしませず、只、その日その日の、乱読で、ございます。そして時には、自分が学研には向かないではないかと、思ふのでございます。

大阪はあまり暑すぎますので、これから山口や日田の温泉を、二三、遊んであるきたいと思つて発足の用意をしてゐる所でございます。…後略…」

（昭和四年七月二十一日大阪市より京都市外花園村谷口西ノ川十二穎原退蔵宛封書）

つまり、この書簡での、「自分が学研に向かない」と云ふ自己診断は、伊東が象牙の塔に将来籠るにしては、あまりに多血質な自己を自覚したからであらう。

その夏休は、伊東は諫早で過してゐる。諫早から帰阪しての宮本氏宛書簡に、伊東が同人雑誌で文学的な出発をしようとする意志も仄見せてゐる。

「宮本さん

…前略… 私は七月二十一日から八月二十五日まで諫早にゐました。私は家で何にもせずにごろ〳〵して暮しました。私は家で虚無的な、興味と興ふんもない生活をしました。これではいけないと時々思ひます。大阪の下宿にかへつてみると、下のおかみさんの思ひつきで、私の室の窓一杯にへちまのつるが伸びてゐて、それが大変美しくあります。そしてそのつるにいろんな虫が這ひまはつてゐます。私はこんなことなりとなかつたら、どれほど退くつしたらうと、おかみさんの思ひつきをうれしがつて、一人でねながらそれをみてゐるのです。

諫早では、あのあなたにも思ひ出のある同窓会に今年も行つてみました。市川君（註・市川一郎氏同志社高商宮本新治氏の一年後輩）がお得意の芝居を二つ三つやりました、大変うまく出来ました。…中略…

帰つてからまだ京都にはゆきません。ゆり子さんもいや。…中略…

十月から妹と二人でいよ〳〵自炊生活を始めます。そしたらあなたもゆつくり泊りにおいでなさい。今度東京の蒲池氏（註・蒲池歓一氏）福田清人氏、大村中学）等と一緒に同人雑誌を出すことにしました。何か書けたら送ります。まあ子さんはどうしてゐることやら。人生は流る。水の如くですねえ。…中略…さあもう書くことが品切れ。昔は何やかやと書くことが多かつたけれど、近頃はすぐつかへてしまふ。

お互に、大人になつたんですね。…後略…」

（昭和四年八月二十九日大阪市住吉区天王寺町一七五一中西昭和常内いとう生より神戸市脇浜町一丁目再製樟脳株式会社宮本新治宛封書）

この書簡の末尾に見える同人雑誌とは、伊東の大村中学での同窓である蒲池歓一氏と、中学一年先輩であつた福田清人氏とが始めた「明暗」であらう。然し実際は、伊東は原稿を送らなかつた模様である。と云ふのは、伊東が文学をやるほど熟してゐなかつたと云ふより、社会主義的な関心が先に立つてゐたからである。

（註・福田清人氏、大村中学での一年先輩）

ムッシユウ・オノレの詩

石浜恒夫

オレがそっぽをむいたら
オレの魂は鬼火となって抜けだし
腑抜けたオレの軀は
風の中でいくどか宙返りを打った

あの安易な拍手をききたまえ
愛慾にひき摺られた空中サーカスの
男女たちでなければ
ひとびとは投げ銭をしない

けれども男性は女性を愛し
けれども女性は男性が好きで

〈曲馬団〉

だれもが
じぶんがいい子になろうとし
オレがいい子になろうとしたら
顔を顰めた
咽喉奥から手をだすかわりに
オレは
かえって
その手を咽喉奥へつっこみ
オレのこころを抱きしめたい
愛しいひとよ ——
おまえの胎内の奥にも
オレのこころはあるらしい
横堀の曲りに
蝙蝠の舞う
夜がきて
道化師よ
魔女よ
みんな さようなら

オレひとりの
肉襦袢の汚れが目立って

〈旅芸人〉

春の三日月は金星を従えていたが
風の便りにも
あいつの噂はききたくない
橋筋の
花舗に踏みいり
あやめかきつばたシクラメンサイセリア
憤怒の花はないものか
死者への供花はないものか

生別離も悲しくはない
オレの古い恋は
死んでしまったのだから

〈無題〉

さうした事情を察知させる、半月後の宮本氏宛の書簡がある。

「宮本さん。久し振りのしかもきん喜躍々たる手紙貰つて、私も嬉しくありました。今の私はなかなか人に惚れられさうにも、又惚れさうにもなく、朝に夕にマルクスマルクスと考へてゐるのですが、友人が喜んでゐるのには、私も無条件にほゝえまれる次第です。幸福を祈る。…中略…

私の目下の仕事は、ともすると私の上におひかぶさりさうになる虚無的な影を追ひ払ふて、社会的な情熱へ一途にならうと努力することです。然し自分等の手はかくも青白い。それを思ふと没落する階級の無力さがかへりみられる。然し私の今のこんな良心の働き方は決して悪いとは思はない。大成を待つて下さい。…後略…」

（昭和四年九月十二日大阪いとう生より神戸市宮本通五丁目四三ノ一常喜内宮本新治宛封書）

伊東は恐らくマルクスの「ドイツ・イディオロギー」から「共産党宣言」、さらに「資本論」の剰余価値学説まで読破したのであらう。宮本氏の語るところによると、当時の伊東はすでに、凡庸な共産党員なぞ及びもつかぬ、社会主義的な知識を蓄積してゐた由である。伊東はニヒリスト・バザーロフからの脱出を企図するため、強ひてマルクスに憑かれていつたと思へぬこともない。

この社会主義的な情熱に燃えた伊東は、やがて自炊生活をすべく家を借りてゐる。その家の模様を、次のやうにゆり子さんに伝へてゐる。

こういう風の家に、かりて住むことになりました。妹は明日の夜来るさうです。然し、私は思ひます。この新しい生活は、私にも、妹にも、きつと、そんなに、愉快なものではないだらうと。私も、これから、ぼつ〳〵人生苦を、泌みじみと、味はされるので、ありませう。

家賃は拾八円五十銭、敷金は四拾円

私は、この、始らうとする、私の典型的小市民生活を、独りで、苦笑してゐます。

目に見えて糸瓜揺れゐる夕かな

ゆり子様

（昭和四年十月十一日大阪府立住吉中学校より京都市今熊野南日吉町二〇〇酒井ゆり子宛封書）

この書簡は、珍らしく改まつて、毛筆で巻紙に書いてある。冒頭の見取図は則の汲取口まで示す詳細さである。それに肉身同志、兄と妹との自炊生活は、互ひに愉快なものではないだらうと、その共同生活の始まる前に予言してゐる。然るに、先の八月二十九日、つまり、一月半前の宮本氏宛書簡には、「ゆり子さんもいや」と書いてゐた。少しく矛盾が感じられる。恐らく、伊東は家を一軒借りることによつて、かつて青春を燃えあがらした慕情と、その慕情が構想した団欒とを、夕風に揺れる糸瓜ほどに、回想したのであらう。或ひは、その糸瓜の揺れるほどの期待を、まだ心の何処かに祕めてゐたのかもしれない。

このゆり子さん宛転居通知の十日後に、伊東はその由穎原先生にも報じてゐるが、この書簡は、転居通知そのものよりも、伊東の胸底に芽生へた社会主義が、文学観として展けようとしてゐる点が注目に値する。

「先生

御健勝に、御研究のことと、お推察申します。先生に、お会ひして、お話、承りたしと熱望いたしおりますものゝ、つい機会ございませず残念でございます。近頃は、私の内の芥川的傾向を克服するためにと存じまして、全集なぞもとめて、芥川氏研究に少しづつ、時間を費してゐることでございます。私は同氏を読みながら、自分の過去の教養――自然主義的な個人主義の根強さに驚いてゐるのでございます。今更、そして、私共年輩の者が皆さうであります様に、新しく開けさうに見える、今迄の私共の教養があまり役に立たない、ばかりでなく邪魔になりさうな世界に当面した様な気が致しまして、危惧し、顧望してゐるのでございます。そして、こんな時代に学問を志すものはどんな態度をとればいゝことであらうかと、苦しんでゐるのでございます。

そんなことで、私は一層、先生に、お会ひしたく存じます。決局、私の青年らしい愚痴で、先生を困らすのでございませうが。…中略…

先生の蕪村全集のための、芥川氏の篤い序を読みまして、ついおなつかしく存じ、併せて御無沙汰のお詫にと存じまして、筆をとつたのでございますが、つい、こんな手紙になつたのでございます。

呉々、先生の、御健康を祈り上げます。

十月二十二日　伊東静生拝

穎原退藏様

玉机下

先日から、妹と、二人で、六畳、三畳二つといふ、玩具の様な、家を借りて自炊を始めました。」

（昭和四年十月二十二日大阪市住吉区阪南町中四丁目二より京都市外花園村谷口穎原退藏宛封書）

この書簡に「私の内の芥川的傾向」と云ふ言葉があるが、芥川氏に関しては、既に昨年三月の宮本氏宛書簡に見えてゐた。即ち、「芥川さんも感心したり、妙に窮くつに感じたりしてゐます」との、所感があつた。その時感じた窮屈さを、伊東は社会主義的な文学観に照らしてみて、かつて芥川氏を自殺に追ひやり、今は伊東に息苦しく感じられる稀薄な空気として、もつと明確に感じてゐるのである。

その忌避すべき芥川的傾向を、忌避せずに逆に超克せんがために、伊東は全集を購つてまで芥川研究をしてゐるわけである。さうした伊東は、たまたま芥川氏が一青年穎原退藏に書き与へた『蕪村全集』序を発見したのである。

……

わたしはあなたの蕪村全集を人一倍切に待つてゐます。それは勿論わたしと云ふ個人の問題に違ひありません。しかし広い世の中にはわたしに似た考へを持つてゐる人も全然ない訣ではありますまい。…中略…

蕪村は蕪村となる為にどう言う道を踏んで来たか、それは前にも書いたやうに唯頗る漠然とならば、几董の編した蕪村全集からも想像出来ない訣ではありません。又確かに春泥集の序には蕪村自身も其角、嵐雪素堂、鬼貫等に参加したことを書いてゐたかと思ひます。けれどもその間の消息を機微に亘つて捉へる為にはどうしてもあなたの蕪村全集のやうに発句、連句、俳文、尺牘等を剰さず一冊に集録した本に拠る外はありません。…後略…

大正十四年九月八日　芥川竜之介

（大正十四年十一月十八日有朋堂刊、穎原退藏編著『蕪村全集』序）

……

大正十四年と言へば、伊東は佐賀高等学校の三年生、穎原氏は京大を卒業してまだやつと二年を経過したばかりの日である。当時、県立神戸第一高等女学校高等科の教諭であつた穎原氏は、すでに大著『蕪村全集』を編むと、これを上梓すべく夏休を利用して上京したのである。その日、穎原氏は鬱然とした大家であつた芥川氏の門を敲いたのである。

「朝　太田水穂氏訪問（八時ヨリ一〇時マデ）

芥川竜之助氏訪問（一〇時半ヨリ正

午マデ）
芥川氏は蕪村全集の序文をかいてもよいやうな話でした
昼食ヌキ
午後一時碧梧桐氏訪問、蕪村最初の歳旦帳を今写真屋にもつて来て写して貰つてゐる処…後略…
牛込のとある写真屋にて
廿五日午後一時半　退」
（大正十四年七月二十五日頴原退蔵より頴原芳枝宛はがき）

つまり、頴原氏は芥川氏と会談一時間半にして、この日より二ヶ月後に、先の篤恭な序文を書かしめたのである。しかも伊東と同じ齢恰好、同じく中等学校教諭の日のことである。伊東は感激のあまり頴原先生に筆をとり、若き日の先生の熱情を想望しつゝ、伊東自ら社会主義的な熱情に頬をほてらしてゐるわけである。

忘れられぬ

田中克己

昭和二十年六月半ばから八月十八日だか十九日だかの、午前二時までゐた田家荘のトーチカでの生活は、一生わすれられない、みじめな苦しい期間だつた。とりわけ私ににがくつらく思ひ出される——今でも眠られぬ夜はしばしばこれをまのあたりのことのやうに考へる——のは、この田家荘徹退の夜半のことである。

河北省……県城に駐屯してゐる大隊から伝書鳩で命令が来た。八月十八日?に徹退せよ途中まで原隊から掩護隊が出る。合流の地点はどこそこ、時刻は何時といふのが、簡単な暗号でしるしてあつた。暗号が僕によめたのかつて、いや僕にはよめないが、このトーチカの派遣隊の十幾人の中、僕はただ二人の二等兵の一人で、一等兵六人のうち、伝書鳩係の青年が、一番の仲好しだつたので、ひまを見つけては行つてゐる。いや本当のことを云はう。大隊とはこの一月ほど前から連絡がなく煙草も切れ、下給品と呼ばれた間食類も班長どの、上等兵どのはともかく、僕には全然まはつて来ない。主食だけはどうにかかうにか不足ではなかつたが、その間食に僕は鳩一等兵との友情のおかげで、鳩の餌の豆の一部をわけてもらつてゐたのだつた。これを炊事ののこり火であぶつて、もう一人の二等兵赤木とわけて食べてゐたのだ。鳩一等兵との友情はしたがつて恥かしいことながら、兵としての食欲とむすびついてゐたのである。

ともかくこの命令を受け取つたあとが大変だつた。十日ほど前からトーチカは全面包囲されてゐる。夜になつたら必ず銃撃をしかけてゐたのが、二三日まへからふしぎにとまつたかと思ふと、拡声器（マイク）をもちこんでほとんど夜どほし何かわめく。僕はもとより隊に中国語の達人もゐないうへ、マイクがわるいのではっきりはわからないが降服をしろといってゐるらしかつたが、その理由はもとよりわからなかつた。そこへ徹退命令である。僕はこの日ひとつも眠らないでいろんな仕事をやらされた。小銃弾を全員一二〇発づつ持つたあと、残りを埋める。手リュウ弾は二発づゝ、のこりは埋めたが、班長や上等兵たちが出がけに扉の内側へぶら下げて、あければ発火するやうな装置にしたのもある。兵隊は人殺しが商売だといふことはこのことでもわからう。

僕はおほむね雑役に使はれた。これにはひまがない。こんなわけで上等兵や一等兵たちはかはるがはる眠ってゐたやうだが、一睡もしない中に出発の時刻が来た。

四五人づゝ一団になつて、わからないやうに一部はづしてあつた鉄条網の柵のところをこえると、次は深い壕だ。こゝでは転んで音を立てないやうに用心に用心をしてこえる僕は転ばなかつた銃口を泥につゝこんだ様子である。新米の兵隊だからしやうがないやねとりまいてゐる敵は気づかなかつた。

春の線

服部三樹子

なめぐぢの這ひたる跡の銀の線うねりて
朝の裏の戸に見ゆ
はつきりと此処を過ぐると月の下身をもて書きし春の銀線
銀の線うねる裏戸に朝日射し小さきものは消えてゆきしか
水槽にさくら花びら片よりてゆっくりまはる果しなき輪に
明け遠き夜中めざめてほの冷ゆる身のすがしさに眠る惜しきも
少女の日にとりかはりたる羞恥もち花を語れば我も花かも
いひしれぬ思ひと呼びてゆきすぎし少女のころに恨みなかりき
かの時に誘ひしものは人ならで我を送りし風に恨みを
現し身は否定を知らず風ふけばさくら花びらしづしづと地に
その掌の上我が掌かさねてふと思へりさくら花びら此処に散れかし

気づいたのはいつだらう。一粁ほど来て部落を迂回してゐるとき、急にそこから撃つて来た。闇夜の鉄砲、あたりはしないが、気持はよくない。まづ火が見え、ドカン、ヒュッといふ音はあとだ。音よりも火におどろかされる。僕らは畑の中でふせをして敵の射撃の止むのを待ってゐる。火を吹く銃口の数は二三十だつたらうか。しかし射撃は横の部落からばかりではなく、うしろからも起つた。前からも二三発。囲まれたなと思ふといよいよ気味が悪い。僕は黙つて横にふせてゐる鳩一等兵の様子を見守つてゐる。その中に各個に前進し出した命令などどこからも聞えやしないが、十米ほど走つては伏せ、走つては伏せしてゐる中に銃声が小止みになつた。匍足で三四百米走つたころ、うしろでドカンと音がした。そのあとまた射撃、匍足、これを二三回やつて、いつのまにか包囲を突破したと見える。僕たちは掩護のため原隊から派遣されて来てゐた小隊と首尾よく合流した。

点呼、一人足りない。十何人だかのことだからすぐわかる。鳩一等兵と同時入隊の青年だ。名前は忘れたが、大阪出身の中学出の兵隊で脚気にかゝつてゐたので敵にとりまかれ手リュウ弾で自殺したのだらうと、僕もすぐ判断がついた。朝夕点呼のとき復誦さゝれる「戦陣訓」に「生きて虜囚の辱めを受くるなかれ」といふのがあつて、これを実行したのだからあたりまへだとその時は思つた。

これがいま僕の心の重荷の大部分となつてゐる。率直にいふと僕はこの脚気一等兵が大きらひだつたのだ。鳩一等兵とちがって病気のせいか何もしないでゐる上に、下級である二等兵とりわけ僕によく小言をいつた。上等兵たちのやうになぐりはしなかつたが、軍隊では弁解や口答へが許されないのだから、小言の方がずつとこたへる。食器の洗ひ方が足りないとか、態度が横柄でゐばつてゐるとかもつともなこともあつたかと思ふ——僕は二等兵だがトーチカで最年長の老兵だつたのだ——が、トーチカの中のたゞ一つの井戸は水が涸れかけてゐて、その水を汲むのは僕の仕事だつたのだ。何分も待つてやつとつるべにたまつた水を数十米たぐり上げて水瀘しの瓶に入れ、それを受けて隊へもつて帰ると、古兵たちがたちまちからにしてしまふ。少々の土埃りではないのだから、ふきんをかけておいてもすぐ汚れるのだ。横柄、これはぬれ衣だ。お前の方でへんにうたぐるからさう見えるのだ。僕は内心さう思ひながら「ハイワカリマシタ」をいひつゞけた。

彼の自殺がわかつたとたん、僕の心中に快

しとしたのならまだよかつたと思ふ。僕がいま恥しいのは平気だつたといふことだ。僕のまはりが皆さうだつたのだらう。僕はこの他

英機君

小山正孝

私はその手紙に返事を出さなかった。英機君のお母さんは、もう一度Kに来たら、必ずよってくれないかと書いてあった。私は、心の中で、つぶやいた。こんな手紙をもらはなかったら、俺はよったかもしれないが、これ以上の関係に立ち入るのはいやだから、もうよる気持はなくなった。それより、もう、Kに行くことはないであらう。高名の小説家の故郷、街中を清い水が流れ、石の橋が幾つもあり、静かな落ちついた街。そこで人間関係を持つことはなかった。仕事の関係で、そこの人々と話はしたが、それも初対面で、それで別れて、別に、あと、どうといふ関係も持たなかった。持てさうもなかった。その街のことは、結局、私には、英機君との不思議なめぐりあひといふことが一番印象的であったのだ。それも、つまり、もう、縁切りになるであらうといふことだ。

人の生死に平気といふ態度が、自分ながら腹立たしくてたまらないのだ。また他人のことには平気になってやしないか。お前はまた包

子供が帰って参りまして、大へん喜んで帰って参りまして、写真をとってもらったんだと言ってました。それから、何日かたって、お写真をいただきました時、子供よりも、私の方が大へんに嬉しくなりまして、学校から帰って参りました時に、英ちゃん、写真が出来て来てゐますよ、といって、私は子供を抱いて、私は涙ぐんでしまいました。子供を抱いて、何となく泣きそうになってしまったのです。子供も大へん喜んで、何度となく写真を見て居りました。ほんたうにありがたく、私どもでは、写真など、めづらしく、母ちゃんもとってもらったらよかったのに、と言って、笑ひました。子供は心待ちにしてゐたやうでありましたが、何よりも、うつしていただいたといふことがうれしかったと見えまして、その後は、写真をどこかにしっかりしまひこみまして、あなた様のお話しを時々いたします。本当に、ありがたく、子供にとっても、どんなに力強く思へた事でありませう。どうぞ、もう一度Kにお出かけの時は、大へんに、ひどい所でありますが、必ずお立ち寄り下さい。

囲されてゐるぞ、僕は時々つぶやいてみる。さうして何ともはつきりした答が出ないでゐる。

私には、英機君といふ名前が、あるひは、お母さんの手紙を、そのまま、すっと受けとれなかった原因であるやうにも思はれる。あるひは、これは、一つの悲劇として成り立つかもしれない、とも思った。

英機といふ名前は、東条英機とすぐにつながる。私が東条英機の名前を、本当に、知ったのは、日米開戦の時の総理大臣としてであった。いや、もう少し前、近衛内閣を倒した陸軍大臣としてであった。私たちの目の前からつひに消える前に、自殺のしそこなひをして、大川周明にぴしゃんと、はげ頭をたたかれて、デス バイ ハンギングと、宣言されて、さうして、死んだ将軍の姿はあの、戦争中によく新聞で見たことのある胸をはったまま、つめたい目鏡のまま、ぶらぶらとぶらさがってゐるやうだ。東条英機と云ふ人間がどみためをあさり、馬上、朝早く街を歩き、東条英機といふ絵本が売り出されたことを忘れない。

「うまいもんだなあ、東条さんの演説は」

「ほんとに、日本のヒトラーと言っていい位の人だ」

東条がヒトラーになりたがってゐる。東条の眼鏡の先のつめたい光は、毎日の新聞紙上に必ず出てゐた。議会での答弁。あの、のど

遺書

林富士馬

今更私は誰れに向つて書いてゐるのか？
さうだ　いまは誰れもことばを信じることが出来ない
生れて来ようとする者よ。
お前より先に私は死ぬ。
悩み　憤り　嘆きながらも　日々を稼いで
死ぬまで生きなくてはならない——お前も。
或はお前は不義の子だといふことに縛られて一生を終るであらうか？
私はお前に何を残したであらう？
お前は　この世で一番優しかつたひとりの少女と　それから真の勇気とを　与へておくれただつたのに。
世を拒んだ人達だけが　救ひだった時代のなかに私達は生きてゐたのだ。

のつまつたやうな声は、ラジオを通じて、天皇のかはりにいつも私たちに命令したのだ。

そして、せっせと、私たちは、その命令にしたがったのだ。東条を誰かが殺してくれないかなあとは思ったが、自分で殺せるといふ事は考へなかった。

東条を殺してくれる英雄を待ったものだ。あの時、一人の東条を殺すことが、局面を変へることではなかったにしろ、東条に切りつける人間がゐたら、私は、その人をやはり信じたのではないか。彼は殺されてもよかったのだ。代表者であったのだから。代表者は、さうした形のものなのだから。

経済学の法則も、歴史の法則も、私には、わからなかったし、今も、わからない。その通りになるのならば、その通りになるより仕方ない。その通りになるやうにして、それでいいのなら、人生は、生きてゐても、死んでゐても同じではないか。経済学者と歴史学者とが地図を描いて、そこへ、ひとつ先き廻りをしようといふ人間だけが、行ったらいい。私は、東条が死んでくれればいいとは思ったが、必ず、亡びるのだとは、思はなかった。むしろ、亡びない、この強いものに、立ちうちは出来ない、と思っただけだ。

だが、私は、まだいい方だ。

Kについてから二日目であった。天気がいいので、公園に行ってみた。私は有名な公園を見るつもりだったが、ただ、なんとなく歩いてみてゐるだけだった。ところが、道の途中で一服やらうと、マッチをすった時、マッチの先の方に、煙草の先の方に、うごめくものを見出した。

そこは婦人会館といふ戦後出来た建築物の玄関らしかった。まる刈りのもちの葉かげに玄関のコンクリの階段の所で、一つの大きな荷物と取っ組みあってゐるやうにしてゐる少年を見出した。英機君なのだが、勿論、その時には、まだ、見知らぬ少年として見出したのであった。

「どうしたんだい」

私は大股に近づいて行った。

「ええ」

かすれたやうな声をして彼は私を見上げた

「なんだ、荷物をうまく背負へないわけなのか」

かすかに、てれたやうな笑ひ顔をした。私は婦人会館の戸口を見たが、そこは、ぴつしやりと閉ってゐた。

「中は、何が入ってるの」

少し顔を赤らめた少年を見て、中のことは

聞かなかった方がよかったとさとった。彼は答へなかった。

「どれ」

私は、いまつけたばかりの煙草を捨てて、荷物に手をかけた。手つだふと、簡単に荷物は彼の脊中にのった。ふろしきを前の所で、しっかり結んで、

「ありがたう」

と頭を下げた。私はその日はまだ、時間があった。

「君、どっちへ行くの」

「――です」

「え」

「――です」

「――ですって言ったって、僕は知らないよ。昨日来たばかりだからね。公園を見るつもりだったんだけど、どこが公園なのか、どこからが公園なのか、何だか、わかんないね」

「僕、公園の中を通ります」

「さうか、それじや、一緒に行かうかな。途中までね。そして、僕はそこで別れるよ」

二人は歩きはじめた。赤松の間の石段をのぼり、砂地を横切り、次第に道は昇り坂であった。

「君の名前は」

「――英機です」

「何年生。五年か」

「中学一年です」

年よりも小さいやうだった。目が大きくて水のやうな白眼をしてゐた。

「学校面白いかい」

少年は微笑した。

「いつも君は荷物を脊負ふの」

「ええ。一日に二度づつ行くんです」

「内職かい」

「ええ」

「お母さんは」

「家です」

「姉さんゐるの」

少年の顔を冷笑に似た線が走った。姉さんゐるの――この言葉が、どうして少年にひやかな笑ひをさせるのであらうか。しかも、私は少しもいやな感じがしなかった。少年と一緒に自分の質問を微笑で感じたかった位だ。わかった。少年をとりかこむいろんなことが、これでわかったやうな気がした。

お父さんは工場、兄さんも工場、お母さんは内職、姉さんは――この少年の顔立ちから十七だといふ姉さんについては、少年は何回か同じやうな質問をあびてゐるのだ。次の質問は、私は言はなかったが、言ひかねない言葉なのだ。「美人かね」男は、大人は、女なら美人かどうかを必ず聞くのだ。

やがて、気づいたのだが、石段を昇るのが彼にとって相当、苦痛にちがひないといふことだ。私は肩に写真機を下げてゐるだけなので、ゆっくりしてゐたのだ。

「君、少し休まないか」

「うん」

うしろをふりかへると、もう、大分高い所に来てゐて、街の様子が、よくわかった。樫の木の葉を通して、緑の葉を通して、街の中は少しかすんでゐた。

「きれいだな。さうだ。君の写真をうつしてあげよう」

「いいです。いいです」

「いいよ。とにかく、モデルになってくれよな」

私はピントを合せた。ファインダーから彼をのぞくと、彼は横目で、どこかを見てゐたこちらを見るのをさけてゐた。

二枚とって、とり終った時だった。私がびつくりした程、美しい少女が、青い顔をして上から一人下りて来た。彼女は私と少年を見ながら、足をふるはせながら、どんどん下に下りて行った。

すると、また二三人の顔を青ざめた女学生が下りて来た。

何かある。

荷物をもう一度脊負はせて、私が立った時に、一人の裸の男が上からやって来た。女学生は彼に迫ひ立てられて来たのだ。陰部を露出して、彼は赤い顔をしてゐた。それは酒を

おごそかな旋律

浅野晃

おごそかな旋律――棕梠の花
けむくじゃらの長い老いの手で大切に
捧げられたデメーテルの
重く張った褐色の乳房
いけにえの頭上に垂れさがった
高貴に使命づけられた爆弾
しづかである
晩春の日は遅々とし
誰もおまへに触れない
おまへはギリシャの端正を持し
黙々と時空を劃る
明るく重々しく
孤独でゆううつで
おまへといふ哲人の頭は
考へに耽つてゐる

おまへの真下に置かれた斧の
砥ぎたての刃が
むなしい午後の日を吸つてぎらり光る
おまへはそれを知らない
おまへは目をつむつてゐる
それともすでにおまへは
絞首され了つたのか
そのけむくじゃらの腕は十字架の
柱だったのか
あの刃は血を吸ったのか
遠くで雷が鳴つた
しづかである

僕らは二人

西するもよし
東するもよし
どうやら君のいってゐることも
理窟としては通つてゐる
だが　今は別れよう　袂を分とう
僕らは若い　一杯に帆を張って
新しい自分の岸へと船出する
波がうたってゐる　魔女みたいに
蜜を求めて蜜蜂も
すきな花へとかけってゆく
さようなら　また逢はう
十年さきか
二十年さきか
こんどは瑠璃色の星空の下で
きっときっと金木犀が
匂ってゐる　夜がいい
お互ひがやってきた航海の話を
語りあはう　半白の頭髪を
いささかひやりとする風になぶらせて
いろんな人にも逢はう　友だちにもならう
だが僕らは二人　僕らは二人

「をじさん、ここだと、まぶしくって」
と言って道の側の木陰によって彼は自分の住所を書いた。
——英機
と名前を書いた。私は、この感じのいい少年が、物を言ふ時、一寸、のどにつまったやうな声を出すのを知って、英機、もう一人の英機を思ひ出してゐた。
少年が生れた頃には、まだ、この地方都市では戦争の勝利が信じられてゐたのではないか。彼の父や母は、何といふ名前をつけるか考へた時に、時の総理大臣——毎日の新聞に立派な言葉をのせ、軍服を着て、長刀のつかに片手をかけながら、ごみためをのぞく庶民に最も近いえらい人の名前をつけようとしたのにちがひない。
私は東条をにくんだのに、彼は、その名前をつけられて、こんなに可愛い人間になってゐる。
どうして、彼があの英機と同じ名前であるのか。日本の何万人の英機をして、何か、生涯、ふと、一条の暗い影を帯びしめたもの。ドイツ人はアドルフ・ヒトラーといふ名前を今はどんな風に感じ、あつかってゐるのだらうか。日本人は、今日もまだ、英機といふ名前をたくさんの人が、特別にいい名前だとして、自分の子供につけてゐるだらうか。
英機といふ字に罪はなくても、英機といふ名前の一人の人間は、なんだか、みっともない事をしてしまったやうだ。
その写真は、逆光線であったのが、かへって効果をあげ、よく撮れてゐた。私は、早速それを送った。
英機君のお母さんが、どうして、涙ぐんだのだらうか。私は英機君の人間らしい成長を興味を持って見守りたいとは思ったが、私は英機君にとって、一体、何なのだらう。私にとって、英機君は何なのだ。不思議な名前を持った一人の少年。強ひて言へば、ふと、一緒に、あの道を歩いた印象深い少年。感傷としてつけ加へるならば、かの東条も、少年の日があったであらうといふことだ。
人間が、もはや——歴史学者や、経済学者の言を借りるならば、もはや、人間といふことではなくて、一つの何ものかの力に押しながされて、夫々が、法則によって、一つ一つの役割を果してゐるにすぎないといふことだ。それでゐて、私は、東条をにくむ。この、にくむ気持も、役割の一つであらうか、さうではない。さう思ひたくはないのだ。私が、もし、東条であったならば、もっとちがった事をしたにちがひないといふ、妙な、自信があればこそ、私は、東条をにくむことが出来るのだ。だから、法則だけを、あんまり信じたくない。英機君に、もう逢ふことはないだらうが、私は、Kの街で、彼に逢ったことを忘れることもないであらう。私の考へは、少しひねくれてゐて、生意気だらうか。

母性

池沢茂

義母はもとから、めったに外出しなかった。ぼくたちの家が出来たために、まだしも今のほうが、すくなくとも神戸へだけは、一年になんべんか出てくる。それまでは、よほどの用事があっても、よその町や家をおとずれるのは、しないですましてきた。山地の谷あいの、となりまで四、五百メートルもある一軒家に住んで、よく〳〵の必要がおこらないかぎり、その周囲からそとへは一歩もふみ出さない、といってよかった。
かの女は容姿にめぐまれていない。いちど過労のためにロクマクを病み、ことに、としとってからは、やつれて肉が落ちたけれど、もと〳〵、夫よりも大がらな、骨組のふとい、いかにも頑丈な体格だった。夫がとくに小がらで、きゃしゃな体つきのため、よけいに目立つのだろう。優美とか可憐とかには、およそ縁の遠い容姿だった。しぐさや作法も、そのために、どうしても「女らしさ」に、とぼしくなる。力仕事や労働などでは、ほかの女たちに負けずにやろうとしても、たとえば料理や裁縫、装飾や生花など、ふつうに女のする仕事では、ひととおりのこと以上になると、しりごみしてしまう。ひとからそのように見られるために、かの女自身も、なんとなく、おもはゆく「がらに合わない」ような気に、なってしまうのだろう。ぶこつなうえに、力仕事のために手がすさんで、女らしい、こまかい仕事には、じっさい、あまり気乗りしなくなってしまったのだろう。しかも、こういうことは、かの女自身が、だれよりも、一番よく知っていた。容姿や作法のすぐれていないことなど、ちょっとほのめかされても、かの女はさっと、顔色をかえた。くやしがり、腹を立て、かなしくなった。ずっととしをとるまで、この性情は、はげしくつゞいた。
とき〴〵は今でも、夫とのやりとりで、はっとさゝれることがある。夫と、なにか、なんでもない話をしているとき、ふいに、体をふるわせて怒りだすからだ。第三者には、ときには相手の夫自身にさえ、はっきりわからないけれど、なにかしら、かの女の気にさわり、かの女の過去の苦しかった記憶をよびさますものが、その話のなかに、まぎれこんでいたのだろう。かの女はとつぜん、違うひとになったみたいに、夫にむかって、かみつきおどりかゝり、たゝきつけるように、のゝしりはじめるのだ。その思いがけないはげしさは「山のなかで、百姓ばかりさゝれてきたんやもの、こんな女になったのも、あたりまえやないか！」「若いころ、さん〴〵おんな遊びをして、ひとをばかにし、苦しめ、困らせ、さびしがらせておきながら、いまさら、なにを言うてるんや、いまさら！」と深い怨念をふきあげているようだった。
かの女はじっさい、夫と連れだって出歩いたことなど、これまでのながい生涯を通じても、かぞえるほどしかない。ぼくたちの家が神戸に出来てからは、いっしょに来るときがあるようになったものゝ、なお、べつ〳〵のときが多い。ならんで出歩くのを、いみきらい、なるべく避けてきたようなものだ。ふたりで遊びにゆき、ともに楽しんだことなどは、だから、皆無といってもよい。がらに合わないことだとして、よい着物や装身具など買いあつめる趣味も、これまで持ったことがない。そのかわりに義母は、そういうものを子どものために買った。三人の子を生み、ひとりは小さいうちに死んだが、あとの、むすこには大学を卒業させ、むすめには上等の衣類など買いとゝのえた。そのむすこにも、しかし、もう妻がある。むすめも結婚して、神戸へ出ている。かの女は嫁が来てから、主婦の地位やむすこの愛情をわたすまいとして、何年かのあいだ、すさまじく争いあった。ぼくも、むすめの夫になった当座、なにかしら、わるい感情を持たれていた。しかし、そんなかの女も、としをとり、たび〳〵神経痛がおこるようになってから、ずいぶん気がよわくなった。家のことも、もう、大半は、すっかり、嫁に、まかせている。ぼくの家に来ても、むすめ（ぼくの妻）はやすませておいて、そうじや洗濯、つくろいものやお勝手など、せっせと働いていたのに、やがて、ぬれえんなどの日だまりに、ぼんやり、すわっているときが多くなった。赤んぼうをだいたり、四つの男の子をあそばせたりしているのだけれど、あぶらけのないかみの毛が日やけした顔にみだれて、ぼくには、しあわせそうによりも、むしろ、とき〴〵、非常にさびしそうに見えた。働いて、働いて、働きぬいたあとの、もぬけのからみたいな姿なのだ。
かの女は以前「田畑の仕事なら、だれにも

負けない」と、よく自慢していた。ほかのことでは、なんにも自慢できないような、まずしい、つゝましい心を持っていただけに、この仕事だけには、とくに誇りが強かったのだろう。そうして、着かざって遊びに出かける女たちを白い眼で見ながら、苦しみや腹立ちや寂しさをひと一倍感じる性情を持ちながら追いつめられたように、四十幾年のあいだ、田畑の仕事に、はげんできたのだろう。なんの楽しみもなく、みずからムチ打って、牛か馬みたいに、働きづめに働いてきた、と言えるかもしれない。しかし、そこに誇りがあり、その結果、もしかしたら、よろこびや楽しみも、うまれていたにちがいない。ときゞく苦情を口に出しても、田畑で働くことが、やはり誇りであり、だから、よろこびや楽しみだったにちがいない。しかし、その誇りも、よろこびや楽しみも、ときゞく神経痛がおこるようになったために、もう無くなろうとしている……。

たゞ、おさない子どもたちは、そうなっても、ふしぎに、よく、なついた。むすこの嫁にも子がふたり出来ているが「だれがいちばん好き?」とたずねられると「お母ちゃん」と言うよりも、たいてい「おばあちゃん」と答える。ぼくの子も、この義母には、じきに、なついた。両親とも無口なせいか、この子も、もう四つを越えたのに、二つの幼児ほどにしか、ものが言えない。たぶんそのために、あそび友だちなど、ひとりもない。いつも、ひとりぼっちで、家のなかで遊んでいるか、親のそばにばかり、くっついている。はやくから母乳がとまったせいか、自分の指をくわえるくせがついて、ねるときも、たぶん乳房のかわりに、親の手をにぎっていないと、ねつこうとしない。そして、親のほかには、なかなかなつこうとしない。こんな子だが、義母が来て泊ると、最初から、おなじ寝床で、義母の手をにぎって、すやゝねむっている。

月に招かれた男 (十二)

芳野清

修羅曼荼羅

十七年暮、シンガポール街上で大垣は恩師の田中克己氏と会つた事は前にも述べたが、その真相は「感激の再会」などの一語で表はせるものでは決してなかつた事を後日、先生から親しく聞く機会を得た。内地にゐて詩にのみ没頭してゐた兵隊と、応徴詩人として南方最前線での占領政策をつぶさに体験しつゝ一早くその実相に気附いて憂慮してゐた、鋭い知識人で、歴史家である先生との思想の喰ひ違ひは、内地にあって戦勝に酔つてゐた私達の神がかり式観念論愛国主義との位相のづれをも示す意味で興味深いものがある。

大垣がシンガポールに派遣されたのは軍票護送の任務で、唯これだけの為めにれつきとした経理下士官が飛行機でついて来た事が先づ解せなかった。又それが有難くもない軍票であれば尚更であった。物資のない所へ軍票ばかり持ってきても物価が上るだけの話だつた。それだったら靴下十足でも持ってきてくれた方がよかった。このやうに軍政に極めて批判的であった先生に大垣が最初に云った言葉は「今度の『四季』の何々の詩は……」と云つた調子でがつかりさせられた。寧ろ先生が聞きたかったのは内地の銃後の生活や、身近い人々の消息、兵器生産状況や食糧事情等であった。ところが彼の語ることは戦争や時局から全く離れた詩の話だけだった。先生は前線下士官の精悍機敏さから恐らく遠い、この軍服を着た文学青年の柔和な細い眼を憮然とした面持で眺め、しようことなしに煙草の煙をふかしてゐたのであらう。その前には乾杯したビールの泡のついたコップが置かれ、窓からは華僑の店の極彩色の看板が熱帯の陽に照らされてゐる…。私はその出会ひにふと

「女誡扇綺譚」の中の作者と古風な詩人である世外民氏とのある会話を思ひ出す。戦争さなかの占領地と云ふ厳しい環境でなく、平和な南の島での邂逅であったら、きっとこれに似た一篇の物語も出来たらうにと、私は戦争に伴ふつれなさを、つくづくこの出会から思ったのである。しかし、大垣自身は感激してゐて「シンガポールで田中さんにお会ひした」と会ふ度に自慢そうに語った。私は軍務の事は知らなかったので、無雑作にそんな遠い所まで行ける彼の身が少し羨ましかつた。十七年は勝戦さだったが、ミッドウエー・ガダルカナルと死闘は続き、十八年に引続きソロモン沖海戦、マリアナ沖海戦と守勢は蔽ふべくもなくいはば彼我攻防の岐れ目であつた。十八年六月サイパンが陥ちてからのB29本土爆撃はあらゆる兵器生産力の喉元を扼した形で窮乏と、荒廃は人心を一変させ、怪しげな迷信や、流言が本気に信じられたりした。もはや文学どころではなく、用紙の割当制はきびしくなり、十九年の東京爆撃では多くの印刷所が焼けた。大垣はその中でしぶとく文学に執してゐた。文学からとかく離れ勝ちの私に業を煮やして、自分一人でもやると、書きよこしたのもその頃である。私の勤めてゐた飛行機工場では十二、三才の学童まで狩り集めて、特攻機、月産五〇〇、戦闘機二〇〇を目標に昼夜をわかたぬ労働が続けられてゐた。ジュラルミンの原料不足から木製機の試作されたのもこの頃だが、合板張りの機体は重すぎて実戦に役立ず中止された。又マリアナ基地爆撃用の気密構造の亜成層圏長距離爆撃機も試作第一号が着々と秘密工場で作られてゐた。しかし、総合産業の悲しさ、飛行機だけが出来ても、それにつく計器やエンヂンなどが間に合はなかったりで、かう云った生産の敗行が実際に使用し得る機数を著しく制限した。特攻機は重い爆弾をかゝへるだけで機関銃も計器盤もなく、玩具のやうに粗末だつた。こんな飛行機に乗せられて死ぬためにだけ行く若者の身の上が重たく心にかぶさってきて、私は機体をいつまでも見てゐる事が出来なかつた。一方、大垣の勤めてゐた航空本部も当然忙がしく、日曜日でもゲートルを巻いて出勤してゐると云ふ事だつた。しかし彼は新らしい詩が出来ると必ず書き送ってくれて、怠け者の私をびっくりさせた。十九年十月の「曼荼羅」創刊号後記を見ると当時の状況とその中で文学を続ける事の悲壮なばかりの意気がまざゝと感じられる。少し抄録してみよう。

—この八頁の編輯を終って着町の印刷所に原稿をあづけに行った日、大垣君と本郷の古本屋を廻つた。そして「未成年」二輯、「狼煙」を三冊買った。「未成年」には立原道造とそのお友達が書いてゐる。「狼煙」は増田晃の追悼号だった。それには遺稿の「日本新紀」が載せてあった。増田氏は出征される時「白鳥」といふ詩集を残して行かれた。僕はこの豪華な詩集に嫉妬などしなかった。それはあんなにすぐれた先輩と知友と豊饒な才能とにめぐまれた「白鳥」が吹きさらしのまゝ磨かれ更に耀いて格段に美しく、嫉妬深い僕も言葉を差しはさめなく、たゞ「まほろば」の仲間と廻して誦した。六十四頁の曼荼羅（作者註・最初の企画による予定頁）には大垣君がその感想を綴ったばかりだった。（作者註、この原稿は残ってゐない）そして僕達二人は今度始めてその後の作品に接し得たのだった。宝玉の筐を求め得たやうに、この日はこの雑誌をはなせなくて、電車のなかで興奮し、歩きながら読み、人混みの中で誦し、遂に絶唱だ、などと云ってゐるうちに二人共泪ぐんで了ってゐた。——しかし詩誌「骨」の田中先生の文を照すると、彼の発病は十八年の暮とあるので、すでに「曼荼羅」同人時代には病気の徴候があったのであらう。しかし、周囲の誰もそれに気附くこともなかった。

奇矯な言動は詩人の仲間では寧ろ詩人らしさの証明でもあったし、詩を書くものゝ心のどこかに狂気がひそんでゐないとも云ひきれないからだ。むしろその言動は林医院の看護婦やら、詩人以外の人達の間で取沙汰された。しかし、それも風変りな詩人らしさと云ふ事で笑ひ草になっただけであったのだらう。しかし、恋人のK嬢だけは女性特有の敏感さで何か分けの分からぬ不安に悩まされてゐた。大垣はそんな事に頓着なくK嬢を伴ってさかんに知人訪問をしたらしい。今は有名な作家になった人でこれに悩まされたといふやうな話もある。しかし不思議に恋情をうたった詩がない。わづかにそれと察しられるものが一二篇あるが、それとてもイメーヂに蔽はれてはつきりしない。あれ程、友情をしつこい程くり返し歌った彼に恋愛の詩がないと云ふのは、私の考へでは彼の恋情はうたになる前に直接こまやかな手紙となって燃えたのであらうと思はれるのである。K嬢の消息も分らぬ今となってはこれも臆測に過ぎぬが、多分彼らしい思ひやりのこもった便りであった事だらう。私がこゝで恋愛ロマンスを小説風に物語るつもりならば大垣宛の彼女の恋文の二・三通を揑造する事は容易で、又この辺の筋書きが一番小説的な構想としては興味の湧く所だと思ふがそれは私の好む所ではない。かへって私は未知なものはそのまゝに残して置くことが死者への礼と思ふからである。恋愛詩は作らなかったが、その代りに友情だけは大いに歌ひ、彼の詩の著しい特色を示してゐる。彼はリルケの「名を呼ぶことは愛なり」の言葉そのまゝ、その詩の中で尽きない友情を歌ひ続けた。二十年三月に大垣は天沼の田中さんの隣りの家に移った。彼はそこから鞄を下げて毎日航空本部の軍官庁に通ってゐた。その通知の葉書にはかう書いてある。

―うららかなよい春日となりました。私は阿佐ヶ谷のこちらに移転恩師の御世話になる事になりました（作者註、この家には先生のお姑さんが一人で住まってゐられた）先生は此度御召しに預り出征三月十八日（作者註、十日に下町方面の大空襲があった）大阪の隊に入隊みいくさもいよ〳〵こゝまで来たかと感に打たれます。たゞ林氏との「曼荼羅」に生涯をかけるつもりです……。

この友情に満ちた営為を私はどんなに羨ましく思ったか知れない。これに答へた林氏の書簡も美しい。

―僕達のこの小さな結びは確かに、何かではないでせうか。美しいものだと思ふのですこれは矢張り、この天地にほりつけてをきたい。誰れか靜雄の手紙に拝するやうに、僕達の「志」を汲んで花を咲きつぐことを思ってもくれるのではないでせうか……。

戦禍の嵐の吹き荒ぶ中でこの「曼荼羅」の営みは咲きのこる小さな野花のやうに勁く美しかった。明日の身の分らぬ日常がかへって友情を固くした。やがて戦争末期になり、B29の都市爆撃は次第に中小都市に移り、宇都宮市も、終戦間近に灰燼に帰した。愛惜おく能はざる柳里恭三幅、荷風六巻、朔太郎、梶井、春夫等の著書もその家諸共烏有に帰したのである。戦争の常として彼は口には出さなかったが内心では随分落胆したらしい。彼は焼野原になった故郷の街を一望して、幼い夢をはぐくんでくれた一切のものが滅んでしまった事を知って胸をしめつけられたに違ひない。かくて終戦と、はりつめた心もくづれ、洞穴に落ちこむやうな暗い虚脱が訪れた。まもなく上京した彼は以前の会社に戻り、背広に軍靴姿で敗戦の荒廃した都心に通勤した。その頃の葉書に「私の故郷も落魄と云ふ状態ですが、乱世にこれも美しい事と思ひます、云々」とあり、十一月には林氏を訪ねて象潟に旅してゐる。荒涼とした日本海の眺めは傷心の彼にはふさはしく、慰めに満ちたものであったのであらう。珍らしく一詩をものして

ゐる。

象　潟

ながらへて
また遇ふことのあらむとも
思はざりしを旅路来て
倶に遊びし象潟の町

百歳の

白居易詩抄（四）

森　亮

玉泉寺

こんこんと湧きでる水を湛へて静かな色を見せる池。
水面に長閑かな影映すあの浮き雲にも等しいわが身。
のどかな心に静かな水（全くいゝ勝負ではないか）、
いづれも世の塵をとどめぬ無垢清浄の相。
頭には白絵子の頭巾をいただき、
手に把つたはそれ、青竹の杖。
お山の深い趣きを眺め尽して下山のときには
今の自分が下界の者であることを疑ひたかつた。

★

囚はれざる者

わたくしといふ代物を愛し労はるでもなく、
亦た、そやつを忌み嫌ふといふのでもない。
毎々おのれの悩み・煩らひの根元であつてみれば
このわたくしをなぜ愛さなければならぬか。
天地のあはひに広がる塵の小さな集積であるわたくし、
それをどうして忌み嫌はねばならぬのか。
愛することを忘れ、嫌ふことを忘れて
自然と共にわたしは歩いてゆかう。

註「玉泉寺」の原詩は題玉泉寺（一の五六一）で、白居易が四十四才、江州に赴く直前の作。「囚はれざる者」の原作は逍遙詠（二の一六一）で、詩人が五十才を越えた頃に成つたもののやうである。毎回一篇はウェーリーの英訳のあるものを選んで来たが、今回のものは二篇とも彼の訳詩集に採られてゐない。

世々の移りに水涸れて
偲ぶすべなし　田の中に
島の跡の小高くは見ゆ

時過ぎて
何をか云はむ
歌はむにわが歌古し
白波は遥かに湧き来て
この渚に今日も崩るる

酒なくて対へば友よ
憂れたくもわびしからずや
うそ寒き宿の表に月あれど
はやわが旅の倦んじ果てにき

（昭和二十年十一月「光耀」所載）

当時、鶴岡に疎開してゐた林富士馬氏は早速書簡でその感想を書き送ってゐる。

―あなたの象潟は大阪のS君からも噂さがとどいてゐました。さうしてあなたの御作品を久し振りに拝見致しました。例の「百歳」といふことばがあり、小生に下すってゐるので、すっかり恐縮致しました。とにかく久し振りの御作品なので有難くなつかしい。僕には「千鳥」以後と云ってい〻です。「再び逢ひしは」もありましたが。感想はかう云ふとき近くにゐて、おさけがあれば都合がよく、

意をつくすこと手紙で難しいと思ひます。古風な、鉄幹調みたいなのを偲んだのは原稿用紙のせいかしら。余りに考へすぎてあることは長所であり且又一議論あるべきところならざるか！それからもう一つ、合歓花式の花への顧慮なきこと、「酒なくて対へば友よ」に僅かに花を偲んでも、あの月は華やかにした方がむしろ荒涼一化を語りはしませんか？右は例の友人間のこととて悪口の方ばかり強いて申しましたが、さすがに「象潟」は老巧に（然り！余りに老巧）描れてゐると思ひます朔太郎の冬は感じます。等々々。

彼のかうした詩への情熱と、新冊子の企画等、敗戦を契期としての心機一転の心構へはともすれば、内心の深い憂鬱に掻き消されることが多く、彼の夜々は物さびしい木枯しの連続であった。彼はそのさびしさを別人のやうに私に訴へてゐる。今、その長い巻紙を繰ってゐると、彼の嘆きが煙のやうに立のぼってくるのを感ずる。煩を嫌はず書き写してみよう。

拝啓、其後如何に候也、御伺ひ申上げ候、はや秋も既に晩く十一月の風身に泌みて覚え候加之今夜は小雨そぼ降って小生はざれ書きなどして遊んで居るにて候、兄も一緒に遊びませんか、と全く独り身の嘆かひ嘆くにもあらず候、幼い小児が梅の花びらが散ってくるのを前掛をひろげて受けてゐる、花びらはひらりと舞ひひらりと飜って幼いひとはもう胸ふたがれる思ひ、あゝそろそろこれが詩人の姿に相違ないと花びらは何処にでも散って小児が胸を一ぱいにして受けて居る、さていろいろとたまらない事ばかり先日も帰郷して私は父と共に宇都宮のがらんとした歌舞伎座にそれも一番の前席に座って遠山金さん奉行名のお芝居を見てゐた。こんな晩は私も善人になって浪花節に耳をかたむけざくろがよく実ななかへだの何処のおばあさんはどうしたのと家の人と話をしてゐると思ふことは何日になっても詩人は悲しい存在であることにて候このまゝ病重くてはこれより先々のこと如何か自ら案ぜらるるにて候、天よ、我々を涙の谷から救ひ出せ／とは西洋のショーペンハウエルが言葉、はて〳〵如何にも困った事ばかりにて候。

（未完）

（註）前号に私の不注意で大垣君の「千鳥」の詩を二重記載いたしてしまひました。後のは次の詩「われら会ひしは」の間違ひですので訂正させて頂きます。

われら会ひしは

大塩麟太郎の霊に

われら会ひしは
凱旋の宵
ひとときせの征旅を了へて
恙なく還り来ませし
誇りかに輝きし額
今も目に見ゆ

いくさ場の疲れ出でしか
時経てば見れずなりにし
ひとときに輝きし額
今も目に見ゆ

額田王の一首 (二)

山根忠雄

先々号の本誌第十五号に於いて、私は大山定一先生の『「愛の女」たち』を引用し、彼女たちの魂の美しさを解説しました。そしてそれに最もふさはしい日本的な好き適例として、額田王の次の一首をあげました。

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の
簾動かし秋の風吹く

今回はその「額田王の一首」の特にすぐれた所以を、同じく万葉集の人麻呂以下の「愛する男」たちの歌と比較し、更に新古今集の代表女流歌人式子内親王の作と比較しながら

顔

福地邦樹

ひとの顔は果実のように
ひそかなしかし確実な
みのりの過去をもっている
汽車などで偶然
向いあわせに坐ったひとが
何かほんのわずか言葉を発すると
それを合図にそのひとの顔や手や皮膚が
しずかに語りはじめるのがわかる
すると私の眼の前には
見知らぬ村の見知らぬ営みが
幻影となって回転しはじめる
掌のかたい輪郭に
その地の息のあらさが見え
色あせた髪の毛に
乾燥の植物の風が見え
その眼ざしのふたしかさに
夜のはげしいやすらぎが見えたりする

考へてみたいと思ひます。

先づ「愛する男」たちの歌を、万葉集から引いてみませう。

潮騒に伊良虞の島べこぐ船に妹乗る
らむか荒き島回を
（巻一・四二）　柿本人麻呂

泊瀬川夕渡りきてわぎ妹子が家の門
に近づきにけり
（巻九・一七七五）　柿本人麻呂歌集

春日山押して照らせるこの月は妹が
庭にもさやけかりけり
（巻七・一〇七五）　作者不詳

これらの歌に相当する批評を、上述の『「愛の女」たち』から拾ってみますと、

「男たちは、いつも、仕事だ、行為だといって、たえず心をそとにむけてゐる。どこにも彼等はじっとしてゐることが出来ぬ。おほきな冒険のゆめにふくらんでゐるのが男の生命である。男たちはたえず何か偉大なものに強ひられてゐるらしい。一すぢの純粋なものが男の生涯には缺けてゐるかもしれぬ。」

「男の生活には、はげしい暴風雨がある。すぐれた男になればなるほど、乗り切らねばならぬ危険な波濤はおほきなうねりをなして次から次へ押しよせてくるといってよい。古来英雄とよばれた人間の生涯は、かならず波瀾重畳の危険の上にきづかれてゐるのである。英雄の偉大さはいつも変化と運命の偉大さであった。」

などであります。先にあげた女たちの歌と比べて、これらは何といふ違ひでありませう。同じく愛情を高らかに歌ってはゐても、いづれも「生活の深さ」（前掲）といふよりも、「運命や冒険」（前掲）のはげしさをそのうちに藏してゐます。静的な愛の女に対して、愛の男は非常に動的であります。

次に新古今集から式子内親王の作をあげてみませう。彼女は賀茂の斎院として、一生嫁がず、淋しい生涯を送ったといはれてゐます。

桐の葉もふみ分けがたくなりにけり
必ず人を待つとなけれど
（巻五・秋歌下）

しるべせよ跡なき波に潜ぐ舟の行方
もしらぬ八重の汐風
（巻十一・恋歌一）

君待つと閨へも入らぬ槇の戸にいた
くな更けそ山の端の月
（巻十三・恋歌三）

新古今特有の美しさではありますが、万葉に比べると、「一途なところの純一さ」、「

32.6.25

うつくしい一すぢの緊張」（以上前掲）が足らず歌としてはやや衰弱した感じをまぬがれません。

このことは次の二つの歌を比較すると、なほ明らかになるでせう。

秋の田の穂のへに霧らふ朝霞いづへの方にわが恋やまむ
（万葉集巻二・八八）　磐姫皇后

晴れずのみ物ぞ悲しき秋霧は心の中に立つにやあるらむ
（後拾遺集第四・秋上）　和泉式部

どちらも「秋霧」を題材にしてゐますが、その取扱ひ方はまるで違ひます。

前の歌は、島木赤彦が「歌道小見」に、「深く潜み入った心が、おのづから事象の微細所に触れた歌である。」と評してゐるやうに、自然の景象と内面的真実との結びつきが、後の歌よりも、ずっと緊密であります。内心と外界との微妙な調和、均衡があります。澄んだ観照と高い表現があります。

ところが後の歌は、外界をむしろ内心の単なる表現手段と考へ、心の内面のみを重んじて、外部形式の具象化を軽んじてゐます。歌がこのやうに、内部へ内部へとばかりつき進・まうとするのは、既に衰退の始まった徴候と見ていいでせう。

以上二つの観点から――一つは人麻呂以下の「愛する男」たちの歌と比較し、また一つは女流歌人式子内親王の作と比較しながら、内容、形式の両方面とも――、額田王の一首の特異なる所以を究明した次第であります。

最近、宮城道雄さんの「男の箏と女の箏」といふ随筆をよみました。その中に、次のやうな一節がありました。

「しかし、箏といふものは、不思議なもので弾いてゐる人の性格が直接爪に伝はって、それが音に現れるものであって、われわれ専門家がその音をきくと、男女の区別がつくのである。矢張り男の人が弾いてゐるのをきいてゐると、どちらかといふと優しいなかにも剛壮なところや、泰然とした感じがするけれども、女の人が弾く爪音は如何にも優しい感じがする。さうしてこんなことをいふと我田引水だと笑はれるかも知れないが、我が国古来からの日本婦人の美しさを、私はいつも感じさせられるやうな気がする。」

これは恐ろしい耳であります。私たちも詩歌を味はふ場合、このすぐれた音楽家のやうに、心を澄まして聴き入らなければなりません。（完）

編集後記

世のなかには、満足しながら不幸になってゆく人が、いくらでもあること。これでいゝ、これが自分みたいなものには相応しているんだと、思い思いしながら、じり〳〵と、不幸になってゆくのだ。なにか不平を言おうとしても、はっきりとは言えずに、だん〳〵暗く、だん〳〵みじめになってゆき、やっぱり満足しているのだ。こんなことでいゝだろうか。といって、一体どうすればいゝのだ。現代の同人雑誌流行について、ぼくはしばしば感慨する。（I）

今度、芳賀檀氏と石浜恒夫氏が同人に参加した。両氏とも「新潮」六月号で問題を投げかけてゐる作家である。芳賀氏は東京工大の桶谷繁雄氏の矢面に立ってゐるが、その答を果樹園でされるであらう。石浜氏はこの号に特異な詩を発表してゐるが、「新潮」の「ある離婚の手記」を濃縮した精神と見られる。共に弱自的だと評された果樹園に活氣を送り込まれるであらう。

今号から四頁を増加した。毎月原稿の収録に工面をよぎなくされたからである。経済事情の許す限り維持してゆきたい。

尚、前号田中氏の「西堤の家」中、「荒木、山前、佐々木の三名」とあるは、「三君」の誤りにつき訂正する。（O）

転居・京都市右京区桂下豆田町四一ノ一四　服部三樹子

果樹園　第十七号　（毎月一回一日発行）
昭和三十二年六月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区猪熊通梅小路上ル　文化時報社
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園第十七号　昭和三十二年六月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所文化時報社　定価三十円

果樹園第十八号　昭和三十二年七月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所文化時報社　定価三十円

果樹園

第十八号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
センチメンタル　田中克己
五月　福地邦樹
白居易詩抄　森亮
ムッシュウ・オノレの詩　石浜恒夫
第一印象　岩崎昭彌
いなかの母　池沢茂
小鳥と倫理　小山正孝
機械の顔　浅野晃
尾生　芳野清
鷗外の「寒山拾得」　山根忠雄

編輯後記（I・O）

書簡から見た伊東静雄（七）

小高根二郎

―尹東と愛犬ヒルト―

伊東の芥川研究はその後も一ヶ月半ばかり続いてゐる。が、やがてチェーホフ、ツルゲネーフ等の露国の作家研究に、興味が切り換へられてゐる。多分、伊東の社会主義的な関心が、さうさせたのであらう。

「宮本さん

先日はどうも。疲れたでせう。

私は今夜は心が暖い。チェーホフの書簡集をよんだからです。その後につけてあるゴーリキーの「チェホフの印象」は偉大な霊魂が、他の偉大な精神を理解することの深さに、私は涙を催すほどでした。私はしばらく芥川をよして、チェーホフの研究をつゞけたいと思ひます。そして、面白いことにはチェーホフはこよなく我々学校教師のみじめさに同情してゐる！　私はひとりほゝえんで住中の教師によませたいと思ひました。…後略…」

（昭和四年十二月十一日大阪市住吉区阪南町中四丁目いとう生より神戸市上野一四〇上野館宮本新治宛封書）

伊東の読んだ『チェーホフの書簡集』とは昭和二年新潮社刊の湯浅芳子女史訳のそれではない。その女史の訳にはゴーリキーの「チェーホフの印象」と云ふ後記は附いてゐないからである。中村白葉氏訳の『チェーホフ全集』や『チェーホフ著作集』が出たのはもっと後年である。又、湯浅女史がゴーリキーの「三人の追憶」を岩波文庫で出したのも昭和十三年である。恐らく、伊東は独逸語訳でそれを読んだに相違ない。

ゴーリキーは一九〇〇年頃ヤールタの別荘にチェーホフを訪れた。その時、チェーホフが語ったところを追憶としてまとめたものだ。冒頭チェーホフの教師同情論である。もしも金が沢山あったら、村の病気の教師のために、窓の広い明るいサナトリアムを建てたいとチェーホフは言ってゐる。それに、図書館、養鶏所、菜園、果樹園を附設し、その上、楽器まで備へつけようと言ふのである。自ら肺を病み、しかも医者であったチェーホフの暖い同情であり、夢である。

然し、少壮で、しかもまだ健康だった伊東の心を打ったのは、チェーホフのこの夢ではあるまい。一九〇〇年と一九二九年。露国と日本の相違はあるにしろ、同じく教師と云ふ職業に与へられてゐる貧寒な社会的地位に、伊東は胸を熱くしたのだらう。チェーホフは帝政末期の露国の教師達の窮状を、次のやうにゴーリキーに語り、慷慨してゐる。

「わがロシアでは教師を何か特別の条件におくことがぜひ必要です。そしてそれは早くする必要がある。広汎な人民の教育なくしては、国家は焼きのわるい煉瓦で畳まれた家のように崩れるものだ、ということをわれわれが理解するならばですよ！ 教師はアーティストであらねば、熱烈に自分の仕事に惚れこんでいる芸術家であらねばなりません。ところがわが国では――それはただの雑役労働者で、教養をもたない人間で、村へ子供を教えにゆく時には流刑地にゆくのと同じような気持で出かけてゆく。彼は飢え、虐げられ、いつなん時パンきれを失うかしれない可能性に脅かされている。…中略…わが国では、巡査、金持の小商人、坊主、分署長、学校の世話役、村長、それから視学官という職務を帯びているけれども教育方法の改善については心を用いず、ただ学区の同文命令を丹念に遂行することばかりに心をくだいているあの官吏、というような連中がみんなそれを――教師の人格を傷つけるようなことを――やっているのです。」（岩波文庫、ゴーリキイ著 湯浅芳子訳「追憶」）

中学教師として、まだやっと九ヶ月の体験しか経てゐない伊東ではあるが、生涯を計量し得るやうな安価な教師の社会的地位を、すでに見透してゐたに相違ない。チェーホフの同情は、そのまゝ伊東の胸に応へ、にやりとした微笑になったわけである。

この書簡の十日後にも伊東は宮本氏に、読書と思想上の問題を書信してゐる。

「御勉強のほど驚嘆します。私はぼつ〳〵とツルゲニェフのものを読みつゞけてゐます。今よんでるのはフリューリンブス・ボーゲンといふ奴、未だ日本には訳本はないらしい。表題だけは米川氏が、春の水と訳してゐますが、実にまづいと思ひます。私をして云はしむれば、これは春濤と訳すべきです。ボーゲンといふのはウェーブといふ英語に相当します。「たぬしき日、幸みちし時！ 春濤に似て、なれは騒過するのみ」こんな詩句が、まっさきに書いてある本、以って、そのロマンツィクな内容が想像出来るでせう。同じ作者のブーリンとブバリンといふ本もいゝもの。これはある革命者の恋愛を取り扱ったつゝましやかな小品。（岩波文庫、二十銭）

インテリゲンチャの悩みは、唯物史観そのものゝ中に理論的矛盾を発見することによっておこるのではなく、頭は唯物史観を肯定しながらもヘルツが云ふことをきかない憂鬱なんですね。唯物史観はそれ自身一つの革命理論なんですね。唯物といふ言葉は昔から革命的意味を以ってゐた言葉ださうですね。然もそれが、我々には、革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして熱情的な革命理論が、熱情なしに理解される時、それが虚無的色彩を、然かも破かいされたあとに茫然とたちすくんで、過ぎゆく白雲をながめる様な虚無を我々に感ぜしむるのですね。私は有島氏の「宣言一つ」そのものには肯定出来ないが、然し、あれを云はずにはおられなかった有島氏の悩みには同感出来ますねえ。然し小説に関する有島氏の言葉は正しい所もありますねえ。今のプロレタリヤ小説はプロレタリヤ小説では断じてない。インテリゲンチャの断末魔的努力にすぎない。（それが価値がないとか何とか云ふのではありませ

ん）

私は春濤を早くかたづけてフエター・ウント・ゾーネ（父等と子等）にかゝりたいと思ひます。然しどうも独逸語の表題が、複数になってゐるのが、どうも神経に障っていけませんな。

私等は今日から休み、来年の八日まで。ボーナスとか、うらやましきかぎりなり。私等のは二三十円位。御酒肴料といふ奴ですね。

遊びにおいでなさい。その内に一緒に京にも出たいですね。…後略…」

（昭和四年十二月二十一日大阪市住吉区住吉町大阪府立住吉中学校より神戸市脇浜町一丁目三十一番地再製橡脳会社内宮本新治郎封書）

この書簡の冒頭、伊東は宮本氏の勉強振に感心してゐるが、それは伊東の社会主義に対し、宮本氏がエスペラントの勉強を始めたのをさすのであらう。

伊東は大学二年の十二月にツルゲーネフの「父と子」を読んで異常な感銘を受けたが、彼は二年振りで再たツルゲーネフに皈って来てゐる。「春の水」である。が、露語からの独訳が「春の水」（Frühlings Wasser）ではなく「春の波」（Frühlingswogen）になってゐるのに伊東はこだはってゐる。「父と子」ではニヒリスト・バザーロフは人妻の唇を奪ったことで決闘をやるが、この「春の水」でも、サアニンは人の許嫁であるヂェンマのために決闘をやる。酒乱で好色な若い軍人男爵からかばってやるためである。その決闘が機縁となって、サアニンのナイト振りに惚れこんで許婚者と解約したヂェンマと婚約する。その結婚資金の調達のために、サアニンは学友の妻であるマーリア・ニコラーイエヴナに会ふが、彼女の蠱惑の術に陥り、ヂェンマと結ばれることなく、つひに一生を蕩尽する。この青春の激情と変転の物語には、確かにサラサラと流れる日本語の「春の水」の感じはない。流氷を浮べた露国の「春の水」である。伊東が主張する「春濤」の方が、原典にも正しいし、適切であるかもしれない。

伊東は「春濤」を読了して再び「父と子」を読むべく身構へてゐる。が、こゝでも標題に、伊東は独特のこだはり方をしてゐる。原典に忠実な独語訳は、「父等と子等」（Väter und Söhne）の複数になってゐるからである。日本語訳は、「父と子」（Vater und Sohne）になってゐる。が、バザーロフと学友アルカーディの子等と父等を主題としたツルゲーネフの作は、「父等と子等」の複数型の方が正しいわけである。が、こゝでは伊東は、独語訳の複数型を耳ざはりとしてゐる。

この飜訳に関する伊東の気むづかしさは、後年に至るまで変らなかった。伊東は上田敏訳の「海潮音」より、永井荷風訳の「珊瑚

センチメンタル

田中克己

橋の名

いつも通ふみちに
霜降り橋といふ停留所があって
寒い日にはかなはないなと思ってゐる
けふ面影橋といふのを通り
ちよっと心を動かした
センチメンタルだぞ 恥じろよ おまへ。

空虚

アメ公ゴーホーム
ソ聯人よ去れ
僕の心からうまく彼等が出て行ったあと
からっぽになったところに日がな一日
こひびとよ お前が坐を占める。

集」を高く評価してゐたのも、かゝる原典への確度を問題にしてゐたからであらう。

とまれ、伊東がいかにツルゲーネフの「父と子」に執心してゐたかゞ判るであらう。つまり伊東は、自己内部の芥川的なものはどうやら超克できたらしいが、バザーロフ的なものは超克できなかったので、再び独語訳「父と子」に取組んで、その超克を企図してゐるわけであらう。

しかも、伊東の心底に潜むこのバザーロフの亡霊は、伊東が頭脳で肯定してゐる唯物史観を、否定してゐるのである。燃え上らうとする情熱の火の手の、火消役をしてゐるわけである。革命の前に崩壊ではなく、崩壊のための革命の曠野に、虚無的な白雲を浮べてみせてゐるわけである。

伊東は又、唯物と云ふ言葉自体が、歴史的に革命的な意味を持つと云ふ謎のやうなことを言ってゐるが、これは謎ではなく、フォイエルバッハの唯物論（「唯心論と唯物論」―特に意志の自由に関連して」）なのである。

即ち、フォイエルバッハは、「独逸唯物論は宗教改革に始まる」と言った。キリスト教に於ける法然とも云ふべきマルテイン・ルッテルは、カソリシズムのあまりに天上的な神の愛をこの地上に取り戻してきて、神の愛が我々に感応できるのは、人間が人間を愛する時、つまり、父になった時だとして、肉食妻帯をおッ始めた。この革命を唯物論の父としてゐるのである。伊東が唯物に革命的意味が歴史的にあると言ってゐるのは、このことを指してゐるのである。マルクスはこのフォイエルバッハの唯物論を、行動と実践性のない単なる抽象論であると指弾したが、伊東が頭で肯定した唯物史観を心底で拒否せしめたものは、前記のバザーロフの亡霊と共に、このフォイエルバッハの幽霊であったかもしれない。

伊東のかうした心境は、有島武郎氏の「宣言一つ」の立場を否定し、その心境には肯定してゐる。

この有島氏の評論の要旨は、結局人間は自己の属してゐる階級にしか、交渉を持ち得ぬものだし、影響も与へられぬものだと云ふ、いはゆる環境限界説である。労働階級にとっては、掌にタコのない、クロポトキンやマルクスのやうな思想家も学者も必要としないと云ふのである。彼等は生活に根ざしを持った実践で、自ら人間生活改造の道を、開拓してゆくだらうと云ふ所説である。

これは悲観論であり楽観論である。かって北海道の農場を小作人に解放したり、或ひは財産放棄を宣言して邸を譲って借家人になったりした有島氏の人道主義が、社会的な効果と反響では、全く空無に等しかった結果に到達した悲観であり、楽観だらう。この評論を発表した一年半後に、有島氏は波多野秋子と軽井沢で心中をしたのである。

伊東はこの有島氏の楽観説を否定したのである。然し、さう言はざるを得なかった有島氏の悲観的な心境には同情してゐる。特に末尾のプロレタリア文学論には、全く同論してゐる。

「世に労働文芸といふやうなものが主張されてゐる。又それを弁護し、力説する評論家がある。彼等は第四階級以外の階級者が発明した文学と、構想と、表現法とを以って、漠然と労働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が発明した論理と、思想と、検察法とを以って、文芸的作品に臨み、労働文芸と然らざるものとを選り分ける。私はさうした態度を採ることは断じて出来ない。」（大正十一年一月「改造」有島武郎―宣言一つ―）

伊東はこの有島氏のプロレタリア文学批判に、当時のプロレタリア文学を対照として、同調してゐるわけである。その年に出た小林多喜二氏の『蟹工船』も同断だったのであ

らう。結局、インテリゲンチャの断末魔的努力――啓蒙的な意義しか、伊東は認めてゐないわけである。伊東は「干規の俳論」にも啓蒙的意義しか認めてゐなかったが、啓蒙即文学ではないからである。

伊東は先にチェーホフ、ツルゲーネフ等のロシア文学に熱中してゐたが、明けて昭和五年、中学教師として一年の体験を経た頃から、彼の興味はロシア文学からフランス文学に切換ってゐる。この転移は、或ひは社会主義に対する彼の懐疑が誘ったのかもしれない。さうした伊東の心情の動きが、宮本氏宛の二通の書簡で、克明に補へることができる。

「相変らずの懐ギ的精神で、苦しんでます。懐疑主義者の悲劇は然し、彼が信じ込みやすい点にあるのですな。二十日から休みになります。休はどうするか、まだはっきりきめてません。京都の娘さんは相変らず、人生のなんとわずらはしきかなですな。」

（昭和五年三月二日住吉―消印―より神戸上野谷三三三中桐内宮本新治宛はがき）

この書簡で、伊東は懐疑主義者の悲劇は、初めから疑ってかゝる拒絶的な性格からもたらされるのではなく、当初は信じやすすぎるので、却って途中から疑念に顛転する許容的な性格のせゐにしてゐるのは至言である。ここに伊東とバザーロフの分れ路がある。しよっぱなから当否の判断、ないし、好悪が截然としてゐる剛毅な精神には、懐疑なぞ起りッこないからである。つまり、懐疑すること自体が、弱い精神であり、悲劇だと言へるわけである。

伊東はこの書簡の末尾で、「京都の娘さんは相変らず」と言ってゐるが、この娘さんとは百合子さんのことであらう。その百合子さんを単なる娘さんと言ひ流してゐる伊東の心情の底にあるのは、先程の懐疑主義の逆説的な談議のやうに、執着とは言はずとも、まだ幾分薫染が残ってゐるからであらう。

この十五日後に書かれた書簡には、その伊東の心情を物語る叙述と、フランス文学への興味が現れてゐる。

「ギイ・ド・モウパッサン、少しづゝ読み出しました。

二三日京都であそんで来ました。鹿ケ谷で大酒を喰ひました。日吉町は茫々として夢のごとし。

その内来なさい。どうかして

J. Renard（ルナール）を世界文学でよんで、仏語を知

五月

福地邦樹

五月は新緑がみち満ちて
空想される祝福の時に
いくらかそのおもかげが似ている
風が吹くと
明るすぎる光がそこら中にふりこぼれ
小動物らは日だまりのなかで
すくなくとも私よりは健康であるだろう
私が不具者のように
正確な眼差しを持っているとすれば
私の希求がそれほどはげしいからなのだ
そして夜
私の心は開きっぱなしになる
すると昼間よそよそしく通りすぎてしまった
日光や色彩や風たちが
甦って私の中にはいってくる
それらはしきりに私を甘やかそうとする
私は恐れてじっと我慢している

りたい念激しくおこりました。

近頃の私の内生活に大きな象徴となってゐる言葉はバルザックの「人間喜劇」といふ有名な表題。

改造二月号の広津和郎の文芸雑感。木村キ氏の大衆文学論。兼営清佐の音楽階級性。よんでも全々損にはなりません。

四月から又大学院に行かうと思って、大学と交渉中。…後略…」

（昭和五年三月十七日大阪市住吉区住吉町大阪府立住吉中学校より神戸市上野一四〇上野館内宮本新治宛封書）

こゝで伊東はモウパッサンを読んでゐるが、少しづつとあるから、多分、独逸語訳でであらう。仏蘭西のチェーホフと言はれるモウパッサンは、伊東の好尚に合ったであらう。

伊東はまたバルザックも幾分手掛けたやうである。が、大柄な十九世紀前半の風俗史で、心理的な陰影の稀薄なバルザックの作品は、伊東の好尚に合はなかったであらう。伊東が感心したのは作品ではなく、九十の長短篇の集成に名附けられた「人間喜劇」と云ふ主題である。この主題が、伊東の内部生活の象徴となったと云ふほどであるから、にんまり微苦笑をもって人間を見、生活に立ち向ふニヒリスティックな心構へが、どうやら整ひかけてゐた事実を証明する。

つまり、人間悲劇と見ず、人間喜劇と見るニヒリスティックな伊東の眼が、マルクシズムに走らせなかったのである。が、もともと伊東には人間悲劇と見る眼の方が本質的であった。伊東書簡中で最も古い四年前の安代、百合子さん宛書簡で、

人の住む所には恋があるんだ

と云ふ詩の結句に、伊東は

そこには又必ず悲劇がある

と云ふ詩句を附け加へることを忘れなかった。この悲劇観を喜劇観に反転せしめたものは、あまりに一人芝居にすぎて悲痛だった片恋の日を回想して、そこから自嘲として感じられる喜劇観であったかもしれない。伊東は二三日京都に遊び大酒を喰ってゐるが、それもこの喜劇観があまりに身に泌みたからかもしれない。然し、酒井家のある日吉町を回顧して、「茫々として夢のごとし」と云ふ感慨の底には、いさゝか悲劇観が感じられぬこともない。

この書簡で注目すべきは、伊東が世界文学全集であらうか、ジュール・ルナールの作品を読み感銘してゐることである。伊東が仏蘭西語を学び、原語から直接ルナールの詩精神に触れたいと望んでゐるほどであるから、よほどの感銘を受けたものと見ねばなるまい。伊東は岸田国士氏訳で「土地の便り」「エロアの控帳」「葡萄畑の葡萄作り」を読んだのであらう。そこに伊東は文芸手法としての感覚の共感を禁じ得なかったのである。岸田氏はルナールの「暗示」と「想忘喚起」の手法が、日本の俳句に一脈通じるものがあると言ってゐるが、その「暗示」と「想忘喚起」を起用しての譬喩が、その日より二三年後、同人雑誌『呂』に開花する伊東の詩精神の一部を形成するに至るのである。

新潮文庫七二　七〇円

伊東静雄詩集

彼は日本の近代詩に消しがたい痕跡をのこして去ったのであって、その細くするどい痕跡がいかに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅ひろく淺い痕跡が磨滅するにつれてはっきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであろう。

桑原武夫

ラ・コルニンユにて

御覧なさい。海の上の二艘の小舟を、誰だ、海で古靴を失くしたのは。

（岸田国士氏訳―エロアの控帳―）

白居易詩抄（五）

森　亮

菊の花に寄せて

若く少かった歳月はすでに早く過ぎ去って、
わが世の真盛り、その芳はしい日々も今闌け
ようとしてゐる。
どうしても拭ひきれない寂しさ、あぢきなさ
それは又この荒れさびれた園生のこころでも
ある。
園のさ中に独り久しくたたずめば、
弱い日差しのもと吹く風、置く露みな冷たい
雑草にけおされて秋の蔬菜は姿をかくし、
目を楽しませた樹も木の葉落ちた枝をさらけ
出してゐる。
ただ数個所にかたまって伸び上がった菊が
籬のもとに新らしく花をひらいた。
さかづきを持ってきて少しばかり酒を酌み、
菊よ、おまへが嬉しくて思はず時間を費すの
だ。
思へばわたしも、嘗て若い日には
たやすく気分は興ある方へと引かれて行った
いちど酒を見せられると季節なんぞはお構ひ
なし、
まだ飲まないうちから心はすでに喜び勇んだ
齢のかたむくを覚えるやうになった近頃では
かりそめの楽しみもこれを楽しみ難くなると
悟った。
わたしの心配はこれから先もっと老い衰へた
なら
強ひて飲まうとも心は慰まないだらうことで
ある。
そこでつい話しかけたくなるが、菊の花よ、
千草の衰へに後れて咲き続くその鮮かな姿は
なにの力によるのか。
おまへがわたしの為めに咲いてゐるのでない
ことは分かるが、
おまへに励まされて窮のしわをわたしは伸ば
さうと思ふ。

註　原詩は東園翫菊（一の五一〇）で、白居易が四十才頃に作ったものである。

神様に　かいつぶりは水の上に

私はあなたに落書きをする

（昭和八年「呂」四月号）

私は特に次のルナールの譬喩的表現に伊東は感銘したゞらうと想像する。

脂ぶとりの女を見て、あの女はうまく骨
をかくしてゐると云ふ、
風が強く吹くと、風見が手間を惜まない
と云ふ。
川の水があふれると「海が見える」と云
ふ。

（岸田国士氏訳―土地の便り―）

さう私に想像させる逸話がある。宮本氏はエスペラントを勉強してゐたが、エスペラントで「小便をする」と云ふことを、「自然が私を呼ぶ」―Naturo vokas min―つまり、英語の Nature call me と表現するさうである。自然である大地が呼ぶから小便がしたくなるわけである。霊妙な表現だ。その由を、宮本氏が伊東に語り聞かせたところ、伊東は「それは素晴らしい。素晴らしい表現だ。」と唸ったと云ふのである。

それはとにかく、ルナールの譬喩的表現の若干が、伊東の初期詩篇に影響を与へてゐることは見逃せない。

ムッシユウ・オノレの詩

石浜恒夫

天にむかって囁き
地にむかって囁く

ひとつの心おなじ軀
あい支え
あい支えられ
愛情と率直な誠実さと
たがいに疑うことなく
信じあう
幸福
を思い
長く、努力します

こう述べたら
そんなにはっきりといえるのは
オノレだけだと
だれかいってよこした

〈結婚式〉

逃げてゆく日々を捕え
鳥籠にいれ
青い菜ッ葉を
塩ッ辛い水とを与えたら
日毎それは
赤黒い糞を垂れ

〈詩人の鳥〉

囀り
歌い
花蜜を好み
生殖しきり
無獣にインクで汚れて
けれども空には陽が昇り　沈み
　夜は月が昇り　沈み
燕脂蟲は変態を逆に辿り
雌はついには卵巣のみとなり
雄は交尾がおわると飛翔し去
るが口吻なく餓死んでしまう
ようまく出来ているそうで
ああ……
オノレはそうではなく
日々新しく
囀り
歌い
花蜜を好み
生殖しきり

〈結婚飛翔〉

尚、この書簡の末尾で伊東は、「改造」を読んで、読んでも損をしない程度で、広津和郎、木村毅、兼常清佐諸氏の諸論に触れてゐたが、伊東が兼常氏に特別の関心を持ってゐた事実は特記しておく必要がある。ピアノの名手が奏く音も、たまたま猫が鍵盤の上をつつ走ってたてた音も、同じであったと云ふ奇嬌な音楽無用論を書いた音楽批評家のどこかに、伊東の虫が好いたのだらう。伊東は後年処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』を兼常氏に献呈してゐる。

四月に入って、京都の娘さんである百合子さんに書簡を出してゐる。

「ぼんやりしてる内に、もう、休暇がすぎてしまひました。今日から、又先生。

妹は未だ皈りません。犬が病気で看護が面倒です。

月給が、まねだけあがりました。

今年は、土曜日は授業をしなくてもいゝことにして貰って、自分の勉強をすることになりました。

独逸の小説家、トーマス・マンといふ人はいゝ人ですね。」

（昭和五年四月七日住吉より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛はがき）

この書簡に、土曜を授業なしにして貰った由出てゐるが、それは先の書簡の末尾に見えた大学院志望と関連がある。中学教師一年の体験をした伊東は、その生活や地位にあきたらず思ったからであらう。月給がまねだけ昇ったと云ふのは、一年の嗣託期間が過ぎて教諭に任ぜられ、四級俸百拾五円也を支給されたことを指す。初任給は百拾円であったから、五円がとこ昇給したわけである。末尾に伊東はトーマス・マンを賞めてゐるが、恐らく百合子さんからマンの短篇集の読後感でも、書き送ったからであらう。

又、この頃伊東は生き物を飼ってゐる。顔の両半と胸と横腹にぶちのあるテリアだ。伊東はこの小犬に Hirt（詩・牧人）と云ふ名を附けて可愛がった。が、書簡で見るやうに病気になって、そのふびんさと面倒から、諫早に送って江川家に嫁いだ姉の手で飼って貰ったのである。それから十三年生きてゐたさうである。さう言へば酒井家にもブチのポインターがゐた。生き物をとめての酒井家の団欒が、モデルとして伊東の心底に蹲ってゐたからであらう。

この百合子さん宛書簡から一ヶ月あまり経て、伊東は宮本氏に書簡を書いてゐる。そこに新しい女性が登場してゐる。

「宮本さん、

どうしてゐますか。

近年来ずいぶんあなたにあてられましたが、私もやっと近頃私の所謂「人生の悦楽」を感じてゐます。京都東山女専、国文科の生徒さん、年は二十一。顔は十人並。すなほな人。兄さんは気ちがひで、外に母と妹あり。…中略…

但し、片思ひかも知れず。ラブレタ書く元気も出ぬので、一人胸に蔵してゐるんですが、愉快なことは、口に云へません。

あてられる覚悟だったらその内遊びに来て下さい。

伊東生」

（昭和五年五月十四日大阪市住吉区阪五町中四丁目より神戸市脇浜町一丁目三十一番地再製綿脳株式会社内宮本新治宛封書）

この書簡は、さかんにもてる宮本氏のロマンス通信に対する、応酬のにほひがある。宮本氏にしたら、学生時代さんざんばらあてられてゐたわけだから、その応酬のつもりだったかもしれない。伊東はこんな応酬や挑みが幾烈で、また一種の好みでもあった。

それにしても、百合子さんと同年のこの女専生は、恐らく近隣の人でもあったのだらう。国文科生とあるから、質問にことよせて、ちよくちよく遊びにきたのだらう。が、この女性は、この書簡にしか現れてゐぬので、やがてまた無縁の人にかへっていったのだらう。

この書簡から一と月半あまり経て、つまり、教師生活二回目の夏休の始めに出された百合子さん宛書簡で、それと察することができる。

「日田にて、

山間の水郷、人美しく気すいて、「我が心、やすらふごとし」。

広瀬淡窓兄弟、田能村竹田の生地、竹田は私をおどろかします。

こゝに来ても音楽をきゝたい熱願がさりません。近所に音楽の先生がゐるさうですから、きゝにゆくつもりです。」

（昭和五年七月五日大分県日田郡日田町隈恵念寺内より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛絵はがき）

この書簡は、水郷日田勝景とした三隈川の鵜飼の絵葉書に書かれてゐる。日附から推して、皈郷の途路に立ち寄ったものであらう。去年の夏も立ち寄ってゐるが、宿を寺にしてゐるから、今度は一と夏をこゝで勉強しようとしたのかもしれない。筑後川上流の水郷。しかも南画の天才田能村竹田を生み、詩をもって経世修身を企図した詩人教育家広瀬淡窓、弟の詩人旭荘を輩出した桃源境である。伊東は人美しく気が透み通ったこの仙境に都塵を洗って、淡窓のやうな学究になるか、又

は旭荘のやうに詩人になるか、或ひは田能村竹田のやうな芸術家になるか、己の心に訊ねたに相違ない。

川辺の村　　広瀬淡窓

ちらりほらり容の籬は流れの西東
蘆や荻の花はひるがへる雨後の風に
日暮れて釣りをしてゐたひとは去る
竿だけは磯のいはをに挿んだまんま

淡窓は（1782—1856）詩人としても有名だが、教育家としてさらに令名がある。彼は帆足万里、頼山陽、梁川星巌らと交り、門弟の中から高野長英や大村益次郎等の英才を生んだ。

春雨は筆庵にやってくる　　広瀬旭荘

菰の畑葱の畦路ははすかいに
桃の花の多いあたりは君の家
おそく誰か門をたゝいてやってくる
雨と　詩人と　散る花と

旭荘（1807—1863）は学究と云ふよりは詩人である。兄から家塾咸宜園を引き継いだが、詩心はむしろ遍歴を求めた。佐久間象山、月照、桂小五郎、吉田松蔭等と交った。清の兪曲園の評するところによると東洋第一の詩人ださうである。

伊東が特に感銘したのは、この二兄弟より田能村竹田（1777—1835）の方である。その高雅精緻な南画風に、伊東の精緻な詩心は自づと共鳴を禁じ得なかったからであらう。

山水画に題す　　田能村竹田

ひねもす往き来する人なく
おどろの霧は地に満ち柴の門をおほふ
誰が知らう　人の世の難所とは
雨風すさぶ山村どころではあるまい

竹田は単なる画家ではなかった。上田秋成頼山陽、大塩中斎とも交った。

尚、東伊は書簡の末尾で音楽について触れてゐるが、彼はこの頃から、文学だけでなく、音楽にも相当熱中するやうになる。ピアノに巧みで音楽に明るい百合子さんは、かっての妄執の対象から、音楽の相談役と云ふ姿に変ってゐるのである。

夏休に日田から出された百合子さん宛書簡に伊東の音楽に対する関心が仄見えてゐたが、その関心は秋がふけるにつけ深まってゐる。又、伊東が大学院に入る希望を持ってゐたが、それを証明するやうに、ちよくちよく京都に出てきてゐる。

「土、日、と二日間琵琶湖のへりをぶらぶらしてゐました。日曜の夕方馬町から京に入りました。京極の裏のうどんやで冷しコーヒーとうどん喰べて皈りました。大津で詩を一つ二つ書きました。

ゆり子さん。暇になったら大阪に遊びに来ませんか。三越で赤飯をご馳走しますよ。」

（昭和五年九月二十三日大阪市住吉区阪南町東五丁目三〇武元楽内より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛はがき）

伊東は京都に出てゐるが、大学なぞに立ち寄らず、遠藤、酒井母娘との曾遊の地、琵琶湖畔なんぞを彷徨してゐる。学究に対する意欲より、詩心の方が強く動いたからであらう。そこで詩一二篇を得てゐるが、恐らく失はれた愛の日に寄せる哀歌であったらう。それをあかしするやうに、伊東は京都に馬町から入ってゐる。つまり、伊東は山科から歩み、清水山を右、六条山を左に見て渋谷越を抜け、百合子さんが住む南日吉町の隣町、日吉町のすぐそばを通ってゐるからである。伊

第一印象

岩崎昭彌

水牛がチーク丸太をゆっくり運んでゆく
錆びた三輪自転車が暢気に走ってゆく
樹陰に象が退屈さうに鼻を振ってゐる
——おゝい　お前の国へ戦争に来たんだぞ
牛曳も自転車のりも象使も跣足
娘は洋傘をさしてゐるがやっぱり跣足
道端で水を浴びる小さな素裸の群
——お前達よ　何故俺達が来たかを知ってゐるか
何処へ行っても必ず出会ふパゴダと僧院
そして坊主は大人とばかり考へてゐたら
黄衣を纏った子供が托鉢をやってゐる
——こんな仏教国で戦争をはじめたのは
一体誰だ

（—インパール—）

東は詩稿を胸に抱きつゝ、立ち寄らうか寄るまいかと自問しつゝ、その道を過ぎたのだらう。

日光はいやに透明に
おれの行く田舎道のうへにふる
そして自然がぐるりに
おれにてんで見覚えの無いのはなぜだらう
死んだ女はあっちで
ずっとおれより賑やかなのだ

（第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」—田舎道にて—）

恐らく、これに似た感慨が湧いたことだらう。

伊東はこの書簡を出した翌日にも百合子さんに端書を書いてゐる。

「夏の休に、一つ二つ、モッツアルトをきいたのと、メリケのあの傑作を今、よみおはったのとで、きゝたくて、たまりません。私も生涯の仕事に、たれかの伝記をかきたく近頃しきり思ふので、あのメリケのことは、うらやましきかぎり。然し、私に、あのモッツアルトが見つかるかどうか。

けふの休日は実に立派な美しい天気です。これからぶらぶら、野に出るところ、…後略…」

（昭和五年九月二十四日天下茶屋—消印—より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛はがき）

この書簡で云ふ、伊東が異常なほど感銘を受けたメーリケ（1804—1875）の傑作とは、「プラーグへの旅路のモッツアルト」のことである。

一七八七年の秋、モッツアルトは未完の大作『ドン・ジョヴァンニー』を携へて、夫人と共にプラーグへの旅に上る。その途中で中食をとるべく村の旅館に一服する。待つ間の手持ち無沙汰から、モッツアルトは近くをぶらぶらしてゐるうちに、いつかシンツベルグ伯爵の館に紛れ込む。涼亭で一と息入れてゐると、手近かに鉢植ゑの蜜柑が稔ってゐる。なんと云ふことなしに、その一つをもぎとり、ぷつりと小刀で断ち切って了ふ。そこを園丁に発見される。実は、この蜜柑の鉢は、当夜館で開かれる、伯爵の姪オイゲニイと男爵との許婚式披露宴の座興に用はれる手筈だった。当惑した園丁は、モッツアルトからぢきぢき伯爵夫人に申訳をしてくれと云ふ。モッツアルトの詫状を手にした伯爵夫人は、怒るどころか、この招かざる客の到来に狂喜する。早速モッツアルトは招き入れられる。旅館で休息してゐた夫人も呼び寄せられる。か

くて、宴の進むにつれ、モッツアルトは未完の大作『ドン・ジョヴァンニー』の荒筋を紹介して喝采を博す。一同はモッツアルトの天才振りに心酔するが、とりわけ感動をしたのは許嫁オイゲニィであった。翌朝モッツアルトが立ち去った後、彼女は天才の霊妙な指が触れた鍵盤を、誰にもしばらく触れられぬやうに錠を下す。そして取り散らされてゐる歌謡集を片附けようとして、ボヘミア民謡の写しをとり落す。その歌を読んでオイゲニィは思はず落涙する。それはかって彼女も唱ったことのある「運命の歌」であったからだ。

……

若駒の黒き二頭の
草食みて、牧場にあり
今し巷に飯りゆく
かろがろと足躍らせて
この駒ぞ、汝が柩を曳きて
しづしづと歩み運ばん

……

（メーリケ「旅の日のモーツアルト」石川錬次氏訳）

伊東は牧師詩人メーリケの書いたモッツアルトの伝記小説に、自分も伝記作者になりたいと云ふほど感激してゐる。折からモッツアルトの旅の日のやうな絶好な秋日和。プラーグへの旅路を想はす野を求めて伊東はさまよったのだ。モッツアルトのメーリケ。ゲーテとの対話を綴った秘書エッケルマン。或ひは『書簡と作品から見たヘルデルリーンの生涯』を書いたヴイル・ヴェスペル。これらの数少い伝記作者の面影が、どんな秋晴れの空にも、探せばどこかにみつかる忘れ雲ほどに、伊東の胸に浮んだかもわからない。そして伊東が地に曳く突ッかけ下駄の響きで、先に掲げた「運命の歌」が、韻律を帯びて口に上ったに相違ない。その韻律とは、ドン・ジュヴァンニーの終曲、稀代の色魔を地獄に招き寄せる亡霊達の合唱のそれであったにちがひない。

いなかの母

池沢　茂

『平吉さん、まあいちど、持ってみてごらんな。ずいぶん重いですやろ』と義母はぼくにわざ〳〵、みやげの荷物をさして見せた。

ぼくの家に来るとき、かの女はたいてい、その季節にしたがって、田畑や山でとれるものなど、八百屋の店がひらけるほど、いろいろと、みやげにする。そのときは、サツマイモが大部分で、ヤマノイモ、ジャガイモ、ゴボウ、青菜などがまじり、米や麦もあったから、とくに、かさが大きく、重さもたいへんだった。大きなふろしきづゝみが二つと、ボストンバッグが一つある。義母はこのふろしきづゝみ二つをひもでくゝり、ふりわけにして肩にかつぎ、あいた手にボストンバッグをさげて、神有電車の長田駅から、ぼくの家まで、バスにも乗らず、いくつもの長い坂を越えて、ずっと歩いてきたのだ。

『どうです、なんぼ平吉さんでも、これだけのものは持てませんやろ』と義母はまた言った。

『持つだけやったら持てんことないけど、長田駅から、こゝまでは、とても無理ですねえ。そんなえらい目せんかて、タクシーでもとばしてくればいゝのに……』

『タクシーなんて、もったいない、わたしはどうせ山のなかに住んでるんやから、少々重いもの持って坂路をあるくぐらい、なんともあれへん……』

そして義母は「タクシー代をけんやくしたかわりに」というように、妻をよんで、ぼくにもそれとなくわかるように、いくらかの小づかいをわたした。ぼくは笑顔をつくって、くりかえし礼をのべた。が、なんだか、その自分の笑顔が、だん〳〵不自然になってゆく

のだ。義母は、じょうだんなど、めったに言わない。じっさい山のなかの農家で百姓をしているから、ちかくの町へ、ちょっと買物にゆくにも、片道三キロほどの山坂を、のぼったり、おりたり、せねばならない。だから、義母はただ、事実をそのまゝ言っているにすぎない。しかし、ぼくには、なにかしら、ひっかゝってくるのだ。たとえば、恩に着せられているみたいな気がしてくるのだ。ぼくはだん〳〵気がおもくなった。まずしい生活だから、食糧など援助されるのは、どれだけありがたいことかしれない。これまでの、もっと収入のとぼしかった時期を切りぬけてこれたのも、じっさい、義父母からの援助があったればこそであった。そのことはぼくも自覚していないわけではない。それでも、非常に恩に着なければならぬとなると、サツマイモやジャガイモなどの山をながめながら、ぼくの心は、ふいに黒く、かげってゆくのだ。義母はしかし、ひと休みすると、じきに、四つの男の子をあそばせに、手をひいて、でかけていった。

ぼくはちょうど、週に一度の、泊りあけの早帰りの日で、帰ってきたのは、ひるすぎだった。いつもなら、この子が『おんもへ行こ。おんもへ行こ！』とせがんできかないので、ちかくの小山や、かなり遠い谷川や池まで、あそびに連れてゆかねばならない。

『やれ〳〵。おばあちゃんが来てくれると、大助かりやなあ』とぼくは横になった。

妻はふとんを敷いて『しばらく、やすみなさいよ』と言った。

夜業をして泊ってきた睡眠不足と疲れが出て、ぼくは、そのふとんのなかで、いつのまにか、ぐっすり眠っていた。目がさめると、チリコン〳〵、ジー〳〵と、にぎやかな音がしている。義母が、赤んぼの女の子のために、オウムがとまっている鳥かごの付いた、ぐる〳〵まわるオルゴールを、男の子のためにジープを、それ〴〵買ってきていたのだ。ベッド代りのテーブルに寝ている赤んぼのうえに天じょうから、そのオルゴールをつるし、ねじをかけて、チリコン〳〵とまわしながら、義母と妻が、しきりに、はしゃいでいる。その足もとで、男の子は、ジープをおして、あそんでいる。ぼくはいゝ気持でねむっていたのが、はずかしい気がした。義母はなにも、恩に着せようなどと、していたのではない。ぼくが自分で、そのように、いやに、かんぐっていただけだった……。

『おばあちゃんはじっさい、よくしてくれるなあ。ぼくにはとても、あのようには……』

言いわけみたいに、ぼくはあとで、妻に言った。すると妻は

『なんにも気にすることあれへん。おかあちゃんの道楽やわ。子どもがかわいゝから、あゝして、いろ〳〵するのが、たのしいのよ』

『道楽？　たのしいて、な……』

ぼくは妻を見て、あかるいその笑顔に、急に、うらやましくなった。そして、妻は実のむすめだからだな、と思った。が、その一方やはり、なにかしら、いぶかしい気がした。もっと子どもをかわいがってくれ、妻を大事にしてやってくれ、家のために勤めをまじめに続けてくれと、しきりに責められているみたいなのだ。

ぼくの実の母は、ぼくが小学校の四年生のときに死んだ。そのご二、三日したら、ぼくはふいに悲しくなって、十日ほどのあいだ、まいばん、寝床のなかに顔をかくし、声をしのんで、ぐっしより枕をぬらした。そのくせぼくには、母の思い出は、かぞえるほどしかない。死ぬまえも、何年かのあいだ、結核のために、ずっと病床にあったからだろう。だから、ぼくには、ほんとうの母の愛情とはどんなものか、十分にわかっていないのかもしれない。もっとも、もっと将来に希望がもてたら、ぼくにだって、義母の愛をすなおに受けて、あまえたり、感謝したり、できるのだろう。

小鳥と倫理

小山　正孝

「さやうなら」

しかし彼女は彼の手をにぎりかへさなかった。さうして小型自動から下りた。ドアを開けはなしたままで、彼はもう一度

「さやうなら」

と言った。彼女はうなづいたが、いつもするやうにはしなかった。彼女を路の上に置いてドアを閉めると小型自動車は走りはじめた。ふりかへったが、自動車のうしろにはもう別の自動車が走りよって来てゐて、彼女の姿は見えなかった。交叉点を越した所で、

「もういいよ、下ろしてくれたまへ」

七十円の料金を百円札で払った。運転手はポケットをさぐって三十円のつり銭を出して一寸不機嫌さうだった。運転手は不機嫌だったにちがひない。彼にはそのわけがわかる気持がした。彼は自動車の走るあいだ、ずうっと彼女の腰に手を廻してゐたし、彼女のほほに顔をすりよせてゐた。昼間だといふのに彼女のくちびるを奪ふかのように彼のくちびるをぐっと寄せたりした。

さういへば、ある一瞬に、彼女の顔が急にぐっとひきしまった。それからの彼女の態度が変ったのだ。

「今度逢へるのはいつだらう。来てくれよ。必ず来てね」

彼女の耳に口を押しつけて彼はささやいた。運転手はずうっとそんな事がらを感じてゐたのだ。背中の方で、男の手が女のスカートの下にのびてゐる事なんかを感じてゐたのだ。

機械の顔

浅野　晃

負けたのではありません　勇気を出して
考へたのです
旗も棄てました　つめたい眼で見送られ
ました
敵はどこにゐたのか
ぼくはなぜ敵を求めてゐたのか

ひまはりをうつくしく描いた画描がゐま
したね
ぼくも絵筆がにぎりたい　旗竿をにぎつ
てゐたこの手で
さうしたら何を描くか

どんよりした天気の時には、走る自動車から見た場合に、外の通行人の動きがはっきり見える。天気のいい日には、太陽の乱反射でかへって色どりだけがはなやかで、アスファルトの上はゆらゆらとゆれてゐるものなのだ。どんよりして曇ってゐると、色がしづんで、男のひたひのしわまでがすぐ近くに見えるのだ。自動車が走ってゐる時には、中までのぞき込まれる位に近く感じるのだ。実際には中からはよく見えて、外からは見えないのだが、外の風景や人物が近く見えるだけなのだ。彼は運転手にわかってもかまはないと思った。

「ああ、キッスがしたい。抱きしめたい」

彼はさっき彼女が、

「今日は、どうしたのかしら。なんだか気持がわるくなって」

と言ってゐたのを思ひ出したが、その、表情の変化がおこった時には、それをさほどとも考へなかったのだ。

彼女が下りてしまって、そのあと、彼自身も自動車から下りた時、急にああ、もしかすると、彼女はどうかしてしまったかもしれない、と考へた。

七十円の距離を自動車に乗ったのは彼女の家の出来るだけ近くまで送るためにした事

だ。走り去る車の中の人間と、車から下り立った人間との関係が、すぐに人ごみにまぎれてしまってわからなくなってしまふにちがひないからだ。二人がつれ立って歩いて来て、別れる場合よりも、ずっと人目に立たないのだ。彼が工夫した別れの方法なのだ。せまい自動車の中で彼の膝の前を通る彼女の太ももの感じはおまけみたいなものだし。それに、自動車の中では、相当に、二人の肉体は近づく事が出来るのだ。運転手も機械の一部と思ったり、二度と同じ車に乗る事もあるまいと考へれば、そこは彼と彼女の天国でさへあるのだ。腰から下は外からは見えない。

彼は今自動車で走った路を逆もどりして歩いた。もう一度交叉点を横切った。走り去る自動車の中をのぞく事がどんなに稀れであるか。そこでためす事が出来た。安全だ。彼は彼女にもう一度逢へるかもしれないと考へてゐた。

ふらふら気持わるさうに、青ざめた顔をして歩いて来る彼女を見出したならば、肩をもたれかけさせてやって、しっかりと支へ、もうかまはないから、彼女の家まで送って行かうと思った。彼女の夫にわかってもかまはないとさへ思った、人ごみの人の顔。流れるやうに人間が彼の方に向ってどしどし歩いて来

ぼくには花は描けない　ひまはりはとて
もむつかしいから

犬ですか　月に吠える犬ですね
あれは怨恨からではない恐怖からです
ぼくは恐怖も棄てたのです
ぼくはなぜ敵を求めてゐたのか　敵はど
こにゐたのか

音楽も何もなかった　何かをむりに虐げ
てゐたのです
さうだ　みんなの顔を内側から写してや
らう
犬はいやだ　それよりか赤い道か動くけ
むりが描いてみたい
さうだ　機械の顔を描いてやらう　機械
の顔を

る。それは行列のやうだ。行列はとぎれる事がない。人が歩いてゐる。無数の同じやうな顔が歩いて来る。彼女がもしその中に居たらすぐわかるであらうに。彼は一つ一つの顔をたしかめた　彼女の顔は見出せない。さっき彼女を下ろした場所に来た。丁度その頃、人ごみに一区切りついて、そのあたりを通る人はまばらであった　そこにも彼女は居なかった。

「君は大丈夫だったのか。君は、もう、家の門をくぐったのか」

彼は彼女のまぼろしに語った。自分の心のやさしさを彼女に見せられなかったのが残念であったが、どうやら家にたどりついたらしい彼女を想像して安心した。どんな風にして家に帰ったのだらうか、すうっと、しづかにそっとかくれるやうにして門を入ったのだらうか。居間に入るとすぐにぐったりと坐ってしまったのではないか。

「ああ、私頭が痛くって。さうして、はきさうで、むかむかして」

彼女の夫が、

「それは大変だ。どうしてだらう。あんまりむし暑いからではないかい」

心の中では、あれが近いからだらうとか、ちえっ、外出する時には勝手にしておいて、いそいそとして行きやがるくせに、帰るとすぐにこれだよ、とか思ひながらも、まさか、彼と抱きあったあととも知らないで、にくみながらも口に出さないで、別の事を言ってゐるのを想像した。

彼は彼女が自動車から下りた場所で、一寸の間、立って空を見上げたりした。

「君は、あの時、よほど気持がわるかった

のだな。さやうならも言はなかったね。来てくれよね、この次に逢った時には、もっともっとやさしくしてあげる」

とつぶやいた、ほんとに、走る小型自動車の小さい窓から中を見る事はさう簡単には出来ない。よっぽど意識的にか、又は、よっぽどの偶然によって見えるだけだ、小型自動車の中の男と女はなかなか人に見つかるものではない。

彼女は彼女の小さい鳥籠に入ったであらう。今頃は、彼女は彼女の小さい鳥籠の中で何事もなかったやうに、あるひは、美しい声でさへづってゐるであらう。彼は、彼の鳥籠が急に恋しくなった。

「帰るとしよう」

まっしぐらに彼は彼の鳥籠に帰った。そこで彼は言った。

「今日、僕はこんな事を考へたんだ。日本にはもう一度ファッシズムが訪れる。必ずと言っていいな。そして、みんなは、そこに救ひを見出すのだ。多くの人がそこに救ひを見出すのだ。さう簡単な形では現れない。はっきりそれとわからないやうにして、允分の現実的な立派なものとしてやって来る。左翼のやうな形かもしれないし、右翼のやうな形かもしれない。どんな風にしてかは、わかる位なら誰も苦勢しないし、あとで泣きべそなんかかくものか。とにかく、正体がさうしたものが日本を訪れるね。この頃みたいに、すべてが下降してゐる状態では、上昇するものなら飛びつくよ。ただ、どうも、はっきりしてゐるのは、どっちが、よりよい洋服を着せてピカピカする武器をにぎらせてくれるかで決まることだ。人間はそっちにつくよ。興味を持ち希望を持ち、いそいそとして、人間はそっちにつく。俺は平和と真実と、新しい経済機構とが望ましいなんて、わけがわからないこと言ってゐるうちに、だんだん分裂して、騒ぎが大きくなって来て、誰も信用しなくなってゐる瞬間、ぱつ、と手品のやうなあざやかさで、すべてが活気を帯びて大進軍になるのだね。僕はもう準備しようと思ってゐるのだ。戦争は必ずある。その前に日本は、もう一度組織された青年隊によって、人間的感情はまつ殺される。ブルトーザで荒地整理をするやうにして、彼等は僕たちをそこまで追ひつめるだらう。ぎゆフ、ぎゆフぎゆフ。それから押しつぶすだらう。前の戦争の時には、僕は内務班に入れられた時、二階になった寝台の藁蒲団と毛布と、小さい箱とを見て、そこで自分の生活が始まるのかと思った時に、畜生と思った。一方では、やれやれ、と思った。今度はあんな風に暴力的ではなく、ねこなで声かもしれないけどね。僕は内務班での暮しの心よさを思い出すね。起きて、ねむって、食べる。それでよかった。女は夢の中で現れる。今度、女房に逢ったら——もっとよくおっぱいをなめてやらう。もっとまくりあげてやらう。そのうち年月がたつと、結局の所はどうにでもなりやがれだ。絶望ではない。絶望といふ立派なものではなくて、他人を絶望におとし入れるといふ愉快な仕事が夫々にあたへられるのだ。僕は今度は、きっとこんな国だと思ふよ。友愛と倫理の確立といふ事にしてね、何か一つ大きい落し穴をこしらへてあるんだ。そこに誰かが落ちこむのを待つんだ。友愛関係でゐるんだ。それまでは全体がね。そして、一たんさうした事が起ったら、そいつを絶望させるやうにして、土足でそいつをけっとばして、大いにたのしませてくれる。つまり、ファシズムは快感をともなってやって来る、そして、最低の生活を保証してくれてね。大へんいい形でやって来るわけだ。その気になればね。ただ、段々に、その輪が小さくなって行って仲間が少くなって、仲間から外される者が多くなるのだ。そのうちに戦争がはじまるだらう」

彼は妻の顔を見た。まあ、戦争なんていやだわね。妻は彼の霊感についての批評はしなかった。妻は別の事で、大変に強い意見を持ってゐた。

「女性の立場から言へば、妻の座を奪ふ人間程憎らしいものはないわ。戦争はいやだけれどさ、主人が死なときやいいわ。もう一度必ず妻の所に帰してくれるのならば、三角関係でよその女の人に取られてしまふのよりはまだいいわね」

「へえ、それでは、妻たるものは、別の意味で、毎日戦争状態か」

「さうよ。あなた、駄目よ。浮気しちやいやよ。ひどいからね。この頃の若い人って、すごいから。奥さんのある人だらうとかまはないんですって。何と言っても倫理の確立だわ。夫と妻と最後までいっしょにすごすといふ原則が一番だわね」

「君の言葉にしたがふと、もし、僕がファシストだとしてだね、世の奥さん方に、亭主は絶対に汝のもとにもどすと約束すれば、それで相当の支持を得られるわけか」

「確実にさうならばね。嘘ではいやよ」

「ふうん。一夫一婦を原則とするのはそこから来てゐるのかな」

「原則だけではいやよ。ほんとにさうでなくっちや」

今や彼の鳥籠は平和であった。

彼女のスカートはその日はごわごわした布地で出来てゐた。扇風機をかけながら抱いてゐても、彼の手がスカートにふれると、それは扇風機の音よりも大きいごわごわした音を出した。小さい室であったが、ふすまの向ふ側にはあるひは他人がゐるかもしれないので二人はただ抱きあってゐるだった。

はじめ窓が開いてあって、外にはずうっと真直ぐに道が見えた。彼は窓をしめた。道は見えなくなり、向ふからこっちに向って歩いて来てゐた中年の白いワイシャツ姿の男も見えなくなった。彼は彼女が窓の外を見てゐたのを知ってゐたので、

「あの太った男は、まるで僕自身みたいな気がするな。僕が向ふから来るわけだ。今や僕は消されたね」

と言った。彼女は何故か急にわびしさうな顔になった。

「いや、そんなことおっしやらないで」

目を見つめあった。

「どうして」

「あなたは、ここにゐるあなただけ」

彼は言った。

「どうして」

「どうしてって、わけなんかないわ。そんな目で見たりしてはいやだわ」

「見つめてはいけないの。そんなら、かうするよ」

両手でひきよせた またひきよせて抱いた。

「抱いて」

だまって力を入れないで抱かれたままの彼女に彼は言った。

尾生

芳野清

虹も消えた　星座も消えた
投げられた花束はかへってはこないが
不安な春の風の吹くたびに
僕は思ひ出す
あの丘で交した　やさしい目ざしを
あの小川に聞いた　あつい吐息を
あたゝたい風の吹くたびに
何故僕の血は騒ぐ？
今　薄明の記憶の丘には　墓標が立ち
今　小川を流れてゆくのは
嗟嘆で青ざめた尾生の亡骸
私の老ひさらばえた影に
何故　春の風は吹く？

「抱いて。好きなら力を入れて抱いて」
かすかに彼女の両腕がしめつけた。
「君に逢へないでゐたあひだがつらかった。僕はつらかった。それでも、両手をのばせば、君がこっちを向いてゐた。それが、はじめの頃は、君はのばした両手の手のひらの辺にゐた。この前から、君は、ほら、かうやってゐる僕の手のひじのあたりに感じるのだ。いつでも、したたるやうな君が、ここにゐるの。抱いて、さうして、しっかり抱いてゐてくれないか。君の手を僕の背中に感じるよ。君の指が僕の背中を押さへる。さうすると、僕は立ってゐても歩いてゐても寝てゐても、いつも——もう、僕は手をのばさなくなってもいいのだ。君が僕を抱いてゐてくれるのだから」
彼女の首は彼の肩の上にあった。
離れた時、彼女にふらふらっとしたらしい。ためいきをついた。
「ああ、なんだか気持がわるいの」
「にんしんか」
「意地わるう」
さうなったらどうしたらいいのだ。彼にはわからなかった。彼にとっては彼女と逢ってゐるのが一番生き生きとした時間をすごす事であった。生きてゐる。生きよう。生きよう。
彼は彼女の目を彼の心の中にしまひ込んだ。
二つの鳥籠は空中に色どりあざやかにぶら下げられ、その中に小鳥はゐる。全部で四羽といふわけか。時々、その中の二羽が飛び出しては羽を押しつけあふ。
彼女は自動車から下りた時、ほんたうに気持がわるくなってしまった。立ってゐられない程だった。しやがみさうになった。へどを吐きさうだった。胸にこみあげてくるのはたまらなかった。口の中をぐうっと押しつめてきたないものを押さへつけた。小型自動車の戸が閉められて、彼の顔をその小さいガラス窓の中側に見た時、口の中にもどしたものがすごい勢ひでぶっと、その窓にひっかかりさうになる程だった。お腹の中がぐるぐると廻りはじめて、下痢をしさうであった。彼女はたまらない思ひだった。
「何がわるかったのでせうか」
自動車が行ってしまった。小粒の雨が一粒彼女の頬に当った。それを、自分の流した涙のやうに感じた。つめたい雨が、彼女に一本の注射をしたやうに、彼女に、ふと、自分の夫の事を思ひ出させた。
「何をしてもいいのだよ。お前の気がすむやうにしたらいい。どうしたの。どうしてお前はそんなにでたらめなんだらう。その人が好きなの。その人とそんなに逢ふだけでもいいの。かまはないよ。知らないふりをしてゐるよ。ただ、二人の結婚だけは崩さないやうにしようね。結婚したのだからね。気持がわるいのなら、僕の手の中に吐き出してしまひなさい」
彼女は女だから、便所にだけはどうしても入らなければならない。昼間だから、男でも便所に入らなければならない。彼女はきちがひのやうな気持になった。彼女は世界がぎらぎらと攻めて来るやうに思った。たまらなく走り出してしまひたい。どうでもよかった。彼女は見知らない家にどんどん入って行った。
「どうか、お貸し下さい」
さう言った時には彼女はその家の畳の上にあがってゐた。そして歩いてゐた。異様な彼女の顔色と動作を見て、店のおかみさんがすぐに事情を察した。大きい声で、
「突き当ったら左側」
と叫んだ。おかみさんは彼女の後からすぐついて来た。戸を閉めた。入ると、上と下とからすべてがはげしい勢ひで出た。彼女はすべてを出してしまった。青ざめた顔に血の気が少しもどった。彼と食べ、彼といっしよに飲んだものが次々と出た。どろどろになって

異臭がついてゐた。しぼり出した。まるで、彼があんまり強く抱きしめたのでしぼり出されるかのやうに、きりがなかった。いつまでもつづいた。そのあひだずうっと、便所の中で、はじめて入ったよごれた便所の中で、彼女は、いまさっき彼女の肩の上にあった彼の顔を感じてゐた。彼女の背中に廻された彼の手を感じてゐた。少しづつ、強くなる彼の手の力を感じてゐた。
「仕方ないわ。もしかすると、愛っていふのは、かういふことなんだわね」

鷗外の「寒山拾得」

山根忠雄

台州の主簿（日本の府県知事ぐらゐの官吏）となった閭丘胤が、前任地長安を出発するとき、乞食坊主の豊干に、鉄鉢の水を突然頭に吹きかけられて、頭痛を癒してもらったその序でに、天台国清寺に住む禅門の傑物——「寒山拾得」の名前を初めて教へられる。
さういふ因縁で、閭は台州へ着任してから三日目の朝、早速「兎に角虎のゐる山」「天台一万八千丈」の国清寺をさして出かけて行く。期待に胸をふくらませながら、いよいよ山門に到着。道翹といふ案内の僧に二人のことを訊ねると、拾得は僧どもの食器洗ひ、寒山はその残飯拾ひといふ仕末……。何だか狐に化かされたやうな気持になりながらも、さて二人のそばへ進み寄り、
「そして袖を搔き合せて恭しく礼をして、『朝議大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋閭丘胤と申すものでございます』と名告った。」
すると、
「二人は同時に閭を一目見た。それから二人で顔を見合せて腹の底から籠み上げて来るやうな笑声を出したかと思ふと、一しよに立ち上がって、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が『豊干がしやべったな』と云ったのが聞えた。」
そのあとには、驚いて二人を見送ってゐる閭と、真蒼な顔をして立ちすくんでゐる道翹の周囲に、ぞろぞろと来てたかった僧どもの姿を点出して、あっといふ間にこの短篇は終ってゐるのである。
寒山拾得の二人が、人々をあとに残して、すばやく立ち去ったと同じやうに、作者鷗外は解決を読者に任したまま、あざやかにこの作品をさっと切り上げてしまってゐる。われわれ鑑賞者はめいめいの感覚でこの作品を理解しながら、いはばそれを補足的に再創造しなければならないのだ。
私がこの小説を最初に読んだのは、高等学校の頃のことだが、今も不思議に親しく耳底に残ってゐるのは、
——豊干がしやべったな。
といふ寒山の言葉だ。
この短い言葉に注意しよう。傾聴しよう。これが恐らくこの小説を解く「鍵」であるに違ひない。
この寸言が、十数年の歳月に耐へて、私の所謂「忘れられぬ言葉」となってゐるのは、一体なぜだらう？
寒山拾得の豊干に対する、深い親愛の情がこもってゐるからである。
「全体世の中の人々の、道とか宗教とか云ふものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、唯営々役々と年月を送ってゐる人は、道と云ふものを顧みない。これは読書人でも同じ事である。勿論書を読んで深く考へたら、道に到達せずにはゐられまい。しかしさうまで考へないでも、日々の務だけは弁じて行かれよう。これは全く無頓著な人である。
次に著意して道を求める人がある。専念に

道を求めて、万事を抛つこともあれば、日々の務は怠らずに、断えず道に志してゐることもある。儒学に入っても、道教に入っても、仏法に入っても基督教に入っても同じ事である。かう云ふ人が深く這入り込むと日々の務が即ち道そのものになってしまふ。約めて言へばこれは皆道を求める人である。

この無頓著な人と、道を求める人との中間に、道と云ふものゝ存在を客観的に認めてゐて、それに対して全く無頓著だと云ふわけでもなく、さればと云って自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がゐるやうに思って、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して云って見ると、道を求める人なら遅れてゐるものが進んでゐるものを尊敬することになり、こゝに言ふ中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶それをさし向ける対象が正鵠を得てゐても、なんにもならぬのである。

「盲目の尊敬では、偶それをさし向ける対象で正鵠を得てゐても、なんにもならぬのである。」と鵠外はいってゐる。寒山拾得の二人が閾を一目見て、腹の底からこみ上げて来るやうな笑ひ声を出したかと思ふと、一しょに逃げだしたのは、このためである。そもそも閾が二人に会ひに来たのは、盲目の尊敬によるものであったから。

しかし、着意して道を求める人同志の間には、真実の尊敬が成立する。逆もまた真であらう。即ち真実の尊敬が成立するのは、着意して道を求める人同志の間である——と、寒山拾得、豊干の三人の場合は正にそれである。

真実に道を求める人同志の間に流れる、美しい親愛、信頼の情——これが、この短篇を貫くテーマでもあるのだ。芭蕉はそれを「秋近き心の寄るや四畳半」と歌ってゐる。

このやうに、この小説は読者の省察を要求する。「読めばすべてがすぐに解る」といふ水ましされた安易な作品ではない。読者に抵抗を感じさせる凝縮された作品である。余情や暗示を残す、このやうな小説こそ、人々から深く愛せられる、不滅な完璧の作品といへるのである。従って、その取扱ひも鄭重でなければならず、決して一時的な感動による、単なる印象批評であってはならない。鵠外の「寒山拾得」は、十数年の歳月に抗して、私の心に絶えず生きつづけて来たのである。

編集後記

スリルに富んだスピード感、どぎつく盛りたてられた現代風の危機意識……しかも赤帯の直訳語をもてあそぶだけで、根の浅い観念と抜け目のない技巧で飾っているにすぎない。ぼくらは追いつめられて、ひとり、しずかに、くちごもり、歌っている。

六月一日所用で上京したついでに東京在住の同人諸氏に久し振りで出会った。多忙なので、初め田中、小山両氏にだけ会ふつもりだったが、連絡のつくところは田中氏が連絡をつけてくれたので、新宿の高野フルーツパラーに集ったのは、田中、小山、林、西垣、石口諸氏の他に女の人が二人までゐた。大阪にゐた頃より田中氏が若やいでゐるのに驚いた。故郷でもない東京にアト・ホームを感じてゐるらしかった。大阪で折った詩筆を再びとりだしたとのことだった。翌日大阪の産経会館で新しく同人になった石浜氏の結婚式兼披露宴があった。この席で初めて藤沢桓夫氏や大朝の吉井英治氏に出会った。田中氏と同じく、故郷でもない大阪に、僕は近頃なんだかアト・ホームを感じだしさうである。

今度、杉山平一氏が同人に参加された。

果樹園 第十八号 (毎月一回一日発行)
昭和三十二年七月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼発行人 小高根二郎
京都市下京区猪熊通梅小路上ル
印刷所 文化時報社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園第十八号 昭和三十二年七月一日発行(毎月一回一日発行)池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所文化時報社 定価三十円

果樹園

第十九号

果樹園第十九号 昭和三十二年八月一日発行(毎月一回一日発行)池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円

書簡から見た伊東静雄 小高根二郎
雲・車 輪 浅野晃
白居易詩抄 森亮
額に手をかざす クロロフ
いなかの母の神経痛 池沢茂
岩に刻む 山根忠雄
蟬 上村肇
高松 福地邦樹
私のみどり 森房子
牛 岩崎昭弥
月に招かれた男 芳野清
かちどき橋にて 石口敏郎
東京吟 田中克己
少女 服部三樹子

書簡から見た 伊東静雄 (六)

小高根二郎

先に百合子さん宛、『プラーグへの旅路のモッツアルト』に感激した旨、伊東は書き送ってゐたが、その一ケ月後、今度は音楽通信を主とした書簡を書き送ってゐる。

「ゆり子さん、お手紙有難う。私の様な鈍根は、この年にやっと、音楽のそばまでたどりつけました。然も笑ひ事でない多くのギ性の後に。どうぞいゝ先生になってやって下さい。それでも、私の態度はずいぶん変てこなものでありませう。然し、ベーエトーベンに馬車の音ばかりをきく人もあるさうですから。

けれど、又、何でも私にはさうである様に、この音楽もその止揚だけが、私にとっては芸術であるのでありませう。

それにつけましても、こゝまでもよちよちとたどりつけたのは、ゆり子さんの暗示の恩も、だいぶあります。お世辞でなく感謝しております。いつかその内、得心のゆく様、私のチンプンカンプンな質問にも我慢して教へて下さい。そしてクロイ・ツェル・ゾナテに寄する「生物の道」といふ私

ジオヴアンニ・セガンテイーニ 「帰郷」

の詩も、いつかよんで下さい。

土曜日には、七条の博物館に、能の面みにゆきます。能の面は、日本人に天性与へられたデヒツンクをよく示す代表的な古典です。けれど、これからの日本人の役目はあれに、生々しいバールハイトをつけ加へて、大成することでありませう。

大へん会ひたくありますが、お内が、混雑してる様な気がして、行く元気が出ません。…後略…

二十三日夜、八時、宿直室にて　伊生

新しい意味で近しくなった、ゆり子さんへ」

（昭和五年十月二十三日大阪より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛封書）

伊東はこの書簡でベートーヴェンがヴァイオリンの名匠クロイツェルに捧げた、ヴァイオリンとピアノのための協奏曲、クロイツェル・ソナタに触れてゐる。この曲からヒントを得て「生物の道」と題する詩を書いてゐるが、同じこの曲からヒントを得てトルストイが書いた、不貞な妻を殺した男の告白小説『クロイツェル・ソナタ』とは、無縁な作品であらう。

又、伊東は日本の代表的な古典である詩(Dichtung)とし能面にも触れてゐる。この諸種の性格や感情の象徴として型どられた仮面。それに真実(Wahrheit)を附け加へることが、これからの日本人の役目だとしてゐる点は注目に値する。

この能面の展覧会が開かれるのは東山七条の国立京都博物館。南へ一つ次の停留所は今熊野。酒井家はつい眼と鼻の先である。ついせんだって、琵琶湖からの帰り、彼はこの東山七条の一つ北の停留所馬町に出たわけだった。すぐ近くまで行くのに、酒井家に立ち寄らぬ理由として、「お内が混雑してる様な気がして…」と逃げてゐるが、真実は、伊東の心情の方が混雑してゐて、訪ねるにしてはすっきりせぬなにかが残ってゐたからであらう

尚、この書簡の末尾で省略してゐるところは、東京文理科大学で開かれる四十日間の講習会に、伊東は参加する機会を与へられながら、その権利を放棄して僚友に譲った旨書いてある。中学教師としての栄達なんぞ、すでに眼中になかったからであらう。

先の書簡では、折角休日にして貰った土曜日も、伊東は大学に寄りついてゐないが、次の宮本氏宛書簡から察すると、時には大学にも行ったやうである。

「先日はどうも。愉快でした。今度の土曜日曜は、京都にゆきます（西鶴研究会）から、大阪に遊びに来るつもりでしたら、やめて下さい。一昨日二科にゆきました。二科はまづしき古典ですな。超現実主ギは手術室をのぞいては偽物ですな。」

（昭和五年十月二十三日大阪市住吉区阪南町東五丁目三〇武元内神戸市脇浜町一丁目三十一再製）（様脳会社内宮本新治宛はがき）

つまり、この年の嗣原先生の講義は井原西鶴だった。その西鶴の研究会には伊東は出席してゐるやうである。伊東と同期で大学院に残った野間光辰氏あたりは、恐らく、その研究会では中心となって活躍したであらうから、負けじ魂のきつい伊東は学友の成長度合を計る必要を感じたからであらう。

然し、伊東の目標は、宮立大学院でなく、あくまで詩立大学院にあったやうである。先の書簡に見えた琵琶湖行や博物館はその好例であるが、今度も京都岡崎の美術館に二科展を見ることを忘れてゐない。超現実主義の作品の中で唯一の真物として認めてゐる「手術室」は東郷青児氏の作品である。

又、先に伊東の音楽に対する関心が見えてゐたが、その関心は秋と共に深まってゐる。

「ゆり子さん

…前略…昨夜は、ＤＶＯＲＡＫの新世界よりに非常に感銘しました。今更めきませうが、あの森の様な新鮮な粗野と、自然の中に営まれる人間生活の、童話的な素朴な愛らしさ、そして、それをつらぬく真摯な緊

張は、私に近しく感じられました。チャイコフスキーの一八一二もきゝ、愛しました。生徒等が四五人で小グループをつくってゐて、各自交代で、私を主賓にして、会をひらいてくれます。昨夜は、その第二回でした。こんな幸福な日がつづけば、大阪も悪くないと思ひます。

今月は、もうすっかり金がなくて、京都にも出られません。けれど、今日の様な日に、窓から、野原をみてゐると、満ちたります。一度ゆり子さんも大阪に来て下さい

ルッソーの伝記を、京都の絵かきさんのために訳出してゐます。これは、私に大へん考へさせた人物伝の一つでした。

日曜日朝十一時　伊生

ゆり子さん将閣」

（昭和五年秋―推定―大阪より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛封書）

格別解説を要しない書簡である。唯、チャイコフスキーの一八一二と云ふのは、作品「一八一二年」のことである。つまり、同年モスコーを攻略したナポレオンが、図らざる灰燼作戦によって命からがら逃げ帰った、いはゆるロシア帝国万々歳の祝典音楽のことである

又、末尾でジャン・ジャック・ルソー（1712－1778）の『懺悔録』の翻訳をしてゐる由見えてゐるが、同著のことはすでに三年前の安代さん宛書簡に見えてゐた。つまり、岩波文庫本であらう……それを売って、信実の三十六歌仙を見に行ってゐた。ルソーの『懺悔録』に対する関心は、かなり永いものと見ねばなるまい。先に伊東はメーリケのモッツアルト伝記に感銘してゐたが、その気持がまた『懺悔録』に感銘せしめたのだらう。伊東の厳しい文学精神は一切絵空事の荒唐無稽は受けつけなかったのである。さう言へば、卒業論文の眼目も「芸術的主観に基く写生主義」であった。さうした気持は、二年半後にはもっと明確になる。

雲・車輪

浅野　晃

あるとき雲は忘られた溝に横たはった
雲は療養所の窓に火花を散らす
それが消えて月夜である
光はライオンの檻にさしこむ
ライオンの仔が
まだ見ぬジャングルを夢む
そして吼える
眠ってゐる東京の何百万の人間の眠りが
重くかかってこの都会の地盤を沈下させる
夜行の車輪が碓氷の胎内に突入する
三十女の部厚な胸に故郷がゆられゆられる
インドから来た白牛は
長野善光寺境内で
翡翠のひとみに菩提樹の葉ずれを映す

ああみな今日の衣裳は脱いでも
しまった翅を見つけ出せない
夢だけだ翅をつけてゐるのは
ああだがなぜ君は帰って来た
石女の巫女に恋慕して何になる
松風の跡を弔って何になる
キルギスの牧童は角を吹き
ニグロの女生徒は合唱し
マホメットは叫び
ファラオはめざめる
雲もどこかで盛り上り
どこかでいまこそ火花を散らす
わたしの持ち古した時計の針が
落ちる
そして地球この車輪は
廻る
お早う　今日は　お晩です　お休みなさい

……
ついでがあったら君は新聞にかう書いてくれ給へ
あの男は日記と書信の外はヴェルケを信じてないって
……
（昭和八年『呂』四月号―エケードー）

つまり、事物（Sache）しか作品（Werke）として認めないといふわけである。

尚、百合子さん将閣の将閣とは、将軍閣下の略であらう。

伊東は昭和六年の正月を郷里諫早で迎へてゐる。諫早から帰っての百合子さん宛書簡に、伊東の第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』期に、重大な影響を与へたジョヴァンニ・セガンティーニ画集を故郷で入手した感激が述べられてゐる。

「ゆり子さん

又、大阪にもどって来ました。下宿のおかみさんが、おかがみ餅を机の上に、そなへておいてくれてたので、私の室も、お正月らしくあります。おぢい様のお内から、ことづかりものがありましたが、こん度の日曜まで勘弁して下さい。こんどの帰郷は非常に私の思想を変へました。客観的には何事もなかったのですが、私の心の中では、びっくりするほどの無形の事件がいくつもありました。

アンナ・カレニナは諫早までも持って行きましたが未だよみおはりません。然し私は、諫早で、ラプラードとセガンチニーの二人を知って帰って来ました。世紀末の画家です。特に私の持ってゐるセガンチニーの画集は、女であるゆり子さんにみせたくあります。…後略…

七日夜　静生」
（昭和六年一月七日大阪市住吉区阪南町中三の十より京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇酒井百合子宛封書）

こゝで伊東の思想を変へ、吃驚するほどの事件を心の内に巻き起こしたと云ふのは、途中まで読んだトルストイのアンナ・カレニナではあるまい。又、諫早で知った二人の画家の中、少くともラプラード（仏蘭西の風景静物画家1875―1931）の方ではない。それは、生涯をアルプスと取り組み、山上の清浄な光と霊気から、自づと印象派的な画法の啓示を得た、伝奇的な伊太利画家ジョヴァンニ・セガンティーニ（1858―1899）の方である。

セガンチイーニに関してはすでに大正十年刊行せられた佐久間政一氏の著書があった。が、伊東の入手したのはそれではなく、長崎への舶来物であらうか独逸版であった。決して鮮明とは言へないセピアのグラビア印刷であったが、代表的な絵と伝記が附いてゐて、そこから伊東は電光のやうな啓示を汲み取ったのである。

貧しい大工の子としてロンバルディアのガルダ湖畔に生れたセガンティーニ。五歳にして母には死別、アメリカに職を求めて海を渡った父とは久遠に生別。異母姉に育てられたが、その冷淡さから逃亡。放浪性と盗癖のゆゑに幾度か感化院である僧院を出入りした幼少年時代。この天涯の孤児セガンチイーニがどん底から渇仰したのは光であった。

二十歳で描いた「聖アントニオの合唱の間」と云ふ寺院内部を描いた作品では、高窓からその渇仰の光が燦々と流れ入ってゐる。この絵は画学校から銀賞をかち得ながら、光の追求に急なセガンチイーニの画技は邪技なりとして、やがて放校の運命に遭遇する。然し、孤児セガンチイーニにも差し伸べられた光の手があった。親友の妹である。マドンナのやうな卵型の面輪。山の湖の色を想はす双眸。豊かな金髪はせせらぎのやうに両肩まで波打ってゐた。この少女を得たセガンチイーニは豊饒なブリアンツァに棲むと、光と闇とを描いた。月光を背に、羊群を引き連れて家路につく牧婦は、彼の好んだモチーフの一つだった。やがて父となった彼は、光そのものゝやうな家庭の団欒の平和を、突如として掻き消す闇に着目する。五歳で母を失った彼は、その闇の悲しさが癒しがたく心身に焼き附いてゐたからであらう。

「父は死せり」と云ふ画題で、揺籃の中には乳呑児、さらに幼童を膝に抱いて茫然自失してゐる若い寡婦を描いた。

又、「空しき揺籃」と題して、空になった揺籃の傍、かけがひのない喪失の悲しさに、両掌で髪を摑んで慟哭してゐる母の姿も描いた

先の書簡で「女であるゆり子さんにみせたくあります」と云ふのは、恐らく、これら女人に待ち設けられた悲しい運命の絵を指してゐるのだらう。

やがてセガンチイーニは、さらに輝やかしい光を求めて、ロンバルディアの丘陵地帯からアルプスに移住する。海抜四千呎のサボニーノである。彼は山の清浄無垢な光に対応するため、絵具をパレットでは溶かずに、いきなり画布の上で調合する新技術を発明する。こゝで図らずも、仏蘭西の印象派の画家達とは違った道程で、印象派の画法を体得したのである。

この当時の作品に「休息」がある。遠く木柵の向ふに獣等のゐる農場を展望し、投げ出された長い鍬の傍で、まるでそれで身長でも測ると云ふあんばいに、長々とよこたはって農婦が午睡をしてゐる図柄である。この「休息」を眺めつゝ、五年後伊東は『日本浪曼派』昭和十年四月号に発表した「真昼の休息」を書いたのである。

木柵の蔭に眠れる
牧人は深き休息……
太陽の追ふにまかせて
けものらかの遠き泉に就きぬ
われもまたかくて坐れり
二番花乏しく咲ける窓辺に
……
第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』―真昼の休息―

セガンチイーニの光に対する希求は、こゝでさらに灼熱した。彼は妻と四人の子等を引

白居易詩抄（六）

森　亮

暮春

黄ないう鶯は折々啼くがそれはもう退屈してゐる。
梅に青い実がなってこれから眠らむところだ
春の景物が姿を消してゆくのが訳もなく悲しくて
わが家の東の園まで思はず足を運ぶ。
さかづきの用意はあっても独りでやるのは気が進まぬ。
こんな時だ、誰かが門の戸を叩いて呉れるといいにと私が願ふのは。

★

枯れた桑の木

道端に立ち枯れした桑の老木は痛々しい。
枯死がそれをおびやかし始めたのは昨日や今日のことではない。
見たところ表の皮は黄いろくて細々と命をつないでゐるが、
この木の心は言はば黒焦げで、うちらから腐ったものだ。
胸中に多くの憂へをいだく人もこれと同じこと、
彼を焼きつくすのは外からの火ではない。

註「暮春」の原詩は喜陳兄至（一の五五六）で、白居易四十四才の作と思はれる。原作は五言十二句から出来てゐるが、私の勝手な判断から此処ではその前六句だけを訳してみた。次の「枯れた桑の木」の原詩は枯桑（一の六六九）で、これは五十一才地方転出を希望して州の長官となり杭州に赴く頃の作品である。

き運れると、エンガディーンのマローヤに移ったのである。先の地より二千呎高い六千呎の高峻だ。稀薄な空気は彼の光に対する情熱を白熱のやうに澄化した。「理想主義なき真実は、真実なき理想主義と同じく無価値だ」と、彼は印象派的リアリズムからシンボリズムへと第一歩を踏みだしたのである。

その当時に描いた作品に「帰郷」がある。ヴェネチヤの展覧会で金牌を得、ベルリンの国民美術館所蔵の傑作である。遠くに皚々の処女雪をいただいた連峯がつらなってゐる。その裾野である曠野を、今しも馬車が轍を軋ませて進んでゆく。手綱を取る男は悲しみに打ち萎れてゐる。馬車の上の女は布で顔を覆って獻欷してゐる。彼女が離れがたく身を凭せてゐるのは柩であらう。その内には合掌をした愛児がよこたはってゐるのだ。その高地の風習として、人が死ねば谿また谿を越しても、故郷まで柩を納めに帰ると云ふ。そのための帰郷である。連峯の下、曠野の涯に尖塔を覗かせてゐる寺院まで、運ばれるのだらう

このセガンチィーニの「帰郷」をみつけた伊東の胸に、いきなり浮かび上ったのは、丁度三ケ月半前、感銘で読み終ったメーリケのモッツアルト伝の終結である「運命の歌」であったのだ。

若駒の黒き二頭の
Zwei schwarze Rößlein weiden
草食みて、牧場にあり
Auf der Wiese,
今し巷に帰りゆく
Sie kehren heim zur Stadt
かろがろと足躍らせて
In muntern Sprüngen.
この駒ぞ、汝が柩を曳きて
Sie werden schrittweis gehn
しづしづと歩み運ばん
Mit deiner Leiche;

この韻律は眼前にする「帰郷」の霊柩車の軋りと共鳴して、このメーリケとセガンチィーニの奇しき符号が、伊東に異常なほどの感銘を与へたのである。しかも、シンボリズムの白熱に燃え上ったセガンチィーニは、「生」「自然」「死」の三部作を完成するため、マローヤより更に高峻を攀じてシャーフベルフに達すると、帝王のごとくエンガディーン一帯を見下しつゝ雪中に倒れたのである。享年四十歳の若さであった。

このセガンチィーニの高邁にして、世俗に不染の芸術魂は感銘におのゝく伊東の胸を射たのである。セガンチニーの如く……。それは伊東の胸に決意を呼んだ。「こんどの帰郷は非常に私の思想を変へ……客観的には何事もなかったのですが、私の心の中では、びっくりするほどの無形な事件がいくつもありました」とあるのは、このことを指すのである。

この伊東の決意を、丸四年間、メーリケの「運命の歌」とセガンチィーニの「帰郷」が伴奏しつづけたのだ。昭和十年四月号の『コギト』に、それは、死としての帰郷の決意、運命の歌「曠野の歌」として発表された。

わが死せむ美しき日のために
連嶺の夢想よ！　汝が白雪を
消さずあれ
息ぐるしい稀薄のこれの曠野に
ひと知れぬ泉をすぎ
非時の木の実熟るる
隠れたる場所を過ぎ
われの播種く花のしるし
近づく日わが屍骸を曳かむ馬を
この道標はいざなひ還さむ
あゝかくてわが永遠の帰郷を
高貴なる汝が白き光見送り
木の実照り　泉はわらひ……
わが痛き夢よこの時ぞ遂に
休らはむもの！

第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』―曠野の歌―〔訂正〕先号三頁 Fruhlings は Frühlings。Vater und Sohne は Vater und Sohn の誤植。七頁の call は calls の誤謬。尚、伊東の読んだ『チェーホフの書簡集』は、独逸語訳ではなく、内山賢次氏訳、改造文庫『チェホフ書簡集』であったことが森亮氏の教示によって判明した。

額に手をかざす・・・

クロロフ

額に手をかざす！　それは
ほんの僅か死を遠ざけるばかり
首すじのくぼみに
感じる天南星の実
か細いこのバラは
指の下で枯れるだろう
さん然たる桜吹雪が　すでに
風にさらわれていった
いまやあてどなき唇！　それは
黙し　しずかに滅びようとしている
僕の亡霊があらわれるとしたら
快い風にもたれていこう
ゆらゆらとポプラがたねをおとし
タンポポの灯が消えるときは
みんな名前もなく
葬列にまじってゆくようだ
おぼろな滅びへの道を
とりいそぐように
光の中で力なくふるう
雄蝶　雌蝶
頭上のまっ黒なざわめきの中から
声がしたのを　僕は知っている
木の葉のざわめきに似た音が
そして感じる　額がくずれゆくのを
かすかに叫び声をあげながら
僕は空虚の中へ陥ちてゆく
ぴったり死と背中あわせしながら
そして感じる　僕はもはや生きて
いないことを

（たかはし・しげおみ訳）

いなかの母の神経痛

池沢　茂

ぼくは義母に、映画でも見てこないかと、すゝめてみた。それから、ぶら〳〵見物がてら、百貨店へでもいってみないか、とさそってみた。しかし義母は『さあ、なんぞ買わんならんものがあったら、行ってきても、いゝけんど……』と、やはり、はか〴〵しい返事をしない。

かの女はきのう、山のなかのいなかから、神戸のぼくの家まで、ひさしぶりに、出てきたのだった。サツマイモやジャガイモをはじめ、いろんな野菜、たまご、米や麦などをみやげにしていた。大きなふろしきづゝみ二つをふりわけにし、あいた手にボストンバッグをさげて持っていたが、大の男でも、よろけてしまうほどに、かさがたかくて重い。それを義母は、バスにもタクシーにも乗らずに、駅からずっと、あるいて、持ちはこんできた。かの女はもと〳〵、神戸のぼくたちの家へ来るほかには、めったに外出しない。いなかの家では、家事や、ふたりの孫たちの世話のほかに、やがて半世紀に近いほどのあいだ、ずっと、百姓仕事にばかり、精出してきている。

岩に刻む

山根忠雄

あざやかに壁にある
長い瀟酒な針の形
その日時計の影を見て
僕らは今更のやうに
太陽の美しさに気づくのだ
あざやかに土にある
われら四人の者の形
その一族の影を見て
僕らは今更のやうに
愛情の美しさに気づくのだ
その日時計の壁のやう
またその一族の土のやう
うつろふ僕らの人生を
大事に残してゐてくれる
大きな岩に刻むのだ

だから、ぼくにしたら、たまにたずねてきた都会の家で、ゆっくり足腰をのばし、のんびり遊んでいってもらうのが、なによりに思われる。まずしいぼくには、それぐらいのことしか出来ないけれど、義母にとっても、ひさしぶりに都会見物でもするのが、いちばんの保養になるにちがいない。

『たまに山のなかから出て来たのに、家のなかにばかりいたら、都会へ出てきたかいがありませんねえ』

かさねてぼくは言ったが、義母には、口さきだけのお世辞みたいで、かえってカンにさわったかもしれない。急にぼくの妻をよんで、

『松子、おかずにするようなもん、もう無いんやろ。わしはこれから、ちょっと市場まで行ってくるさかいな。なんぞ欲しいもんあるかいな』

『さあ、べつにあれへん。なんでも有りあわせのもんでよいわ。あまりたかいもんは買わんといてや。やすい魚で、あたらしいのんがあったら、買うといて』

『そんなら、行ってくるぜ』

義母はついと、ぼくからはなれ、幸吉の手をひいて、市場のほうへ、でかけていった。口が特別におくれているせいか、四つを越しても、ひとりのあそび相手もなく、いつも親にばかり付きまとっている幸吉だが、義母には、もう、なついている。おもてへ出られるというので、急に元気になって、義母の手を引っぱってゆく。ぼくにも、妻にも、しばしば手におえなくなる幸吉を、しばらくでも、安心な肉親の手にゆだねて手ばなすと、すうっと、一時に、肩の荷がおりてしまう。

ながいあいだの習慣で、義母はなにかしら、いつも働いていないと、気がすまなくなっているのだろう。そうでなくても、夫婦と子どもだけの、ぼくたちの家に来ると、あれも、これもと、ゆきとゞかない点ばかりが、目につくのだろう。そうして、なにやかや仕事をさがしだして、しきりに文句を言いながら、つぎからつぎへと働くのが、やはり、愉快でいられるのかもしれない。その晩、ぼくが勤めから帰ってきて、門をあけると、

『おかえりなさい。おそかったですねえ』

と義母が、玄関の格子戸をあけるのももどかしく、笑顔で、ていねいに、あいさつした。ぼくが帰ってくるのを待ちかまえていたにちがいない。そとの門をあけ、石だゝみをふむ靴の音を聞くやいなや、かけだしてきたのだろう。顔には、おしろいが、ぬられている。なが年のあいだ百姓をして日にやけるにまかせ、けしょうなど、めったにしたことのない

蟬

上村肇

男の唇は裂けて兎唇であった。
そしてしゃべる言葉は早口で
慣れるまではきゝとれ難かった。
然しその言葉がわかると
耳を覆いたくなる程嫌であった。
それは不平に充ち満ちた言葉であって
この世に生を受けるまでの地下の暗さと
それに比す僅かな地上幾日かの陽の目と
それにつゞく不平、悲しみ、憤り
羨望と呪いと——
それを夏の陽の烈しさをたてとして
間断なくしゃべりまくる
この男の云うことを夢うつゝにきいて
静かに眠り得る人こそ幸いなれ
私は同情の余りこの男に近づき
顔に尿をかけられて逃げ去られたことがある。

義母だから、よけいに目立つ、妻から手順をたしかめておいたらしく、ぼくが着がえをし、便所へいっているあいだに、湯をわかし、洋服をかたづける。ぼくが口をすゝぎ、顔や手足をあらっているあいだに、食ぜんをとゝのえる。そして、たいせつな目上の人にたいするみたいに、ごちそうをならべて、つゝましく給仕をはじめた。

ぼくはちょっと、かたぐるしくなった。それほどまでにしてもらわなくてもと、きゅうくつに感じた。が、一方、やはり、うれしく、安心な気もした。

ぼくはその日、おそ番だったが、仕事がいつもより一時間ほど早くすんだので、それだけ早く帰ってきた。仕事がすむと、ぼくはいつも、じき、まっすぐに、家に帰る。しかしその日は、義母の手前、ちょっと、ぐあいのわるい気もした。勤務時間も大してながくなく、いかにもらくをしているみたいに思われはしないかと、はゞかられたからだ。ところが義母は逆に「おそかったですねえ」と言って、その全身に、よろこびと感謝をあらわしている。ぼくは耳に故障があるので、勤めに、ふつうの人より、いろ〳〵つまらない目にあったり苦労したりするのを、知ってくれているからだろうが、ぼくのるす中、妻の松子が、なにかと、いゝように、吹聴しておいたからかもしれない。義母は、幸吉をはさんで、松子とならんで寝た。

ぼくはその翌日も、いつものとおり、おそくまで寝ていた。この日もおそ番で、ひるじぶんに家を出たらいゝ。ふつうの人の昼食が、だから、ぼくには、朝食になる。起きてゆくと、ぼくはしかし、はっとなった。義母と松子とが、お勝手の間で、たがいに、けわしく、言いあらそっていたからだ。

『サラリーマンの奥さんいうたかて、うちら、どこへも遊びにいかへん。百姓の嫁は、きたないなりして、えらい目にあうやろけんど、ひまになったら、よいふうをして、温泉でも、旅行でも、ゆっくり行ってこれるがな。子どもが生まれたかて、おばあちゃんがいてるし、よう見てもらえる。うちら、子どものことも、主人のことも、みんな、ひとりでせんならん』と松子は言っている。

『そんなこと言うなら、まあ一ぺん、百姓の嫁さんになってみいな。男とおんなじに、どろまみれになって働いて、おまけに、ごはんごしらえやら、せんたくやら、そうじやら、家のことは、みんなせんならん。それほど、えらいか。田植えのときやなんか、腰がまがったまゝ立たへん。そらまあ平吉さんは勤め

が新聞社やさかいに、朝や晩がおそうになって、ふつうの会社や官公庁みたいにはいかんやろ。そやけど、やっぱり、サラリーマンの奥さんよりいゝもんが、ほかにあるかいな』と義母は言いかえしている。

義母の家では、あとつぎのむすこに嫁をとって、その子がもう、ふたり出来ている。たぶんこの嫁のことが話題になって、そこから、母とむすめとの言いあらそいが、おこってきたのだろう。ぼくがお勝手の間にはいってゆくと、ふたりはしかし、やがて口をつぐんだ。そして義母は、腹立たしそうにしている松子をほうっておいて、ぼくのために、きのうとおなじように、いそ〳〵と、うれしそうに、食事の支度をはじめた。

ぼくは、義母に見送られて家を出て、ちょっと、心がはずんだ。義母はもう何十年も百姓をしているのに「サラリーマンの奥さん」にあこがれをいだいている。つまり、ぼくはもう勤めに希望をうしない、同僚たちにも追いこされてゆくばかりだけれど、そんなぼくでも、義母には、十分かゞやかしい存在なのかもしれない。すると、むすめの松子がぼくと結婚しているのは、母として、うれしい、ありがたいことにちがいない……。

その晩ぼくは、きのうと反対に、いつもより一時間ほどおそくなった。おなじおそ番でも、そうなると、二時間に近い差が出来てくる。ようやく終電に乗って家に帰ってくると、ちょうど夜半になっていた。そして、ぼくはまた、はっとなった。そとの門をあけると、玄関の格子戸をあけるよりさきに、まさかと思っていた義母が、きのうとおなじく、あわてて、すばやく、かけだしてきたからだ。見ると、お勝手の間に、裁縫の道具や、つくろいかけの夜具などが、いっぱいに、ひろげてある。妻なら、こんなときは、もうなれているから、子どもといっしょに早く寝て、いゝかげんなころに目をさます。ところが義母はずっと起きたまゝ、ねむってしまわないように、いっしんに裁縫しながら、いまか、いまかと待っていたのにちがいない。『おそかったですねえ』とぼくを迎えた義母の目のなかには、待ちくたびれた疲れと、なにか事故でもおこったのではないかと案じていたような不安が、色こくかげっている。そして、きのうとおなじように、手順よく、食事の支度をとゝのえ、給仕をはじめたものゝ、やがて、急にがっくりとして、そのまゝうと〳〵と、いねむりだした。奥の間では、妻の松子が、さっきから目をさまして、こちらを見ている。ぼくはちょっと目くばせして呼んだ。

松子は起きてきて『おかあちゃん、もう寝てよ。あとは、わたしがするから！』と言った。義母は、はっと目をさまし、やがて『あゝ、どうも、肩がこって、肩がこって……』と自分の手で、肩をもみはじめた。

ぼくはなんだか、責められているみたいな気がした。ぼくが立っていって、義母の肩をもめば、いゝにちがいない。しかし、わざとらしいような、てれくさいような、実のむすめの松子にたいして悪いような、そんな気もする。ぼくはたゞもじ〳〵して、結局、松子がしてくれたら一ばん無難なのにと、うながすように松子を見た。ところが松子は『よいというのに裁縫なんかするからよ。ねえ、あんた、もんであげてくれる？　おかあちゃん、もんでもらいなさいよ。うちの主人、衛生兵やったから、肩をもむの、なか〳〵じょうずなのよ』と言った。

ぼくは立って、義母の背後へまわり『あまり、じょうずでもないけれど……』とその肩をもみにかゝった。

義母はしきりに、遠慮し、恐縮して『大したことないさかいに、そないにしていたゞかいでも、もう結構……』としりごみした。それでも、ぼくや松子がすゝめるので『そんなら、着物がじゃまになるやろから、はだかになるのも、なんやろけど……』と、はだぬぎになった。顔や手足が黒く日やけしているわりに、白いはだをしている。

ぼくが聞きかじったところでは、あんまには、指や、こぶしなどのほかに、ひじや、てのひらや、タオルなども使う。そして、もんだり、たゝいたり、ふるわせたり、いろ〳〵にする。しこっている筋をさがしだして、そこには、とくに力をいれ、念入りにする。しかし義母は『あゝ、いゝ気持に、すいっとしましたよ。なか〳〵じょうずですねえ。なんや、おもとうて、いとうて、だるうて、いやな気持やったけど、急にさっぱりしましたよ。ひとばん寝たら、なおりますやろ。すみませんでしたねえ』と、いくらもたゝないうちに肩をおさめて、しきりに礼をのべた。

あくる日は、はや番なので、その朝、ぼくは、ふつうの家庭なみに、義母や妻といっしょに、朝めしを食った。家を出るとき、義母は玄関の板の間に手をついて『なが〳〵お世話になりました。こんどまた、ひまができたら、あそびに来ておくんなはれ。みんな連れだってでもよいし、ひとりでもよいし、幸ちゃんだけ連れてきてもよいさかいに……』と言った。

そしてその晩、帰ってくると、義母はやはり、もう、いなくなっていた。せまい家のなかが、なんだか、がらんとしている。四つの幸吉も、さびしそうにしていた。ぼくは疲れていたので、はやく寝ることにした。しいてあるふとんを見ると、これまでとは別の、あたらしいのと変っている。カバーがふるびて、ぼろ〳〵にいたんでいたのが、義母の手で、すっかり取りかえられていたのだ。えりにも、すゞしそうな水色の布が、ぬいつけてある。あたらしく清潔な感じに変った夜具のなかで、ぼくは、やすらかな、しあわせな気持がした。

ところが義母は、家に帰ってから、肩のこりが、ます〳〵ひどくなり、痛みも、ともなってきた。なが年のあいだ田畑の力仕事にはげんできたせいか、としよってから、とき〳〵神経痛がおこるようになっていたが、こんどのは、とくに、ひどい。それで、めったなことで薬ものまず医者にもかゝらない義母も、とう〳〵、ハリとキュウをたのんだ。ハリは五センチも六センチも突きさして、ぐり〳〵、かきまわすようにする。あ、あ、と悲鳴をあげずにいられないが、しんぼうして受けとおすと、なおってしまうのだそうだ。ところが逆に、義母はその晩、高熱を発して寝こんだ。痛みも、かえって、いっそう激しくなって、とう〳〵二晩、ほとんど一睡もせずに、うな

高松

福地邦樹

梅雨のはれまの夜の市なれば
ひとびとはなまめかしく集い来て
アセチレンの青い火影は
がらくたオモチャと子供達をてらし
きららかな千の金魚に照りかえし
花さかせて待つ植木屋の一角で
幻のように吸収された
異郷が美しいのは
これはどういうたくらみなのか
舌たらずの方言であんなに器用に笑い
買わぬ着物をいじってまわり
小一時間もかけてうなぎ一匹釣り上げ
やがて私も
彼らに体よく拒絶されないために
そのゆるやかな逍遙に歩調を合わせる

りとおした。起きるまでに一週間ほどかゝり、その後も、めっきり気がよわくなって、これまでのような力仕事や無理は、あまり出来なくなった。ひろ〳〵したいなかから、せまい都会のぼくの家に来て、せっせと、こまかい裁縫仕事などに励んだのが、いけなかったのだろう。

私のみどり

森　房子

雨傘を新調しなければならないが、最う柄物は飽きてしまったと思った。昔は雨傘と言へば、皆黒ときまってゐた。雨の日は誰でも、その黒い傘をさしてゐて、如何にも暗い雨の日らしかった。いろ〳〵な色や模様を使ふやうになってからも、水をかぶった布の色は、乾いてゐるときとは違って冴えなかったから、はじめは色や柄が、雨の日にはふさはしくないと思ってゐたが、流行する一方で、今では殆ど誰の傘も模様と色を使ひ、自分も長い間使ったので飽きてしまった。傘屋へ出かけて行って撰んでみたが、気に入ったのは一向になかった。店員は「それでは……」といふやうな顔をし、

「これはまだ何本も出来てゐないのですが……」

と言って、色見本の布を出した。それはうすみどりいろの無地だった。

「あら、これならよささうね」と言って、私はそれに食指を動かした。うすみどりいろの無地を、骨一ぱいに張って、それに雨が降り、その下に顔があると、これなら青葉の下にでもゐるやうで、明るくさわやかだと思った。私は迷はずそれにして貰った。無地ものは元々好きだった。店員は、ナイロン製品だと言ひ、黄色と赤と、二本だけ出来上ってゐた傘も見せてくれた。どちらも鮮かできれいだった。それが出来上ってから、私は専らそれを愛用した。二つ折りの傘だったが、一二度さすと、骨の折れ目のところで布を射したらしく、一ケ所小さな穴があき、又布は折り目の跡が、はっきり筋になって残った。私はこの布は失敗だったと思った。けれども、そのみどりいろは捨てがたく、その折り目の跡や、穴があきなどしなかったら、一層どんなにすっきりとして、よかったらうと、傘をひろげる度に私はさう思った。或る日中河先生と御一緒になった雨の日があった。勿論私は、この傘を持って出かけた。すると先生も無地の傘で、しかもずっと濃く、青みがゝったみどりいろのものであった。先生もみどりがお好きなのだなと、その時思った。外へ出て傘をさす時、先生も私の傘をおみとめになったらしく

「いゝ　いろね」と仰言った。

私は、「先生のも、とても」とお答へした。そこは街だったが、並んで御一緒しながら、ふたりの傘が同色の濃淡で、かう揃ってひろがって並んでゐる様子は、端目にどんなであらうかと思った。いろ〳〵な色と人波の中で、これを目にする人があったらきっと、それは嘸美しく映るだらうと、私はひそかに、うれしいなと思った。

今年の梅雨は降り続かず、ぐず〳〵してゐる日が大分あった。或る日久し振りのお家をお訪ねするのに、用心に傘を持って出かけた。何時ぞやは私の顔を見ると、待ってゐたと仰言って、くちなしの八重の花を

「今日はじめて、この花が咲いたら、一体これは誰方だつけな……あゝ、あなただ、と思って、あなたのことを丁度想ってゐたところへいらっしやるなんて……」

と仰言って、早速それを折ってお土産にして下すったことのある方だったが、その日はまた、もの見事な泰山木の花の、これから開かうといふ一輪を折って、お土産にして下すった。薄い白紙で花を先づ包んで下さり、私

は上から新聞紙を重ねて全部を包み、宝物のやうにそれを抱へて帰った。帰りの手荷物は、傘とその花とハンドバックだけだった。晩かったので駅から自動車に乗り、家の傍に着いたので、私は自動車の中で泰山木を抱へたまゝ、紙入れから料金を出し、払って降りた。少し経って、何だか手許が物足りなかった。何秒程だか判らなかったが、おもむろに「傘」と思って振り返った。自動車は停ってゐたけれど、最ううしろ向きに位置を変へてゐた。

「あゝ、ちよっと」私は夜の静かな中で、大きな声を出した。と同時に自動車もエンジンの音を出してゐた。私が小走りに走ると、自動車も同時にうしろを見せたまゝ、ずーっと走り出してもう止らなかった。もう大分よごれて来てはゐたけれど、小さく二つ折りにされたまゝの傘が、それから先き、どうなったか、翌日も翌々日も私の胸を嚙んだ。三四日経ち、銀座へ買ひ物に出かけた。やはり曇りで、何時降り出すかしれず、誰も傘を持ってゐた。私はデパートの傘の売り場など、横目で見たが、買ふ事には熱がなかった。気に入るのはなささうだと決めてゐた。それに直ぐ新しいのを買ひ込むのは、忘れた傘にすまないやうな気がした。この頃無地などざらにあるから、みどりも当然あるだらうが、売り場には見かけなかったし、あるにしてもやはりみどりを買ふのは、忘れた傘にすまない気がした。さうすると他に何があるだらうか。無いやうな気持だった。買ひ物を終って、帰りのバスに乗った。走りかけた頃、雨がぱら〳〵来たらしく、窓から見える外の人群からひとつの傘が開かれて、さあーっと上った。それはあのみどりだった。私の他に、誰かまだあのみどりを、愛用してゐる人がある。何時もはさういふ事にすっかり興を覚ましてしまふ私なのだが、今度は少しも気にならなかった。バスはその傘の位置にだん〳〵近づき、そして追ひ越した。そして私はずっとそれを見てゐて、見えなくなるまで見ながら「あゝ、私のみどり」と思ひつゞけた。

牛

岩崎昭彌

一

「強くするために」といふ理由で
仲間達の荷物まで背負はされる
いやだといふ言葉が牛にはないので
曳かれるまゝなのだ

二倍の荷物で黙々と歩く
この国にも水牛といふ仲間がゐるが
親しげに主人と畑を耕してゐる
俺達はなれない炎熱と闘ひながら
この間までゐた緑の牧場を思ひ出す

二

むかし義仲といふ武士がゐて
彼の軍に祖先達がかり出された
彼等は角に松明をしばりつけられ
闇の谷間へ雪崩落とされたといふ
いまは松明の時代でないが
人間は何を考へ出すかわからない

現に背負ってゐる荷物が弾薬だ
牛にはそれが取り除けない
くたびれると涎も出なくなる
それでも曳かれて歩かねばならぬ
――俺は　なぜ牛なのだらう

――インパール――

新潮文庫七二
伊東静雄詩集
七〇円

月に招かれた男 (上)

芳野　清

終戦と同時に私の勤めてゐた飛行機会社は忽ち潰れてしまひ、私は第二次整理であっさり馘になってしまった。それはふくれ過ぎた風船がしぼむやうなものだった。そのどさくさの中でも幹部階級はうまく立廻って私腹を肥してゐると云ふ噂さがしきりだったが、窮般従業員は雀の涙程の退職金であの混乱と一乏の中へ投げ出されたのだった。私もその中の一人だったが、持前の暢気な性質でどうにかなるだらうとのんびり構へてゐたが、失業の暗く苦い期間は長く続いた。防空壕を堀り返へして薪にするやら、妻の着物を持って附近の農家へ芋を買ひに行くやら、雨漏り屋根の修繕やら、仕事は後から後からあったが、それはただその日暮らしの努力でしかなかった。空襲のなくなった冬空は再びその尊厳を取戻したかに思はれたが、それは余りにも悲し過ぎる空の色であった。私はやっとその冷酷さの中に生活の厳しさを知り始めてゐた。かうして慌ただしく敗戦の年は暮れ、その間、私は誰にも会はなかった。時折、大垣へ手紙を出しては敗戦の荒廃と生活の難さをくど〳〵と老婆のやうに書き綴った。私がその後彼に始めて会ったのは二十一年の一月で私が丸の内の官庁に新らしく勤めるやうになってからだった。仕事に慣れず冷たい周囲の空気の中で心細い想ひを噛んでゐた時、彼は人なつこい笑を浮べながら突然部屋に入って来た。昼休みだったので私達は連立って街へ出た。日本橋から銀座へかけてあてどなく歩いたが、道の両側には闇市が並び、異様な活気を呈してゐた。彼はポケットから金を出すと、パンやまんぢゆうやらを買ひ、私にも分けて、平気で歩き乍ら頬張った。私は一寸度胆を抜かれて、友の顔を盗み見た。いくらなんでも銀座通りをものを食ひ乍ら歩く気にはなれなかったが、まだ都心に勤めて間もない私はこれが敗戦の街の流儀なのだらうと思ひ、彼の真似をすることにした。しかし、今考へるとこれは少しおかしかったのではないか、そんな気もする。何を語ったか今は忘れてしまったが、慥か本当の文学はこれからだとか、もう文学青年を脱皮して大いに腕を振ふべき時が来たとか盛んに精神を鼓舞するやうな話だったが、恋人の事になると曖昧になり、K嬢とは別にVと云ふ人の妹で凄くきれいなひとが好きになったなどと云ったりした。私はこれも今までの大垣の誠実な性質と違ふなと思ひ、或ひは彼流の文学的な表現なのだらうと聞き流してしまったが、その頃K嬢は真剣に未来の伴侶としての彼を考へ、帰還したばかりの田中さんを訪れて相談してゐたのである。

大垣の会社は縮小されたとは云へ、大会社だけに分裂してしまふ事もなく、彼はもはや

かちどき橋にて

石口敏郎

道は切断され
厳粛な祈りのやうに
虚空に通じる

高く
鋭く
速度の磨いた刃が
青色の時間に通じ
雄大さのゆえに
磨かれたレールの激しさのゆえに
すべてのものが立ち止る

エンヂンの煙の

そこで経理事務に明るい中堅社員であった。寧ろ今やめられては会社側で困まる程で、彼の学校の先輩でもある課長は殊に彼の卒直と誠実さを愛してゐて幾分の我儘は大目に見て貰ってゐたのである。敗戦の混乱の中でこの境遇は恵まれてゐると云ってよかったし、結婚しても何ら煩はしい系類も持たなかった。二人の祝福を妨げる何物もないやうに思はれた。文学への熱情を通じて彼の誠実はよく分ってゐたし、剣道三段と云ふことからも、彼の健康は保証済みだし、結婚して幸福を築くことは出来ると云った話を伺ひ、K嬢はよろこんで天沼の家を辞した。彼女の胸は新生活を夢見て明るくふくらんでゐたに違ひない。だが、彼の精神は目に見えず内側から蝕ばまれてゐた。彼は自分の二階の部屋に友人を同居させ自炊してゐたが、燃料に困まると、欄干を折って焚物にしはじめた。或る時は、夜中に突然起き上って天井板を棒で突き上げた。その暗い隙間に戦死した友の顔が見えると云ふのである。嘗ってあれ程、整頓秩序を愛した彼はどこへ行ってしまったのであらう。彼の生活の荒廃そのまゝに部屋は乱雑を極めてゐた。彼の留守に訪れた或る友が見たのは万年床の上に無惨に散らばった四つ切り大のY写真であり、又或る友は朔太郎遺影の前に燈明を捧げて何やらぶつ〳〵云ってゐる彼の姿を見たりした。酒を呑むと彼の陰性は募りめそ〳〵泣き出す始末であった。会社では昼休み時間に外出しては長い間戻らなかった。その間、彼は新らしく知り合った女の子など誘っては映画など見てゐたのである。その後彼が故郷に帰へってから当時の廃頽を偲んで作ったと思はれる遺稿があるが、それは嘗っての端麗な筆跡も乱れてゐて、彼の精神の奈落が覗かれる悽惨な詩である。

かすかなしっぽを止め
自動車が
おもひ　おもひに息をひそめる
ヘッド・ライトが
文明の巨な腕をみつめる

ほほずりと
小さな鼓動を残して
乳房のやうに柔かい速度で
船がその抱擁を逃れる

巨大なためいき
そして風景がつながる
橋が下り
おとぎばなしが消え去り
ふたたび
文明は急ぎ足になる

秋成を売り酒を喰らひ
道造を売り女と遊ぶ
書籍ことごとく銭と替へ
我が欲を充たさむと欲す
されど我罪深く生れ
我欲のとゞまる処を知らざれば
せんなしや
深更　朔太郎遺詠の前に座し

一詩にすがらむとす
師の名を呼べど応へなし
白米一升
納め給はず
うつむきて文字書き給ふ
師いたく痩せ給へり
げに骨の骨
生き給へりや
死に給へりや
吾のあげたる鞭もはた誰をか打つべき

この詩からも錯乱の徴候を歴然と読み取ることが出来る。彼は自分の生活が荒廃するにつれ、隣りの恩師の目が恐くなってくる。しかも彼は敗戦の現実も素知らぬげに詩にだけ没頭してゐるのだ。

32.8.2.

果樹園第十九号　昭和三十二年八月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同　朋　舎　定価三十円

東京吟

田中克己

うた作るこゝろとなりて浅草のあたりを歩く
年にはあらず
小金井に住むてふ友は二十年を見ぬうちしら
が鬢にみちたり
大学の赤門前の古書店に見おきし友の詩集は
売れし
ふみ読むとふるさとすててふみ読まず春ふた
月をあだにすごせし
わが教へし子らほとほとにおとなびてけふこ
のごろを見合ひすらむか
ひたすらに学にはげむとふるさとの叔父叔母
たちは信ずるらしき
わがおもひ知られであれとはちらひつ本郷通
り都電にてゆく
疲れてしわれがかひなにビタミンをうちます
医師の友も痩せたり
無礼なるふみといかりて裂くところひとに見
せじとわれは思へる
理想はた真理のありかわれ知らずひとを教へ
て妻子やしなふ

少女

服部三樹子

胸内に蔵ひ忘れし鶸色をさそひ起して人何の
色
つとたやすくもの思ふ世に出入せし少女の日
こそ往きてはるけし
少女の日身の透き徹る感じせしその日にかへ
る夕風ぞ吹く
新しき小さき家に我が居れば空は広しも夕べ
風ふく
昔むかし誰のかはせし約束を果す心地にマニ
キュアをする
少女ならぬ今日の小指をからませて約束せし
を軽からなくに
誘はれてこころの帰る道とほし我が空蟬はこ
こに留るを
檜皮葺く明るき堂の屋根に対き夢とことわり
夢を語りぬ
我がうちに一つの矜りありし日をふりかへり
いま少女と呼ぶも
ふと怖れぬこころほどきて語る夜を夜おそけ
れば家に帰らむ

編輯後記

このところ上京する用務が多く、そのついでに今月も東京で同人会を開いた。場所は前回と同じ新宿の高野フルーツパラーで、酒なしで、浅野、田中、小山、西垣、芳野、森房子、斉田、石口、糸屋、広沢諸氏と会談した。うち糸屋鎌吉、広沢雄一郎氏は新同人である。同人の数では東京が多くなったので、果樹園の発行を東京に移管することを提議したが引き受けていただけなかった。東京から帰阪すると、今度は山陰に旅をすることになって、松江に森亮氏をお訪ねした。不昧公の建造にかゝる菅田庵とヘルンの遺跡などを案内していたゞいた。そのうち全同人をお訪ねする機会に恵まれるかもしれない。

第十九号は期せずして詩歌が多かつた。盛夏にふさはしい特輯号になつたやうである、ところが頁の方も夏痩せして四頁を搾減した。新秋にはこの搾減分を取り戻したい。大方の御支援を切に御願ひする。

果樹園　第十九号　（毎月一回一日発行）
昭和三十二年八月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区壬生川通五条下ル　同朋舎
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園二十号　昭和三十二年九月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同　朋　舎　定価三十円

果樹園

第二十号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
闇をゆく牛　伊東静雄
一瞬　杉山平一
詩説　浅野晃
ムツシユウ・オノレの詩　石浜恒夫
夏休み　西垣脩
真珠　山根忠雄
乗合自動車　石口敏郎
大休止　岩崎昭弥
薔薇　ランゲッサー
台風　池沢茂
白居易詩抄　森亮
月に招かれた男　芳野清
出発　福地邦樹
わかれ　三浦久子
水禍記　上村肇

書簡から見た伊東静雄（十九）

小高根二郎

伊東が中学校教師として迎へた三年目の春に、京大の講師であつた頴原退蔵先生は助教授に栄進された。

「先生
おききしますと　先生には　こんど
京大助教授に　御栄進とのお事　私どもま
でうれしく　ございます
離れてはゐましても　大学はやっぱり
生涯の本拠の様な気持がいたしますのです
が、そこに　先生が　終生　おいで下さる
ことになったのは　私どもにも　大変心強
く　うれしいので　あります。
どうぞ　ますます　ご健康を　祈ります
ただ　およろこびの　一言でございます
四月十八日　大阪　伊東静雄
頴原退蔵先生　」

（昭和六年四月十八日大阪府立住吉中学校より京都市大将軍坂田町二二頴原退蔵宛封書）

この先生の栄進を祝ふ書簡は、措辞と措辞の間に空白を多く置き、その空白には句点も打つてゐない。心なしか、七尺去つて師の影を踏まず……と云った敬虔の思ひが溢れてゐる。

その四日後に出された宮本氏宛書簡で、当時伊東は小説に精進してゐた事実が察せられる。

「宮本さん
お金、おかげで助かりました。
さびしくなったら出かけていらっしゃい。
例のエス話の娘さんどうしてますか、
私はあの小説は放擲しました。
小使が郵便局に行くのを待つてますから、
急いで、これだけ…後略…」

（昭和六年四月二十二日大阪市住吉区阪南町中三丁目十より神戸市西灘原田宮ノ後六〇〇古河内宮本新治宛封書）

伊東が宮本氏に借金をしてゐるが、これは弟の寿恵男さんが京大文學部に入學するに際して、いろいろ出費が多かったからであらうもっとも、學生時代久留米ガスリ、小倉袴で通した伊東は、學生服は新調そのものであったから、それはそのまゝ寿恵男さんに譲られた。が、上洛の費用なり、その他いろいろと出費が多かったからであらう。

エス話とは、エスペラント會話の略である。その會の娘さんとは、恐らく昨年五月十四日附の宮本氏宛書簡で、「ずいぶんあなた

にあてられました」とあった、あの艶聞のヒロインなのだらう。その時はあてられたが、後報がないのを寂しんでゐるわけである。

尚、この書簡に伊東は小説を放擲してゐる由見えてゐるが、宮本氏の記憶によると、かなりの大作で立派な作品であった由である。童話は一篇殘つたが、小説が今に伝へられる一篇もないことは寂しい。伊東の小説熱はこの時だけでなく、戦後にも燃えてゐた。即ち昭和二十年十二月八日附の栗山理一氏宛書簡に、「このごろは一日も早く長崎に行き、小説を書きたいとそればかり夢みてゐます。時勢のせいに長崎に退くばかりでなく、是非さうしたい文學的な希望も積極的原因になつてゐるのです。」とある。戦災を蒙り無一物となつた伊東が、もし長崎に歸つて小説を書いてゐたら、榮養失調で肺疾患になることもなかっただらうし、後七年しかなつった寿命を、も少し伸ばし得たかもしれない。まことに運命と言はねばならない。

その後空白期が伊東を見舞ったのだらう。夏休まで書簡がない。

「暑中御伺ひ申上げます

八月一日

長崎縣諫早

伊東静雄

（大阪府立住吉中学校）

先日は九州ご旅行の由、お疲れでしたでせう。小生八月一日諫早にかへりました。何も、いゝことありませぬ。」

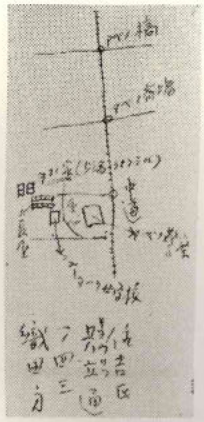
（昭和六年八月一日長崎県諫早より宮本新治宛はがき）

事實、この二伸の通りであつたのだらう。昨年の夏休は日田に立ち寄り、九州が生んだ詩儒廣瀬淡窓、旭荘兄弟、画家田能村竹田を回顧して感奮するところがあったのを思ひ出す。

夏休から帰阪すると、心気一転を図る必要を感じたのであらう、下宿を變ってゐる。同じ住吉区の阪南町から、共立通に変つたのである。宮本氏に精細な地図を添へて転居通知が出されてゐる。

「一度遊びに來て下さい。

下宿住ひは徒然のうあります。



（昭和六年九月二十二日天下茶屋―消印―より神戸市西灘原田宮後六〇〇古河内宮本新治宛はがき）

その後、伊東の空白期を示すやうに一ヶ月半ばかり書簡が出されてゐない。が、中秋に百合子さん宛に出した封書には、伊東が初めて詩精神をみつけた事実が物語られてゐる。

「先生が御病気の中、どうぞよろしく申上げて下さい。ゆり子さんもお骨折のことでせう。私の方こそ、ごぶさたばかりしてゐます。「よく覚えてゐ……」るどころではないのですが、何のかはったこともなく、相変らずの孤独単純な生活なので、手紙を書く機会も、ついなくなるのです。どうぞおかあさんにもよく申して下さい。

お家の裏の庭もきっと、もう、ずいぶんきれいになつてゐることだらうと思ひます先日は、お内のまはりもよく見ず、ゆり子さんのお室も拝見せず、残念なことしました。相変らず京都には出てゐますが、お内がないと、中心点がない様で、会が終つても、はて、どこに行ったものかなあとぼんやりする次第です。先週の土曜には、仕方がないので、丸山公園に出ました所が、無料の菊の陳列があったものですから、それみてゐる内に夜になり、電燈がともったりすると妙に淋しくなって來て、こんな菊などみてる自分がかはいさうになつたりして微苦笑しました。

こんなに孤独でゐますと、周囲のことも皆單純にみえて熱中する気もおこらず、そ

れが又、私を孤独にするのでありませう。

…中略…

もう種が尽きましたから、私のノートから詩を一つ抜き出して近頃の心境のご報告にいたしませう。

では今日はこれで

十六日　学校にて、（今夜は宿直です）

静雄

（昭和六年十一月十六日大阪市住吉区共立通一ノ四三織田方より姫路市五軒邸六七酒井ゆり子宛封書）

この書簡は姫路の酒井家に出されてゐる。その年の春に、百合子さんが同志社女子専門学校を卒業したので、姫路高等学校に奉職する父小太郎氏のもとに引揚げてゐたからである。「先日は、お内のまはりをよく見ず」とあるから、多分、伊東は姫路の酒井家を昔懐しさから訪ねたのだらう。家の周囲の庭には四季とりどりの草花が植ゑられてゐて、その花々で飾られた食卓は、若き日の伊東の郷愁であった事実を思ひ出す、（昭和二年五月附酒井安代さん宛書簡）又、「ゆり子さんのお室を拝見せず」とあるがかっては学生と云ふ不拘束な身分で、自由に令嬢達の私室に出入を許され、安代さんとの間に、日記を見たとか見なかったと云ふ悶着を起こした事実も思ひ出す（昭和二年二月四日附酒井安代さん宛書簡）さうした年少期にだけ許された特権も自由もいかめしく苦がい二ヶ年半の教師生活の体験

未定稿

闇をゆく牛

伊東静雄

わたしはみた　十頭の牛の
つぎつぎに　闇をぬふてゆくのを、
電車の灯は華やかに　間どほに
折々牛らを照らしてゆくが

たれもみぬ　これらの牛は
同じ向きに角をむけて
つぎつぎに乏しい灯をぬけてゆく
たれもゐぬ　電車道路を

風さへねむる　夜半のみちのべ
まがきのばらの匂ひはたかく
灯の下を　やみの下を
十頭の牛がゆくのを見た。

註・この詩は、伊東から富士正晴氏に譲り、富士氏から更に小久保実氏に譲つた『四季』昭和十六年四月号に書きとめてある。後に「小曲」と云ふ童謡に改作され第三詩集『春のいそぎ』に収められた。尚、題名は仮題である。

が、自ら遮断したわけである。残念……と言った述懐は事実だったらう。

さうした回想を籠めて、伊東は丸山公園の秋の夕をさまよったのだ。たぶん西鶴研究会の帰りであらう。東山から垂れ籠める夕靄の中に、今は思ひ出だけが住んでゐる今熊野の家を其処と想ひ定め、そこに昔と今の姫路の酒井家とを三重写しの幻影として思ひ浮べたことだらう。さうして鑑賞無料の葭簀掛けの菊花の前に佇んだのだ。伸び、縮み、或ひは捩れ又は垂れ下る一弁一弁の完全な独立と競合。それでゐて花弁全体を眺めると、粛とした孤寂を感じさせる花容。咲くと云ふ本命だけに花開く花。塵一つ寄せつけぬこの花の精に、灯のつくのも気附かず伊東は佇んでゐたやうである。さうした伊東の思ひは、芭蕉が園女に寄せた、あの清潔な咏嘆に通じるものがあったに相違ない。

伊東はこの書簡の末尾に、菊に代り白薔薇を歌った詩を、当時の心境の報告としてノートから抄出してゐるが、こゝにはかって在つた身を焦した思ひが、すでに抽象され、詩にまで昇華されてゐる事実を物語ってゐる。

私が泉のそばに坐った時
噴水は白薔薇の花の影を写した

私はこの自然の反省を愛した

私が青空に身を委ねた時
縫ひつけられた幾条もの銀糸が光った
私は又この自然の表現を愛した

さうして　私の詩は出来た

右の詩に傍点を附したのは私である。この個所を抄出すると、

自然の反省
自然の表現
詩

となる。

つまり、自然の反省が表現なのであって、それが詩だと云ふ詩精神である。これを逆に言へば、自然そのまゝの模倣は、表現にはならぬし、詩でもないと云ふ理論である。さう言へば、伊東は二年八ヶ月前の卒業論文で、自然の模倣としての子規の写生主義を排し、芸術的主観に基く写生主義を主張してゐた。その芸術的主観に基く写生主義と云ふ抽象的な言葉が、自然の反省としての表現……と云ふ思潮にまで成熟したのだと言へさうである。又、この自然の反省と云ふ伊東の思潮は、卒業論文で触れるところがあった古今和歌集とも関連がある。つまり、万葉集の卒直な自然に対し、「花がなかったら春はどんなに長閑かなことだらう」と云ふ在原業平の歌が代表する古今和歌集に於ける自然の反省としてのひねりのある表現が、そのまゝ、前述の伊東の詩精神であるわけである。

この伊東に於ける古今和歌集は、当時京大文学部に於ける随一の講義だと学生間に評判のあつた、吉沢義則博士の古今和歌集講義であったやうである。この名調子を聴きに、他学科からも学生が多数詰めかけたさうである大山定一氏もその一人で、わざわざ独逸文学研究室から推しかけたほどであるさうだから国文学科専攻の伊東に与へられた影響は、当然と言はなくてはなるまい。

閑話休題。前掲の「噴水と白薔薇」の詩の結句で、「さうして　私の詩は出来た」と伊東は言ってゐるが、前述したやうに、詩が出来たと言ふより、詩精神が出来たと言った方が適切である。「自然の反省が表現であり詩である。」と云ふこの思潮が、「はにかみ勝な譬喩的精神」（『呂』昭和七年十一月、十二月号―詩話のかはりに―）と云ふ更に明確な詩精神を形成するまでには、伊東はまだ一年の歳月を要するのである。

丁度この頃、伊東が初めて文学的な出発をした同人雑誌『呂』の創刊の話がもちあがった。発起人は伊東が初めて上洛した時に下宿した家の息子―青木敬麿氏である。青木氏は当時大谷女子専門学校の倫理の教授であった。同じ大阪で教師稼業をしてゐる機縁で再会をするに至ったのであらう。青木氏から伊東に次のやうな同人参加を慫慂する書簡が出されてゐる。

「呂編輯会計すべて愈々ぼくがやることにした。方針は Vorwärts！（註・前進）だ。皆が歩いてゐてさへくれたら、ぼくにはうれしい。刺激にも鞭撻にもならぬ「学問」や「趣味」はお断りするつもりだ。できたら皆が蠢動する、或は突撃する全容を見せてくれると、一ばんうれしい。

新潮文庫七二
伊東静雄詩集
七〇円
彼は日本の近代詩に消しがたい痕跡をのこして去ったのであって、その細くするどい痕跡がいかに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅ひろく浅い痕跡が磨滅するにつれてはっきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであろう。
桑原武夫

ゲル（註、Geld銭、一頁宛同人費の意か？）は三十銭、頁数いくらでも、月々必ずたのむ僕のしっているいろんな人々を、できるだけ広く動員するつもり。一つの方向をとる人々、には断念したのだ。

十一月十八日　　多可

静雄兄　　」

（昭和六年十一月十八日青木敬麿氏より伊東静雄宛書簡）

まるで指揮官の作戦命令である。この作戦命令に伊東は従軍を志願したのである。然し戦備が整って同人雑誌『呂』が文芸戦線に参加したのは八ヶ月後であった。その上、戦士である伊東は、まだ次のやうに甘美な心情を宮本氏宛に書いてゐる。

「先日替為送っておいたのですが、とゞましたか、二三日前の葉書そのうけとりぢやないかとも思ふたのですが、なにぶん字わからず。

よぞらをとりのわたるよりなほひそけ
しといふべけむ
ねむりゆさむるねむばなのにほひにに
るといふべしや
わたしはとなりの乙女にほのかな恋情を
さゝげてゐます。　」

（昭和六年十一月二十八日大阪市住吉区阪南町中三丁目十伊生より神戸市西灘原田宮ノ後六〇〇古河方宮本新治宛はがき）

冒頭の為替云々は四月の借金の返済だらう末尾のほのかな恋情を捧げる乙女とは、昨年の五月十四日の宮本氏宛書簡に現れる東山女専国文科の生徒だらうか？

〔訂正〕第十九号二頁下段、野間光辰氏は伊東と同期とあるが、当時氏は大学の一回生であり、西鶴研究会（輪講会）は頴原氏の師である藤井乙男先生が司会され、会場は楽友会館であった由、野間氏より御叱正と教示を得た。

一瞬

杉山平一

佐藤春夫の
きみと別るゝ一瞬の
思ひつめたる風景は
松の梢のてっぺんに
海一寸に青みたり
或ひは　中原中也の
（人生まことに一瞬のゆめ
ゴム風船の美しさかな）
などとちがった意味で、「一瞬」は三好達治氏の詩の主題（ライトモチーフ）の一つとなってゐるやうに思はれる。

それは早く、「測量船」の「獅子」に発想がある。

王者獅子の頭上を漂ひ過ぎた一羽の蝶がある。「あゝかの、彼の視覚に閃めき、鉄柵の間から、墜ちんとして夙やく飛び去ったところのあの訪問者、あの花の如き一瞬は何であったか？彼の生命にまで潑剌たりし、かの明瞭の啓示、晴天をよぎって早く消え去った、かの輝やく情緒、それは今自らにまで、如何に解くべき謎であらうか。」

その追求が氏に詩を書かせる。うつろいやすい一瞬、そこにこそ生命があり、美がある。歌とは、そこに生きるものではないかと「間花集」の中の

「蝶は鳴く、神様がねぢをお捲きになっただけ」

の蝶が、主題となった短詩は拾指を越えるだらう。歌を歌ふだけでなく、その生命の短かさが、歌を光彩あらしめると。とんぼもまた「いのちみじかきものもまた、しばしはここにいとふかな」と屢々歌はれる。

立原道造が亡ったとき、氏は、嘆いてその詩学を述べてゐる。

「人が　詩人として生涯ははるためには
君のやうに聡明に　清純に
純潔に生きなければならなかつた

詩説

浅野晃

如是我聞
一時ポエジボサツ
タルマイヌプリのふもと
イプツの曠野にありて
詩人アサーキラに説いて曰く
汝　真言を叙べんに
つとめて大衆の語をもて叙ぶべし
その功徳けだし無量ならん
故いかにとならば
語はもと神通
所著あることなければなり
汝しばらくかくの如くの観をなせ
我いま風となりて過ぐ
我いま光となりて注ぐ
我いま木の葉となりて鳴る
我いま川となりて流る
我いま山となりて黙す
よくかくの如くの観をなさんに
汝すなはち衆草の中にありて
語音すぐれて一味ならん
仏　金口もて説きたまふ
諸法は縁に随ひて生ず
音声もとより体あることなし
しかあれば語を選ぶも非
語を選ばざるも非
形容あるも非
形容なきもまた非なり
衆生もと仏なり
仏語もと自在なり
ただ風の如く光の如く
滝の如く汐の如く
はたまた雷の如く
五月の岸の如く
山とその石の如く語るべし
ゆめ妄想の餌食となりて
面前に蹉過することなかれ
さうして君のやうに　また
早く死ななければ！」

詩集には採録されないが、戦時中、北海に流寓中の思ひを述べた「窓下の海」といふ作品に、一瞬といふなまの言葉で、二度までも人生観が吐露されてゐる。

「心機まさに一瞬を尚ぶべし」

戦後、詩集に採録されぬ作品で「昭和二十二年婦人公論？所載」「歌のさなかに」といふのがある。この美学を歌ひあげたもので私には忘れ難い。

「歌のさなかに蟬は死ぬ
恋のさなかに蟬は死ぬ
それがよい
それでよい
思へ人の死は
彼方にくづるる雲の峯
はた噴上げのてつぺんに
躍つて堕ちる水玉だ。」

このてつぺんといふのが、最初の佐藤春夫の一瞬のてつぺんにも通ずるが、その高さ、その故の危ふさ、美しさを包含してゐる。激浪の中を、はためき傾き疾航する小舟を、「危いかな」と歌ひ、「乾坤は一の焦点の上に片脚立つが如くに緊張せり」と歌ひ美の形而上学をここに見ようとしてあるのも（「一葉舟」）、「私はここで戦つた」「私の砦は砂の砦だ」「崩れるに早く」「ここははかない戦場だ」と歌ふのも（「砂の砦」）危ふさ、緊張、もろさ、短かさなど同じ美のモチーフである。

大切な時は短かい。失つてばかりゐるが、一瞬に全てはきまる。

ムッシュウ・オノレの詩

石浜恒夫

巴里祭の次の日
午后五時
ムッシュウ・オノレは
夜の巴里を空からみた
流れる　流れる
一九二七年五月二十一日
リンドバーグが大西洋を越えて
眺めた午后十時の巴里
コンコルド　エトワール　ツウール・エッフエル　ノートル・ダーム……
金平糖の灯で飾られて
勿論　現在の巴里の夜景にちがいない
フィルムビル五階の試写室でだった

その半時間あと
大阪テレビのスタジオを
名探偵ルコック刑事が歩いている
流れる　流れる
ランチエ街　シバルレ街　ブルゴーニュ街
モルグ街……
モルグ街はもう現在の地図にはない

一八二〇年二月二十日
雪の巴里でおこった物語である
脚色者ムッシュウ・オノレは
片隅のモニターでそれを眺めていた

その夜
ムッシュウ・オノレは
新婚の妻と道頓堀　橋筋　千日前
流れる雑沓を散歩した
喫茶店ダミアの二階の窓から
御堂筋の銀杏並木に駐車した
黒塗りのルノーのボディに映って
明滅する広告ネオンの虹色を眺め
こんなところにオノレの巴里があると思う
ムッシュウ・オノレは
まだ巴里へはいったことがない
むし暑い夜だった

〈巴　里　祭〉

夏休み

西垣脩

蜩のよび交す時刻に
家族たちのふねは
いつしか舳をそろえて
すべりはじめる
夏休みとは
なんとながい油照りの航行だろう
しかし　水平線が
ひんやり鎮まりだすとすぐ
寄り添うようにして
互いに窓をひらき　顔を出し
微風を嗅ぎあったり
干し物をたたみあったりして
やがてそれぞれに燈をつける

船胴のひまの闇い波に
ときどき　燐光を放って
飛ぶものがある。

真珠

山根忠雄

あこや貝の外套膜を切り取り
それを核とともに
他のあこや貝の或る部分に移殖すると
その断片が不思議に
そのあこや貝の生きた一部として
活動を始め
核をめぐって真珠質を分泌し
——五年後
「真珠」となるのだ

しかし
この長い期間中には
たこなどの外敵に襲はれたり
貝自身が核を吐き出したりして
結局——
五十パーセントしか採集できない
更に不良品を選別すると
二十パーセントしか
残らないことになるのだ

乗合自動車

石口敏郎

速度の中で
子供が睡ってゐる

乗合自動車がゆれるので
さっきまで頬ずりしてゐた風景が
母親の腕の中を
大急ぎで走ってゆく

セロファン紙に包まれたお菓子のやうに
ガラス窓に頬ずりをしてゐた子供よ
あわただしく過ぎて行った風景よ
ひざの上から落ちた絵本に
昔の私が乗り捨てた自動車が呼吸を止めてゐる
少年を乗せたままそこに休んでゐる

接吻

タイヤを
唇の如くぬらし
自動車が路上に接吻をする
静かにうづくまってゐたものが
激しく飛び散り
左右の風景に
その爪をふりかざす

去ってゆくもの
消えてゆくもの
自動車は突き立てる
血の色にも似た方向指示器を
そこで身を飜へす
風景を振り切らうとする

エンヂンの虚しさ
ためいきの長く
なほも見えないものを追って身体を動かさね
ばならない

見えないものが
私をつきあげ
自動車が停止する
その呼吸をひそめる

ヘッド・ライトは
瞳を開いたまま　光を失ってゐた
風景を凝視してゐた

大休止

岩崎昭彌

囲りの住居は草葺の小屋ながら
こゝは外陣も内陣も大理石づくめ
極彩色の装飾に囲まれた仏像に
坐って熱心に額づいてゐる人々
読経の声ゆらめく香の煙と匂ひ
狐につまゝれたやうな錯覚を起して
よく見ると
隅にミイラのやうな癩病人がゐた
それには平気で祈ってゐる女達
——何を祈る？　国のこと　夫のこと？
　否々　今度生まれる時は男になりたいのだ
膝には揃って葉巻のやうな煙草を持ち
やがてゆっくりとそれを吸ふ
ふと甦った丹波市での記憶
あるひは日本の奈良時代かも知れぬ
と思って時計を見た
大変だ　俺は一散に馳けだした
——インパール——

薔薇

エリーザベト・ランゲッサア

さあ　おまえたち　おわかりかい
わたしは　もとは　いぶきなの
いぶきは　無
つまり名前もないものなの

しつかりと　おぼえて頂戴
わたしは　しまいは　においばかり
わたしの名前のお墓から
そおっと　きえうせてしまうのよ

お墓はからっぽ　けれど　また
世界がながれこんできて
おお　あたらしく　いぶく　しやわせ
わたしは　世界を　いぶきもどすのです

（たかはし・しげおみ訳）

※ ランゲッサア（1899—1950）はドイツのカトリック系女流詩人

台風

池沢茂

台風が来たとき、ぼくと妻は、ガラス窓のまえで、じっと息をひそめていた。

『絶対大丈夫だよ。この家そのものは小さいけど、四軒長屋やからな。四軒全部あわせたら、幅はとにかく、長さは、こゝらへんのたいていの家より、ずっと大きいはずや。大きければ、それだけ倒れにくい道理やないか。それに、あの「がけ」や。ながめはじゃまされるし、冬はさっぱり日があたらんし、さむくて、じめ〳〵して、夏は風がとおらんし、わるいことばっかりやけど、こういうときには、役に立つやないか。あれほど頑丈な風よけはまず、どこにもないやろ』

ぼくはさっきから、くりかえし言っていた。ぼくの家には、じっさい、南がわの、目と鼻のさきに、三メートルにあまるコンクリートのがけが、切りたっている。そのうえは台地で、やはり家が建っている。つまり六、七メートルもある山かげにうずくまっているようなもので、風むきがわるくならないかぎり、直接の風は受けない。

『火事がいちばんこわい。地震もこわい。

しかし風なら、この家では、なんにも心配ないな』

念のために、窓は全部しめきり、雨戸もとざし、しんばり棒をかいなどしておいたけれど、口ぶえをふきたいぐらい平気だった。が、そんなぼくも、だんだん、顔色がかわってきた。ます〳〵はげしくなってきた風が、がけのある南から西のほうへそれて「ごおっ」と吹きよせはじめると、家が、メリ〳〵、音をたてて、ゆれだしたからだ。測候所の予報をうらぎり、ふいに阪神地方をおそって、家屋や電柱の倒壊、津波など、ひどい被害を出した台風だった。方々の家のかわらが、木の葉みたいに、ひらひら、飛び散っていた。うえの家の板べいが、ばり〳〵とさけて、ぼくの家の庭に、ころがり落ちた。風や雨のごう音のなかに、かわらやガラスの割れる音、バケツやブリキなどのぶっかりあう音が、けたゝましく入りまじり、人間の悲鳴が、とつぜん、断続して起った。

そして、このとき、ぼくたちの目のまえで、ぼくの家の納屋の屋根が、ばりっと吹きはがされた。家がせまくて、がらくた道具などおさまりきれないので、義父が自分の手で、庭のすみに、建ててくれた納屋だ。柱を四本立て、そのうえに、はりをわたし、トタンの屋根が打ちつけてあるにすぎないが、家屋のおもしに、大きな石が、いくつも、のせてあった。台風はその大きな石をころがし、五寸くぎを吹きぬいたのだ。はじめは、はしのほうだけだったが、がらん〳〵とあおられるたびに、だん〳〵大きく、はがされてゆく。妻はあおい顔をして『ほっといたら、飛んでしまう。となりの庭ぐらいへ落ちたらいゝけど、どこか遠い、わからんとこへ、飛んでしまうかもしれへん』と言った。そして、ぼくがだまっているので、じりじりしてきて『ぼんやり見とらんと、はよう、なんとかしてよ。はよう、はよう!』とさけんだ。

『こんなに風が吹いてるのに、どうしたらいゝんや。かわらなんか飛んでくるのに、あぶなくって、そとへなんか、出られやせんやないか』

『そうかって、あのトタン、一枚五百円、三枚で千五百円したのよ』

『……』

妻にはずいぶん残酷なところがあると思っていたが、そう言われると、ぼくも、ことばにつまった。ぼくたちには、まだ子どもはなかったものゝ、ふたりだけでも、やっと食っていけるだけの生活だったからだ。

『じゃあ、まあ、やってみよう。そやけど、どうも、頭があぶないな』

ひとしきり風にゆるみが出来たらしいので、ぼくはいそいで、そとへ出る支度にかゝった。妻はざぶとんを持ってきて、ぼくの頭にのせた。ぼくはそれを、たすきで、あごにかけてくゝりつけ『戦時中の防空ずきんみたいやな。これでしかし、うえの家から、かわらなんか落ちてきても、まあ大丈夫やろ』と言った。それから、もう暑いじぶんだし、雨もふっているので、ふんどしだけのはだかになった。

トタン屋根は、はしから三分の一ほどが、吹きはがされていた。あとの三分の二は、まだ元のまゝに残っている。そのために、したから引きおろそうとしても、びくとも動かな

浅野晃著
現代を生きる
亀井勝一郎氏評——日本民族の個性、とくに明治にあらわれた民族の活力と偉人について著者は深く傾倒されているようである自分たちの足もとをみつめ、祖国の真のすがたを知ろうとする念願、およびそれを通して自己の新しい生をもう一度築きあげようという祈りに似た気持に私は期待する。二〇円
東京都千代田区神田美土代町六
明徳出版社

い。トタン板を全部はがして、飛ばされないように、しまっておこうとすれば、屋根のうえへあがって、おもしの石を取りのぞき、くぎを一本ずつはずしてゆかねばならない。それなら、いっそ、吹きはがされた部分だけを元どおりになおすほうが、らくに出来るにちがいない。トタンのうえに板をあてて二重にくぎづけし、おもしの石も、もっと数をふやしたら、台風にも、たぶん耐えるようになるだろう。ぼくはしばらく納屋をしらべてから、となりの家のへいづたいに、屋根のうえにあがった。それから、したに立っている妻から、金づち、ペンチ、板、くぎなど、順々に受けとって、修繕に取りかゝった。すると、じきに、とっぜんまた、風がおそってきた。しばらくおさまっていたのは、風の波の、ひとつの谷間だったらしい。ごおっと、うなりを立てて吹きよせると、ぼくはたちまち、体ごと、吹きとばされそうになった。しゃがんでいても、ひっくりかえりそうになる。とうとうぼくは屋根のうえに、べったり、腹ばいになった。吹きはがされたトタン板が、ガラガラとまくれあがって、頭のうえに、かぶさってくる。ぼくは肩や背中のあたりに、切りつけられたような痛みを感じた。そして夢中で、大きな石をころがしてゆき、体の重みといっしょに、そのトタン板をおさえつけた。

『あぶないから、おりていらっしゃいよ。もう、ほっといて、おりなさいよ』と下で、妻が、おろ〳〵している。

ぼくはしかし、むちゃくちゃに、気がたっていた。風の暴力のせいかもしれない。なにかしら、はげしい怒りが、ぼくをとらえていた。横目で、ちらと妻を見おろして

『そこをのけよ。そんなとこにいたら、かえってあぶないやないか。この大きな石が落ちたら、どないすんね。つぶれてしまうやないか。家のなかへ、はいっとれ!』とどなった。

それから、妻がへやのなかへはいったのを見ると、腹ばった姿勢のまゝ、さっそく、く

白居易詩抄 (七)

森　亮

秋の日

池は底をのぞかせ僅かな水がじめじめ残ってゐる。
家の窓よりも低いところにいざよひためらってゐる落日。
ひゆうひゆうと秋風はおびただしく吹く。
槐の豆科の白い花が黄を帯びて半は実に変ってゐる。
丈高いその木のもとに独り立ってゐる者、齢四十一のそれがわたくしです。

★

病床吟

病臥してからもうどれほど経ったかしら。
さう、重苦しかった日々がかれこれ百日。
婢女は薬草が摘めるやうになったし、
犬のやつは医者が来ても吠えない。
酒を容れた瓶はびっしりかびで覆はれ、
宴の筵は塵が厚く積ったまま忘れられてゐる
外の景色はこれからいよいよ陽気を加へてくるが、
枕越しにのぞく春の眺めなんて意味のないものだ。

註「秋の日」の原詩は秋日（一の七三三）で、作中に見えるやうに四十一才のとき作られたもの。その頃白居易は渭村に引籠ってゐた。前年母が亡くなって三年の喪に服してゐた為めである。「病床吟」の原詩は臥疾来早晚（四の五五三）で、六十九才の作である。この時の病気は前年十月に発病、軽い中気のやうなもので左足が不自由になったらしい。

ぎを打ちにかゝった。ところが、くぎを打つのも、なれないものには、なかなかむずかしい。ことに変な姿勢と状況だから、五寸くぎなど、みな、途中から、まがってしまう。といって、小さなくぎにすると、つぎの場所へ移っているあいだに、たちまち、元どおりに、吹きはずされてしまう。大きな石を置きならべ、板をあて、そのうえに体の重みをかけておさえながら、ぼくは、なんべんも、途方にくれた。体のしんはかっかっと熱を持っているのに、しばらくでもじっとしていると、はだかの皮膚は、雨に打たれて、チカチカ痛み、ふるえあがってしまう。はげしい風に吹きおろされる大つぶの雨は、まるきりヒョウとおなじ感じなのだ。そのうえに、ときどき、ピシッ、ピシッと、石つぶてを投げつけられたみたいな、へんな、するどい痛みがおこる。ちかくの森から無数に吹きちらされた木の葉が、台風の異様なスピードに乗り、矢のやうに飛んできて、はだに、へばりつくのだった。そして納屋全体が、いまにも引っくりかえりそうに、ぐらぐゝゆれる。

ぼくは後悔にかまれだした。妻から言われたとき、さっさと、おりてしまえば、よかったのだ。しかし、いまとなっては、もう、おりられない。立ったら、体ごと、吹きとばされてしまうかもしれない。それに、ここまでやりかけたのだから、せめてトタン板が飛ばされないように、なんとか目鼻をつけてしまわねばならない。だいたい妻が最初に言いだしたのが、いけなかったのだ。こんな暴風雨の最中に、屋根の修繕に放りだす妻は、いったい、どんな気持をしているのだろう……。

ぼくは早くから、妻や家庭にあこがれていた。気にいった妻をめとり、平和な満ちたりた家庭をいとなんだら、どんなによかろうかと、しじゅう、頭をいっぱいにしていた。そして今、兵隊にとられたりしたあとで、ふつうの人より十年ほどもおくれて、その妻と家庭を得ている。しかし、たったひとりの妻をやしない、四軒長屋のうちの一軒の、大きなかけのかげの、三間だけの家を維持してゆくのに、こんなに、つらい目にあわねばならぬのだろうか。おなじつらい目にあうのなら、もっと理想的な妻や家庭があたえられても、いゝのではなかろうか……。ぼくは、はだかの体を雨や木の葉にピシピシたゝかれ、ごうごうと吹きおろしてくる風に息もつまりそうになりながら、大きな声で、なにか、さけびだしたい気持にしきりに、あえいでいた。

月に招かれた男（十四）

芳野　清

六月頃だったと思ふが、彼はふらりと私の職場へ現はれて「会社をやめなくてはならなくなったが、東京へ残って出版会社へでも勤めるか、故郷へ帰って商業学校の先生にならうか、どうかと迷ってゐるのだが君はどう思ふ？」と訊ねるのだった。どうして又会社をやめるのかと私は聞きたかったが、もうその時は病ひが進み日常の勤務が辛くなってゐたのではないだらうか。時々、発作的に起る奇矯な言動には彼を愛してゐたさすがの上司も眉をひそめ、体よく辞職を勧めたのであらう。彼にすれば平静に戻ればその行為が愧かしく自然と卑屈にならざるを得ない。こんな状態が重なるにつれて彼は己れの周囲になじめない冷たい垣の出来たのを感ずる、もはや職場は彼にとって北風の吹き荒ぶ異郷に感じられるに至ったのである。私は彼の言に驚いて、即答出来ぬから今晩一晩考へてみようと云ひ、幸ひ土曜だったので彼を私の家に伴った。こゝでも彼は今までの元気な饒舌を忘れたやうに無口になり縁側に腰を下ろしたまゝ頭を低く垂れてゐた。どんな事を思ってゐるか分らなかったがその後姿にはうそ寒い影があった。私は結局、彼が非常に疲れてゐるのだと思ひ、故郷へ帰へる方がいゝとすゝめたが、たべ黙って肯くばかりだった。そのうち彼は口をひらいて「僕はもうすぐ結婚するつもりだが、本当は女などより何よりも詩が一番だ。文学こそ第一義で女など意味がない」と云ふのだった。今私は結婚しようとしてゐる彼からこんな言葉を聞くとは夢にも思ってゐなかったので啞然として彼の顔を見守った。此頃から彼の魂は詩神に魅入られてゐたのだ。

「大垣さんてあんなひとだったかしら、何もお話しなさらないでお辞儀ばかりしてゐたわ」

前に彼を知ってゐる私の妻は彼の帰った後不思議さうにさう云った。暫らく音沙汰がなかったが私は次の葉書を受け取った。

——お葉書有難う。僕先生をやってゐます。元気です。英語と外国史と、君の嫌ひな簿記とソロバン。学校、黒板、教壇、生徒、すべて新鮮です。少女達が清潔な声で「グードモーニングトウユウ」の合唱をするのを聞き乍ら涙が出て困りました。女子野球部の副部長でもあります。鞠の来ない方に走ってゐます。こんな書き方太宰式でいけないのです。論語から始めてゐます。「孺悲、孔子に見えんと欲す。孔子辞するに疾を以てす。命を将ふ者戸を出づ。瑟を取りて歌ひ之を聞かむ」会ってはくれないが病気と云ったのを本当にとり心配してはならぬと瑟をひいて聞かせたのです。私達もよい詩を書き立派な人となって田中さんに会って頂きませうよ。「詩人は淋しいものです！」と厳しい言葉を覚えてゐます。私も今独り。便りとてなく。虫の声も星も澄んで来ました。……

私はこの便りを見て彼れが昔の元気を取戻したと思ひ、田舎へ帰ってよかったのだとしみじみ思った。しかし、その幸福も束の間で父の死と云ふ大きなショックが彼を襲ったのである。彼はその時許婚のK嬢ならぬ女の子と映画館かどこかにゐて父の死目に会ふことが出来なかった。彼の父は末子の彼を目に入れても痛くない程溺愛した。この不幸が一

出発（一）

福地邦樹

なににしても
後悔するのはやめよう
実らぬ思いについて言うのをやめよう
いつもが出発でなければならぬのだ
無風の蔭の花のように
僕らは考え深く　やがて腐ってしまう
過去は僕らを激励するためにあるのに
僕らにはあわれな帰路の本能が強すぎる

昨年大台ケ原のイトザサは
三十年ぶりに開花結実し
数百町歩にもわたってその地下茎が枯れたと
今年はその涼しい高原に新生の芽が
点々と吹き出たであろう

おまえ　きのうのことは言うまい
陽が照りわたり　草木が成長することは
かならずや新しい力なのだ
どうして僕らに同じ力のないことがあろう

註　竹や笹類は普通地下茎によつて株が増え繁殖するが、それが衰えると三十年から五十年位の週期で開花結実し地下茎は枯死する。翌年その種子から出た芽はまばらだが、数年にしてもとの地をおおいつくすという。

段と大垣の精神の崩壊を早めた事は察するに難くない。彼は授業中にも黒板の影に父の幻影を見た。彼はその幻影に向ってやさしく涙を流し乍ら詫びるのだった。しかし、まだ詩に対する熱情は消えず、学童詩集を編むのだなどと虹のやうな気焔を書き綴ったりした。一方、心の優しい兄夫婦は父の死に傷心し、恋の煩悶に把はれてゐる弟の身を案じ、懸案の結婚問題解決を押し進め、正式に仲人を立てゝ東京のK嬢の家を訪れ、二十二年の一月下旬、挙式の日取りまで取決めるに至った。しかし、運命の神はあくまで彼には悲劇的であった。結婚を間近に控えた十二月十八日に彼はついに発狂してしまった。深夜、宇都宮市の端れにある進駐軍司令官邸の戸を叩いたのである。そこに何事か懸命に訴へてゐる異様な男を見出した異国の軍人は自分に危害を加へる者の侵入と誤認してボーイ達に命じて彼を縛り日本の警察に渡したのだった。かうして彼は一夜留置場にとまったが、精神錯乱と分り翌日脳病院に移された。二週間程して平静を取戻した彼は大晦日に家に帰ることが出来たが、家中の驚きは非常なものであった。老母は彼の体にとりすがって「クニ、クニ、どうして又おめえはこんな病気になっただ？」と掻きくどいた。しかし発作が納まって平静になれば昔の彼と少しも変らないやさしい子供であった。彼はこの僅な落ち着きの中でその時の異常な経験を書き綴って未だ失はない精神の光輝を示した。

——貴方の御手紙は大へん私を励ましてくれました。私は今寂しく。それに詩も書けず、やっと一篇お見せする次第です、詩の書けぬ時には何もするのも嫌になり困ります。貴方もどうぞどし〳〵書いて下さい。私は貴方の詩をよいと思ってゐます。続けるこでとはないでせうか。何と云はれても本当の詩はこれからだと思います。貴方のカタイ線はいゝです。この荒れた野に詩人が花を咲かせなければ、さう思ひませんか。年齢も本格的には三十過ぎてからです。今迄の文学青年の詩はつまらない。貴方も作品書いて下さい。僕も書きます。とにかく僕はFOUの小説みたいに美くしい夢見乍ら気が狂ったのです。恋しつゝ、生活は荒寥と無為でしたが、「三十一日兄の迎へにより退院す、戸外に出づれば新星ほのかにほひ歳も数時間にして暮れんとす」朔太郎ばりですね。何しろ田舎で面白くないのです。今東京に行ったら僕など気がまたちがひそうでこわくて行けない……。

脳病院の雪景色
目は横に鼻は竪なり春の花

うたてやな桜を見れば咲にけり
鬼貫

鉄の格子の外には
今日も寂かに雪が降る
白くつめたくしとやかに
積っては消えまた積る
恋の乙女の手のやうに

わたしの歌は天にゆき
其処で日永を遊んでた
春の花散る樹の下で
幼児の頃の追懐詩
あゝ　もう一度とは思ふけど

あれはやっぱり雪の結晶
これはやっぱり田舎の病院
そして私の冷えた肢
わたしは此処でこのまゝ死ぬのか
恥をさらしてこのまゝに
そんな筈ではなかったが
この眼に景色が美しい

二二・一・一六

この手紙を見てもまだ私は彼の発狂と云ふ事実を信ずる事が出来なかった。FOUのやうにと云ふ言葉などから夢幻的なロマンチシズムを余けい感じてしまひ、又この詩でも審

美的な情景を先に思ひ描いてしまったからであった。寧ろ私はそこに狂気の仮面を見たのだった。しかし、今、この詩を読み返してみればみる程恐ろしくなる。いはば彼の若い生涯はこの一詩に凝縮されてゐると云ってもいい。白くつめたく積ってゆく雪はひら〳〵ひるがへって乙女の手のやうにも見え、それは彼の心象の中で妖気じみた詩への執念となつてめら〳〵と炎えてゐたのである。小説「ヒュウペリオーン」の中でギリシャ的静謐と明澄を憧憬しながらも、陰惨な精神の暗黒の中に悲劇の一生を終へたドイツ浪漫派の詩人、ヘルデルリーンの次の一節も又、その傷つける魂の呻きは私達を慄然とさせずには置かない。

おんみいづくにありや、光よ？
心はまたも目ざめたり。されど心なく
力強き夜はわれをつねに引き行く……

（"Chiron" 第三節から）

（未完）

わかれ

三浦久子

波止場には見送人がたむろしていた。黒人コックを見送る私の家族達は、老いたパパとママと弟と妹と、秋田犬のアミである。

波止場の喫茶店で、私とアミはミルクを、老父母は熱いモカを、弟妹はイチゴクリームを、黒人コックはおしることを注文した。

海の見える喫茶店、黒人の故郷の砂を洗った波が、いま日本のふなつき場にも漂よい、彼を運んでゆこうとしている。熱いモカがミルクがクリームがおしることが——、無言劇の私達の唇を濡らし、／わかれ／の切ない感情がひたひたと胸の中に鳴っている。

白い雲と青い海の地平線をみながら、おしることが大好きだった黒人の耳に、私は私の唇をおしあて、わかれの接吻（くちづけ）をしながら、

＜嵐の日の海はネ、おしることのような色になるのよ＞と教えた。

彼は故郷のパキスタンへ、パキスタン生れのお嫁さんを迎えに帰国するのです。

三二・六・二七

水禍記

上村肇

洪水に対する私自身の先入観というものは、多分にニュース映画などによって、つちかわれたものであって、それはいかにものどかなとも見られる増水の泥田の中を、ゆるやかに流木が、あるいは人家が、散歩でもするかのように、流れるものとばかり思っていた。

こんどの水害で、最悪地帯となった諫早の眼鏡橋畔に居を移して二年余、私は窓に眼鏡橋の風雅をとり入れて来客の多くを招じていたものである。

七月二十五日午後十時二十分ごろであろうか、それはまるで暴漢によるなぐりこみの表情をもって、戸障子を破壊したウズ巻く濁流は、私一家のみを目標とするかのように乱入した。

「二階へ！」と叫ぶ妻の声を叱りつけて、私は七十九歳になる歩行不自由な母を背にし「裏口へ逃げろ！」と絶叫しながら裏戸をあけてわずかな路地を逃げ進んだ。少しでも本流である本明川から遠ざかること、それだけが頭にあったようだが、水勢はすでに私より前方を走っていた。幼い子供と、妻と、背に

32.9.11

田中克己 李白

李白の自由奔放、磊落洒脱の境地を円熟した訳筆・鑑賞の正確さによつて伝える。詩人である著者が多年の研究を集大成した名著《筑摩世界名詩選》新版　三〇〇円

東京神田小川町二の八
筑摩書房

した母の重みは、私の全身を押しつぶすばかりだった。

私達はかろうじて自宅を去ること五十メートルくらいの地点にある二階家に避難した。しのつく雨雷電、どこかで樹木のひき裂かれる音。私はぼう然として雨戸の間から矢のように走る水勢のすさまじさをながめていた。と見る視界の中を、黒々として一軒の家が傾斜しながら流れ去った。「助けてくれっ」――窓下を一人の男が二声、三声叫んで、これも流れ去った。私は腕を組みながらそれを見送った。そして、いよいよ来るべきものが身近かに迫りつつあるのを感じた。私は母に「お母さん、あきらめて下さい」と小声で耳近くささやいた。三人の子供をしっかりと両手に握りしめて座っている妻には「最悪の場合は何でも良いから木につかまって流れるだけ流れていけ」と命じた。その瞬間、無気味な柱のねじれる音と、立っていた二階の畳がエレベーターの上るように私達を乗せて盛上った。とともにヘビのように全身に水がまつわりつき、私の頭は天井板にイヤというほど押しつけられた。「これが最後かっ」と無念の声を出す口の中にガボガボと水が入った。肩のあたり、しめ木をかけるように何かの重量が圧してきた。呼吸が少し楽になった。真っ暗で何もわからない。私は身を細くして肩の重量を脱した。私は頭上にかぶさるものを無茶苦茶に突破した。私は天井板と屋根のカワラを突き破って、しのつく雨の屋根に出ている自分に気付いた。私は長男の名を連呼した。他の個所から長男も屋上に出た。その足にすがっている二男が、これまた引上げられ、雨にうたれている。母と妻の名を狂人のように呼んだが、ただ濁流の音ばかり。私は断念して屋根を伝い、また浮流している他の屋根を伝って警察署の窓わくから差出された手に引上げられた。母と妻と、幼い二人の子供とそれから数人の生命の出口を密閉したような家は、その後一瞬にして濁水の中に解体し、流失した去った。……後略……

（大阪毎日新聞から転載）

編輯後記

七月二十五日　伊東の郷里諫早は未曾有の水禍に見舞はれた。伊東詩碑の建立に献身した上村氏は、「水禍記」のやうな悲痛な運命に見舞はれた。なんとも弔慰の言葉もない。この一文は大村在住の会員溝江京子さんから送られたものだが、「水禍を越えて進もう」の原文の題名を上村氏に無断で改訂した。文字通り裸一貫になつて再建に寸暇もない氏の多忙を慮つたからである。伊東の姉妹江川ミキ、伊東りつさんの住む上町の家は浸水の被害だけに止まり、城山中腹の詩碑も無事だつたのはせめてものなぐさめであつた。

八月一日上京した。多忙だつたので同人では田中氏に会つたきりだつたが、用務が幸ひ棟方志功画伯と中河与一氏の御宅のすぐ近くにあつて、寸暇にお訪ねすることができた。共に果樹園を激励する御言葉をいただいた。

今号は、池沢山根両氏は帰郷してゐたので、休暇で帰阪中の福地氏に久し振りに手伝つて貰つた。紙面は狭いが賑やかな号になつた。

果樹園　第二十号　（毎月一日一回発行）
昭和三十二年九月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区壬生川通五条下ル　同朋舎
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園二十号　昭和三十二年九月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同朋舎　定価三十円

果樹園二十一号　昭和三十二年十月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同朋舎　定価三十円

果樹園

第21号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
白居易詩抄　森亮
早春　福地邦樹
ムッシュウ・オノレの詩　石浜恒夫
月よみ　服部三樹子
山荘の写真　山根忠雄
金魚すくひ　石口敏郎
台風の過ぎた夜　池沢茂
箱船　浅野晃
インパール　岩崎昭彌
ギュンタア・アイヒ詩抄　たかはし・しげおみ
「青い花」評　福地邦樹

書簡から見た伊東静雄（二）

小高根二郎

「呂」の主宰者故青木敬麿氏

明けて昭和七年、伊東にとっては、いろんな意味に於いて、運命的な年となった。その運命の伴奏のやうに、莫逆の友宮本新治氏とエスペラントがとりもった女医吉田貞子さんとの恋愛が、恋愛と云ふものが多かれ少かれ運命とする抵抗を喫しながらも進行した。

「新兄
吉田様
どうぞ。　但し高説は思ひもよらず。たゞ欣々として饒舌だけは私がひきうけます。
小生の一件、思ったとほりにはうまくゆかず。人生ですなあ、
委細面談。　伊」

（昭和七年二月九日大阪市住吉区大阪府立住吉中学校より神戸市兵庫区脇浜町一丁目三十一番地再製璃脳会社内宮本新治宛封書）

詩のやうに凝縮された書面である。宮本氏と吉田さんとが、人生の相談に訪問を求めたのであらう。その返事である。「小生の一件」と云ふのは、例の隣家の娘のことだらうか、それとも、一般的な縁談のことだらうか？その首尾は芳しくなかっても、親友とその恋人との航路を祝福し、力づけてやる溢れた友情が感じられる。

この書簡の二、三日後、宮本氏は伊東を訪れ、賑やかな歓談をしたやうである。伊東は友を祝福して送り出し、取り残されたやうな空虚の気持でゐるところに、飛び込んできたのは父危篤の電報だったのである。

「父　とうとう　死亡し　先夜（あなたとあそんだ夜）あれからすぐ　帰郷
昨日大阪に帰ったとこです。
そのご如何。寛裕に強くおすすみなさる様。」

（昭和七年二月二十二日住吉―消印―より神戸市兵庫区脇浜町一丁目三十一番地再製璃脳会社内宮本新治宛はがき）

父とうとう死亡し……とあるから、その死はかねて予知し、宮本氏にも知らしてゐたのであらう。もともと伊東静雄は四男であったが、兄の栄一、潤三、岩蔵さん達は皆早世し

てゐたので家督を継ぐことになったのである。しかも、その家督は、桑原武夫氏が伊東から聞いたところによると、当時の金で一万円の債務附であったのである。今の金にして三百五十万円相当の巨額。しがないサラリーマンには、一生を以てするも、容易に返済しがたい金高である。その上、頼みとする姉ミキさんはすでに嫁いで江川家の人である。母ハツさんの他に、弟寿恵男さん、妹りつさんの面倒も見ねばならない。まことに悲痛を極めた運命が舞ひ込んだものである。

この悲痛さも、この端書には微塵も見せず友が寛裕に強くことを進めて、恋愛が成功することを祈ってゐる。

この宮本氏宛書簡の翌日百合子さんにも書簡が出されてゐるが、前述の運命は仄かに語られてゐるだけである。運命に挑まうとする伊東の意志が、いかに強いかゞ察せられる。

「ゆり子さん　お葉書有難う。時々は思ひ出して下さってうれしくあります。近頃はほんとにごぶさたばかり致しますね。すみません。

近頃の読書は重に音楽の本と独逸語です。音楽のことはさっぱりわかりませんので、それだけ興味が深くあります。独逸語はやっぱりリルケの詩の訳です。

戸川秋骨（註・英文学者 藤村・孤蝶の友人）といふ人の随筆「自然　気まぐれ　紀行」といふのは大変面白くありました。五軒邸のあなたの書斎でよまれたらきっといゝ本だと思ひます。伊庭（註・伊庭孝氏、音楽批評家）といふ人の本も散慢で出たらめな言葉も多い様でしたし論理も幼稚でしたが、面白いと思ってよみました。この人のは二三冊よみました。只今は音楽と詩歌の境といふ仏訳の本をよんでいます。近頃は、自分の一生は勉学より外にないと思ひきめておちついて読書に耽ってをります。

二月の十二日に父が死去しましたので十日ほど諫早にかへってゐました。一昨日帰ったところです。死に目にはあへませんでした。

結婚のことも、私の一人で思った通りにはすらすらはゆきません。私や相手の女の人の様に反省的で憶病ではこんな常識的な世間的な事柄は骨が折れてこまることが多いのです。どうなりますか。

活動も近頃はあまりみませんでした。只火の山（註・杉山平一氏によると、原作ジオヴァンニ・ロベッチの詩による伊太利映画「火」ならんか？）と云ふ）といふのと、かっぱらひの一夜（註・フランス映画、オツソオ製作。原作アンリ・ドコアン。監督カルミネ・ガローネ。俳優アルベール・プレジャン、アンナベラ。）といふのをみましたがあまり面白くありませんでした。活動はあまり現実に遠くて私には縁遠い気持がします。モロッコ（註・パニ・ファウント製作。脚本ジュルス・ファンバーク。監督ジョセス・フォン・スタートリツヒ、俳優マルレネ・ディ、ゲエリ・クーパー）など、いやな筋だとまゆをひそめました。

家はうまく売れません。なりゆきにまかすより仕方ありません。

ゆり子さんの様に寂しくても平和静澄に暮してゐらっしゃるのは私にはうらやましくあります。もう、私は幾月と睡れぬ夜がつづいて、ひどい神経衰弱にかゝってゐます。一晩ねむらず朝を迎へて、下で鳴ってゐるラジオ体操の元気のよい号令を床の中できく気持といふものは、私の様に、ねむりをなくした人間でなくては味はへぬ、さびしいやるせない、ものです。

では時々はお便下さい。どんなに喜ぶかしれません。

二十三日夜　　静生

音楽の本はその外兼常といふ人の音楽巡礼といふの外二三冊、大田黒（註・大田黒元雄氏）といふ人の音楽夜話外二三冊よみました。皆（殊に大田黒といふ人は）頭が割にわるいと思ひました。もっとも音楽をわかるためには頭はいらないのでせう。じやまになるのでせう。…後略…」

（昭和七年二月二十三日大阪市住吉区共立通一ノ四三 織田方より　姫路市五軒邸六七　酒井百合子宛封書）

この百合子さん宛書簡に、ぼんやりではあるが悲痛な運命が影を見せてゐる。家を売ってまで負債を整理せねばならぬ事情は書かれてゐるが、音楽批評家達の著書の話、映画の話等の影にかくしてあって、直接悲痛さを訴へてゐる甘さはない。唯、不眠症にかゝって一睡もせずラジオ体操を聞く末尾のくだりに、あゝでもない、かうでもないと思案のあげく、所詮なるやうにしかなるまいと、佗びしげに起きる伊東が描かれてゐるだけである。事実、伊東は限定相続に関する知識を宮本氏に訊ねたさうだが、田舎のことゆゑ、債権者は親戚、縁者、知己がほとんどであったらうから、債務の打切、ないし、棚上げと云ふ手段は至難であったに相違ない。

この書簡で重要なことは、伊東の生涯の詩業での挑みの対象であった ライネル・マリア・リルケ（1875~1926）が影を現はすことである。伊東はぽつぽつとリルケの詩を飜訳しながら、現代詩の詩精神の所在を尋ねたのである。伊東はすでに三ケ月前に「自然の反省が表現であり詩である」と云ふ、古今和歌集的な詩精神を発見してゐた。それをリルケの詩精神の一つと思はれる「譬喩としての自然」

白居易詩抄（八）

森　亮

秋の牡丹

この葉と茎との老けた叢立ちに夕べはしら露が置き、
朝は朝とて衰へた葉をすずかぜが吹き抜けてゆく。
紅のつややかな花のいろは絶えてもう久しい。
それが吐いた強烈に甘いみどりの芳も今はどこに求めて得られよう。
世に背をむけた男が一人これを飽かず眺めてゐる。
彼の心にも眼前の風物にもひとすぢ寂しいものが流れてゐる。

★

臼口といふ所で

白くくだける大波は舟泊りの舟の出入りを差し止める。
行く先々で足踏みを強ひられ、すること為すこと空廻り。
世の中をわたるのに道踏み迷うたこの旅人は
今また大川のうへで哀れにも風に足を奪はれる身となった。
魚やらえびやらが長雨に当って生臭い匂ひが鼻をつき、
蚊と蚋が物焚く煙と一緒に襲ひかかりからだ一面にかゆい。
老いに向へば時はさらさら流れて残りの月日に心くばられるのに
臼口に舟繋りして十日といふもの為すこともなく暮らしてしまった。

註　初めの訳詩「秋の牡丹」の原詩は秋題牡丹叢（一の七一五）で、白居易が三十九才のときの作である。「臼口といふ所で」の原詩は臼口阻風十日（二の五二九）で、詩人が四十四才で江州の司馬に左遷されて新しい任地に向ふ途中での作。この旅行は家族連れで、陸路を襄陽に至り、其処から舟で漢江を下り漢江から長江の本流を更に下って現在の九江である江州に達したもので、この詩が詠まれた臼口は漢江上の舟泊地の一つである。

への接近を図ったのであらう。

さらに、も一つこの書簡で注目されることは今まで抽象的な憧憬としての存在であった女性が、にはかに結婚の対象と云ふ具象的な存在に変化してゐることである。相手は、伊東の気質と同じく、反省的で臆病な人……とあるから、多分、一月あまりして結婚をするに至った山本花子さんのことであらう。花子さんは奈良女子高等師範学校出身の秀媛で、当時、堺高等女学校の地理の教諭をしてゐた。前述の断り書から判断すると、恋愛に近い経緯の存在が感じられる。

不思議なことに山本花子さんと、宮本氏の恋人である女医の吉田貞子さんとは、大阪府立清水谷高等女学校での同期生であったのである。さうした因縁のあることも知らず、日本一の美人を見せてやる……と、土曜日の午後、伊東は宮本氏を誘って、南海電車の終点難波駅に待ち伏せたと云ふのである。当時、花子さんの家は、難波から大国町寄り、木津青物市場の附近にあった。花子さんはそれまでの距離を歩いたのである。鏑木清方描くと云った細面。黒の編上靴で紫紺の袴を翻へして雑踏を縫ってゆく花子さんをみつけた伊東は、あれだ！　あれなんだ……と、友の注意を喚起したと云ふ。

又、後年伊東は上級生徒であった西垣修氏をよく伴って町を歩くと、いゝかね、将来君が結婚する時には、町を歩いてゐてこれぞと思はれる人があったら、どこまでも後をつけて、そしていきなり結婚を申込むんだ…と、真面目に言ってゐるのか、冗談を言ってゐるのか判らぬやうに、教へたと云ふ。

これらの逸話から綜合判断すると、それに近い事情があったことが想像される。

この書簡から半月余りして出された百合子さん宛書簡では、山本花子さんとの結婚話がさらに具体化してくる。

「皆々様

ゆり子さん　お元気ですか。一昨夜シュナイダー　トリオといふのをきゝに行き、実に美しいと思ひました。チェンバロ始めて見、きゝました。プログラムは、モーツァルトとシューベルトのソナタが重なものゝ様でした。水野氏（註・百合子さんの同志社女専時代のピアノの先生、当時大阪石橋在住）によると、チェンバロを弾いた人が、その内でも一番よかった、とのことでした。私はそんなことは一つもわかりませんでした。上品なおちついた人達でした。

近頃はどんなにして暮してをられますか。私は相変らずリルケの訳で、その日〳〵をすごしてゐます。一日が短く、学校のつとめが多くて、いやです。

大阪で、青木（註・青木敬麿氏）といふ人と詩の小さい雑誌を出します。蒲池君から小説文学といふのが送って来るでせう。あまりつまらぬので、同人には入ることをやめました。私、いよいよ三月の末か四月の始めに、結婚することになりました。先生に仲人に立っていただかうと切望し一寸お願もして置きましたが、相手の方で、簡単に〳〵と言ひますし、又純粋に大阪の商家のことでインテリらしい人に接したことのない人達ですから、先生にお願ひしても、かへって、言葉の端とか、振舞などで先生に気まづいお思をおかけしなければならないことになるかも知れぬと一人で案じまして、仲人らしい人も立ないことにきめました。どうぞゆり子さんから、その点、よろしく御釈明願ひます。近い内に、私が参上して、お話したいとは思ひますが。

それで、近々の内、この下宿を出て、私一人でしばらく自炊を始めようと思ってをります。思ひもよらぬ運命にどんどん流されて行く近頃の自分の多事を考へて諦念とも苦笑ともつかぬものを感じてをります。二三年二人で一所懸命、苦労に、積極的な気持になって働かねばなりません。母と、

妹はしばら（二三年）、諫早にとどめ、弟を私共の家に住ませようと思ってゐます。いつかお話の様に、もう下宿住ひではなくなりさうですから、その内きっと遊びに、おかあさんとご一緒において下さい。ずいぶん長く待ちましたから一生懸命歓迎したいと思ってをります。…後略…

十二日夜　　伊東

ゆり子さん書斎」

（昭和七年三月十二日大阪市住吉区共立通一ノ四三より姫路市五軒邸六七酒井百合子宛封書）

伊東は半月後に結婚をすると云ふ急激な運命の深まりのなかで、音楽会に行き、チェンバロ（註・ハープシコード或ひはクラヴィサンとも云ふ。ピアノの前身）に感心したりしてゐる。大正琴に一寸似たところのある古典的なその音色に、伊東は多痕であった歳月を回顧するふさはしい伴奏と聞いたらう。しかもその感想を百合子さんのピアノの先生であった水野氏に聞いてゐる。多分、音楽の相談相手として百合子さんから紹介をうけ、一緒に音楽会に行ったものだらう。先の書簡でも判るやうに、伊東はたゞ音楽を聞くだけでなく、進んでいろいろと音楽批評家達の書いた書物を渉猟してゐた。真ん底から音楽が包蔵する精神を探らうとの努力である。

伊東はまた飽かずリルケの詩の飜訳を続けてゐるが、これも飜訳と云ふ作業によって、詩の組成から精神を味読し含味しようとの努力なのである。宮本氏の語るところによると当時、伊東はすでに浩瀚なリルケの訳詩稿を蓄積してゐた由である。が、その一編も今日残ってゐぬことは残念である。伊東の訳詩で残されてゐるのは、『呂』に発表されたケストネル二篇、ハイネ一篇、計三篇の訳詩にすぎない。

『呂』と言へば、昨年の十一月、青木敬麿氏が Vorwärts！と号令をかけて以来四ケ月を経過し、やうやく発行の段取になったやうである。「詩の小さい雑誌」と伊東は謙虚に言ってゐるが、悲痛な運命の下に参加するこの同人雑誌に、伊東は深く期するところがあったらう。由来、真に意義のある文学運動の種子は、こんな小やかで、豊饒ならぬ地所に播かれたことを、伊東は知りすぎるほど知ってゐたからだ。

しかも、花子さんとの結婚も半月後と云ふ目睫の間に迫ってゐた。『呂』での出発と共に、莫大な負債の返済に協力して貰ふと云ふ深い理解のある認諾を得たこの好伴侶との門

早春

福地邦樹

陽光は暁ごとに
人知れず冷い蔭りを浸蝕し
おのれの誇らしい時を奪いかえしていった
たれひとりにも惜しまれることなく　冬は
待たれた明るい季節に追われはじめる
都会の片隅に見捨てられた空地の
かすかな雑草たちでさえ
太陽の頼もしい助勢を得て鋭い霜柱に闘いを
　いどみ
恋人を持った少女のように
秘められている華やいだ力強さで
新しい緑を増していった
このような心賑わしい早春の日々　私も
わけもない幼い感動で
苛烈なおもいの時を
はげしい身振りで去らせつづけた
そして芽生えるものの精確なしるしに
長わずらいのこの枕辺に
何か可愛い春の花でもほしいと思いはじめた

（旧稿）

出に、伊東はさらに決意を新たにするところがあったらう。永い永い忍耐を当初から覚悟せねばならぬこの門出は、できるだけひそかに祝はれねばならぬ。高等学校教授と云ふいかめしい肩書のある酒井小太郎先生の仲人を辞退してゐるのも、そのためであらう。

もともと花子さんの実家山本家は、心斉橋筋を北に行った丸善の近くで、生薬商を代々営んでゐた。父君が老衰するに及んで、店を畳み前述の木津青物市場附近に隠棲してゐたのである。さうした伝統ある浪速商人の終末を飾る才気は、男の兄弟にでなく、女の花子さんに継承せられてゐた。奈良女高師は東京の御茶水に対応する、当時にあっては女子の最高学府であった。花子さんは、そこを出た才媛で、しかも終末の家の忍苦を身に泌みて体験してゐる。悲痛な運命下の伊東にとってはまことに絶好な伴侶と言はねばなるまい。もし伊東がこのひとを得なかったとしたら、伊東の天才を以てしても、生活的な圧力で彼の詩業を頓挫せしめてゐたかもわからない。

さうした意味の幸運を伊東自ら覚ったのであらう。今は晴れやかに酒井婦美夫人と令嬢百合子さんを書簡の末尾で招待してゐる。

伊東は結婚十日前に夫婦生活の覚悟を次のやうに宮本氏に披瀝してゐる。

「先日は実に申訳ありません。貞子さんにもあなたから、くれぐれお詫びしてをいて下さい。私はあの日京都に行ってゐました。いろいろ小生のために気をつかって下すってすみません。どうぞ、美しいレコードいただきたいと思ひます。

そちらはどんな都合ですか、すら〳〵と事の運ぶ様衷心祈ります。

私は来月四日挙式の予定です。

私の場合、これからさきの忍耐、努力の生活のこと考へられて、美しさより強さ、楽しさより理解が、重大で、心がひとりでに緊張せずにはおれません。うまくゆく様祈ってゝ下さい。

伊

新治兄

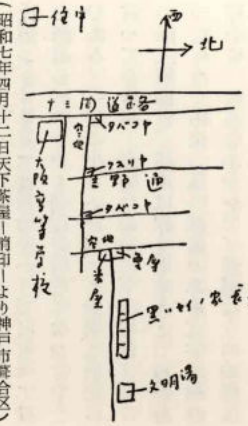
近い内に家引越す予定。後報　」

（昭和七年三月二十六日住吉中学校より神戸市葺合脇浜町再製樟脳株式会社内宮本新治宛封書）

京都に行ってゐた留守に来訪した宮本氏と吉田貞子さんに対する詫状である。結婚祝にはレコードを希望してゐる。「忍耐」「努力」「強さ」「理解」が当初から結婚生活の指針であったことが知られる。

この書簡では結婚予定日は四日となってゐるが、暦の都合によったのだらうか、一日繰上げて四月三日に挙式した。伊東は花嫁花子さんに、俺の財産はこれだけだ、と、書生ッぽ時代から用ひふるした小机と、本の山と、レコードを指さしてみせた由である。

この佳日から九日目に、伊東はやっと宮本氏に愛の巣の場所を知らせてゐる。



（昭和七年四月十二日天下茶屋一消印一より神戸市葺合区脇浜町一丁目三十一再製樟脳株式会社内宮本新治宛葉書）

伊東は花子さんと云ふ好伴侶を得て新しい人生の門出をしたが、その二ケ月後、即ち、昭和七年六月に文学的な出発もしたのである。かって、Vorwärts(前進)と号令をかけた、青木敬麿氏編輯の『呂』が創刊されたからである。その創刊号に、伊東は活字になった次の処女作を発表してゐる。

公　園

私が腰を　おろす場所は皆
公園になる
そこで人々は　ひとりでに
水の様な
安らかな歩調に帰り
木木の梢の様に
自分の言葉で話を始める

（昭和七年六月『呂』創刊号）

この処女作に、出発に際しての伊東の自信と自負のほどが、充分うかゞふことができる。もともと同人雑誌に『呂』と云ふ奇妙な題名を附けたのは青木氏であらう。つまり、自分の名の敬麿の麻呂の、呂であらう。言はゞ、男の土台である雄心と云った含蓄が蔵されてゐたと想像する。前述した「前進！」と云ふ檄でも判るやうに、伝へ聞く青木氏の風格には、さうした勇ましさが確かにあったやうである。桑原武夫氏が三高一年の時青木氏は三年であった。丁度、校長排斥のストライキが起って、クラス委員であった桑原氏は執行委員であった青木氏に身近かに接したのである。東洋学者桑原隲蔵先生の曹子である武夫氏は、あくまで話合ひで解決すると云ふ妥協派であった。然るに、青木氏は最後まで全校退学を主張して譲らなかった強硬派中の硬派であった由である。なんとなく飄然とした『呂』と云ふ名題にも、雄心を含蓄したのは当然だと想像される。

それとも、『呂』が象徴するのは、餌のない釣針で大魚を待った太公望呂尚の「呂」であらうか？　又は、唐の浦島太郎とでも云ふべき盧生が、邯鄲に赴く途路、道士呂公の枕で八十年の栄華の夢をゆめみるが、その呂公の「呂」を譬喩するものだらうか？

伊東は『呂』の解釈をどうとったか知るよしもないが、勇ましい青木氏を向ふに廻しての処女作「公園」での自負はたいしたもので

ムッシュウ・オノレの詩

石浜恒夫

＜夜が待つ＞

夜が待つ
橋のほとり
橋姫ひとり

買いたまえ
ひとたびの哀歓はすべて水
逝くものは逝き
酔い痴れて
売りたきはわがこころ
川霧に灯はうすれ
なにさんざめく行人ら
老ゆるには早く
夏もまたすぎた

猫のごとく去る
橋のほとり
橋姫ひとり

＜通天閣＞

百円札ヒロタ
新世界ヘユコカ
ジャンジャン横丁デタコ焼買オカ
キンツバ買オカ
ナンボナンボ買オカ
算盤ハジイテ十円ガ買オカ
ダイヤモンド買オテンカ
ダイヤモンドタカイ
タカイハ富士山
通天閣タカイ
通天閣ノ望遠鏡
アッチヤモコッチヤモミエル
財布ノ中ニ三十円ノコッタ

——谷内六郎氏ニ

（昭和七年六月『呂』創刊号）

月よみ

服部三樹子

曇・日の庭の木の葉の光りたるたまゆら
よりぞこころ動きき
稚なさよ我れが超ゆべき稚なさを地下道
下りつ無下に捨てたり
見し月は波のごとくに拡がりて灯を消す
時に胸に宿れり
灯を消せば胸の奥処の深さかも見しもち
月を浮かべてぞ寝ぬ
湖のごと澄める月夜に明らけく影落つ時
に我が影は愛し
うつしみの人にあれども遠くより肩に来
たまふ重くあらねど
澄みゆきてきはまる時のむなしさに堪へ
て押し照る月の光は
天地の天に月よみかかるとき生きとし生
きてこころ澄むなり
こよなくて睦びしきそは霧がくれいまの
うつつに押し照る月よみ
果つるとふ言葉こころに生くるとき言葉
といふはまことゆゆしき
むらぎもの心のうごき果つるところいの
ち生くとも我等死すべし

ある。伊東がペラ〳〵な同人雑誌『呂』に腰を下しただけで、人々が憩ひに集ふ場所となり、各自が自分の言葉で文学を作る安らぎの園になることを譬喩してゐるわけである。

この頃、伊東は宮本氏に次のやうな書簡を書いてゐるが、伊東の新家庭そのものが、憩ひの「公園」であったことが知られる。

「その後どうしてゐますか、いつも心配してながら、こちら近頃諫早より家族上阪中のごた〳〵にて手紙もよう書きません。ハイラーテン(註・Heiraten結婚)のことどうなったでせう。

丁子(註・吉田貞子)さん元気で、希望を持ってをられるでせうか、なりゆきを一寸ご一報下さい。私の方相変らず要領をえぬ気持でをります。これはどうも二人の性格のせいらしいです。

…中略…

是非そちらの情況報告かたがた上阪下さい。今度は少しはもてなします。(下女を雇ってゐますから少しは楽です)。では待ってゐます。」

(昭和七年六月二十日大阪市住吉区阪南町中三丁目二〇伊東より神戸市灘合区脇浜町一丁目三十一番製樟脳株式会社宮本新治宛はがき)

伊東はコンファタブルな楽園にゐながら、相思の宮本氏吉田さんの成行きを心配してゐるわけである。

伊東は下女を雇ひ得るほどのこの好環境にあって、毎月『呂』に溢れるほど作品を発表しだした。

桜

後園に

東伊と人夫子花の時当婚新

何時にても逢はば逢ふべくさまたぐるも
のなき世にも別れむと言ふ
蔵ひをく我が気位の高さをも始めより知
りて愛し給へり
颱風の近づくままに稲葉さやぎ波なす見
れば人し恋ひしも
たたかふとあれば空母にも参謀にもなら
むと言ひて帰りゆきし人
門柱の倒れて石の長き椅子作れば秋陽に
我等憩へり
胸内のしづく重さとなりゆきてきのふも
今日も見しはもち月
たまゆらも吾を傷つくることなくて育て
給ひき我はをみなに
赤子よりききわけ知らぬ手をのべて飽か
ず汲みたる君が胸の井
虫なけば夜半あかあかと灯をともしきく
はたのしゑたのしかるらむ
我がまこと尽さざりしは許されて飽かず
もよりし御手ぞなつかし
家中に眠れるものをさまたげずみづから
は啼く秋虫の声
君と我が二人なる世をしろしめす神をた
たふと夕戸差したり
くまもなく照らせる月の下なるに我より
知らぬこの思ひごと

桜は孤樹になって立ち
淡々しい花に満ちる

野茨の花

お前の社交の時は
了った
日光の正饗はもう
お前にずっと 遠い
夕影の茂みの傍を
今は
傾聴で歩いてみたり
聖孤独の祈りを
したりすればいゝ お前は

追 憶

青葦の根に 慥か
追憶は棲んで居る
葉揺れが
五月の泉の様に鳴るが
風は何処にも 気はひも ない
私は 要心しなければいけない

(昭和七年七月『呂』第二号)

七月に発表した、この三篇中の第二篇目、「野茨の花」には、妄執であったかっての愛の歴程に対する回想が感じられる。あの苦澁に満ちた歴程を、〈社交の時〉であったと鎮静した今となって感慨してゐるのである。その社交の日々のたのしいさんざめきに、傾聴しながら心静かに歩み過ぎ、或ひは、そのさんざめきを構成した人々の幸運と、併せて新家庭の平安とを祈ってゐるのである。

こゝに用はれた聖孤独と云った言葉には、Einsame(アインザーム)と云った独逸臭がある。伊東はこのアインザームと云ふ言葉には高等学校時代から馴染みであった。彼の高校卒業記念写真帳には級友各自の語録が銘してあるが、意気とか希望とか云った青年らしい語録の氾濫の中に、伊東は一人「イッヒ、ビン、アインザーム」(註、Ich bin einsame 我孤独なり)と書いてゐた。恐らくこの感慨は、新婚の「野茨の花」の日も、父となった日も、いや、終生変ることのなかった感慨だったに相違ない。

然し、伊東の祈った聖孤独も、風もないのに揺れ騒ぐ葦のやうに時として揺れることがあっただらう。第三篇目の「追憶」は「野茨の花」とは全く反対な血気のある心象を抒情してゐる。葉を揺るがすのは、時に心騒がすのは、根に籠ってゐるあの追憶なのだ。

この詩は格別解説を要しない詩ではあるが、葦の葉による発想はその後も永く伊東の胸底に暖められてゐたのである。即ち、六年

山荘の写真

山根忠雄

渡り鳥のやうに
今年も妻子は帰省した
詩人リルケが晩年隠棲した
寂寞の家
詩人ヴァレリイがそこを訪れて
「沈黙との極端な親和
純粋な時間
生活の透明さ」
と驚嘆した
ミュゾットの山荘――
白雲の浮ぶ
スイスの連峰を背景にした
煉瓦作りの古い小さな一軒家
見るからに
胸をしめつけるやうな
きびしい孤独感の迫る
その写真を壁に貼り
それに刺戟されて
――この好機とばかり
僕は詩作に没頭する

後に「夜の葦」として全き作品と結晶した。
いちばん早い星が　空にかがやき出す刹
那は　どんなふうだらう
それを　誰れが　どこで　見てゐたのだ
らう
とほい濕地のはうから　闇のなかをとほ
って　葦の葉ずれの音が
きこえてくる
……

第二詩集『夏花』―夜の葦―

言はば、この「夜の葦」の原型として記憶に留むべき作品である。

台風の過ぎた夜

池沢茂

『さむい！　さむうて、かなわん。ふとんを敷いてくれ！　じきに寝るさかい』
ぼくは屋根からおりると、さっそく妻に言った。しぜんと、どなりつける口調になっていた。
『はだかでするからやわ。ゆかたかシャツを着ればよかったのに。ぬれたかて、かまへん。天気になってから、ほしたら、じきに、かわくんやから……』
ぼくの見幕に、妻はちょっと、おびえているようすだった。ぼくは自分の言いかたが大げさだった気がした。『じきに寝込まんならんほど、それほど寒いわけでもないんやが……』とぼくは口のなかで言った。
ところが、ふとんのなかへはいると、ぼくはほんとうに、ふるえだした。そのときは夢中で、あまり気にならなかったにちがいない。暑いじぶんだったが、はだかで一時間から二時間ぐらい雨に打たれていると、体のしんまで、こゞえきってしまうのらしい。歯がガチ〳〵なり、腕や脚が、ときには腹のあたりが、けいれんでもおこしたみたいに、ぶる〳〵ふるえるのだ。あまりひどいので、兵隊のときのマラリアが再発したのではないかと、ぼくは不安になった。しかし三十分ほどもして、体がだん〳〵あたゝまってくると、ぼくはまた、元気になりはじめた。疲れきっているはずなのに、なにか粗暴な力が、しきりに、わきあがってくるのだ。
『あんな暴風雨の最中に、はだかで屋根のうえにあがっていたものが、ひとりでも、いただろうかな』ぼくはこうふんして妻に話しかけた。『消防団員でも警察官でもない。団体の力も身支度もない。すっぱだかで、あの物すごい風のなかへとびだしていって、ひとりで、雨に打たれながら、やったんや』ぼくは、はだかで雨に打たれると、つめたいのを通りこして、痛いように感じること、木の葉があたっても、台風の異様なスピードに乗っているので、まるで石つぶてを投げつけられたみたいなこと、ごおっと吹きよせてくるたびに、納屋全体がどんなにゆれるかなど、いろ〳〵としゃべりつゞけた。
妻はくちびるをかみ、まゆをひそめて、うなだれていた。いゝ気になってしゃべっているぼくにたいして、かの女は、なにかしら、責められているみたいな気がしていたのだろう。納屋のトタン屋根が吹きとばされないように修繕してくれと、はじめに言いだしたのは、かの女だったからだ。しぜんと手がらばなしみたいになるぼくの口ぶりのまえで、妻はつらそうに、ときには腹立たしそうに、いら〳〵していた。ぼくはしかし、これまでやったことのない仕事をぶじにやりとげたことで、むやみに、ほこらしくなり、よろこんでいた。
『もう、たぶん大丈夫だよ。あれ以上の台風が来たって、納屋そのものが、ひっくりかえったり、こわれたりしたらしまいやけど、屋根が吹きとばされることは、まあ、ないやろな。おもしの石もふやしたし、くぎもたくさん打ったし、そのうえに板をあてて、二重にくぎつけしたんやからな。まえよりも、かえって、ずっと丈夫になったやろな』
『ほんと、あんなにじょうずに出来るとは思わなんだわ。一時はどないなるやろと、はら〳〵してたけど……』
うつむいていた妻はこのとき、ぼくを見て、はじめて口をきいた。その笑顔をたしかめて、ぼくは急に、大きな安心をおぼえた。ぼくはひとり、いちずによろこんでいたけれど、怒ったように、うつむき、だまりこくっていた妻のまえで、やはり、だん〳〵チグハグな気持になり、いくらか不安にもなりはじめていたからだ。苦労がみとめられた者の満足で、ぼくはやっと、おちついた気持になった。よろこびのこうふんがしずまって、みちたりた、やすらかな愉悦が来た。愛したい慾情に、ぼくは強くとらえられていた。
ぼくはそれまで、ほんとうは、妻を憎んでいたのだ。不満もいだいていた。いくらくぎを打ってもトタン板がまくれあがり、納屋全体がぐら〳〵ゆれ、体ごと吹きとばされそうになったときには、いっそ、納屋はおろか、家そのものまで、吹きこわされてしまえと思った。ふたりの結婚も、さっぱりと、ご破算になってしまえと思った。ところが、そのト

金魚すくひ

石口敏郎

夜店が
花火のやうにあかるい
金魚は
アセチレン燈の光の中を泳ぎ
薄い死の膜に追はれる
丸くやぶれてしまった
吊革の中を
少年の夢が泳ぎ去り
金魚すくひの網は　その結晶を捕へる事
は出来ない
私は考へる
美しくよろめいて帰って行ったひとのこ
とを
光のかたまりになってしまった金魚は
尚もはたはたと
のしいかの匂ひの中を泳いでゐた
ビニールの袋の中で燃えてゐた

タン屋根の修繕が、はじめの予想より以上に、うまく出来あがったときから、ぼくの心は、ふいに一回転していた。

ぼくは妻とわかれたら、じっさいは、ぶじに暮してゆけるかどうか、わからなかつたのだ。こじんまりした新築の家を買い、むずかしい就職の世話までしてくれたのは、妻の父親だったからだ。妻の親からの援助がなかったら、耳の遠いぼくは、いつまでたっても、ろくな職があたえられず、結婚もできずに、あわれな生涯をおわったにちがいない。ぼくはその晩、いったん起きて夕食をすますと、じきにまた、妻をさそって、寝床のなかに、もぐりこんだ。そして、いつになく早くねいったせいか、夜半に、ぽっかり目をさました。ぼくと妻とは、手をにぎりあっていた。枕もとの腕時計を見ようとして、その手をほどいても、妻は、あおむけで、口をあけたまゝ、規則正しい寝息をつゞけている。といっても、やすらかな寝顔ではない。いちど不妊症だといわれたことがあり、自分でも半信半疑なので、ぼくにも、まだ打ちあけていなかったものゝ、かの女はこのとき、もう妊娠の初期になっていたのだ。ほおがこけて、苦しそうな、けわしい顔をしている。あけたまゝの小さな口をこわばらせ、ひたいにしわをよせて、ねむっていながら、なにか思いつめているような、かたい、いっしようけんめいなようすをしている。

睡眠のなかでまで、なにを苦しみ、なにを思いつめているのだろう……。ぼくはふしぎな気がした。起きているときには、こういう表情は、かえって、それほどにもあらわれていなかったからだ。そして、そのために、なにかしら心を打たれた。ぼくは納屋のトタン屋根を修繕するのに命がけみたいな気持になっていたけれど、この家を守るのに、ほんとうにけんめいになっているのは、たぶん、ぼくよりも、妻のほうにちがいない……。

枕もとの腕時計は、まだ一時半にしかなっていない。そっと起きだして便所へゆくと、窓はしかし、まもなく夜があけるみたいに、ほの白くあかるんでいる。いつのまにか雨もやんで、はれわたった空に、月が照っているのだろう。あんなに荒れ狂っていた風も、うそみたいに消えて、休のなかまでしみとおるほど、しずかなのだ。

ぼくの祖父より以前は代々兵庫県の加古川の近くに住みついていた。ぼくはしかし、教員だった父の任地がかわるにつれて、茨城県の太田で生まれ、その奥の馬場村へゆき、名古屋へ来ると、片端、大曽根、千種町と移り、大阪では王子町から北畠へかわった。学校は東京で卒業し、日暮里から牛込へ移って、その近くに就職し、そこで召集されて姫路に入隊し、大陸にわたって六年近くすごし、職を求めて東京へゆき、大阪に帰り、いまは神戸のこの家で暮している。女にたいしても好みが一定せず、そのとき〳〵で、いろんな相手に、心を動かされてきた。

『あの妻が、よかれ、あしかれ、ぼくの一生の伴侶なんだな。そして、この家が、ぼくにさだめられた「すみか」なんだな』

ぼくはしかし、このとき、ふいに目がさめたみたいに、強く思った。

新潮文庫七二　七〇円

伊東静雄詩集

彼は日本の近代詩に消しがたい痕跡をのこして去つたのであつて、その細くするどい痕跡がいかに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅ひろく浅い痕跡が磨滅するにつれてはつきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであろう。

桑原武夫

箱船

浅野晃

ネオンかがやく墓地
車でうづまり
身動きならぬ雑踏の十字路で
けしからず巨きな腹がふくれあがり
泡立つ青い浪の裾から
また一つ
錨のきれたその船が
時間のなかへと押し出される

いま鳴る晩餐のドラ
食卓のかたはらに
瞳を忘れた女が立ち
その手が支へた平べたい皿には
すでに終末らしいものが
なまみのままで載ってゐる
窓のない箱のなかでは

どの花もどの花もただ黒く
無電が呼びつづける
冷房　暖房
冷房　暖房
冷房　暖房
冷房　暖房

おしやべりは尽きない
意味は太古のへその緒だとか
種子はいつも非常に小さいとか
名前といっても番号だとか
だにの脚にも関節がありますとか
この天井に太陽をぶらさげろとか
否、否、千度も否
と叫ぶ口から飛出す蝶

その蝶一羽のがれて黄濁の流の上を
この瞬間をわれら知らず
されどすべてを見てゐる一者がある

インパール（二）

岩崎昭彌

「ウ号作戦」とはインパールを取ることだ
二十日間の食糧弾薬で　四十余日を戦った
駄牛は全部斃れても　進軍以来　牛一匹の補給もない
兵隊はすでに原始人間となり　チン高地の蕃族陸穂を喰ってゐる
見よ！敵は　七十機を越える輸送機で　軍需品を　インパール陣地に投下する
「弾丸送れ　米送れ」この訴へを　部隊は幾度も繰り返す
歩兵　砲兵　飛行機　戦車　敵の立体作戦に対するは兵を弾丸とする　モグラ戦術
夜間奇襲で戦車を破壊すると　天明とともに炎の嵐をうけ　中隊ごと吹っ飛んでゐる
かくてインパール――コヒマ道へ　敵は洪水となって雪崩こみ
「烈」「祭」の両兵団は　分断され　孤立させられ
パレルの支柱の山本支隊また　反復攻めたテグノパールで力つき　生残りが　数十名と

なった

「ウ号作戦」とはインパールを取ることだ
拠点を「弓」兵団方面と決めた　軍司令官は
マレーの鬼といはれた人
戦車と重砲は　負傷の分までかき集め
昨日ビルマへ到着の　「安」兵団の二大隊に
下命した　「チュラチャンドプールに急行
せよ」と
だがトラックを持たぬ部隊は　アジャのあば
たで　蟻の行列だ
悪疫と　暑気と　疲労に倒れるものの続出で
命令を全うしたもの　軍旗と十二名の若者
だけだった
隊伍の崩れた蟻を　新鋭の支援と信じた友軍
は　ビシエンプールの山地にて
雨にも霧にも　三十八度の極熱にも　屍の悪
息　糞便との同居にもめげず　闘った
斬壕から一歩飛び出せば彈の雨　屈んだまま
の苦痛を　東北育ちのねばりで耐へ続けた
彼等に対し
五月十九日　乾坤一擲を期す攻撃命令が出た
雑木の茂みの中で　衰へた肉体に眼だけが燃
えてゐた聯隊長　「馬鹿な！」と一言つぶ
やいたが　最後の作戦にとりかゝる

平和な妻子の姿が　一瞬　浮かんで消えた彼
の脳裏で使用に耐へ得る兵力が　整理され
てゆく

第一大隊	三八〇名
第二大隊	五〇〇名
直轄部隊	一五〇名
第一大隊の兵器彈薬は	
重機関銃	二門
軽機関銃	五門
第二大隊の兵器彈薬は	
重機関銃	三門
軽機関銃	六門
山砲	四門
砲彈	五四発
破甲爆雷	五個
擲彈筒	四個

兵隊一人に小銃彈一二〇発　手榴彈一個
乾パン三袋
一時間分の彈薬と一日分の食糧で　三日戦
ふ　あとは——
かくて翌夜半の午前二時　猛烈な音量が突如
爆発し　闇の底に　異常な散乱が拡がった
「おっかあー！」「今死ぬ！」「天皇陛下
万歳！」地獄の中の　呻吟と血の匂ひ
小隊全滅し　中隊全滅し　死闘は一週間続け
られ　大隊長も斃れ　聯隊長も斃れた

「ウ号作戦」とはインパールを取ることだ
斬り込みとは　空き腹が　暗に乗じて敵の寝
込みを襲っての　兵器と食糧の略奪だ
命を賭けた得物とて　何人が　何日喰ひつな
げるといふのか
片腕　片脚のない兵隊！　マラリヤ　赤痢の
重病者達！　一体どうせよといふのだ
餓鬼と病人では軍が出来ず　敵は来る
「烈」兵団長佐藤中将は決意した　「全員
を救ふのはいまだ」
電文を　受けて驚いたのは軍司令官　彼は怒
りと　不安と　自責におののいた
「今や　大作戦の成否の関頭にあり　飽くま
でコヒマを確保せよ」
兵団長それには答へず　宮崎少将の一支隊を
コヒマ——インパール道にとどめ　傷病患
者を指揮して　独断退却を開始した
昼は密林にかくれ　夜は銃を杖に歩む　それ
は　化物のやうな人馬の行列だ
背後の　この事実を知らされなかった「祭」
兵団に　得たりと敵は　戦車一五〇輌　二
箇師団を指し向けた
守るに兵団長は病床に伏し　参謀長が馳け廻
ったが　兵力は　敵の一箇聯隊以下なのだ

火を吐く戦車へ突っ込んで行くふらふらの肉
体を雲がみてけふも瞼を泣き腫らしてゐ
る
退却の「烈」兵団には軍参謀が土砂降りつい
て馳けつけた
フミネに兵団長と会した彼は戦線離脱の違令
を糺し「戦場へ帰れ」との厳しい軍命令を
伝達した
だが「この惨状を見よ」と兵団長やがて破れ
た軍服の背をみせた
「ウ号作戦」とはインパールを取ることだっ
た

——インパール——

浅野晃著
現代を生きる
亀井勝一郎氏評——日本民族の個性、とくに明治にあらわれた民族の活力と偉人について著者は深く傾倒されているようである自分たちの足もとをみつめ、祖国の真のすがたを知ろうとする念願、およびそれを通して自己の新しい生をもう一度築きあげようという祈りに似た気持に私は期待する。　一二〇円
東京都千代田区神田美土代町六
明徳出版社

ギュンタア・アイヒ詩抄

雨の使者

ぼくにさしむけられた報知は
スレエト屋根から瓦屋根へ
雨から雨へとどよめきながら
病気のようにもちこまれる
ほしくもないものに
手渡される密輸品のように
壁のむこうで窓のブリキがなる
ガタガタと音をたてて文字をつづるのだ
そして雨が告げる
ぼくのほかには　きっと
誰も知らない言葉で
ぼくは途方にくれながら聞きとる
貧困の通告を
それから叱責の通告を
それがぼくにむけられているのが
ぼくを苦しめる
ぼくには責任が感じられないのだから
ぼくは声高く言ってやる
雨なんか恐れてやしないし
雨の訴えも　そんな訴えをぼくに
よこしたものをも恐れてやしない
しかるべき時に出かけて
かれに回答をしてやろうと

見捨てられた高原の牧場

牛の足跡に
たまった雨水
十一月近くなっての
途方にくれた蠅
赤銹びた釘は野分の風に耐えられまい
鎧戸は蝶番できしむだろう
いつか窓ぶちにぶちあたったり
いつか壁にぶちあたったりして
それを誰が聞くのだろう

レンベルグ*

不安な傾斜は　数えきれなくて
市電の軌道は
雑草におおわれた原っぱの
ふるびた戸口の前で終っている

果樹園二十一号　昭和三十二年十月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同　朋　舎　定価三十円

＊一九一八年までオウストラリア領ガリシアの首府でレンベルグと呼ばれたがポーランド復興後ルヴオヴと改められ第二次大戦後はウクライナ領リヴオフと呼ばる。

指先を見つめよ

指先を見つめよ　もう色が変っていないか
根絶えた筈のペストとなってあいつが　いつかまたやってくる
郵便配達はあいつを手紙としてがたがたの郵便受にほうりこみ
あいつは餓の配給として皿の上にのせられ
母親は乳房として子供に与える　あいつを
あいつの扱い方を知った者が誰ひとりいなくなった今ぼくたちはどうしたらいいのだろうぞっとするようなものと仲よくするやつはあいつの訪門を気やすく待つことが出来るがぼくたちはいつも幸運を迎える用意をしているのに
幸運はぼくたちの椅子に坐りたがらないのだ
指先を見つめよ　もしも黒ずんできていたらもう遅すぎるのだよ

たかはし・しげおみ訳

（Günther Eich は一九〇七年生のドイツ「自然詩人」）

同人雑誌評「青い花」

浪漫主義の象徴の名を持ったこの雑誌は山岸外史の編集後記ほどに空想力に満ちてはいない。がさすが山岸外史の「鼻の大きな男」はある不思議に透明な美しさを持っている。萩原葉子の「父の思い出」は朔太郎がいかに本当に詩人であったか、そしてまた、そうした人物がもう今の世に絶えてなくなったことをしみじみ感じさせるような快い文章で書かれている。静かな愛情でみつめられて父朔太郎が生きてきている。重要な伝記になるのであろうこの文章が書きつづけられることを期待する。桜岡孝治の「東方未明」は何故こういうものを書かなければならなかったかがよく理解出来ない。かって読んだスウェン・ヘディンの、少々退屈だが本当に書くべくして砂漠の生活を記した「ゴビ砂漠探検記」を思い出した。宇田道夫の「燔祭」の緊張ある文体は気持よかったが、最後で力が抜けた。

いまの文学にとって青い花が何であるか、それこそむずかしいが、この雑誌にはたしかにゆるやかな純粋さがある。刊行を重ねて豊かになっていくことを祈る。（福地邦樹）

編輯後記

去月三十一日、北村徳太郎氏の招きで上京した上村氏は、その帰郷の途路発行所に立寄った。東京で田中、小山斎田三氏に会へたと喜んでゐた。未曽有の水禍に見舞はれたことで、幾度か捨てようとした諫早に却つて愛著と定住の覚悟が湧いたと言つた。水禍の直後死んだやうになつて三日を過ぎたが、こんなことではいかぬと立ち上らせたものは、後で思ふと詩精神ではなかつたかと語つた。

もともと僕等の詩精神は、いかなる環境下にも人間の尊厳を信じ、その護持を祈ることであつた。

その翌日岐阜から岩崎氏が来訪した。彼が心血を注ぐ「インパール」の連作は、その地で戦没した兄上と、同じく運命を共にした幾多の無名戦士への鎮魂歌である。この作も戦没した者の心になつた冥福――人間の尊厳を顕彰する志の上になつてゐる。

九月八日服部三樹子さんが来訪した。この秋秀麗な歌集を編む筈である。

尚、今号の編輯は池沢、山根、服部三氏と共に当つた。

果樹園　第二十一号（毎月一日一回発行）
昭和三十二年十月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区壬生川通五条下ル　同朋舎
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園二十二号　昭和三十二年十一月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同　朋　舎　定価三十円

果樹園

第22号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
東京哀歌　田中克己
クロロフ詩抄　たかはし・しげおみ
セメント　池沢茂
島二題　浅野晃
恵子とクロと　山根忠雄
気違いばばあ　福地邦樹
臨海実験所のある町で　小村京子
Kなる人に　山田幸
月に招かれた男　芳野清
ムッシュウ・オノレの詩　石浜恒夫
白居易詩抄　森亮

書簡から見た伊東静雄（三十二）

小高根二郎

伊東は『呂』八月号に、次の八篇の作品を発表してゐる。

夕顔

妻よ　夕顔のことを話すのを
廃さう
僕等の言葉は未だ
この花の霊白な理智の
目覚め切るのに
ほんたうの薄暮でない

葉は

葉は　葉の意思で
楡の木に
細緻な Cosmos で光って居る

註　Cosmos 世界

窓

何処か　無花果の匂がして
気づかはしげに　空の
夕明むよと　自分の体を
一枚の硝子絵にしたい願で
私は窓に坐ってゐる

八月

街路には何の予感もなかった
そして
自身の恢復するのを
人は待つだけだった

父祖の肖像

父祖の肖像を
食堂の壁に懸けて　私は
とりかへせぬ過をした
晩餐の　濃ふ様に暗いのは
窓から入った外の闇であらうか
不確な手許に堪へ
私の家族は　誰一人もう
灯に立たうとしないのは
食物の楽しいからであらうか

懼

真夏の日光の中を　きっと
あの女が　私の曽て

雲の様に去らせた女が
鋪石に影をも落さず
私の目の前を過ぎる

並　木

並木道を　私の過ぎたがるのは
私は　挨拶好きな樹木だからだ

湖

妻よ　小艇の親和力を信じては
いけない
あんなに湖面に　あれが白く
見ゆるのは
湖の心深いあざむきなのだ

（昭和七年八月『呂』三号）

冒頭の「夕顔」と末尾の「湖」の詩は、共に、〈妻よ〉の親愛な呼掛けで始まってゐる。が、その親愛さにかゝはらず、〈話すのは廃さう〉であり、〈信じてはいけない〉の禁断の調であるのに気附くであらう。さう言へば、三月下旬に出した宮本氏宛書簡に、「これからさきの忍耐、努力の生活のこと考へられて、美しさより強さ、楽しさより理解が重大」と、結婚生活の指針を書いてゐたのを思ひ出す。さうした厳しい指針から生れた抒情に、この禁断の調が感じられるのは、むしろ当然であるかもしれない。

又第五篇目の「父祖の肖像」には若い家長としての伊東がよく感じられる。六月二十日附の宮本氏宛書簡に、「近頃謙早より家族上阪中のごたごた」とあったが、その時この発想を得たものだらう。つまり、手狭な家に急に人数が増え、その食卓の賑やかさから、父の写真が夕闇で見えなくなってゐるのに、誰も灯を点さうとせぬうかつさを、気にしてゐるのである。父が死んでから九十日をすませたばかりである。しかもこの無関心。若い家長であり夫である伊東は、思はず「花子！灯をつけなさい。」と叫んだに相違ない。その声に席を立った花子夫人も、灯の下で夫人が腕によりをかけた料理に舌鼓をうつ家族も、灯を呼んだ家長の真意は判らなかったに相違ない。

尚、第六篇目の「懼」も作品のできふできからでなく、記憶に留むべき作品である。……と云ふ訳は、前月の「追憶」につらなる作品と思はれるからである。〈真夏の日光の中を、鋪石に影をも落さず過ぎる、あの女〉それは、紛れもなく、昭和二年五月、つまり五年前の安代さん宛書簡に報じられた、ゆくゆくなく河原町丸太町で出会った百合子さんの幻影である。「どちらに？」「三条に……」たゞそれだけの問答が、二人の間に交されたゞけだった。どちらかと言へばつれない別れであった。が、伊東は、百合子さんのバンドが風に揺れ、やがて電車に吸ひ込まれるまで見送ってゐたのである。その夜、伊東は大学図書館に籠って、本を読みながら、安代さんの数数の恩愛を思ひ出してゐた。その思ひ出の糸で、小説的構想や詩の着想を考へた……と、安代さん宛書簡に見えてゐた。その夜の詩の着想が、五年の年月を経て結実したのが「懼」であると言へると思ふ。この考へ方に立たなくては、〈雲の様に去らせた女〉と云ふ意味がぴたりと来ぬ。つまり、雲のやうに、止めることも得ず、見送るばかりであつた女……と云ふ意である。

花　咲　く

私は花瓣だ　タイトルだ
根への諦の　底無ければ底無い程
蕊等の憧に　痛切であればある程
私は私の一番美しい力で　花咲か
うとする

東京哀歌

田中克己

秋晴れのけふ
僕はまたあの高みにのぼった
少女たちとのぼった夏の日とちがって
地平線まで見わたされる
赤城、榛名、妙義、那須——
僕は山々の名を呼んでみる
しかしなんと冷い表情だ
いまに寒い風を吹き送ってやる
山々はさうおどかしてゐるやうだ
さうだおまへたちはかつての日
朔太郎を叱り大垣国司をおびやかしてゐる
おまへたちはあのおとなしい子供だった
大塩麟太郎の戦死の報にも哭しなかった
冷酷なやつらよ　おれはにくむ
さう僕はつぶやいてからおりて来た
なんとそのつぶやきの低いこと
僕は泣いてゐるやうに見えたらう
僕はここでも負けて泣くのだらうか。

（昭和七年九月『呂』第四号）

底知れぬ過去への諦念。痛切な未来への憧憬。その間の現在に処する伊東の覚悟は、美しからんとする努力なのである。その努力の役割を果すのに一番有効なのは詩人である。つまり、詩人は花容の中の花瓣。詩人は爵位だと伊東は歌ってゐる。この詩人は爵位であると云ふ思想は、三年後、つまり昭和十年『コギト』十一月号で

……
われ縦令王者にえらばるるとも
格別不思議に思はざるべし、と。
……

と云ふ、絶大な自負として歌ひ上げられるにいたるのである。

とまれ、この昭和七年『呂』九月号までの作品は、伊東の初期詩篇中でも前提としての作品である。

十月に入ると、伊東が気にしてゐた、宮本氏と女医吉田貞子さんとの氷らくの愛が結んで、ようやく結婚をした。伊東はその喜びを、次のやうに宮本氏に伝へてゐる。

「絶えず案じてゐました。さぞ忙しかったことであらうと充分推察出来ます。どうぞ疲れぬ様（お二人ともお互に）要慎しながら、ぼつぼつ整理やって下さい。花子も近頃になってから疲労出てしばらく熱など出してゐました。疲労こそは結婚生活の大敵です。私も神戸にゆきたいと思ってはゐましたがぎり〳〵な家計ではなかなか機会ありません。

然し、貞子さんの口あってよかったですね。今度の所はいくらか楽ぢやないかと、わからずながら推察し喜んでゐます。それでも大阪まではかなりあるなあと貞子さんの今までの努力の生活を考へながら思ってゐます。どうぞよくして上げて下さい。

その内私も出かけませう。是非行きたいと思ひます。私は近頃詩集を出したいと思ひ、一生懸命書いてゐます。金のそのために少しづつためたいとおもってゐます。……後略……

新治兄　　伊生
貞子様　　」

（昭和七年十月七日大阪市住吉町大阪府立住吉中学校より神戸市葺合区脇浜町一丁目再製樟脳会社宮本新治宛封書）

この書簡の末尾に見える詩集出版の希望は、その翌日百合子さんに出した書簡に、もっと具体的に報じられてゐる。

「ゆり子さん　お手紙有難う。活動には近頃ちっともゆきません。そとに出ると大へ

ん、くたびれていけません。毎日学校に出てると日曜など動きたくありません。読書も一つもやらないでゐます。近頃は一生懸命、自分の中のものを書いてゐますので、人のをうけ入れる力がとぼしいのでせう。詩少しづつ自信が出来てゐます。自分で立派だと思ふものが五十も、たまったら、出版したいと考へてゐます。二百冊位刷ったら二三百円で出来るさうですから、花子に金の工面など、たのみ出してゐます。これが思ふ通りに行ったらと、大変希望をもって暮してゐます。私は「自分は、こんなにある」と自分をさらけ出し、投げ出して、人のひはんをうけたい、といふ考へで暮してゐますので、割に左右をかへりみず、肩をはらずにおることが出来て、楽です。然し、心のこまかい、いんえいや感触やは、決局人にわかつて貰へさうにないので、その点、孤独を感ずることが、度々です。又自分の体係立った思想も、一進一退、一歩行っては、立ちどまる、といふほどの進行で、もとの様に夜明けが来るといふ様なものでありません。然し、その中に、私は私らしい美しさを見つけながら生きてゐます。かなり自信強く。

近頃は海でも山でも、大きな景色のところに行ってみたいとしきりに考へますが、それは果せません。

結婚生活の大凡ものみこめると、楽な気持がして、昔の書生どほりな安易なその日を送ることが出来ます。京都に夏休に二日ほど行ってゐました。大文字やまのま下で、のきに糸瓜やあさがほを、からませて、ひっそり住んでゐる母達をみると、何とも云へないさびしいしみじみした気持がしました。鹿ケ谷は、奇麗な流が人家の周囲に流れてゐて夏は涼しい感です。けれど湿気が多くて、こまってゐました。法然院がすぐ近くで、実にゆうすいな場所です。

ジャーナリズムを大して気にかけず、しかもそれに静かにのって行ってみたい、と云ふ淡々とした気持が近頃おこります。

宮本君は十月二日にいつか云ってゐました女医の人と結婚したさうです。多難なことであらうと私は想像してゐます。…後略…

八日ご後　学校にて　　静

ゆり子さん　机下　」

（昭和七年十月八日大阪市住吉区住吉町大阪府立住吉中学校より姫路市五軒邸六七酒井ゆり子宛封書）

この百合子さん宛書簡に、詩に打ち込んでゐる伊東の心境や覚悟が、克明に書かれてゐる。ジャーナリズムを大して気にかけず、しかもそれに静かにのって行ってみたい……と云ふ願ひは、この日から生涯変ることのなかった願ひであった。つまり、ひそかな敬愛で常に見守られてゐる。さうしたつゝましい詩人像が伊東の理想像だったわけである。

夜

クロロフ

乱れた髪の間に
灯がともっている
眠りをさそう風が通りぬけていった
明るい月の中には兎がひそんで
まともにとびかかってくる
上着の布を通して
冷気がせまってくる
何遍間も前から草刈場に
ひろげられた牧草の
じやこう草の甘い匂いがしてきた
かすかな葉ずれに耳をかたむけよう
流れをわたる小ねずみに目をとめよう
それからうるんだ星屑の下で
赤くちらつく
葦の葉の夜露に

セメント

池沢茂

ぼくの家のせんたく場は、かぎの手になった、ほそい庭のすみ、ちょうど台所の窓のしたにある。そこだと、台所の水道にゴムホースをつけて、窓から直接に、水がひけるからだ。それに、かたわらに、どぶの口があって、水はけも、わるくない。しかし土のまゝだから、たらいやバケツからすてた水など、どぶの口へ落ちきるまでに、どうしても、土に、しみこんでしまう。ことに、いつも水をすてる場所には、土が掘れて穴があき、そこに、いつまでも水がたまっている。のちに板を敷きならべたけれど、その板のしたには、そとから見えなくなっただけで、やはり、水がたまっているわけだ。ぼくの家の裏はもと〳〵へいとがけにかこまれていて日あたりがわるいから、いったん水がたまったら、なか〳〵かわいてくれない。板もそのうちに、こけがはえてあおくなり、ぬる〳〵して、しば〳〵足をとられるようになった。そして、しばらくすると、ぼろ〳〵にくさってきて、うえに乗ると、われたり、折れたりした。妻はその板のうえに、たらいをのせ、小さくかゞみこんで、あぶなっかしく、ごそ〳〵と、せんたくする。いかにもみじめで、ときには、じっとなにかを耐えしのんでいるように見えた。

といって、どんな手をほどこしたらいゝのか、ぼくには、わからなかった。もと〳〵妻の父が買ってくれた家だから、すこしぐらい気にいらないところがあっても、あまり文句はいえない。まして無断で手を加えて、へたに改造したりするのは、なんとなく、はゞかられる。それに、ぼくには、セメント工事の経験など、全然なかった。板を敷きならべたのが、せい〳〵の仕事だった。

ところが、その日、ぼくが勤めから帰ってくると、いなかの義父が、いつものように、生活のたしにと米や野菜など持って、たずねてきていた。そして妻が、せんたく場の不満など、しきりに訴えていた。夫のぼくには、かえって遠慮して、じつの父親に、せがんでいたのだろう。

『それはやはり、たゝきにせんと、あかんやろなあ。たゝきというても、セメントと砂をまぜて、ぬるだけやから、そうむずかしいもんやない。一ぺんやっといたら、氷久的なもんやから、もう、心配はいらんのやが……』

義父はぼそ〳〵と、いかにも不きげんに答えている。妻には実の父親だが、一体どれほど面倒をかけたら気がすむんだ、もういゝかげんにしてくれ、とでも言いたいふうな、やりきれないようすだった。そして、ぼくがそばにすわると、助けぶねでもつかまえたみた

なんだか雲の上をはだかでとぶようだ
どんぐりが殻の中でたわみ
夜の黒さにそめられて
ひんやりと
天南星が実をむすぶようだ
蟲取撫子が花をひらいたようだ
そのいきづかいが
そのままぼくに感じられる
ぼくのまわりから黒々とした夜気を
すいとっては見しらぬものへとかえて
ゆく
ちぢかまった指で
大気の中に書いておこう
冷たい大地に逐われれば
ぼくにはなにも残らないのだ
ぬかぼのわずかな匂いのほかには

（たかはし・しげおみ訳）

いに、急にぼくのほうをむいて『ひとをたのんで、日当を払うて、やってもろうてもよいが、ちょっと大層やないかな』と、さそいの水をかけた。

『えゝ、そうですね。こんな時代やから、よっぽど取られるでしょう』とぼくは答えた。『材料から、みな運んできてもらうとしたら四千円や五千円は、十分見とかんならんやろな。わしがひまやったら、わしでも、よう出来るんやが……なに、簡単なことや。本職の左官はコテでぬるけど、コテがなかったら、板でもえゝ、ブリキの切れはしでもかまへん。うえから、なぜておいたら、いゝのや。どうせ人目に立たん裏のせんたく場やから、玄関みたいなところと違うて、じょうずに出来んでも、いっこう差支えんわけや。わしがやってもいゝんやけど、いま田んぼがいそがしいてな、きょうはもう、これで帰らんならん。こんど来るときいうても、いつのことかわからんし……どうや平吉、あんた一つ、やってみんか。それとも、わしがこんど来るまで待ってるか……』

『いや、いゝです。出来るか出来んか、ひとつ、やってみましょう』

じっと念を押すような義父のまなざしを見ると、ぼくはせきこんで、承知のことばを述べた。こんど義父が来るときまで待っていたら、そのあいだに、どんな恐ろしい結果になるかもしれないと、暗い不安に、おびやかされたからだ。義父がその気になれば、ぼくをこの家から追いだし、せっかく得た職を破懐してしまうことも、できないわけではない。そう思えるほど、義父はそれまで、ぼくには、絶対の存在だったのだ。家を買ってくれ、生活や就職の世話もしてくれたうえに、実の父親にも無かったような、やさしい心づかいと実行力を見せてくれた義父だったからだ。たゞぼくには左官の経験は全然なかったので、その点がまた、だん〳〵心配になりはじめた。『このあいだは、台風でこわれた屋根を修繕したんやもの、たゝきをぬるのかて、きっと出来るわ』と妻は、うしろから、ちょっと背中をついて、そゝのかした。ためらわずに出来ると答えて、父をよろこばせ、安心させてやってくれと、はげまし、ねがっているのだろう。

『そやけど、あれは大工の仕事やったからなあ。そりや、ぼくにかて、くぎを打ったり、簡単な小屋を作るぐらいは、ぼつ〳〵ひまをかけてやったら、出来んことはないさ。しかし左官の仕事は、生まれてから、ほんとに一度も、やったことがないんや。やったことないもんが、やれるかどうか、どうも、そいつはなあ……』

『まあ、とにかく、いちど、やってみてくれんか』

島二題

浅野晃

その一

永びかされた苦悩の年々よ
しかも疲れた歩みの跡よ
これらの道にあなたも私も
だが風は死なず

光の中に
たくさんの小鳥らの声が
ここの草にたむろして私らに啼け
海の見えるここの丘で

あなたといふものの影をしかと抱き
今日も朝影
おおこのやうに今は小さなこの島に
私のすべてを献げつくして

義父はしかし、もう、きげんのよい笑顔にかわっていた。台風で納屋の屋根が吹きとばされかゝったとき、その暴風雨の最中に、ぼくが元よりも丈夫なほどに修繕したのを、義父は、ぼくが勤めから帰ってくるまでに、妻から聞き、実際にも見て、案外なことに感心していたのかもしれない。ぼくがあらためて承知のことばを述べると、急に元気になり、いき〳〵と、しゃべりはじめた。

『セメントというやつは、ふしぎな性質を持ったもんや。どうも単なる接着剤とは違うらしい。砂や石の表面に、一種の化学作用をあたえて、一つの完全なものに融合してしまうらしいんやな。うまくいったら、石や岩より、かえって強いぐらいや。しかも、石でも岩でも、そのほかどんなものでも、たいてい、年月がたつほど、だん〳〵いたんで弱くなるのが、ふつうや。ところが、セメントにかぎって、年月がたつほど、だん〳〵固く、丈夫になってゆくらしいんやな。その期間はどれぐらいかというと、ざっと百年ぐらいらしい。百年がすぎると、また、ぼつ〳〵弱くなってゆくらしいんやが……』

それから義父は、セメントは一、六、三といって、セメント一、砂六、石三のわりで混合すると、わずか十分の一ですんで経済的なうえに、いちばん丈夫なこと。石がなくて砂だけ使うときは、やはり一と六で、六分の一、すくなくとも七分の一のセメントが必要なこと。そのかわりきれいに仕上りやすいから、たゝきなど作るには、かえって適当だろうこと。そのほか、いろ〳〵くりかえし説明して『じゃあ、帰ろう。どうも田んぼがいそがしいて、ゆっくりしとられん……』と急に立ちあがった。それから、玄関のところで振りかえって、妻に『松子、おまえも手つだうんやぜ。平吉さんがやってくれるんなら、おまえかて、できんことないやろ』

『そりやあ、できるわ。平吉さんがしてくれるんやったら、わたしかて……』と妻は、いさんで答えた。

『セメントは店にたのんだら、砂もいっしょに、バタ〳〵で運んでくれるさかいな。スコップはどこかで貸してもろうたら、えゝやろ。コテは板でもブリキでもよい言うたけど、のりのカンでもえゝ。カンのふたで、なぜたら、きれいにいくはずや。わしは当分、来られへんからな……』

義父は玄関から出ると、まるで逃げてゆくみたいに、あいさつもせず、あとも振りかえらなかった。小がらな体の肩をゆすり、とぶように足をいそがせながら、バスの停留所のほうへ長い坂路をくだって、みる〳〵小さくなってゆく。その背中は『おまえたちはもう、子どもやないんだぞ。そんな時期は、過ぎてしもうたんや。困ることや苦しいことがあっ

その二

忘れまい　怠るまい
朝々に水汲むわざを
またわれ母として
子らをいつくしみ育てるわざを

桶をおき日にむかひ
はるかな人の幸を祈った
ああこの胸に溢れてくるものは
恋ひしさ

あそこの乏しい屋根の下で
二人の子はまだ眠ってゐる
ここは孤島
だが私の、またあなたの

忘れまい　怠るまい
私は妻　私は母
重いわけですこの水桶の清い水が
空と顔とを映してゐる

ても、もう知らん。わしかて苦しい仕事をいっぱい背負わされているんや。あとのことは、おまえたちで勝手に、どうにでも、解決していってくれ』と告げているようだった。そのうしろ姿が路のカーブにつれて不意に見えなくなると、コンクリートの長い坂路のそのあたりが、秋の夕日に、浮きあがったみたいに、白っぽく光っていた。

恵子とクロと

山根忠雄

恵子と海に行く。秋晴れのいい天気だ。渡しをわたる。先日の洪水で橋が切れたのである。まだ仮橋が出来ないので、両岸につよく張った八番線の針金を伝わって、ゆったりと舟は対岸に着く。

町を通る。散髪屋にからの牛乳罐をあずける。牛乳屋は橋向いの分をここにあずけて置く。すると、薬屋の角でひょっくりクロに出遭った。

「なあんだ——お前か。」

「おや、おや。」

黒い胴体をくねらせ、短い尻尾をふりふり、匍うような格好をしてクロは無性に喜んだ。恵子が歩き出すと、その前でぴょんぴょんはねた。

「ついて来る気かね?」

「そりゃあ来るよ。」

恵子の静養のため、叔母も一しょに東京からやって来たのが八月。九月には反対に僕が上京した。そして半月ぶりに帰って見ると、——家のそばの大橋が落ちている。母の手紙で知らされてはいたが、初めて岸に立って見たときはやはり意外な感じだった。と同時に一種爽快な感じもした。ふと「断橋」という言葉が浮かんだ。

それからクロだ。或る日のこと、昼飯がすんで縁先で日向ぼっこをしていると、こいつがのこのこやって来た。

「これは一体何者だ?」というと、恵子が首をふりながら、

「知らない……」といった。「この間からちょこちょこ来るの。」

米倉の前で張物をしていた母が、

「なんでも、好かれて困る」といった。

頭を撫でてやるとじっとして尻尾をふった。全身黒に、ところどころ茶色のぶちがあり、それが片方の目にも半月形にかかっているだけに、何だかこまっしゃくれた感じがする。早速クロと命名した程、要するに雑種の小さな捨犬なのだ。張物を手伝っていた叔母が、「犬好きにかかっちゃたまらないね」といって笑った。

その日の夕飯——その頃知合いの頼みで下宿していたKという小学校の若い女先生と、これも遠い親籍の子で、手伝いかたがた来ていたサッチャンという女学生との間に、クロがいつのまにか坐り込んでいた。

そしてその翌朝だったか、恵子の蒲団の裾にあたたかい一夜を明かしたのは……。

最初、このように放任したのが悪かった。仏の顔も三度である。その度が重なった。間違って、犬嫌いの母や叔母の蒲団にもぐったりした。そして雨が降った。——歴然と縁側に足跡がついた。

クロには困るとまず母が切り出した。昨夜のこれも夕飯のときである。

「おばさまは犬がお嫌いなの?」

恵子が早速横やりを入れた。

「大嫌い。」

「私も嫌い。」叔母がしずかに母の肩を持った。

「ちょっと度がすぎるな。どうしょうか?」

仏は皆黙っている。すると、

「渡しでつれて行きましょうか?」

ふと先生がこういった。それは名案だと皆が賛成した。先生は明日の朝、登校の際に渡しでつれて行くことにした。ひょっとすると、対岸の者が渡しでつれて来たのかも知れないなどと話し合ったりした。

その朝のことである……。

クロはちょこちょこついて来る。二三度仲間に出遭ったが、すぐにはずしてついて来る。四方館の焼跡から左に曲り、賑やかな田町に入る。そのとき、

「クロ、クロ」と誰かが呼んだ。瞬間やっぱりクロだなと思いながら、クロより先に僕がふり返った。ワイシャツを着た三十すぎの男と女学生の二人が呼んでいる。女学生は腰をかがめるようにして、「おいでおいで」をした。クロは立ち止まってちらりとその方を眺めやったが、すぐまた歩き出す。

「やっぱりつれて来たのだよ。渡しで——。」

「そうらしいわね。」

目指す本屋は休みだった。本好きの恵子はしょげた。早く海が見たいので、それではとすぐ郵便局の角を右に曲る。同じ道のりなのだが、その方がこの際近いような気がしたから。

このあたりにはずっと寺が多い。壊れかけ

気違いばばあ

福地邦樹

僕の下宿に
世にも珍らしい婆さんが住んでいて
玄関のそばの部屋で　暇にまかせて
蜘蛛のように眼をひからせ
なんとかかとか同宿のものに始終からんで
それが八十三才で
身内からも捨てられたばばあと知らねば
どやしつける所だが
仕方なしに　そうかそうかと逃げまわり
それがまたばばあの気にいらず
みんなでのけものにするとひがみ
私の清い心など誰が解るものかとわめき立て
興奮すると二時間ぐらいも独言をいいつづけ
自分がどんなに普通の人と異るか
大臣に手紙を出し叱咤した事あり
どこそこのおえら方が頭をさげた
昔はよく政治講演をきいたものだ
それなのにそんな私を相手にしてくれぬは
そこらのやからが有象無象ゆえと咆哮し
へたにうっかり
なぐさめの言葉でもかけようものなら
生い立ちからの身の上ばなし自慢ばなしを
えんえんと腰のぬけるほど聞かされて
のがれるすきを与えられず
八十三の方が疲れないのだからそら恐ろしい
またある日には　炭がへった金が足らぬと
あらぬ嫌疑をかけてまわり
もうれっきとした誇大妄想狂に間違いはない
気もちの悪い眼つきをし
お婆ちゃんと呼べば
年はとっても　ちゃんなどと
子供扱いをしてほしくありません
苗字でよんでもらいましょうと
はねつけるいやらしさに
もう口をきいてやるかとそっぽ向いて通れば
私が悪かったどうぞ家を追い出さないでくれ
とあやまるあわれさに
気の毒なとつい心をゆるして
なにか食べ物でもあげようものなら
そんなものは好きません
ひとから恵んでもらうのは大嫌いですと
断わるそのにくたらしさ
三畳の部屋にひっこんでおればいいものを
なにを好んでかいつも障子をあけて
廊下に面して眼をむいているのだ

た築地の塀がつづく。どこかで百舌が鳴いていた。その閑静な径で、恵子に「雪の遠足」（志賀直哉作）の話をする。

まもなくさあ——、さあ——と波の音が聞こえて来た。もうすぐだ。

「早かったわね。」

「クロのお蔭だ。」

海が見える。松籟の下、海が見える。と、恵子はもう走り出していた。一刻も早く海に直面したいのか、病後の身体をさも自分でいたわるようにして、しずかに防砂林の間を走って行った。

恵子は鋭敏だなと思った。海の力を思った。

六つ並んだ島の向うに、うすく今日は見島が見える。

潮風を満面に受けながら、十八里も沖にあるというその島影を指さした。

波が大きく白い。浅瀬にぶっかってもり上り、飛沫を放ち、さわさわさわさわと休みなく押し寄せて、ゆったり浜にうち上げる。

砂の上で弁当を開く。右手の方に鳶が五六羽降りている。

まず林檎をかじる。——潮風と林檎の香と……。

黙りがちな二人の近くで、クロはやたらに砂を掘っていた。そのとばっちりがひろげたむすびについたりした。

「駄目ね。クロは——。」

恵子があわてて飛び立った。

臨海実験所のある町で

——高知県宇佐港——

小村京子

このへんの七夕祭は可愛いですよ
ごらんになりましたか
と案内の水産学者はいふ

さうであったか琉球いも
茄子とトマトと小さな胡瓜を
縄に結んで軒毎につるしたかざりは
牽牛と織女への手向けか
土語に標準語のまざるこの
地の果てへ来て七夕を見ようとは

この夕方この土地の男達は一人もゐない
今遠い海の上で妻を思ふ男もあらう
さびしい人間のしきたりに
此処では特別のねがひがこめられてゐる
やうだ
今夜は殊に星が近い

帰りは中学校の前を通る。毛利氏の城見物はここも橋が落ちていて駄目。丁度春日神社の秋祭りで、玩具店が二三軒テントを張っていた。

昔、中学校に通った路だ。懐かしい気持が湧いてくる。

一方、クロは？と見ると、どうやら弱って来たらしい。目をとろんとさせ、今までのような敏捷さがなく、めっきり大人しくなってしまった。

恵子が同情して、

「渡しはどうする？」と訊いた。クロはどうするという謎である。

「そうだな？」

垣根に沢山木槿が咲いているところまで来た。林檎を剝いたナイフで、勢いのいい枝を五六本切る。見ると、地べたに足を投げ出し、その上に首をのせ、いつのまにかクロは眠っているのだ。

「とうとうのびちゃった！」

二人の笑い声にクロはようやく目を覚まし、「もう行くのか——」といわぬばかり、首をちぢめ、四つ足をうーんと伸ばして、渋渋あくびをした。

その仕草がつい気に入って、手籠に入れ、僕が提げて帰ることにする。入れた木槿とナ

イフと弁当風呂敷を取り出し、恵子が手籠の口をひろげた。抱いて入れようとすると、暫く騒いだが、すっぽりと入ってしまった。提げかけると、すぐまた飛び出そうとする。

「こりゃあ、そっくり『雪の遠足』だ。」

急に二人は元気づいた。

「ここでね、『こら、お駕籠に乗った気でいると承知しないぞ』といって、犬の頭を押し込むんだ」と「雪の遠足」の一部分を紹介する。

女学校の前の道に出た。幸い人も通らない。

恵子が、

「渡しはどうする……？」とまた訊いた。

「そうだなあ……つれて帰ってもいいな。」

駕籠かきも何だか機嫌がよかった。

町通りに出た。散髪屋に寄る。牛乳を貰って帰る。子供づれの女が、「まあ犬が！」といって子供と一しょにふり返った。

渡し場の上まで来た。いよいよ手籠から出そうとすると、——クロはぐっすり気持よさそうに眠っていた。今度はかえって出るのを渋った。

渡しは今出ようとするところだった。二人は急いで石段を降りた。二人が最後だった。

舟は出た。クロは……？と見ると、石段を降りずにまっすぐそのまま上の道を行き、そこで止まってこっちを見ている。舟が出て、ようやくのこの石段を降りてくる。

「先生、遠慮したんだな。」

Kなる人に

山田幸

嬉しいんです
あなたがそういってくれるのが——
実のない同情
口先だけのお世辞
そんな仕掛のわかった手品には
もうあきあきして
少しも心を動かされないけれど
やはり
あなたのその言葉には
甘えてみたい気がするのです

「まさかね。」

岸には簡単な板の棧橋が作ってある。クロはその突端まで来て、しばらくこちらを眺めていた。

月に招かれた男（十五）

芳野清

死とその前後

一時退院した彼はその後、薄寒い着流し姿で私の勤先に現はれた。たしか一月だった。家を無断で出て東京の知人を泊り歩いてゐる間中の事と後で分ったが、懐には後生大事と例の朔太郎の写真を入れてゐた。私に恋人のK嬢を紹介しようと云ひ、彼女の勤先である新橋駅前のビルまで一緒に歩いた。歩き乍らも彼は絶えず胸元からずり落ちさうになる写真をその度に奥へ押し込んでゐた。その動作だけが妙に今の私に記憶に残ってゐる。そしてビルの前まで来ると急に気が変ったらしく、「僕は駅で彼女と待合はせることになってゐるからこゝで失礼しよう」と云った。私ははぐらかされたやうでいやな気がしたが、彼の気紛れには馴らされてゐたのでそのまゝ黙って別れてしまった。それきり大垣からの音信は途絶えてしまった。しかし私は病気が

再発したものとは知らず詩の幾編かを送ったりしたが、返事はなかった。しばらくしてやっと彼が再び入院したと云ふ家からの簡単な葉書を受け取った。それから大分経った七月の始、私は宇都宮の駅に降り立った。戦災を受けた駅前には闇市が並び戦後のあの異模な喧噪に包まれてゐた。彼の入ってゐると云ふ病院は驚く程遠かった。着てゐた一丁羅の国民服は暑苦しく、バスが通る度に白い埃が舞った。場末のごみ〳〵したしめっぽい屋並が何時までも続き、不安な、いら〳〵した私の気持を一層重くした。私は誰に会ひに行くのだらう。一人の精神分裂病患者ーそう考へると当惑しないわけにいかなかった。その病ひに対する私の知識は極めて少ないのだ。気狂ひ。松沢病院と芦原将軍。それにずっと昔、私の少年の頃、故郷の街で見た狂女。その女はみるものやうな髪をして、風に裾を乱し腹まであらはにして長いコンクリートの橋を渡ってゐた。しかも女の腹は妊って醜くふくれ上ってゐた。悪童達は意味も知らぬ卑猥な言葉を吐いては傍に寄ったが、その度に狂女は空を踏むやうな不安な足取りで、けたゝましい叫声を上げながらよろ〳〵と彼等に摑みかゝった。少年の私は遠くから胸のつまる想ひでその暗い肉の谷間に瞳を注いでゐた。それはもはや人間でもなく動物でもなく、己れの不吉な罪の想ひそのものゝ姿であるやうに想はれた。そんな記憶が益々私の心を重くした。ガードを超えて道は上り坂になり、視界はやっと明るく展けてきた。高等農林学校の樹木の多い清潔な敷地が長く続き、それが尽きると一望の麦畑であった。私は上着を脱いで肩にかけた。私の心の中ではこの道が何時までも続いてゐることの希ひと、早く終ってしまひたいと云ふ二つの矛盾した思ひが存在してゐた。しかし、既に病院らしい建物が麦畑の中に見えてゐた。個人経営になるその病院は如何にも古くさく、気狂ひ病院の名にふさはしいものだった。別棟になってゐる病舎は土蔵と呼ぶに近く、石積みの壁には一尺四方位の高窓が少しばかりあって、鉄の棒が嵌めてある。それは見たものゝ誰でも憂鬱にさせずに置かぬやうな、窓と云ふより盲人の目と云った、それあるが為にかへって暗さを深める、とも云ふべき正に閉ざされた魂の牢獄そのものを象徴してゐた。無愛想な看護婦に通された控室には患者面会の注意が箇条書きになって貼ってあった。剃刀とか刃物類、マッチなどを患者に渡していけないとか月並な文字が書かれてあった。その中看護人と称する屈強な男が現はれて、私を病舎の方へ案内した。頑丈な扉を開ける度にその男は大仰に鍵束をじやら〳〵鳴らした。そして私が薄暗い廊下に入ると、再び鍵をかけた。私は密室の中に閉じこめられる不安を感じたが、今は寧ろ大垣に会ふと云ふ事の方が強く、二十帖程の畳敷きの部屋に導かれても落ち着かなかった。広い湿った部屋は長椅子がたった一つ置かれてある奇妙な部屋であった。奥の入口から黒い着物の人影が現はれた。それはのろのろと私の方へ近づいてきた。大垣だった。夜具とも着物ともつかぬものを引ずってゐたが、帯がなく、前を両手で押さへてゐた。私を見ると彼はかすかに笑ったが、その目はぼんやりと濁んでゐた。長くのびたまばらの鬚の中の顔は異様に青かった。病気の事を尋ねたが私はふとその愚かさに気付いてやめてしまった。彼はうれしさうに重い口をあけてぽつ〳〵話し出した。彼の知人の消息など私の知ってる限りの話を伝へる間、彼は時々うなづいた。彼は退屈で困まると云ひ、彼の兄に本を買って持ってくるやうに伝言してくれと云ひ、もそ〳〵懐から皺くちやになった五十銭札の幾枚かを取り出して私に渡した。彼の指の爪は長くのびて黒く、私の手に触れた時私は思はずぞっとした。当時は既にひどいインフレで五十銭札などでは雑誌一つさへ買へ

ムッシュウ・オノレの詩

石浜恒夫

1

誰れに投げつけるべき
怒りもなければ悲しみもない
これを幸福というのだろうか

いつ忍びよってくるかしれない
それは
いちど巣喰った蝕歯のようなもので
金冠をかぶせてもすっくり癒ったとは
思えないのだ
忘れ去ってしまうことだ
孤独を
オノレは他のひとたちのように
尊ぶことは出来ない

竹がほしけりゃ竹屋へゆきゃれ
竹屋どこぞィ竹屋町……
いまはとっくに竹屋なぞ一軒もない
竹屋町のアパートの一室で

真夜中のコオロギの声を
町なかのコオロギの声を
きいている

2

誰れにいわれなくとも
胸奥の空虚と暗黒は
オノレがいちばんよく知っている

手探りで辿り生きている
惨酷な言葉は吐くな
おまえ
欲びはこの不安定な小宇宙にも
星屑のように燦めき太陽のように燃え
水をかけないことだ
希望は
水蒸気になって焔とともに消えてしまう

妻の軀のあたたかさ
アパートの裏庭ではコオロギが鳴き
きょうは珍しくこもりっきりで
どの堀も
どの橋も渡らずじまいだった
盛り場の秋の灯は消えたが
盛り場のネオンは消えたが

やくざな女がやくざな男と
安ホテルへ消えていったが……
この日常には
人工の天体もまわりつづけている

〈幸福〉

ジャン　ジャン　ジャンバルジャン
ジャンジャン横丁のジャンバルジャン
野良犬　痩せ犬　どこの犬

ジャンジャン横丁のジャケツの子
縄とび　石蹴り　ジャンケンホイ
コゼット　コゼット　よっといで
ジャンジャン横丁に日が暮れた
通天閣にも灯がついた
痩せ犬　黒犬　どこの犬

ジャン　ジャン　ジャンバルジャン
ジャンジャン横丁のジャンバルジャン
黒犬　野良犬　どこへいた
コゼット　コゼット　もう帰えろ
ジャンジャン横丁に夜が来た

——谷内六郎氏に

〈ジャンジャン横丁〉

ない事が分ってゐないのかと私は暗然とした。暫くすると先程の男が私達の間に入って来て、十分間の面会時間が終った事を無愛想に云ひ、彼の袖を取って連れ去ってしまった。部屋を出る時彼は一寸ふり返へった。寂しさうな目だった。（その姿が私に最後のものになってしまふとは夢にも思ってゐなかったが。）その後私は病院を訪れようともしなかった。私は確かに不実な友であった。私は友の病ひに対して完全に無力だったし、それを戦後の意外な生活の苦しさの故にして私は次第に病ひの友を忘れていった。然し通勤電車の中とか、歩道の真中などで不意に彼の面影が鮮やかに蘇へって来たりした。すると私の心に冷たい風が吹き通り洞穴がぽっかり開いたやうな気がするのだった。その後彼の家からは何の知らせもなかったし、私も又一通の手紙も出さなかった。一年以内に治らなければとの病気は荒廃の一路を辿って全き痴呆に化すと云ふ話など聞くにつれ、絶望が先に立ち、彼は次第に生きながら私の思ひ出の人になっていった。入院してから七年目の、二十八年の秋、私は所用で大阪に寄ったがその時郊外の田中先生をお訪ねした。早速口をひらいて訊ねられたのは彼の事であった。その時私は何も答えられず口籠ってしまったのを記えてゐる。きっと先生は友の病状がどうなのか、いや、その生死さへも知らない私の不実さを責めてゐられたに違ひない。先生は寂しさうに「もう死んでしまったかも知れないね」と低い声で云はれた。

晩秋の一日私は再び宇都宮を訪れた。死んだのだらうかと云ふ不安は繁華街に近い彼の家に近づくにつれて高まるばかりだった。生きてさへゐたらどんな状態でも会はうと心に決めながらも不吉な想ひの方が先になり。見舞ふこともなかった七年間の空白が彼の死と云ふ一事が私に蘇へって来るのだと思ふとその苦しさは堪え難かった。来意を告げると、奥から出て来た彼の母は少し腰が曲ってゐたが大変な元気で嘗つて商家を切り盛りしてゐた若い日の才気を偲ばせる歯切れのよい口調で末子の傷ましい過去について語り出すのでった。不吉な予想通り彼は既に不帰の客になってゐた。それも二年前の二十六年三月五日春浅く、彼は誰の看取りもなく人知れず死んでいったのだ。病院からの報らせに彼の兄が駆けつけた時はもう死んでゐて、その死因さへ判然としないと云ふ。病院側の話によれば前夜一晩中家に帰りたい一心で窓格子を壊してゐたが、朝になり飯も食べず下を向いたまゝでその後死んでしまったと云ふのであった。彼の母はしかしそれを信じないで本当は格子を壊した事から看護人か、同室の患者からでもひどく殴られ、それで死んだに違ひないと言葉を強めた。又言葉を変へて彼の老母は再度の発狂の日に戦死した大塩の柘榴の絵や、本やら、写真など風呂にくべて燃してしまったと云ひ、今は何も遺ってゐないけれどと、私の前に小さなボール箱を置いた。その中には一時退院した時に書いたと思はれる、恩師や友人に宛てた未投函の手紙が一杯入ってゐた。開けるとどの手紙の中にも「脳病院の雪景色」の詩が書いてあった。「……そんな筈ではなかったが悩みに悩んで死んでゆく」と結んだその詩の言葉そのまゝの最後が目に浮び急に私の目は熱くなった。私は下を向いて涙を見せまいとした。しかし、涙は意外にも溢れてきて彼の遺墨の上を濡らしてゆくのだった。私は帰途の汽車の中で発狂した

田中克己 李白

李白の自由奔放、磊落豪宕の境地を円熟した訳筆・鑑賞の正確さによつて伝える。詩人である著者が多年の研究を集大成した名著《鶏賞世界名詩選》新版　三〇〇円

筑摩書房

彼と会ふことなく去ってしまった彼の恋人についていてしきりに思ってゐた。女の非情は責められなかった。寧ろそのやうな無残な別離こそ夢を食って生きてゐる詩人に訪れる運命のやうに思はれた。現実と妥協しようとしない者に現実はいつも復讐の刃を研いでゐるのだから。喀血した血を自分で吐く事も出来ず誰もゐない未明の病室で苦悶の窒息死を遂げた立原道造の死や、白蛇の幻に脅かされて狂ひ死んだ中原中也の死など、美神に魅せられた者に対する死神の見事な復讐。私はふとコクトオの「オルフェ」と云ふ映画の中の死神を思ひ浮べた。それは白いドレスに胸乳豊かなハイヒールを穿いた美女の形をしてゐたが……。彼にやっと訪れた死が彼の魂の救ひであったかどうかは知らない。私はたった一人の友を失ったと云ふ事だけだ。車窓には晩秋の黄昏の風景が映ってゐた。葉の少ない桐の枝に烏が群れて黒い森の背後には火のやうに一時燃えた夕映えの名残りが次第に光を奪はれてゆくのが見えた。ふとそれが友の生涯のやうに思はれた。一つの詩が私の中で轍の音ともつかず言葉になってゆくのを私はほのかに感じ始めた。彼の挽歌としては余りにも拙なかったが私はひたすらにその言葉を小さな手帳に書き記してゐた。

詩人と恋人　（一）

K…、K…、口に乗せて呟くと
可憐な響がしないかしら

白居易詩抄（九）

森　亮

夕べの庭で

たそがれに独り持仏堂の前に立つ。
槐の落花が庭一面に散らばってゐる。
どの立ち木にも鳴き頻る蝉のこゑ。
四季を通じて心悲しまぬ時とてないが、
中でも腸にこたへて悲しいのはそりゃあ秋の頃ほひ。

★

元微之に寄せて歌ふ

紅いろ紙と白い紙とが交じりあった紙束が二つ三つ。
君の詩と君の手紙が半々にまざってゐるのだ
もう一年も開いてみなかったが
それはこの身病にうちしづんでゐた為めと思ってほしい。
今日久し振りにひろげてみたら、つと紙魚が走った。

★

船中に友の詩を読む（元微之に寄せて）

君の詩巻を引き寄せて明かりに照らして読む
詩は最後のものまで見をはり灯し火は一段と細ったが
東天が白むのにはまだ間がある。
その火が痛いまでに眼にしみるので灯しを消して
しばらくは闇の中に坐り続ける。
まともに吹きつける風が大波をともなって
船に当たる水音がざわざわと鳴る。

註　今回は七言絶句を三つ訳してみた。初めの「夕べの庭で」の原詩は暮立（二の四三六）で、白居易が四十才頃の作。次の「元微之に寄せて歌ふ」も同じ頃に出来たもので原詩は開元九詩書巻（二の四三四）である。最後の船中の詩は居易が四十四才長江を下って江州に赴く船の旅の途中で出来たもの。原詩は舟中読元九詩（二の五三二）である。後の二編の原題に見える元九というのは居易の親友の元稹（あざ名は微之）のことである。

たとへば、アンリエットとかソーニヤとか
まもなく友と結ばれる筈だったのに
みじめな運命が離してしまった
悲恋（月並な、と笑ふのもいゝ）
宇都宮市外
真夏の日が建物の影を彫りつけ
ひでり草が陽気な花文字を描いてゐた。
けれど、やっぱり
精神病院は石の牢
帯のない着物を引づり
日の目見ずの顔は青ざめ——
それは生きてゐる幽霊か
＜朔太郎師と今まで話してゐたのだ＞
＜昨日は春夫大人がお見えになった＞
僕はF・O・Uのことで話しあった
あの主人公は僕なのです、と＞
＜T先生とは毎日お会ひしてゐる
色んな人が来てくれる
僕は少しも寂しくない＞
これはみな幻と、知りつゝ
私はぞっとした
声は咽喉に凍りつき
いひたいこともいへなくて
＜早くよくなってくれ＞と
馬鹿なことばかりくりかへし
友はうなづき笑ったが
限られた会話の時間はもう尽きた——
その後、長い月日が過ぎた
友の墓には苔が生え
落葉が何度、舞ったらう
その女は友の死を知らない
詩人の恋人だったからとて
新らしい運命をひらいていけないわけぢや
なし
しかし私はひそかに思ふ
生涯、彼女は縛られる
わけのわからぬ悲しみが
しば〳〵彼女におとづれる
だからます〳〵その女の名が
かなしく私にひびくのだ。

彼が死んでもう七年になる。三十一才で死んだ彼は日々の生活の重圧にひしがれ乍らあくせく働いてゐる私を草葉の蔭からどんな気持で眺めてゐるだらうか。（完）

註一　この詩は田中先生の筆で詩誌「骨」8号に紹介されたものゝ再録であることをお断はりします。尚は、この小説に現はれた実名の方々には大いに失礼の事も多かった筈で、更めて深くお詫び申します。御励まし下さった田中先生、林富士馬様、伊藤桂一様お忘れ出来ない方々です。

編集後記

田中さんが東京へゆくとき、ぼくたちは「どうか行かないで！」と頼んだ。「東京へいつたら、奥さんまで働かさんならんようになりますよ」と予言したものもある。そして、そのとおりになつた。ところが、ちかごろは、やつぱり東京のほうがよくなつて、そこに骨を埋めるのだそうだ。ぼくたちは大阪の一角の池田で、のこされた「果樹園」に、あいかわらず変な愛情をそゝいでいる（I）

九月二十一日信州に旅して長野で斎藤史女史にお目にかゝつた。孤絶した山国で高い文学精神を護持してゐるけなげさを拝見したかつたからである。一人ではとても見られぬ善光寺の御内陣を案内していただいた。十月四日棟方志功画伯が立寄られた。会ふ度に幾つかの啓示をいたゞく。二十八年来の師匠である。十月十六日西垣修氏から電話があつた。が互ひに多忙で会ふことができなかつた。第二十二号から山田宰氏が同人に参加した。（O）

果樹園 第二十二号（毎月一日一回発行）
昭和三十二年十一月一日発行
編輯兼発行人　池田市野町一六八　小高根二郎
印刷所　京都市下京区壬生川通五条下ル　同朋舎
発行所　池田市野町一六八　果樹園社
定価　三十円

果樹園二十三号　昭和三十二年十二月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八　果樹園社発行　印刷所　同朋舎　定価三十円

果樹園

第23号

書簡から見た伊東静雄　小高根二郎
彼岸花　服野三樹子
馬　浅野晃
ムッシュウ・オノレの詩　石浜恒夫
くわとスコップ　池沢茂
ブリッティング詩抄　たかはし・しげおみ　亮
白居易詩抄　森
生い立ち　福地邦樹
ポエジー　杉山平一
東京哀歌　田中克己
新聞をくれた女　芳野清
地獄　岩崎昭弥
相聞　山根忠雄

書簡から見た

伊東静雄（三十二）

小高根二郎

十月に伊東は六篇の詩を「事物の詩抄」と云ふ主題の下に発表してゐる。先の百合子さん宛書簡で、「詩少しづつ自信が出来てゐます」とあり、詩集出版を夢みてゐたが、主題の下で作品を作るほど詩想がまとまりだしてゐたのである。

事物の詩抄

母

妻よ　晩夏の静謐な日を
糸瓜の黄花と蔓とで
頃日の僕等の唯一の
幻想である母の
家の門を飾らう

新月

淡淡しい穹窿をも誘うて
新月の
私の目の前で生々と凝固する夕方に
新月に啓示を拝しつづける太古の
港を
私は静かに出て行った

都会

田舎を逃げた私が　都会よ
どうしてお前に敢て安んじよう
詩作を覚えた私が　行為よ
どうしてお前に憧れないことがあらう

秋

事物が　事物の素朴を失ふ日
夏は去らねばならない
そして澄み渡ったその空虚に
衆人の悔恨で
目に見えぬ伽藍は建ち始める

廃園

身を野性に放たうとする
お前の努力は
生ひ茂る雑草や濁った糸藻でこそ
消し難く　その古い物語を甦らす
廃園の様だ

朝顔

秋のほの明い一隅に私はすぎなく
なった
充溢であった日の様に
私の中に　私の憩に
鮮しい蔭影になって朝顔は咲く
ことは出来なくなった

（昭和七年十月『呂』第五号）

冒頭の「母」は先の百合子さん宛書簡に見えた、別居中の母を歌ったものである。軒に糸瓜や朝顔をからませて忙しく住んでゐる母達を見て、「何とも云へないさびしいしみじみとした気持」と書簡にあったが、同じ〈妻よ〉の呼び掛けに始まる八月号の二作の禁断の調と違って、哀憐を喚起するための勤誘の調である。

第三作目の「都会」末尾の「朝顔」は、共に処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』に「帰郷者の反歌」「咏唱」として収められてゐる作品である。

伊東はこれら一聯の作に「事物の詩」と云ふ主題を付けたが、この「事物」と云ふ言葉は、第四作目の「秋」に見えてゐる。

つまり〈事物が事物の素朴を失ふ日〉とある。この事物は、当分、伊東の追求主題となるが、まだその意味が明晰だとは言へない。

然し、秋の深まりと共に、すっかり板についた新婚生活の中で、いよいよ詩に沈潜していった様子が、次の書簡でうかがふことができる。

「お手紙有難う。近頃のあなたのご努力、心労どれほどであらうと深く推察します。病院も会社もうまく行く様祈ります。貞子さんの雅静な態度は人々に好感をあたへ、きっと、うまく栄えることと思ひます。具体的に世事に参与されるのは、僕らの友人では、あなたが選手です。花子と今日もそんなことを話し、あなた方の前途を期待し祈ります。その内暇な時出かけて、家のことあなた方お二人の愛情の程など、みにゆきたいと思ひます。私らもそのごどうにか少しづつはよくなってゆく様です。ひっそりと夜長を読書したり散歩したり、詩作したりしてゐます。…後略…」

（昭和七年十月二十八日大阪市住吉区天下茶屋三ノ十五より神戸市兵庫区脇浜町一丁目三一再製樟脳会社内宮本新治宛封書）

伊東はこの頃詩だけでなく小説も書いてゐたやうである。伊東と宮本氏との共通の友であったと想像される笹山某宛の書簡に、その由見えてゐる。

「これは、おそらくは、十六ミリには適せぬシナリオです。けれど、今の私は、こんなものしか書けませんから、こんなものをかいたのです。

重大にかんがへず、ねる前に一度よんでみて下さい。そして、すこしでもいゝシインがあったらとって下さい。ゆめゆめ、こんなものを作る野心はおこさずに下さい。

彼岸花

服部三樹子

火を含み火を吐き真昼くれなゐに燃えて
しづまる夕彼岸花
彼岸花彼岸花とて我が呼べば曼珠沙華な
る横顔を見す
彼岸花ふとせし隙に咲き揃ひこころ浮か
れて秋陽きらきら
葉なければ茎はかかはり浅けれど隣もこ
れも花はくれなゐ
空澄みぬ野にくれなゐの花咲けば思ふ人
あり何時か忘れむ
思ひごと秋の野道に咲きいでて裂目は深
き花のくれなゐ

十六ミリは、もっと即興的なものと小生はおもひますから。丁度、三十五分で書きました。（お葉書よんで、すまぬと思ひ）。この中の青年は宮本さんを想像してかいたのです。宮本さんだったらやれます。

何か美しい写実がいゝですな。

その内ひまになったら私も神戸に行きます。目下大長篇、大傑作執筆中、約千枚のもの

現住所　大阪市住吉区阪南町中三丁目
十番地　　伊　東

一度遊びに来て下さい。日本一きれいな奥さんと同居中です。

宮本さんによろしきご伝言。」

（昭和七年十一月四日大阪市住吉区阪南町中三丁目十番地より笹山某宛封書）

この書簡は宮本氏が所蔵してゐる。恐らく宮本氏に近い京都時代の友の一人だったのだらう。その笹山氏が、十六ミリ撮影機を持ついたり、学生時代に伊東が御大礼記念の児童映画脚本の懸賞募集に当選したのを思ひ出し、宮本氏を介し、伊東に十六ミリ用のシナリオを求めたのであらう。伊東はそのシナリオを三十五分で片附けてゐる。又、伊東は千枚の長篇小説を書いてゐる由、伝へてゐる。詩は先述したやうに、「事物の詩」と云ふ主題の下に『呂』誌上に溢れるほど書きだしてゐる。伊東は充分充実してゐたと見ねばなるまい。その事実をあかしするやうに、この十一月に伊東は生涯に発表した唯一の詩論を執筆してゐる。

桂川川水速き昨夜の雨つくばひ居れば彼
岸花咲く
思ふべき人にあらねば彼岸花わがくれな
ゐを野の道に燃ゆ
一群の朱立ちのぼる我が妬心空澄む日な
り佇ちて見てゐし
嘆きつつもの言ひし時彼岸花汝もくれな
ゐと我に言ひたり
我が思ひ土に埋もれ涙川絶えねば紅き彼
岸花出づ
ほのほなす身のくれなゐに余りつつ花蓋
を出でて蘂は長しも
彼岸花妖しき花と見る間にも胸に抱ける
くれなゐや何
田の向ふ遠く彼岸の花咲けばきのふのこ
とはみな忘れたり

談話のかはりに

（一）

最近買った独逸抒情詩集をみてゐたら、エリッヒ・ケストネルといふのが目についた。これは、新即物主義の重要な詩人の名として一寸馴染である。で読んでみた。

事実のロマンス

互に知合って八年
（それだったらいゝ仲と言ふものだ）
急に二人の愛情がなくなってしまった
世間でステッキや帽子がなくなる様に
二人は悲しかった　わざと快活にした
何でもない様にキスしてみた
そして見つめ合ってみた　がそれから先
　がわからなかった
そこでしまひに女は泣いた　男は傍に立
　ってゐた
窓からは舟がいくつもウインク出来た
男は言った　もう四時と十五分だね
時分だ　そこらで珈琲飲まうよ
隣室で人はピアノをさらへてゐた
二人は土地で一番小さいカフェに行った
そしてめい〳〵の茶碗を掻きまぜるのだ
　った
夕方はずっと其処に坐ってゐた
二人だけだった　そして何も話さなかっ
　た
たやすく話はみつからないのであった

どうもうまく訳はゆかぬが、大体こんな調子である。人から聞く所によると、新即物主義といふのは、文字通り、なるべく物事に即し、明澄な鏡での様にこの紛雑した世界に対し、それを透徹しようといふのらしい。表現主義のアンテイテーゼで、リルケやゲオルゲやの伴であるらしいとのことである。そしたら、僕などにも全然縁の遠いものでもない様である。そしてこの道によって、現代を生き抜かうと悲壮な決意をせねばならぬ層が、全世界にわたってあるのも事実だらう。

この詩は何も渇仰するほどのテーマでも、技巧でもない様だが、その表題のつけ方はこの主義の行き方——事物的(ザッハリヒ)に、事物的にと言ふ——意識的な心構をいくらかあらはしてゐる様に見受ける。そして又、これは無意識にかも知れぬが、この主義の生き方は、誰もが予測するやうに、新しいローマン主義に行きやすいことを証明してゐると思はれた。理性的に即物的に、鏡の様にと言ふことは、本体のわかりにくい言葉である。

第一聯の第二行の独言、第四行の譬喩。第三聯の第一行と第四行に情景描写を映画の様に入れた仕方、第四聯のしめくゝり等は、技巧として全然まずいのではないかも知れないそしてこの技巧が、即物的なと言ふ感をいくらかでもあたへてゐるのかと思ふ。（詩人・伊東がさあ、得意の技巧論と誰かが笑ってる様だからやめる）。

ケストネルには一九二九年に出た「鏡の中の騒音」（註・Laerm im Spiegel.）といふ題の詩集がある。この題の用意も、前述の気持でみると、賢明な読者はおわかりのことゝ思ふ。因に彼は一八九九年に生れた。

独逸抒情詩集(ドイツチエリリーク)というのはフランクフルトの大学の先生が、一八八〇——一九三〇の諸家の詩を集めたもので、学校の先生が集めただけ、詩の教科書の様なものである。同名の本を近い内に日本でも茅野氏（註・茅野蕭々氏）が出されるさうで、大へん待っている。

（昭和七年『呂』十一月号「談話のかはりに」）

……

こゝに伊東はケストネルの「事実のロマンス」(Sachliche Romanze) を通して新即物主義(ノイエ ザッハリヒカイト)の解説をしてゐる。「事物に即し、明澄な鏡での様にこの紛雑した世界に対し、それを透徹しよう」と云ふのが、伊東が読んだ新即物主義の精神である。が、こゝから糞リアリズムを予想せずに、新浪曼主義への展開を予想してゐるところが、いかにも伊東である。さう言へば、伊東が卒業論文「子規の俳論」で追求したものは、「芸術的主観に基く写生主義」であった。これは伊東の不動の信念なのだ。新即物主義から新浪曼主義を想望したものは当然であると言へるかもしれない

因みに、このケストネルの詩を収録してゐるのは末尾に見えてゐる独逸抒情詩集（Deutsch Lyrik）であらう。編纂者であるフランクフルトの大学教授とは、高橋重臣氏の想定によると、「現代独逸文学史」の著者であをマルチン・ゾンムメルフェルドであらうと云ふことである。

この伊東のケストネル研究はその後も続いてゐたやうである。翌昭和八年にも、「私の読んだケストネル」と題し、次の詩を飜訳紹介してゐる。

Erich Kästner
伊東静雄訳

Feine Leute, 1200 Meter hoch
上流社会の人達・海抜千二百米

Sie sitzen in den Grandhotels.
彼らはグランド・ホテルに居る。
Ringsum sind Eis und Schnee.
周囲(くるり)には氷と雪とがある。
Ringsum sind Berge, Wald und Fels
周囲には嶺と森と岩とがある。

Sie sitzen in den Groundhotels
彼らはグランド・ホテルに居る。
und trinken immer Tee.
そして絶えずお茶を飲む。

Sie haben ihren Smoking an.
彼らはスモーキングを着てゐる。

Im Walde Klirrt der Frost.
森では凍寒が鳴ってゐる。
Ein Kleines Reh hüpft durch den Tann.
一匹の小鹿が縦の大森林をくぐって跳ぶ
Sie haben ihren Smoking an
彼らはスモーキングを着てゐる
und lauern auf die Post.
そしてポーストをにらんでゐる。

Sie tanzen Blues im Blauen Saal,
彼らは青いホールでブルースをおどる
wobei es drauβen schneit.
その時外では雪が降る。
Es blitizt und donnert manches Mal.
彼にも夢はあるのであらうか
その高い背に暁の光がさしたとき
メムノンのごとく鳴りひびかないまでも
長い影は街道を切ってこの北の曠野に落ちる
だらう
さうして彼はめざめ
たて髪をふるっていなくだらう
その声は必ずや雄々しくそして悲しいにちが
ひない
自分も嘗て馬であったとき
このやうに眠りそのやうにめざめた
記憶に残ってゐるのは だが
柩を挽いた日のことだけだ
汐は満ち闇は深まり
地は事もなく転じてゐる
馬はやすらかに息してゐる
自分は彼のふかい眠りを見とどけて
さりげなく彼から別れていった

馬

浅野晃

その馬は霜のおりた道のまん中で
眠るのであった
自分が彼を見たのは
十一月も末のある日
深夜小さな村を發って
自分のゐる町へ帰ってゆく途上であった
時刻は明け方には遠かった
星の少ないしんのやみで
海ぞひの無人の曠野を一筋通ってゐる街道は
まっすぐなだけが唯一の取柄である
自分は前面に巨きな影を認めた
歩いてくる人影かと思ったが
あまりに丈も高いし柄も大きい
しばらく行くと
それが動いてゐないことが分った
ちかづいてみると
馬であった
四本の脚で立ったまま
眠ってゐる
自分は用心ぶかく彼のまはりを廻り
しさいに彼の体臭をかいだ
見知らぬ草原の中へまぎれこみ
神殿のにほひをかぐ思ひがした
海からの風が一陣来て
菊芋は霜をあびたままそよいだ
じっに刺すやうな寒気である
その中で星が乏しく光り
浪がどうと鳴った
馬は眠ってゐる
廃址の門をさながら
時空の深淵にのぞんでゐる
しかも彼はそれを知らない

何べんも何べんも稲妻や雷鳴がする。
Sie tanzen Blues in Bauen Saal
彼らは青いホールでブルースをおどり
und haben keine Zeit.
とても忙しい。

Sie schwärmen sehr für die Natur
彼らは非常に自然を崇拝する
und haben den Verkehr.
だのにこんな処まで交通をせりあげる。
Sie schwärmen sehr für die Natur
彼らは非常に自然を崇拝する
und kennen die Umgebung nur
だのにこゝいらについて知ってる事はといへば
von Ansichtskarten her.
みんな絵葉書知識ばかり。

Sie sitzen in den Grandhotels
彼らはグランド・ホテルにゐる
und sprechen viel von Sport.
そしていろ〳〵スポーツの話をやる。
Doch einmal treten sie, im Pelz,
だが彼らが室外に歩み出るのは一度だけ
毛皮を着て
sogar vor Tor der Gradhotels——
それもグランド・ホテルの玄関までだが
——
und fahren wieder fort!
そして車にのってこの地を去ってしまふ

（昭和八年『呂』七月号）

この伊東訳を、ケストネルの権威である愛知大学教授板倉鞆音、、慶応大学教授小松太郎両氏の訳文と比較すると面白い。

第二聯第一行の「スモーキング」は、板倉訳は「たきしいど」と飜案してあり、小松、伊東訳は原文どほり、「スモーキング」である。スモーキング・ガウンは日本人には馴染が薄いので、板倉氏はそれを脱がせてタキシイドに着換へさせたのであらう。

次に、伊東訳で最も拙劣な第二聯第二行目を比較してみよう。

森では凍寒が鳴ってゐる　（伊東）
森では寒さが凍てきしむ　（板倉）
森の中では蛙が鳴いてゐる　（小松）

つまり Frost（寒気）を伊東、板倉訳は「凍寒」或ひは「寒さ」としてゐるが、小松訳では「蛙」となってゐる。Frost を Frosch（蛙）と飜案したからであらう。たまたま私はこの詩の相談に最も適切な独系瑞西人ワルテル氏に出会った。瑞西インベンター社のナイロン技術者である。ワルテン氏は私の質問に対して、いかに千二百米の高地に変異があるとしても、雪の降る中に音楽を奏でる蛙は絶無であるとの返答があった。

更に第二聯第五行を比較してみる。

そしてポーストをにらんでゐる（伊東）
そして郵便を待ってゐる　（板倉）
郵便を待ちかねてゐる　（小松）

ここでの伊東訳は一番拙劣で、気分として小松訳がぴたり……とくる。

最後に、三者各様に訳してゐるのは第三聯第二行である。

ムッシュウ・オノレの詩

石浜恒夫

横堀の川霧か
町の靄か
早朝から泣きそうに煙って
安堂寺橋の袂
ウィスキーの空瓶が山と積まれ
まァ五千本はあるとして
これらを飲んだやつら

だのにこんな処まで交通をせり上げる　（伊東）
そして交通を頻繁にする　（板倉）
旅行を讃美してゐる　（小松）

この行も前記のワルテル氏に質したところ板倉訳をよしとする回答だった。小松訳の意味するところにはどうしても受け取れなかった。然し、前後の詩句の盛り上りからくる日本語としては、伊東訳が一番ぴたり……とくる。

私はここで国文科出身の伊東を、独逸文学者、とりわけケストネルの権威である板倉、小松両氏に競はせよう……との不逞は思ってもみぬ。しかも、私の理解を助けてくれたワルテル氏は、文学者ではなく技術屋中でもぼくねんじんの機械屋である。その上、お互ひにブロウクン、イングリッシュを仲介としたわけであるから、あまり当てになったものではない。然し、伊東は専門の独逸文学の権威にほぼ追随できるほどの学力を備へてゐた証拠にはなる。

くわとスコップ

池沢茂

泊りあけの早帰りの日、ぼくは妻と連れだすっぱり酒類をやめたから
羨しいのではなく
瓶のひとつひとつを
めぐる男と女の
生態が思い浮んで
ふいと顔をしかめて通りすぎる
冬は近く
ひそやかに濡れて
ムッシュウ・オノレは散歩する

〈瓶の中の小鬼〉

って出かけ、セメント一袋と、それに相応する六倍の量の砂とを注文した。

『こんどの土曜日の朝、わすれんように持って来て下さい。どうしても朝のうちやないと困るんやから。できたら、まえの日の晩にでも……』とぼくは念を押した。

このまえ義父が来たとき、地面のままのせんたく場をセメントで塗りかためるように約束していたので、公休の土曜日に、朝から一日がかりで、やってしまおうと思いたっていたからだ。そして、その帰りに、こんどは金物屋に立ちより、五百円ふんぱつして、スコップを一つ買つた。セメントをこねるにはさきの四角い、小型のがあったけれど、土を掘るのにも使えるように、ふつうの型の、さきのとがった、大きいのにした。塗料がぬってあって、金色に光っている。金属的なにおいがし、いかにも切れそうな、するどい感じがする。

『こんどの公休日も、きょうみたいな天気やったら、いゝがなあ。雨がふったら、また一週間、のばさんならん。ぼくらには公休日やないと、かたまった仕事はできんからなあ』

秋になってから、やたらに雨が多いので、ぼくは心配になった。妻も家を出るときから、なんだか、浮かぬ顔をしていた。せんたく場がコンクリートになるのは、さしあたって一番望ましいことだけれど、そういうことが、ぼくに、ほんとうにできるのかどうか、かの女には、こゝろもとなかったのだ。そういえば、自分にも、ぼくにも、かの女はもともと自信がなかった。妊娠していることさえ、よう打ちあけずにいた。ぼくが一家の主人として、妻も子も引受けて、ながい将来、りっぱに暮してゆけるかどうか。つらくなったら逃げだしてしまうのではないか。そして、かの女はふたゝび結婚に失敗するのではないか。そんな不安に、かの女はしきりに、とりつかれ

ていた。それにつれて、ぼくもだん〳〵気がめいった。セメント工事など、うまれてから一度もしたことがないせいもある。たとえできたところで、そんなことの全部がむだになるような予感が、しのびよってくる……。

しかし家に帰って、こゝろみに、せんたく場にスコップを突き立てると、金色のあたらしい刃は、ぐさりと、地中に深く、突きさゝった。水はけがわるく、ぬかっているので、掘りおこすと、あんころ餅みたいに固まった土がスコップに乗って、いっぺんに、大きな穴があく。ぼくはふと、戦地で、いくつも「たこつぼ」を掘ったことを思いだした。そのご腰や脚に負傷して、神経痛がおこったりしたものゝ、どれも妙に急所をはずれているので、大した障害はのこっていない。

『おい松子、きょうじゅうに掘ってしまおやないか。セメントはこんどの公休日にして、掘るだけは、きょうじゅうに、掘ってしまおうや』

お勝手の間に引込んでいた妻をぼくは大きな声で呼んだ。ぬれえんから顔を出した妻は、やはり不安そうにしていた。

『そんなにあわてんと、こんどの公休日にしましょうよ。ゆうべは泊りやったんやし、やすんどかなんだら、疲れてしまうやないの。また腰や脚が痛くなったら、たいへんやわ』

『そうかって、公休日いちにちでは、とても全部は出来やせんよ。きょうじゅうに掘るだけ掘って、あとはセメントぬるだけにしといたら、かえって、らくなんや。こんな大きなスコップ買うて来たんやから、大したことあらへん』

これを見てみい、というように、ぼくはスコップを突きたてて、つゞけさまに掘った。山岳戦で「たこつぼ」を掘っていた自分が、また浮かびあがってくる。どうしようもない命令のまゝに動かされながら、いのちのかくれがを求めて、うえ疲れた体に、みずから、むち打っていたのだった。そのときにくらべたら、庭の土を掘るくらい、なんでもないことではないか。くさった敷板を全部取りのぞいて、ぼくは掘りつゞけた。さしあたって、どぶに通ずる水の落ち口がいちばん深く、はしのほうほど浅い、広さ一坪半ほどの、五寸から一尺ほどの深さの池をつくればいゝ。土がしめって、やわらかいので、どん〳〵はかどってゆく。

『わたしもやるわ。くわがあるから、くわで……』

妻も急に元気になって、とびだしてきた。

となり近所が戦災地のまゝだったころ、その

美しい九月の日々

ブリッティング

ああ　美しいこの日々よ
昨日に同じく　今日もかがやく
近きも　遠きも——
久しくこんなことはなかったが
どこか　北の　海辺で
もう風が吹きはじめた——
そうだ　今日は　ぬくもるがよい
廃墟の家守のように
そうして　やがて
燃え上る日まわりを
吹きちらす
木枯しまでは
清らかな卓子で酒をくみ
ひろびろと扉はあけはなち
あかるい戸口に立って
りんごの梢ごしに
青い空を眺めて
愉しむことだ！

（たかはし・しげおみ訳）

（G. Britting　一八九二生、ドイツの「自然詩人」）

あき地に野菜など作るのに使っていたくわがある。かの女はそのくわを納屋から出してきて、掘りはじめた。ぼくはそのあとから、スコップですくって、そとの庭まで、ほうりだす。一時間か、せい〳〵二時間もあれば、ぞうさなく出来てしまいそうに見えた。

ところが、まもなく、くわもスコップも、ガツンと手ひどく、はじきかえされるようになった。途中から、瓦やコンクリートの破片びんや茶わんのかけらなどがごろ〳〵まざりだしただけでなく、表土の二寸から五寸ほどしたに、整然と取りつけられた煉瓦の列や、コンクリートの土台などが、ふいに出てきたからだ。このあたりが戦災で焼きはらわれてしまうまでに建っていた家のあとにちがいない。いまはぼくたちの家がなにげなく建っているものゝ、そのまえには、そのおなじ場所に、全然ちがう構造の家が、建っていたのだろう。くわやスコップの刃をそこなわないように表土をすこしずつ取りのぞいてゆくと、たぶんふろ場だったらしいあとが、はっきりとあらわれてきた。水の落ち口か、火のたき口だったらしい四角い穴が、きちんと煉瓦にかこわれたまま残っている。コンクリートの土台には、柱のたっていたあとがある。煉瓦の列を金づちでたゝき、くわやスコップでこぜて、ようやく取りのぞくと、そのしたにふとい鉄管がうまっている。さきが折れているが、戦前にはガスか水道が通っていたのだろう。コンクリートの土台をくぐって、とな

白居易詩抄（十）

森　亮

百花亭の夕べ

百花草にのぼりこの夕べ静心なく立ちさまよふ。
雲の影が日差しをかげらせたと思ふと
忽ち雲はしざって辺りはぱっと明かるくなる
いつまでも山に映えてゐた夕日の赤い色が薄れると
さあっさあっと音立てて雨は水の上を渡って来る。
頬までとどく髪の毛は病んでこの方左右とも雪の白さになり、
わたしの心は廻りくる秋に行き合ひ温みの去った灰にひとしい。
夜更けて家路に就かうとすれば
胸の愁へはやすらふときを知らない。
湖面いっぱいに広がる月光の白さの中を小舟に乗って帰る。

★

なんとなく

庭さきで一日中ぶらぶらして夜になってしまふかと思へば、
灯し火のもとで時をすごして坐ったまま夜明けを迎へることもある。
このそぞろな心の動きをわたしは誰にも話さない。
この切ない気持ちを誰が分かってくれよう。
時たまああといふ溜息を繰り返すだけだ。

註　初めの訳の原詩は百花亭晩望夜帰（二の六〇七）で、江州在住第二年、四十五才の作品である。次の「なんとなく」の原詩は夜坐（二の四三五）で、昼臥、暮立（既出、第二十二号）と併せて三幅対になってゐる七言絶句である。四十才頃の作。

りの家のほうへつづいている。そして最後に大きな井戸が出てきた。ぶあついコンクリートの、円形のわくで、かこってある。ぼくたちの家は四軒長屋だけれど、門は二軒に一つしかないから、つまり、ちょうど二倍の広さがあった。そこに、水道のほかに井戸もそなえ、ふろ場などもこしらえて、ゆたかに、平和に、くらしていたのだろう。戦災で焼きはらわれてしまうなどとは、夢にも思っていなかったにちがいない。その井戸は、おびたゞしい瓦や煉瓦の破片、こわれた壁、焼けたゞれた金くずなどで、口まで、うずまっている。柱などの燃えのこりも、たくさんな消し炭になって、そのなかに、まじっている。つい最近できたばかりみたいな、なま〳〵しい消し炭なのだ。もしかしたら、そのしたの井戸の底には、そのころ生活していた人の死体が、そのまゝ水びたしになって、うずもれているかもしれない……。

掘りだした瓦や煉瓦など積みあげた山に、ぼくはぼんやり腰をおろした。ズボンのしりがよごれるのも、かまう気になれない。思いがけなく手間どった労働の疲れが出て、肩や腕、脚や腰が、急に痛みだした気がする。妻もがっかりして、しゃがみこんだ。うわ目づかいに、ちらと横目で、ぼくを見て、じきにまたうつむいてしまう。打ちあけずにいながら妊娠しているので、心身ともに、よけいに疲れるのだろう。あおぐろい顔をし、ほおが一時に、そげたみたいになり、肩のあたりで苦しそうな息をしている。

『こんなこと、せなんだらよかった……。これまででも、不便は不便やけど、せんたくぐらい、よう出来たんやから……』

やがて妻は、ぽつんと、ひとりごとみたいに言った。

『うん……』

生い立ち

福地邦樹

私がその胎内にあったとき
母は悲しい日々を送ったという
それゆえか私の幼少は
ひ弱でいつも引込み思案で
なさけに敏感であった

小学校時代は光豊かな地で育ち
私は自然児となった
蝶とりと木のぼりが上手で

ぼくは返事をしようとして、口をつぐんだ。妻に同調し、このままやめてしまおうかと口もとまで出かゝっていたけれど、そう言ってしまったら、なにか大きな不幸が逆流してくるような、暗い不安が、おゝいかぶさってきたからだ。せんたく場が出来ずにしまうだけではない。せっかく掘りかえした地面を元どおりにうずめねばならないだけではない。もっと大きな、たとえば、この家全体がくずれてしまったり、ぼくたちの家庭そのものがこわれてしまったり、これからの将来がいっそう暗黒になったりするような、そんな予感が、ふいにわきおこってきたのだ。はじめ一時間か二時間だった予定が四、五時間もかゝり、いつのまかに日がくれて薄暗くなったなかに、ぼくと妻は、不安におびえたおももちで、うずくまっていた。

ポエジー

杉山平一

私が雑誌記者をしてゐたころ、「黒死館殺人事件」といふ、幻怪不可思議な、大探偵小説を組立てた小栗虫太郎といふ人に魅力をおぼえてゐたので、編集長に説いて、氏の小説を貰ふべく訪ねて行ったことがある。

もとより、黒死館とは似もつかぬ、ごみごみした町の外れの普通の二階家だった。玄関には、化粧の厚い奥さんが出てこられた。その白粧の下に、世帯につかれたしわが、ありありと刻まれてゐた。座敷とおぼしいとなりの部屋で、小さな子供がたくさん声をあげて走り廻ってゐた。

二階に通された。がらんとした八畳の間に大きな坐り机をおいて、白皙の、度のきついロイド目鏡をかけた小栗虫太郎は坐ってゐた。本は一冊も置いてなかった。いや、たゞ一冊、大英百科辞典めいた、でかい本が、家具のやうに置いてあった。

私は、おそるおそる用件を切り出し、更に私が小栗虫太郎の読者であることを述べた。すると氏は、人なつこい表情になりはじめた。

一二度訪ねるうちに、小説の構想は成ったらしく、執筆ははじまった。たしか海洋冒険譚であった。氏は凝って、挿絵をつけて雰囲気を出さうといひ出した。

「僕を知り、僕の味を出してくれるのは、巴里から帰った茂田井　武といふ青年しかない。僕の方から場面やタッチを指定して彼にペン画をかゝせるから」

といふことだった。

私が、茂田井といふ名を意識したのは、そのときである。

すべての蜜のある花木と
実のなる木の在りかに通じていて
生傷の絶え間がなく
勉強はろくにしなかった
私を愛した叔母は手をやいて
おまえだけは何になるのか
さっぱりわからぬと言った

いまになっても私のなかには
かっての母の悲しみの鼓動と
それを克服しようとするような
樹液の明るさと静かさと強さとが
さらさらと流れているのだ

戦後、茂田井武は、童画をかいた。巴里の四季を描いた十頁足らずの絵本が出てゐた。エッフェル塔や、街頭のアイスクリ売りや、落葉の詩情は、たまらないものだった。私は買って、ひとり楽しんでゐた。しかし、私は結婚したし、子供も生れた。子供は、押入れから、これは明らかに親のものではないと見抜きこの絵本をとり出し、落書きし、ずたずたに引さいてしまった。

そのかなしかったこと。戦後のそんな本屋はつぶれて、もうないし、再び求めるすべもなかった。

子供の絵ばかりかく、茂田井の挿絵を、店頭で、わづかにたのしむにすぎなかった。

彼は死んだ。それは東京の新聞に小さく出てゐた。大画家でもない彼の画集が出るわけもない。挿絵家で、画集の出たのは小村雪岱位だ。私はあきらめてゐた。もう、あきらめることの多い年頃になってゐた。

それが、何気なく新聞広告を見てゐて文芸春秋の漫画読本といふのに、茂田井武の画集が色刷で出てゐるのを知った。それが二号も続いてゐる。だれか、どこかで、あの詩情を識り、愛惜してゐたのか、と私はうれしくてならなかった。

この漫画読本といふ雑誌は、谷内六郎といふ人を紹介した。線路の中に咲く花とか、茎の線路を行く毛虫の汽車だとか、夕焼雲の中に浮ぶ駄菓屋子の幻想だとか、海の波が白く海辺に並んでピアノのキイのやうにならす音楽だとか、そのポエジーは、もはや、詩の雑誌からは失はれてしまったものである。こんなところにポエジーが生きてゐる。私は感激した。

今にして思へば、それは、茂田井武からつながってゐるものである。

漫画読本といふやうな雑誌の編集者に、見失はれた「詩」は護られてゐる。

新聞をくれた女

芳野　清

彼の鞄の中には一枚の古新聞が曰くありげに蔵ひこまれてゐる。時々、彼はその黄色くなつたのを展げては一人笑ひにしてゐるやうである。鼻先へ持つていつては犬のやうに匂ひを臭いでゐるのである。彼の顔は如何にも幸福さうで、禿頭は益々輝きを増すかに見える。ポニーちやんと呼んでゐる部屋の女の子が到々我慢出来なくなつて或る日こんな事を訊ねた。

「ねえ吉住さん、どうしてそんな古新聞見てにや〳〵してんの？　にや〳〵ぶつ〳〵いやらしいつたらないわ」

「理由だって？　ありもあり大ありさ、だけどね、これは秘中の秘、ほかならぬポニー嬢とあれば、第一ヒントだけ教へよう、『希望は幸福と同じであるか』へ、へ、へ、一寸した禪問答だね」

ポニーちやんはこれですつかり度膽を抜かれてしまつた。この人少しクルクルパーぢやなかろか、と内心思つて

「中年つて不潔だな、複雑怪奇、気味が悪いわ、まあせいぜい思い出し笑ひでもしてゐ

東京哀歌

田中克己

もとの女高師の古い建物ー古い伝統におびえながら、寒い日もわたしは休まずに漢文を教へに通つた。私は中老の、前途のない書生で、非常勤講師を命ずといふ辞令をいただいて、詩経から白楽天までをへたくそに教へた。学生も無感動に寒がりながら聴いてゐたことだらう。土曜の講義は講師も少く、二年間に知合になつたのはわづか数人、そのひとりがあなただつた。あなたはよく笑ひ——ちよつと皮肉な笑ひだつたが、私にアヂサヰのフランス語はオルタンシアだと、辞引をひいて見てくれた。「先生は作家では誰が好きですか」。三らつしやいな」

と、ポニーテールをぶらん〳〵させて怒りながら去つてしまつた。彼女に云はれなくとも既に彼は古新聞にまつはる一場の光景を鮮かに心に再生させていたのである。

それは煙のやうに降りしきる梅雨のせいであつたかも知れぬ。五時十六分發、国電H町駅發、山手線外回り、二輛目の前部左側の吊革にぶら下がるやうに不様な格好で彼はもたれてゐた。彼の目には一瞬、芝浦港へ流れこむ堀割や、雨に濡れたトタン屋根がものうく映つては消えた。そこには心をたのしませる一片の緑もなかつた。彼はぼんやりと自分の希みのない未来を思つてゐたのである。何をしたつて今更始まらない、四十幾歳かの淋しい灰色の過去の連続があるばかりだ。寧ろ、幸福とか希望とかが金と等価であると錯覚出

島由紀夫か井上靖か（まだ挽歌の作者の登場する前である）、私はこれら流行作家の名をあげるべきだつたらうか。ともあれ本音でトルストイと答へたら、あなたはまた笑つて、起ち上り教室へ行つてしまつた。そのときのやうに、話すべきことも話さずに、あなたは急に行つてしまつたね。いや行つてしまつたさうだね。私はいま東京で寒がりながら、また話し相手に困つてゐる。学問の話し相手にも困り、時間のあひまにも退屈してゐるのだ。あなたはこの世界一の大都会のどこかにゐるのではなからうか。静かに、皮肉に笑つてゐるのではないだらうか。どこかの喫茶店で、「マドモアゼル・オルタンシア」の唄でもきいてゐるのではないだらうか。（小川和女史追悼）

来た昔の若さが懐しい。未来が己れの学業や、いつか立現はれるかも知れぬ理想の女性像に彩られてゐた青春が二度と来る事はないのだと云ふ諦めが彼の痩せた胸をしめつける。それにもまして今の彼は心の支へになつてゐた何物かが次第に崩れ去る焦りに堪へられない彼の肋骨の浮き出た狭い胸に無慚に刺しこまれた初老と云ふドス黒い刃からは、絶へず赤茶色の錆が全身に染みわたつてゆくのだと思ふと、思はず大声で叫びたくなるのだつた。彼はその誰もが逃れる事の出来ぬものから逃れようと試みた。出世の全く閉ざされた下つ僕役人の出来る事と云ったらたかが知れてゐる。屋台で呑めもしない酒をあほる事。そこでパンパン染みた女相手に重い口で心にもない駄洒落なども云つてみた。しかし、もう一人の彼は何時も青白くうなだれて、深い罪の意識に戦きながらひつそりと立つてゐた。酔ひが醒めると一夜で十歳も年老いる感がした。ストリップ劇場にも始めて足を運んだ。浅草の暗い地下劇場で彼は青い光に浮き出た艶めく肢体の不思議な運動に見入つてゐた。ある行為を聯想させる女のリズミカルな腰の動きにつれて若い男達の熱狂した声が反響した。最前列の席にゐた彼はふと隣りの男がズボンのあたりで烈しく手を動かしてゐるのを見た。満たされぬ男達の欲情の悲しいカタルシス。それは彼が襲はれてゐる漠然とした焦燥とは恐らく縁の遠いものであつた。寧ろそれは裏返へして云へば果敢な生の肯定であり、獣じみた生の燃焼と云つてよかつた。

ゆれる乳房。くねる太腿。彼はそこから何の昂奮も感ずる事が出来なかつた。彼はただそこに若い女性のセックスの誇張を見ただけであつた。若さへの羨望だけしか残らなかつた。ここでは衰頽を思はせる一切のものが醜かつた。ストリッパーの一人は花道から彼のはげ頭に向つてかうささやいた。

「私の可愛いいブリンナーさん（つる／＼頭が売りもの〻アメリカの俳優）、私の悩ましいこの胸から、熱いこの腰から、あなたの手でドレスを脱がして頂戴！」

そう云つて女の香りに噎せる豊かな乳房を太腿を、彼の鼻先に突きつけたのである。

映画も駄目だつた。彼の衰へた、弱い目はワイドスクリーン一杯にくりひろげられる色彩の乱舞に堪へられなかつた。外へ出ると目が痛み、寝ると夜中疼き始め、自分が盲になり、白い杖をつき乍ら、細い笛を吹いてたよりなく歩いてゐる姿を夢見ておびえた。それ以来、彼は一度も映画を見ない。それなら、どうすればい〻のだらう？　読書の趣味もない。一日の仕事を後生大事と精一杯した後の彼は物云ふ元気もなく床に潜りこむのが落ち

地獄

岩崎昭彌

森の中から地響たてて現れた巨体！
のたうつ蛇腹のやうなキャタピラの廻転が
土塊や砂礫を水のやうにはね散らす
途方もない轟音　交錯する火玉
天から土砂や鉄片が落下する
射つても射つてもピシピシはねかへる音
なぜあの怪物の皮膚がぶち抜けぬ
やがて一人が胸に何かを抱いてかけ出した
火柱に照し出された顔が一瞬苦笑した彼は
蛙のやうに跳躍して走る蛇腹にころげ込んだ
響音！　押しつぶされた火花が拡がつたが
怪物はなほも人喰面で殺到する
乱れる影　努号　悲鳴　火を吐く悪魔の笑ひ
——お母さん　お母さん　頼みます　お母さん——
叫び声が何処かで次第に遠くなつてゆく

——インパール——

である。それに好きな本の買へる身分でもない。囲碁、将棋、麻雀、勝負事一切駄目である。頭が弱く長い思考に堪へられぬのである。人生の倦怠などと云へば体裁がいいが、一種の刺戟飢餓である。……とまあ、そんな思へば他愛のない事をその時は真剣に考へこんで吊革に身をもたせてゐたのであるが、電車が品川につくと、うまい具合に斜め横前の席が空いた。彼はすかさずその席に滑りこんだ。これは長いサラリーマン生活で身につけた悲しい、又最も素晴らしい技術の一つである。所で彼は如何にも物倦げに見える。が、内心ではなか〳〵どうしてこの通勤電車の中を唯一の生甲斐とも思つてゐるのである。大袈裟に云へば正に「通勤電車なからざれば人生の喜びも又なかるべし」と云つて過言でない。彼は眠つたやうに目をつぶつてゐるが、抜目なく薄目を開けて周囲を物色してゐるのである。一言にして言へば、女性品評、この愉しみはとてもストリップなどの比ではない。若鮎のやうな色とりどりの若い女を見てゐると、彼の澱みきつた心が洗ひ去られる想ひである。彼の好みに合つた顔立ちの少女を發見した朝などは、その日一日、心がはづんでうれしいと云ふ。ところが、生憎、その日は彼同様、長靴を穿いた疲れた表情のサラリーマンが彼の視野に重たくふさがつてゐるばかりであつた。第一、こんなに早く家に帰る種族には禄なのはゐない。懐が少しでも暖かければこんなくさ〳〵した梅雨には銀座か新橋あたりで一杯呑んで、と云ふ事になるだらうし、仕事熱心な男なら、どうせ雨が降つて、早く帰へつたところでつまらないと、会社や役所に居残つて部厚い書類と取組んでゐるだらうし、勝負事の好きな連中は好機とばかり仲間を誘ふだらうし、さう思つて見ると、男達の顔は一様に黄ばんで生気なく見える。俺もまた、と彼はうんざりした。一日中、課長や係長に睨まれ、おどかされて、すつかりいぢけ切つてやれ〳〵と云つた心で吊革にぶら下つてゐるのだらう。世話女房と子供達の顔だけが救ひなのである。出世する男なら家の事など考へるものか。胸を躍らせるやうな少女もゐないし、仕方ない狸寝入りでもするかと、彼はおもむろに股に挾んだ洋傘を胸にひき寄せた。すると彼の横にひろげられた新聞がふと目に入つた。東都タイムス、それと同時に、白魚のやうな指。おや、と思つて彼は横を盗み見た。迂闊であつた。燈台下暗しとは正にこの事だ。素晴らしい美女であつた。先づ肌の白さときめの細かさに思はず息をのんだ。その新聞にはでか〳〵とグラマーガールの水着姿がのつてゐて、その下欄には若い美貌の人妻の姦通を取扱つた映画の筋書があつた。彼は頭をのばして無遠慮にその人妻になる女優の男に抱かれた恍惚の表情に覗きこんだ。女の人だ、殴られる事もあるまい、そんな下心もあつた。すると婦人はわきにおいてあつた一枚の新聞を取り出して、

「どうぞ、よろしかつたら御覧になつて下さいな」

と彼の前に丁寧に差し出した。細いよく透る声であつた。彼は度を失つて、いや、どうもなどと訳の分らぬ事を口走り手を出した。彼は無巣な行為に頬のほてる想ひがした。婦人は彼の非礼を咎める代りに新聞を与へたではないか。それは右の頬を打てば左も、と云つたキリストの訓そのままであつた。こんな親切さと云ふものがあるだらうか。彼はしかし、忽ち、中年男の図々しさを粧ふと、活字に貪るやうな目をさらした。彼は又最も愚劣な男にふさはしく、三面記事が最も好きである。無限の妄想が雲のやうに湧いてくるのがたのしいのである。しばらくすると婦人は自分の手にしてゐた方の新聞を丁寧に畳みハンドバックからガーゼを取り出していぢつてゐるやうであつたが

「こちらのもどうぞ」

と云つて彼の膝にそつと置いた。今度は彼は言ひ訳けする元気もなく、あわてて読みかけてゐた自分のと合はせて婦人に返へさうとした。

彼はきつと世にも卑屈な笑を浮べてゐたに違ひない。

「いゝんですのよ、私、どうせ読み捨てて

相聞

山根忠雄

月遠し

うすい秋の雲を見てゐたら
ゆうべ見た
あなたの夢を思ひ出しました

蜜柑色に焼けた朝雲の間から
鎌のやうな
白い残月が浮んでゐます

その人をおもふ純粋な気持——
かくして
恋愛は人間を高めます

ひとこと

うちあけぬ悩ましさよりも
うちあけたあとの苦しさが　たとへいかほど
　にあらうとも
言つてしまつた方がいいのかも知れないのに
うちあけることが恐ろしくて
黙つたままかへつた.あの夜の道の短かしさ

やさしい心はもつてはゐても
自らの純情に　いくたび涙を流しはしても
たつたひとこと
たつたそのひとことが言へなければ
通りすぎる列車の窓にみた人となる

所詮　この世は旅にちがひなからうけれど…
…

しまふのですから家へ持つていつても仕方ないんですの」

と彼女は自ら弁解するやうに云つてほゝゑむと、さらりと立上つた。ほのかな香水の匂ひが漂よつた。前に立つた婦人は見ると驚く程豊かな胸をしてゐた。薄紫色のレインコートの二つの隆起は今咲誇つてゐる紫陽花の大輪を思はせた。婦人はちらと彼の方に複雑な一瞭を投げて降りて行つた。渋谷だつた。彼は思はず腰を浮かして婦人の後を追はうかと思つた。彼は心の中で次の一事を繰り返へしてゐた。

「私の四十何年かの生の中でこんな感激を覚えた事はありません」

しかし、別の考へが彼の腰を再び座席に押し戻した。それは彼女の善意を全く裏切る悪魔のささやきに似てゐた。彼女の親切は憐憫ではなかつたか?

彼はあらためて自分のくたびれた風体に目を落して苦笑した。ノーネクタイのワイシャツに古びたレンコート。油のにじんだピケ帽明らかに弁当しか入つて居らぬことの分るチャック付きのフオリオ。それに長靴。彼の姿はくたびれた下級サラリーマンの象徴以外の何ものでもなかつた。一つには彼は今の季節にふさはしいネクタイを持たぬ事も原因であつたが、彼の地位は別に威厳を繕ふ必要もないのでこんな蒸暑い季節には喉元をしめる布はつい敬遠してしまふ始末であつた。うらぶれた中年男が無遠慮に謹しみも忘れて他人の新聞に覗きこんでゐる。生活に追はれて夕刊代も節約し、盗み見してゐる憐れな男。人生の黄昏に歩んでゆく侘しい都会の敗残者。心

新潮文庫七二

伊東静雄詩集

七〇円

彼は日本の近代詩に消しがたい痕跡をのこして去つたのであつて、その細くするどい痕跡がいかに深く切れこんでいたかは、時がたち、幅ひろく浅い痕跡が磨滅するにつれてはつきりしてくる。日本人が真に詩を愛しつづけるかぎり、百年後、彼の名は一そう光りをましているであろう。

桑原武夫

のやさしい彼女はきつと憐れみを覚えて俺に新聞を恵んでいつたのであらう。俺のどこかに希望のない人生に破れて泣いてゐる男の黒い影がさしてゐるのだらうか。彼はさう考へるとその新聞をひろげてゐる事に堪へられなくなつて、膝の上に置かれた一枚と一緒に鞄の中に入れてしまはうと手にとつた。すると後から置いていつた一枚の方からほのかな匂ひが立上つてきた。さう云へば婦人はその新聞を私に渡す前にガーゼで新聞の上を何度も撫でてゐた。彼女はきつと私に知られぬやうにハンドバッグの中でガーゼに香水をたらしてそのガーゼから新聞に香水を移したのだ。さう知ると、彼の暗い今までの想念は一瞬にして消え去つた。彼の頬には世にも幸福さうな微笑が浮んでゐた。前に立つてゐる男達の顰りに似た視線も構はずに彼はもう一度、高々と新聞を掲げると深く息を吸つた。

ほのかに匂ふジャスミンか、はたミユウゲか、彼は勿論香水については何も知らない。しかし彼は十分幸福であつた。目を細めてその香に酔つてゐるのである。羽毛のベットに深々と横はる裸体の夫人のやうに悩ましくも甘いその香り。

いつか電車は彼の乗り換へる新宿に着いてゐた。車窓から見える西空はほのかに黄ばんで明るく、雨はいつかしらやんでゐた。「生きてゐる限り、人生はやはりこのやうに美しく、優しく、希望に満ちたものなのだ」彼の目は恢復期の病人の目のやうに新らしく輝いてゐた。

爾来、彼は勤務がひけると、五時十六分の電車に出来るだけ乗ることにしてゐる。しかも前から二輌目の前部左側、あれから一度もあの婦人を見かけない。しかし彼は少しも失望しない。ひそかにその電車を「幸福の天使」と呼んでゐるのである。この中年男のさゝやかな幸福を嗤ふのはよさう。彼は今日もきつと、大海に漾ふ箱舟に似たこの都会の何処かでとうに匂ひの失せた新聞紙をひろげてゐるかも知れないのだから。カルメンから貰つた紅い花を乾からびるまで持ちつゞけてゐたホセは現代にもゐるのである。（了）

編輯後記

十一月十五日松江から森亮氏が来阪した。京都で開かれた比較文学会の学会からの帰りである。彼は今度駐日イラン大使ホセイン・ゴッヅ・ナカイ氏のルバイヤートを矢野峰人先生と共訳した。都合よくその訳本を携へてゐたので見せて貰つた。十数年前オーマー・カイヤムのルバイヤートの名訳で馴染の訳筆である。近く和蘭から上梓される由で、いづれ本誌にも紹介させていただけるだらう。

十一月十八日久し振りで石上玄一郎氏に出会つた。日頃果樹園の評判なぞ気にもかけてゐぬが、第三者としての厳正な批評をしてくれるのはいつも彼である。彼の伝へるところによると、池沢茂氏の地味な短篇が、近頃珍重すべき作品である由定評となりかけてゐるさうである。彼の言葉に甘へるには僕等はとうがたちすぎてゐるが、信用すべき大学の教授方から幾度か激励の言葉をいたゞいたことは、ジャーナリズムの仲間ぼめより幾倍かうれしいのである。（O）

果樹園 第二十三号（毎月一日一回発行）
昭和三十二年十二月一日発行
編輯兼発行人 池田市野町一六八 小高根二郎
印刷所 京都市下京区壬生川通五条下ル 同朋舎
発行所 池田市野町一六八 果樹園社
定価 三十円

果樹園二十三号 昭和三十二年十二月一日発行（毎月一回一日発行）池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 同朋舎 定価三十円